山手樹一郎長編時代小説全集＝16

はだか大名



春陽堂

はだか大名

山手樹一郎長編時代小説全集

16

はだか大名

山手樹一郎長編時代小説全集 16

春陽堂

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻紘一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
*水野泰治

*本巻執筆者

はだか大名

春おぼろ

1

境内のどこかに梅が咲いていて、それがにおってくる、そんななまあたたかい早春の宵すぎだった。まわりは一口に辰巳といわれる色町で、土橋、仲町、表櫓、裏櫓、裾つぎ、網打ち場、大新地、小新地、佃町など、北の新吉原と江戸を二分して脂粉嬌声を競い、昼夜の別なく弦歌の声にぎやかに繁盛する遊蕩の地だが、ひと足この八幡社の境内へはいると、さすがにひっそりとして、拝殿までお賽銭をあげにくる善男善女はほとんどない。

「なんて静かなんだろう」

およそ静かなどというものとは縁の遠い明け暮れになれている小稲は、取っていた小褄を器用にひざの間へはさんで押え、紙入れから小銭を出して、賽銭箱へ投げこんだ。からんからんと、その音さえ耳へかえってくる。こんどは思いきり鈴を鳴らして、それが拝殿の奥深く消えていくのを聞きとどけると、これでたしかに八幡さまも、うたた寝からさめて、こっちを向いてくれたような気がしたので、自分もおごそかな顔になりながら柏手をうった。

「南無八幡大菩薩さま、どうぞ小稲にご利益がございますように――」

これだけではなんだか簡単すぎるような気がする。芸と意気とで張りあう辰巳芸者のうちでも、新地の小稲といえば芸はいうまでもないこと、器量といい気まえといい、押しも押されもしない一流の姐御株だが、これまで信心ごとにはあまり関心がないほうだったので、どうも適当なことばが見つからない。

「八幡さまあたしはお経を知りませんから、正

直に申し上げます。どうか、今夜はあの伝次とうまく話がついてくれますように——それから、小品ちゃんの病気が早くよくなってくれますように、あたしのお願いはこの二つでございます」

それだけいってしまうと、やっと安心したので、もう一度柏手をうってから、その手で小褄を取りなおし、しゃっきりと立った姿は、さすがに水もしたたる辰巳仕込みだ。すそさばきもあざやかにくびすをかえそうとしながら、あっと小稲は目をみはった。

この森閑としたおぼろやみにいる者は、八幡さまと自分ひとりと今の今まで思いこんでいたのに、いつどこからきたのか、すぐうしろの石畳に、ぬっと立ってわらっている男があったのである。

黒羽二重の着流しに細身の大小、年ごろ二十四、五でもあろうか、すらりと上背があって、なかなか美男子だ。なによりも気品のあるのが、稼業がら客なれた小稲の目をひく、おそらく、どこか近所の旗本の若さまが、気まぐれにふらりと散歩にでも出てきた姿なのだろう。

いずれにせよ、ひとがたいせつな願いをかけて、だれもいないと思うから口にまで出して、八幡さまにたのんでいるのを、黙ってうしろで立ち聞きして、しかもわらっているという法はない。

「お侍さまのくせに、ずいぶん失礼なかたでございますね」

きかない気だから、小稲はむっとして、かまわずその男の顔をにらみつけてやった。

「こんばんは——。だれか病気なのかね」

その男はけろりとして、まだわらっている。たかが芸者ふぜいと、頭から小バカにしているにちがいない。

「大きなお世話じゃございませんか。こう見えても、あたしはおこっているんですよ」

むきにならずにはいられない小稲だ。

2

「なにをそんなにおこっているんだね。わしは別に、あんたの気を悪くするようなことは、したおぼえはないがなあ」

あきれたような男の顔が、ひどく子どもっぽく見えるのは、少しも邪気がないせいだろうか。

「ひとが八幡さまにないしょごとをお願いしているのに、そっとうしろで立ち聞きしていたじゃありませんか」

小稲は承知しない。

「あ、立ち聞きか、立ち聞きは悪いな」

「それごらんなさい。悪いと気がついたら、あやまんなさいよ」

「あやまってもいいが、ほんとうはわしがここへ参詣にくると、あんたが大きな声でないしょごとをお願いしていた。だから、ついわしの耳へはいった。いわば自然のなりゆきなんだから、そう憤慨しなくてもいいと思うんだがねえ」

「自然のなりゆきじゃござんせん。あんたが足音もたてないで、黙っていきなりひとのうしろへ忍んでくるから悪いんです」

どうしてもあやまらせなくては気がすまない。ここで自分があやまるようでは、これから行く伝次との掛け合いごとにもあやまらなくてはならないようになる。ふっとそんなつじ占いを感じたので、少々無理でも小稲は一歩もひきたくないのだ。

「どうしておまえはそう人のことを、悪意にばかり解釈したがるんだろうな」

「じゃ、立ち聞きは悪意じゃないというんですか」

「むろん、立ち聞きは悪い。立ち聞きをしようという心の中には、たいていよこしまなものがあるからね。しかし、わしのは立ち聞きをしようと思って、ここへ来たわけじゃないんだ。通りがかりに八幡さまへ敬意を表していこうと思って、ここまできてみると、あんたが先になに

か願いごとをしている。信心のじゃまをしては悪いから、あんたのすむまで黙ってうしろで待っていたんだ。あんたのうしろからおじぎをしたんでは、あんたのおしりへおじぎをしたようになるからなあ」

男はのんびりと言いわけをしながら、にこりとわらってみせる。が、どうやら話の筋は通っているようだから、いくら小稲が向こう見ずの伝法あねごでも、これ以上あやまらせる筋はないようだ。

「あんたはあきれた暇人のようね」

「おかげでそうらしいな、むしろ、暇人より廃人に近いほうだ」

「なんのこと、その廃人っていうのは」

「不具、かたわ、つまり世に捨てられた人間ということだ」

「あら、じゃ、あんた捨て子なのね。かわいそうに」

どこかにけんかの柄をすげて、どうしても一度はあやまらせてやりたいから、小稲はわざと悪たれた顔をしてみせる。

「捨て子とはうまいことをいうなあ。たしかに、わしは捨てられた子だ。——おまえはこの土地の芸者のようだねえ」

「そうらしゅうござんすよ。こうやって左褄(ひだりづま)を取って歩いているところを見ますとね」

「それはちょうどいい。実は、わしは深川で遊んでみたいと思って、道を聞き聞き、やっとここまできたんだが、まだ一度も遊びというものをやってみたことがないんで、さっぱり様子がわからない。困っているところだが、ひとつ、わしに遊びの指南をしてくれないかねえ」

それがまんざら冗談でいっているような顔つきでもないようなのである。

3

「あんた、あたしをバカにする気——」

いうことが少しおかしいので、お座敷なら稼(か)

業だからわらってすませておくが、こんな若僧にただでからかわれてたまるもんかと、小稲は穴のあくほど相手を見すえてやる。

「気にさわったらかんにんしてくれ。わしは見てのとおりのやぼで、色里の作法はなにもわからんものだから、失礼なことをいったかもしれぬ」

ほんとうに悪気がないとすれば、いまどき珍しい男なので、

「あんた、うそいつわりなく、一度も遊んだことないの」

と、やっぱり顔を見なおさずにはいられない。

「あいにくその機会がなくてね」

「お友だちづきあいが悪いからじゃないのかしら」

「その友だちというのがあまりいないんだ」

「あんたお旗本の若さまのようね」

「いや、浪人者だ」

「うそばっかし——。浪人さんがそんなぞろりとした身なりをしているもんですか。ほんとうはおしのびで一度遊んでみたい、まずそんなところかしら」

「おしのびというのは当たっているな」

「お名まえはなんとおっしゃるの」

「浮世捨三郎——」

答えてから、なんとなく目もとへてれたような微笑がただよう。

「まあ、真にうけておくわ。おしのびじゃ、お屋敷を聞いたって、どうせほんとうのことはいわないだろうし——お金は持っているんですか」

「五十両では足りないかな」

「あら、あたし困っちまったねえ。うっかりしちまった」

五十両と聞いて、小稲はふっと伝次との約束を思い出したのだ。

「やっぱり足らんか」

「いいえ、遊ぶのは五両だって十両だって、遊

びようはいくらもありますけど、あたしこれからちょいと行ってこなくちゃならないところがあるんです」
「遠いところかね」
「すぐそこ、洲崎村なんですけど――」
「どうせわしは暇人なんだから、ここでまっていてもよろしい」
「それがねえ、掛け合いの様子によってはけんかになりそうなんです」
「ふうむ。どんなけんかになるんだえ」
「殺すか、殺されるか、どうしてもそんなことになるんじゃないかしら」
「勇ましいんだねえ」
暇人捨三郎は目を丸くして、
「相手はやっぱり芸者かえ」
と、あっけにとられているようである。
「男よ。新地の小稲が女なんか相手にするもんですか」
ちょいとみえをきってみせて、
「どう、捨さん。どうせ暇なら、あたしのけんかっぷりを見にこない？　そのかわり、助太刀なんか今からまっぴらおことわりしておきますよ。小稲はそんなひきょうなことは大きらいなんだから」
と、急にこの人のよさそうな世間知らずを、もっとびっくりさせてみたいいたずら心がわいてきた。
「おもしろそうだねえ」
男はぽかんとこっちの顔をながめている。

4

「ふ、ふ、度胸があったら、ついておいでなさいまし」
小稲は褄を取りなおして、嬋娟と歩きだす。伊達の素足が白々と、黒塗りのげたを石畳に鳴らして年は十九か二十歳、芸者としてはようやく年増の部にはいりかけているが、いわゆる柳腰というひよわい美人型ではなく、のびのびと

肉付きゆたかな肢体が、見た目に案外すらりとしているのは上背があるせいか、男好きのするいろっぽさをからだいっぱいにみなぎらせながら、お俠で、むてっぽうで、潑剌としているのが、捨三郎にはひどく珍しいらしく、——小稲は小稲で、たぶんそうなるだろうと見ていたとおり、ぽかんと肩を並べてついてくる男が、もう旗本でも若さまでもなく、自分の色香にむらがりたかってくる雄犬の一匹、しかもこれはまだあまり世間ずれがしていないようだから、少し甘い顔を見せればいまにも尾をふってじゃれついてくる犬ころだと、もうすっかり見くびっていた。

——こんなのをうまくだまして、ふところの五十両を巻きあげてやれるようだと、今夜のようにけんかをしに行かなくたっていいんだけどねえ。

それがどうしても性分でできない。小稲、世話場だろう、少し用だててやろうと、親切にいってくれる客がないでもないが、そんなのにうっかり手を出すと、あとできっと帯を解かなければならないようになる。ちゃんとわかっているから、ご親切さま、いいえ、やりくりにはなれていますからと、やせがまんをしてしまう。どういうものか、こっちから帯を解きたいような男には出会ったことがないし、好きでもない男にからだをまかせるなんて、考えただけでも身ぶるいが出るのだから、どうせあたしは生まれぞこないにできているんだと、自分であきらめておくよりしようがない小稲である。

深沈と人かげ一つない寂しい内宮を出て、水屋の前をとおり、絵馬堂を右手に見てまっすぐそり橋をわたり、表門から境内を出ると、前に二の鳥居がおぼろ空高く黒々とそびえている。正面の突き当たりが門前河岸にかかる蓬萊橋で、右手が門前仲町、左手が土橋、この辺が辰巳と呼ばれる深川色町の発祥地だから、急に春の灯が浮きたつようなにぎやかさになる。

「捨さん――」

貴となく賤となく、遊蕩児がぞろぞろと行きかう間を縫って、水を得た緋鯉のごとく颯爽とお座敷へいそぐ妓たちのあで姿に、捨三郎はすっかり心をひかれているようなので、小稲はじゃけんにひじで横っ腹を小突いてやった。

「痛いなあ。なんだえ」

「女に見とれて歩く人がありますか、みっともない」

声が思わず高かったので、びっくりして振りかえったやつが二、三人、なあんだ、痴話げんかかというように、にやにやわらっていた。

「目をつぶって歩こうかね」

「なんですって――」

「目をあいていると、どうしてもきれいなものは見たくなるんでねえ」

「あんた、そんなに平助な男だったの、いやらしい」

「なんのことだね、平助というのは」

「女なら子もりっ子にでも手をつけたがる男のことです」

「いや、わしのは手をつけたがる平助じゃない、ただながめているほうの平助だ」

こんなのをけんか場へつれていっても、すぐふるえだすんじゃないかと思うと、小稲は妙に張りあいがなくなってきた。

5

「あんたなんか連れてこなけりゃよかったな」

思ったことはすぐ口に出てしまう小稲である。

「どうしてだえ」

「あたしはけんかに行くんだっていったでしょう。洲崎の海っぷちには、ながめてよろこぶ女なんて、ひとりもいないんですからね」

汐見橋をわたると、色町の外になるから、町筋は急にひっそりと暗くなる。しばらく男が黙っているので、おこったかな、かまうもんかと

思っていると、
「おまえのけんかの相手は伝次という男かえ」
と、いきなり名まえをいいあててきた。
「あら、あんた伝次を知ってるの」
「知らないな、さっき八幡さまで、おまえがいいつけているのを聞いただけだ」
「なあんだ。ふいにそんなことをいいだすから、あたしはまたおきつねさまでもついているのかと思って、びっくりしたわ」
「その伝次っていうのは、どんな男だえ」
「自分じゃ油屋のだんなだってふれこみだけれど、ほんとうはやくざ者らしいわ」
「どうしてけんかになったのかね」
「あたしがその男の忘れていったお金をつかっちまったんです。男のくせに、ひきょうってありゃしない」
小稲は吐き出すようにいってのけるのである。
「しかし、その金をつかったのはおまえなのだろう」
「そうよ、わざと忘れていくから、ついつかっちまったんだわ」
「どうもわしにはよくわからないな」
人の金をつかったほうがいばっている、捨三郎にはなんともふにおちないのだ。
「血のめぐりが悪いのね、あんたは。あたしはこう見えても、年じゅう火の車なんですよ。一度も遊んだことのないやぼてんにこんなことをいったってわからないでしょうけど、深川の芸者は二枚証文といってね、たいてい帯を解くのが普通なんです。あたしはあいにく生まれぞこないにできているから、好きでもない男のおもちゃにされるのは大きらいときているんです。貧乏するのはあたりまえでしょ。そこをつけこんで、わざとお金を忘れていって、いつまでも取りにこなければ、つい背に腹はかえられないから、手をつけたくなるじゃありませんか」
これはまたたいへんな理屈をこねるものだ

と、捨三郎は感心して、
「なるほど。つまり、金助になったわけだな」
と、ちょいとあげ足がとってみたくなる。
「なんですって――」
「女に手をつけたがるのが平助なら、金に手をつけるのは金助さ」
「ふ、ふ、ずいぶんつまらないしゃれね」
「笑ってくれてありがとう、で、伝次という男が、わざと忘れた金を取りにきたから、ひきょうだとおまえがおこったわけかね」
「いいえ、金がかえせなければ、帯を解けと、変にからんだことをいいだすから腹をたてたんです」
「だから、今夜、洲崎の海岸へ呼び出して、果たし合いをやろうというのかね」
「そうなんです。ないものは返しようがないんだもの、もう一度よくわけを話してみて、それでもわからなければ、とことんまで行くよりしようがありゃしない。いやなやつに身を任せるより、生きるか死ぬか、いっそひと思いにかたづけてしまったほうが、さばさばするんじゃないかと思って――」
無知度しがたしとでもいうか、それにしてもいい度胸だと、捨三郎は感心せざるをえない。

6

入舟町の通りを細川の下屋敷へ突き当たって右へ切れ、平野橋をわたると急に磯の香が強くなって、からりと洲崎の海岸がひらけてくる。曇り空のどこかに月があるらしく、足もとの砂地はおぼろにあかるいが、海は暗くて見えない。遠く西南の一角に、灯がかたまって見えるのは、品川の宿あたりだろうか。
波の音がささやくように耳についてくる。
「いったい、その金というのはいくらぐらいなのかね」
捨三郎は念のために聞いてみた。
「いわないわ」

きっぱりと小稲がつっぱねる。
「どうしてだえ」
「あんたが立て替えてやるなんていいだすといやなんだもの」
「わしは金で帯など解けという平助ではないんだがねえ」
どうだかわかるもんかと、小稲は腹の中でわらいながら、白い波が寄せては引いていく汀(みぎわ)にそって洲崎弁天のほうへさくさくと砂を踏んでいった。たとえ男になんの野心がないとしても、男が五十両持っているとわかったから、そんな打ち明け話をしたと思われるのは、へそまがりだから意地が承知しないのだ。
「どの辺で待っている約束なんだえ」
「どの辺ともいわなかったけど、どこかで待っているでしょ」
ゆうべも家へきて、いつらちをあけてくれるんだね、と油屋伝次がいいだした。金の催促をしだしてから、それが特権のようにのこのこ家へきだしたのもむしずが走る。金より間夫(まぶ)にでもなりたい下心がちゃんと読めているからだ。が、金をなんとかしないかぎり、もう家へきてもらっちゃ困るともいいきれない。ついがまんしきれなくなって、あすの晩らちをあけるわ、五つ（八時）までに洲崎の海っぷちへ行って待っててください、とぴしゃりとやっつけて、お座敷へ出てしまったのが真相だ。
洲崎の海っぷちだね、となんとなく目を丸くしていたから、尋常な話ではないとは、おそらく伝次も勘づいているだろう。しかし、出てこないような男じゃないから、もうどこかへきて待っていることはたしかだ。
「呼んでみたらどうだろうな」
どこまで行っても浜べはがらんとして、人かげ一つ見えないので、捨三郎がのんびりといいだした。
「バカらしい。わざわざこっちから呼んでやらなくたって、いまに向こうで見つけてかってに

出てくるわ」
「呼んでやるほうが親切だよ」
「親切なんかにしてやりたくない男なんだから、しようがないでしょう」
「気が強いんだねえ、おまえは」
「弱けりゃこんなとこへ出てこれやしません」
「まむしの生き肝をのむと気がつよくなるそうだね」
「ふ、ふ、そのせいかしら。あたしのんだことあるのよ。あれは労咳の薬だっていうもんだから、友だちにのませてやりたいと思って、あたしがためしてみたんです。かっかっと顔がほてってきて、まるでお酒をのんだみたい。困っちまったわ。ところが、病人にのませたら、そんなにはならないのよ。それだけからだが弱っているんですねえ」
小稲がそんなのんきなことをいって笑いだす。
行く手の、磯にあげてある舟のかげから、ふいにだれか立ちあがる者があった。

7

「油屋のだんなですか」
はっと立ちどまって、おぼろやみをすかしてみながら、小稲が声をかけた。
「うむ、小稲だね」
のそりと近づいてきたのは、縞物の対をきちんと着こなした三十がらみの、いかにも堅気のだんなと見える男ぶりだが、
「そちらのおかたは――」
と、なにげなく連れの捨三郎をしり目にかけて聞いたつら構えに、ふてぶてしさがろこつなのは、小稲がひとりで出てくるものときめていたせいもあるのだろう。
「この人はなんでもないんです。今そこで出会って、深川で遊んだことがない、案内してくれないかとたのまれたもんですから、こっちがかたづいたらつれていってあげようと思って、――

ただそれだけの人なんです」
「なあんだ、ねえさんの金主じゃなかったのか」
油屋の顔に冷笑がかぶ。
「はばかりさま、そんなんじゃござんせん」
「じゃ、用心棒かね」
「用心棒――」
「失礼だが、お武家さんはいざとなると、刀を抜いて人をおどかすことを知っていなさる。切り取り強盗なんとやらということばが、世間にあるくらいだからね」
「捨さん――」
くるりと小稲が向きなおった。
「あんたがいつまでもぼんやりあたしのそばに突っ立ってるから、だんなが変な気をまわすんじゃありませんか。もっとあっちへどいていてくださいってば」
「そうか。それは気のつかんことをしたな」
捨三郎はおとなしく三間ばかり離れて、
「これでいいか。ここからなら刀を抜いてもどかないがねえ」
と、のんびり聞く。
「だんな、もっとあっちへどかせましょうか」
小稲が挑戦するようにいう。
「たいへんおとなしいかただねえ」
油屋はにやりとわらって、
「で、あのほうはどうらちをあけてくれる気だね。五十両、金はできたのかね」
と、改めて切り出した。
「金のできる当てがあるくらいなら、だんなにわざわざこんなところへきてもらやしません」
「へえ。すると、どういうことになるんだろうな」
「すいませんけど、どうせひと月も忘れっぱなしにするほどだんなにとってはありあまるお金なんですから、五十両あたしがかせぎ出すまで、なんにもいわずに待ってくださいまし」
「そりゃ、待てなら待たないこともないが」
「もう一つのお願いは、あたしが五十両こしら

えるまで、あんまりたびたび家のほうへはきていただきたくないんです。稼業ですから、お座敷でならいくらでもお客のきげんは取りますが、せめて家にいるときぐらいはわがままにしていたいし、あんまりたびたびだんなに家へこられますと、なんだかあたしがだんなのいろにでもなったようにとられて、ご近所のてまえ困るんです」

「驚いたねえ。わたしの五十両をかってにつかってしまったのは、小稲、おまえさんなんだよ。うっかり忘れたのは、こっちにもおちどはあるが、迷惑をかけられているのはわたしのほうなんだよ」

「そうですかしら。あたしのほうこそ、だんなよりもっと迷惑していると、あたしは思っているんですけどねえ」

小稲はまじまじと油屋の顔を見つめて、ほんとうに迷惑そうにまゆを寄せてみせるのだ。

8

「冗談いっちゃいけない。五十両といえば大金だ。その大金をかってにつかわれたほうと、つかったほうと、どっちが迷惑するものか、世間さまに聞いてごらんよ」

油屋はあきれたように苦笑した。

「だんなはひきょうです。いつでも火の車の貧乏芸者の家へ、わざと五十両も忘れて、つかってくれといわないばかりにひと月もほうっておかれれば、だれだって手をつけたくなるにきまってるじゃありませんか」

小稲も負けてはいない。

「つかったほうがいばっていれば世話はない」

「いいえ、だんなはあたしに帯を解かせるつもりで、わざと五十両忘れていったんでしょう。男なら正直においいなさいまし」

「ふうむ。もしそうだといったらどうするね」

「おことわりいたします。せっかくですけど、

あたしは好きでもない男にからだをさわられると、身ぶるいが出るたちなんです」
「じゃ、五十両耳をそろえてかえしてもらおうかね」
男がそこまであけすけにすっぱぬかれては、もう引っこみがつかなくなる。油屋の顔に凶悪な色がろこつになってきた。
「お金はできるまで待っていただくよりしようがありませんね」
「おい、小稲、おまえ案外いい度胸だな」
「ほめていただくほどじゃござんせん」
「そうか、てめえのほうでそうあくたれて出るんじゃ、おれも遠慮はしねえことにするぜ。いやでもおまえのからだから五十両ふんだくってみせるから、そう思いねえ」
「たぶんそうくるだろうと思ったから、じゃまのはいらない洲崎へ呼び出したのさ。ついでに、にいさん、ずきんをぬいで肩書きを名のってごらんよ」
「なんだと――」
「油屋だなんてうそっぱちで、本職はなんとか小僧の伝次っていうようなぬすっとじゃないかえ」
「うぬッ」
ぐいと右足をひいて、いきなりふところへ右手を突っこんだのは、むろん匕首に手をかけたのだろう。
覚悟はしてきた小稲だが、さすがにまっさおな顔になって、これはすばやく帯の間から象牙の撥を抜いて右手に握りしめる。相手がぶつかってきたら、よけたってよけきれるものではない。かってにどこでも突かせておいて、そのかわりこっちも脳天へがんと一撃くらわせてやる腹だ。運があれば傷ぐらいで助かるだろうし、運がなければ死ぬ。死んだって今はだれも泣いてくれるものはない野中の一本すぎなのである。
そこまで行っても女は女である、左で取った褄は放さず、男のように右足を思いきって踏み

ひらいたのは、相手にからだをぶつけられたとき、あおむけに倒れてぶざまなかっこうになりたくないからである。

——あまめ、やくざ者の娘だとは聞いていたが、こいつはあきれかえった瘋癲だ。

油屋伝次もおどかしにすごんではみせたものの、まさか女を相手に匕首も抜けない、腹の中で苦笑いをしてから、つかつかと捨三郎のほうへ進んでいった。

「お武家さん、聞いていなすったようないきさつだ。おれはここでどうしても一度小稲を手ごめにしてやらなけりゃ男がたたねえ。あっけらかんとこっちをながめていねえで、さっさと消えてなくなるか、でなきゃあ、しばらくあっちを向いていてもらいたいね」

ぬけぬけといってのけるのである。

9

「おまえはぬすっとかえ」

捨三郎はおっとりとわらいながら聞いた。

「なにを——」

油屋は警戒するように、ぎろりと相手をにらみつけたが、別に悪意はなさそうだとわかると、

「おれはぬすっとでも貧乏人の金はとらねえ。因業な金持ちか大名をねらって、困っているやつらにばらまいてやるのがおれの道楽よ」

と、ちょいとそり身になってみせる。

「義賊というやつだな」

「ぬすっとにだって仁義はあらあ。賄賂をとってのさばっている役人よりはましさ」

「ふうむ。どろぼうにも仁義があるのかねえ」

「あたりめえさ。人の家へはいって刃物をふりまわしたり、居直ったりするなあ本職のぬすっとじゃねえ。そんなのは強盗だ。だれにもわからないよう忍びこんで、煙のように消える。もし人が目をさましたら、おどかさないように逃げてやるのがぬすっとの仁義だ」

「仁義小僧油屋の伝次というわけだな」

「肩書きなんざ自分でつけるもんじゃねえ。まぼろしのようにはいって、まぼろしのように消えるから、世間じゃまぼろし小僧といっているようだ」
「小稲の家へ忘れていった五十両も、まぼろしのように盗んできた金なのだろう」
「冗談いっちゃいけねえ。あれは賭場で勝った金だ」
盗んだ金より、ばくちの金のほうが正しいと考えているような口ぶりだ。
「なるほど、ばくちで勝った金だから、こんどはそれを女に張ってみたわけだな」
「話がわかったら、だんな、勝負がつくまで、しばらくあっちを向いていてくんな」
伝次がふてぶてしい顔を取りもどす。
「好漢惜しむらくは、今夜はぬすっとの仁義を忘れているようだな」
「そうかね。文句があるんなら聞こうじゃねえか」
「おまえはたった今、本職のぬすっとは居直らないと自慢していたようだが、ばくちに負けたときは居直るのかえ」
捨三郎の涼しい目に、はっきりとけいべつの色がうかぶ。
「いつおれがばくちに負けて居直ったっていうんだ。変なことをいうと承知しねえぜ」
「変なのはおまえのほうのようだ。小稲は金ができるまで待っていてくれといっている。おまえの金はつかいこんだが、おまえにからだを任せるのはいやだといっている。つまり、おまえが小稲に張った五十両のばくちは、負けたと同じことじゃないかね。いやがるものをむりに手ごめにしようというのは、居直って強盗になるのと変わりはない。まぼろし小僧の名がすたると、わしは思うがなあ」
「ちくしょう――」
伝次はくやしそうに捨三郎をにらみつけて、その目をちらっと小稲のほうへ向けた。小稲は

まだ撥をつかんでもとのところに立ちながら、いつでもこいというように待っている。まったく強情無類の女だ。

「どうだ、わしが仲人に立つから、今夜のことはいっさいわしにまかせて、これから三人で深川へ遊びに行かぬか。そこではっきりと話をつけることにしようではないか」

おだやかに捨三郎が伝次をさとす。

10

「小稲をあきらめろっていうんかね」

伝次はふてくされたような顔をする。この男も相当執念深い性分らしい。

「あきらめろとはいわぬ。ただ、手ごめは強盗のすることだから、よしたほうがいいというのだ。それより、おまえが男なら、女のほうから思いをよせてくれるようになるまで待つんだな」

どこかのっぺりとしている捨三郎が、人のことだと思って、そんなのんきなことをいいだす。

「ちぇッ、そういうだんなはどうなんだ、いやがる腰元を押えつけて、愛いやつじゃとかなんとか、のべつに手ごめにしたがる組じゃないんかね」

「わしは仁義を心得ているから、そんなまねはしない。しかし、そういう強盗にも劣る同類が、ずいぶんないとはいえないだろうな。末世末法、腐りきっている世の中だ」

「口まえだけはりっぱだねえ、だんな。ことわっておくが、あっしはだれがなんたって、あの女はあきらめねえよ。いつか一度はきっとこっちのものにしてみせるから、そう思っていてもらいましょう」

「よかろう、女のほうから帯を解きたがるような男になれば、おまえも見上げたものだ」

「おだてたってだめでさ。そんなまどろっこしいことをするもんか。奥の手を出して、まぼろしのように盗んでみせるっていうんでさ」

「なるほど、それもよかろう」
捨三郎はにっとわらってみせて、
「おい、小稲ねえさん、話はついたよ」
と、女のほうへ歩きだした。
「どうついたんです」
「金はできるまで待つ。手ごめにはしない。おまえのほうから帯が解きたくなるようにしてみせる。というのだ」
「ふうんだ、そんな気には死んだってなりゃしないから、おあきらめくださいまし」
底意地の悪い目をしてにらみつける小稲だ。
「ただし、奥の手を出して、おまえの気がつかないうちに貞操を盗むかもしれない」
「あんまりバカにおしでない。そんなしまりのない女とは違いますようだ」
「どんな堅いしまりでも、音ひとつたてねえであけるのがおれの腕だ。いまにびっくりしねえこったな」
伝次がそばからにやりとうそぶく。
「脳天をたたきわられないように気をおつけ」
さっと小稲が右手の撥をふりあげる。
「これ、やめぬか。盗む盗まれるは今のことではない。これからの話だ。攻守の駆け引きは他日にゆずるとして、今夜はわしが仲人に立ったしるしに、三人でこれから深川で遊ぶ。約束どおり、おまえ、案内してくれるだろうな」
「お座敷は稼業ですから、あとへはひきません」
「油屋もいいだろうな」
「こうなりゃ、どこへだってお供しやすよ」
「ああ、ちょっと待ってください」
小稲はやっと撥を帯の間へおさめながら、
「ここまできたついでだから、あたしは小品ちゃんを見舞ってやります。深川はその指の曲がった油屋のお大尽がよく知っていますから、どこへでもひと足さきへ行って待っていてくださいまし、あたしはすぐあとから行きますから」
と、これもひどく口に毒のある女だ。
「逃げる気か、小稲。ひきょうだぜ」

伝次がわざとせせらわらう。
「逃げたって、お大尽はあたしの家を知っているんでしょ。黙っておしかけてくるのは、お大尽の一番のおはこじゃござんせんか」

暴君

1

「小品ちゃんというのは、さっきおまえが八幡さまにたのんでいた病人のことかえ」
捨三郎はなんでも小耳にはさんでいるらしい。
「いやだなあ。あんたのようなのを地獄耳っていうのね」
目をみはって、わざと口をとがらせているが、どこか伝次を見るときの目つきとは違うところがあるようだ、とはっきりわかるだけに、この気ちがい芸者めと、伝次はますますおもしろくない。
そして、いったいこののっぺりとした若僧は何者なんだろうと、妙にそれが気になってくる。
「地獄耳でなくても、あんな大きな声で八幡さまと話をしていればたいてい聞こえるな」
「ふ、ふ、あたしほんとうにだれもいないと思っていたのよ。ことによると、あんたもこのにいさんと同じ稼業のまぼろし組なんじゃないかしら」
「いや、わしはおまえのたいせつな戸じまりを盗もうなどという物好きな了見はない」
「どうだかわかるもんですか。男なんて偉そうな顔をしていても、百人が百人、平助にきまってるんだもの」
「ふん、しょってやがる、気ちがいおかめのくせに」
つい伝次はからんで出たくなる。
「ふ、ふ、平助小僧がなにかほえてるわ」
「なんだと――」

「まあよい。その小品ちゃんの家というのは遠いのか」
捨三郎がわらいながら、にらみあっているふたりをわけた。
「すぐそこ、洲崎弁天の裏なんです」
「ついでだから、いっしょに行ってやろう」
小稲の指さしたほうへ、もうゆっくりと歩きだす捨三郎だ。
「でも、きたない家なんですよ」
右へ肩をならべながら小稲がいう。
「家を見舞いに行くのではなかろう」
「そうね。家を見舞いに行きたがるのは、なんとか小僧でしたっけね」
「ちくしょう、戸じまりを用心しろよ」
左に並んだ伝次がすぐにやりかえす。
「小品ちゃんというのは、おまえの朋輩なんだね」
「ええ。とてもきのどくな妓なのよ。もとはりっぱなお侍の娘だったんですけど、おとっつあんが浪人して、死んだおっかさんが長わずらいをしたもんだから、芸者になったんです。芸者って稼業は、あたしのような気ちがいおかめにはつとまるけど、あんなおとなしい妓には無理なんですね。それに、深川はほかと違って二枚証文だし――」
「二枚証文というのは、どういうことなのかな」
「あんたはほんとうになんにも知らないのね。さっきも話したでしょう、二枚証文てえのは、芸も売ります、帯も解きますという証文を入れてかかえられることじゃありませんか。平助が多いから、どうしても帯を解く数が多くなるでしょう、とうとう小品ちゃんは労咳に取りつかれてしまったんですよ。平助男が寄ってたかって小品ちゃんを病気にしちまったようなものよ」
「なんでも男のせいにしやがる。女のために鼻を落とした男だってあらあ」
伝次はいちいち小稲のいうことがしゃくにさ

わるらしい。

2

さくっ、さくっ、と三人の足もとで砂が鳴っていた。春の夜はやや長けて、磯風がはだにひえびえとしてきたようである。

「おまえはよく小品ちゃんの世話をしてやっているようだな」

人の忘れていった金は平気でつかいこんで、変な理屈をこねながら、さんざんあくたれているかと思うと、ふしあわせな病に倒れた朋輩のめんどうは親切に見て、冷酷な世の中へ義憤をたたきつける女と、——そのまた金をつかいこまれた男が、洗ってみればぬすっとで、おれは強盗じゃない、義賊だといばっている。なんともふしぎな世界だと、捨三郎にはひどく物珍しいのである。

「小品ちゃんの弟の要ちゃんが感心なのです。まだ十三になったばかりだけど、きょうだいふたりっきりだもんだから、しじみを売ったり、いわし来いになったり、そのかせぎでくらしをたてて、その間にはねえさんの看病をして、涙が出るほどよく気がつく子なんです」

くすんと小稲がふいに鼻をすすりあげた。

「そのいわし来いというのはなんだ」

「ええ——？」

「いわし来いという商売があるのかね」

「いやんなっちまうな、あんたって人は、そんなことも知らないの。いわし来い、いわし来いって、町をどなって売って歩くぼて振りのことじゃありませんか」

「うむ、そうか」

実はそのぼて振りがわからない捨三郎なのだが、

「まあよい。きょうだいには江戸にだれも身寄りの者はないのかね」

と、先をうながす。

「ないんでしょう。一度もたずねてきたことな

んかないもの。もっとも、たずねて損になるところへは、きょうだいだって寄りつきたがらないのが世間ですからね」

「おまえがまむしの生き肝をためして、顔がほてって困ったというのは、その病人にのませるためだったのだね」

「あんた、つまらないことはよくおぼえているのね。——そうよ、小品ちゃんにのませるためだったのよ。ところが、意地の悪いもんね。あたしは一度でのぼせて困ったのに、小品ちゃんは毎日一匹ずつ、もう半月のうえもつづけてのましているのに、まだそんなにきいた様子もないんです」

「今ごろ、まむしがそんなに出るかね」

「また始まった。へび屋へ買いに行くんです。冬のまむしは高いから、ついにだれかさんのお金へまで手がつけたくなっちまったんじゃありませんか」

「そうか、へび屋で買うのか」

労咳はぜいたく病だから金がかかる。なるほど、それで人の金までつかいこみたくなったのかと、どうやら捨三郎にも事情がのみこめかけてきた。

「だんなはいい星の下に生まれてきなすったようだね」

なんとなく皮肉な伝次の口ぶりだ。

「そうでもないようだな。これでなかなか苦労はある」

「どうしたらたいくつしないで、その日がおもしろく暮らせるかって苦労なんでござんしょう」

そばから笑いだす小稲の口ぶりにも、ひやかし半分、そんな底意地がのぞいているようだ。

3

洲崎弁天の裏手に、貧しげな漁師の家が五、六軒、ばらばらと散らばっている。この辺の海は遠浅だから、春は潮干狩りでにぎわい、冬は

千鳥を聞く。

そういう遊山客から見れば、青い海を背景にしたひなびた弁天社の森につづくこれらの漁師のあばら家は、いい点景として目にうつるだろうが、実際そこにある生活は、浮き世のどん底ともいいたいひどいものばかりだ。

「捨さん、びっくりしっこなしですよ」

小稲はあらためて捨三郎の耳にささやいておいてから、

「小品ちゃん、こんばんは」

と、声をかけながら、暗いあかりのもれている入り口の雨戸をあけた。

「あら、お客さまなの」

一坪の土間の奥は六畳一間きりで、上がりかまちの破れ障子をあけると、家じゅうがひと目で見える。二枚折りの小びょうぶをまくらもとへ立てた床の上へ、こっちを向いてすわっているのが病人の小品だとはひと目でわかる。こざっぱりとした寝巻きの上からはでな半纏を羽織った肩のあたり、ひどくほっそりとして、だれの目にも病人にはちがいないが、この病気の常として、すきとおるような面だちのほおにほんのりと紅がさして、黒目がちなうるんだ目をぱっちりこっちへ向けた姿は、凄艶ともいいたいふぜいに見える。年も小稲より一つ二つ下だろうか、どこかしっとりとした気品があるのは、身についた武家育ちのしつけがまだ抜けきらずに残っているせいか。

その病人と向かいあって、こっちへ背を向けてあぐらをかいているぞろりとした身なりの若い男が、ひょいと振りかえった。

「小稲じゃねえか」

「おや、滝田屋のにいさんだったんですか」

客は小品のかかえ主で、滝田屋の間夫におさまっている深川の万七だった。もとは土地のあくたれ船頭だったが、七つも年上の滝田屋の女あるじで、家には三人もかかえをおいている兼次というすご腕のばばあ芸者にかわいがられ、

亭主とも男妾ともつかず、ずるずるべったりに家へはいりこんでしまったまではいいが、このごろいい気になって、ちょいちょいほかの女に手を出すとかで、いつもやきもちげんかが絶えないといういわくつきのしろものである。

「ご親切に、小品ちゃんの見舞いにきてくれたんですか、にいさん」

女の敏感さで、小稲はただごとではないと見たから、さっとすそをさばいて、かまわず上がりこみながら、万七の前へすわった。

「うむ。どんなあんばいかと思ってね」

万七はなんとなくてれくさそうな顔つきである。

「小品ちゃん、そんなかっこうをして起きていちゃだめじゃないか。あんたは病人なんですよ。寝ていたって失礼にもあたらないんですからね」

「すみません」

なんとなく涙ぐんでうなだれてしまう小品だ。

「捨さん、さっさとはいって門の戸をしめてくれなくちゃだめじゃありませんか。病人のからだに夜風は毒なんですからね」

小稲はついでに外へまでしかり飛ばす。

「こわいねえさんだなあ」

捨三郎はわらいながら、伝次をうながして土間へはいったが、さすがに鼻がつかえそうで、というより薬くささの中にまじった貧のにおいが鼻について、すぐには上へあがりかねる。

4

「小稲ねえさん、おいでなさい」

台所からつぎだらけの半纏股引き姿の、十三、四の小僧が出てきて、小稲におじぎをした。これは貧乏むき出しというかっこうで、そういえば家の中にも道具らしいものはなんにもない。小品の身のまわりだけがこざっぱりしているのは、病人にだけはという小稲の女らしい心づか

いなのだろう。
「なんだ、要ちゃんいたの、ねえさんをひとりおいて、どこへ遊びに行ったのかと思った」
小稲はそっちへも、つんけんと当たり散らす。
「おれ、どこへも行きたくないんだけど、滝田屋のだんなが、客には茶菓子ぐらい出すもんだ、ついでに酒を買ってこいって、銭を出すもんだから」
握っていた小粒を畳の上へおいて、不服そうな顔つきである。色は浅黒いが、くりくりとした輝くような目をしている少年だ。
「あら。にいさんはこんな病人にお酌をさせて、一杯のむつもりだったんですか」
小稲のあきれた目へ、けいべつの色がろこつに光りだす。
「そ、そんなつもりじゃねえんだ」
「じゃ、要ちゃんを追い出して、あとで小品ちゃんをくどく気だったんですね」
「人聞きの悪いことをいうねえ。いくらおれが物好きだって、病人を――」
「にいさんは人聞きの悪いことを平気でしたがる物好きなんだから、心配するんです。なんの下心もなければ、お金まで出して要ちゃんを追い出さなくたっていいでしょう」
小稲は人前もかまわず、追及の手をゆるめない。小品はじっとうつむいているし、要吉は挑戦するように万七を見すえて、その様子からもひどく迷惑な見舞い客だったとわかるだけに、小稲は腹がたってきてしようがないのだ。
「にいさんの女ぐせの悪いのは、深川じゅうで知らない者はないんですからね」
「小稲、黙っていりゃいい気になりやがって、あんまり変なごたくを並べると、引っこみがつかなくなるぜ」
まが悪そうに苦笑いをしていた万七が、急に開き直った。
「へえ、どう引っこみがつかなくなるんです」
「おれはなにも、女ぐせが悪くて要吉を追い出

そうとしたんじゃねえや。要吉のいねえところで、少し小品に話があったんだ」
「どんな話でござんす」
「これから春はこの土地のかせぎどきなんだ。せっかく大金を出してかかえておくかせぎてを、いつまでも遊ばせちゃおけねえ。来てみりゃ、病人だとはいっても、こうやってもうすわって話もしていられるんだしよ、なにも水仕事をさせるわけじゃなし、ただお座敷へ出ていさえすりゃ金になるんだから、もうそろそろ帰ってきて、少しずつでもお座敷へ出たほうが当人のためにもなる、その相談をしようと思ってきたんじゃねえか。あんまり人を小バカにしたことをいうと、承知しねえぜ」
「ふうん。じゃ、そんなことを兼次ねえさんからいいつかって、おまえさんは今夜小品ちゃんをつれにきたというんですね」
「バカにするねえ。こう見えてもおれは滝田屋の亭主だぜ」
「それじゃ、にいさん、おまえあたしの掛け合いに、きっと返事ができるというんですね」
小稲の鉄火な目が、またしてもつりあがってきた。

5

「どんな掛け合いだか知らねえが、文句があるんなら聞こうじゃねえか」
土間に見知らぬ侍と、だんなふうの男がぼかんと突っ立っている。その前でいい負かされては男がたたないから、万七はみえをきるようにいって、腰からタバコ入れを抜き取った。
「タバコはやめてもらいましょう。せきの出る病人の前じゃないか。気のきかない人だねえ」
ぴしゃりと小稲はかまわず一本きめつけておいて、
「小品ちゃんの証文は、なるほどまだおまえさんとこにあるにはちがいありませんが、ただでこうして出養生しているんじゃないんですよ。

狭い台所べやのすみへ寝かされて、おまえさんとこは親切な人がそろってるから、ろくな薬どころか、のみたい水さえ病人が自分で台所まではっていく。まるで死ぬのを待っているようなもんだ。聞けば身のしろ金は五十両だという、あんまり見かねたから、あたしは自分の金ってわけじゃなかったが、五十両持っていって兼次ねえさんに頼みました。あばら家じゃあるけれど、小品ちゃんには洲崎に家があるし、要吉さんという弟もある。この金で親もと身うけということにしてくれませんかというと、にいさんの七つも年上の、おかみさんだかいろ女だか知らないけど、いい年をした兼次ねえさんが、なんといったと思います」

「いろ女じゃねえ、兼次はおれのりっぱなかかあだ」

「まあ、お聞きなさいよ、そのりっぱないろ気ちがいのかかあが、小品ちゃんには身のしろ金のほかに、出の着物だ、髪のものだと、なにやかやで三十両からの貸しがある、そのほうは小稲さんどうなるんですと、つんとそっぽを向くじゃありませんか。遠慮したってしようがないから正直に申し上げますがねえ、にいさん、あたしはそのときほんとに、こんちくしょうと思った。ろくな薬ひとつのませてやがらないで、もし死んだら、——ごめんよ、小品ちゃん、これは話なんだからね、もし当人が死んだら、身のしろ金の五十両だって玉なしになるんじゃないか。それに、小品ちゃんだって、この三年近く、ただ遊んでいたんじゃありゃしない、こんな病気が出るほど、さんざんひどいかせがせ方をしておきやがって、まだ高利の勘定までするのか、欲張りばばあめと、もう三十両あたしにあったら、あのきつねつきみたいな横っつらへ、そのときたたきつけてやりたかった」

「遠慮しねえで、たたきつけてもらいたかったね」

「くやしいけれど、それがないから手をついて

たのみこむよりしようがありやしない。その三十両は、小品ちゃんの病気がなおってから、かせいでかえさせます。いいえ、もしそれができなかったら、あたしがきっとかえしますから、とにかく家で養生ができるようにしてやってください。そうかえ、そういうことなら、証文はまけないが、あたしのほうから五十両たしかに預かったという一札を入れて、出養生をさせよう。ただし、その間の費用いっさいはそっち持ちにしてもらいますよと、まったく驚き入った頭のいいねえさんなんで、あたしはあきれるほど感心しちゃいました」

「そうれみねえ、からだがなおったらかせぐっていう約束があるから、おれが今夜小品を迎えにきたんじゃねえか」

万七はまたしてもタバコ入れへ手をかけて、はっと気がついたその手をなんとなく長いあごへ持っていく。

6

「にいさん、小品ちゃんを迎えにくるならくるで、どうして一度あたしに話をとおしてくれないんです。仲に立って、五十両という金を積んだのはあたしなんですよ。いったい、あたしの顔はどうしてくれるんです」

返事によっては、つかみかかりそうなけんまくで小稲はつめよっていく。

「だからよう、今夜は様子を見にきたんじゃねえか。話はそのあとでとおすつもりだったんだ。物には順てものがあらあな。あんまりあわてるねえ」

けろりとしている鉄面皮な万七だ。

「ふうんだ。様子だけ見るんなら、なにも要ちゃんに酒を買わせにやることなんかないじゃありませんか。ひと目見りゃ、小品ちゃんがまだお座敷へ出られるからだか出られないか、ちゃんとわかったはずです。にいさんのような女ぐ

せの悪い人は、長居をするとどんな不了見をおこすかわかりゃしない。さっさと帰っていただきましょう」

「小稲、おまえそんな大きな口がききてえんなら、残りの三十両、耳をそろえてここへ出してからにしちゃどうなんだ。それがすっかりすまねえうちは、なにもそこまでおまえのさしずをうけることはねえはずだ」

ないのを承知で居直ろうとすると、

「そこに、にいさん、証文を持っているんですか」

と、すかさず小稲が逆をとる。

「払ってくれるんなら、すぐ取ってくるぜ」

「おあいにくさま。あたしは金貸しじゃないんですから、出先までそんな大金を持っちゃ歩きません」

「家へ帰ってもねえくせに、あんまり大きな口をきくねえ」

「家へ帰れば千両箱を踏み台に使っていますのさ。あすの晩までに三十両おとどけすれば文句はないんでしょ。さっさと帰っていただきましょうかね」

負けずぎらいだから、売りことばに買いことばで、ひょいと口に出してしまったたんかだった。

「きっとだな、小稲」

「帰ったら、兼次ねえさんによろしく」

もうあとへひけない。

「ようし、あすの晩になって、三十両持ってこなければ、いやでも小品を座敷へ出すから、そのときになって言いわけはきかねえぞ」

「ご念にゃ及びません」

「ねえさん、お願い――」

小品が両手を合わせて、そんな無理なけんかはしてくれるなと、おろおろすがりつくような目をするのへ、

「いいんだよ、小品ちゃん。お金ならちゃんとこしらえてあるんだから」

ときっぱり言いきって、つんと横を向いた小稲の顔が、さすがになんとなく青い。

「じゃまをしたな、小品。じゃ、あすの晩ということにしよう」

引き揚げどきと見た万七は、にやりとわらってみせて、土間に突っ立っているふたりにはわざと目もくれず、下駄をさぐって帰っていった。

「小稲ねえさん、上がってもいいかね」

捨三郎がのんびりと声をかける。

「さあどうぞ――」

小稲はまだうわの空だったが、すっとあがってきてそこへすわったあかりの中の捨三郎は、おやと見直すほど貴公子然とした品格がそなわっている。

7

「小品ちゃんは、苦労が多いようだな」

親しみをこめた捨三郎のまなざしである。

「はい」

「父御は侍のように小稲ねえさんから聞いたが、どこのご藩中だったのだね」

「あの、せっかくでございますが、そのお話はご主家にはばかりがございますので、どうぞお許しあそばして――」

当惑げに小品は床の上へ両手を仕える。

「ねえさんは、あんなバカ殿さまに、どうして遠慮なんかするんだろうな」

要吉が情けなさそうに姉のほうを見て、そんな思いきったことをいいだすのだ。

「要吉、口がすぎます。お慎みなさい」

たしなめながら、小品が困ったように顔を赤らめた。

「おれ、侍なんかいやだっていっているじゃないか。あんなとこ、もうご主家だなんて思ってやしないんだ」

「わしも侍は好きなほうではないな。このごろはバカな大名が多すぎるんでね」

捨三郎は珍しそうに少年をながめながら、

「要ちゃんうじのきらいなご主家というのは、どこなんだね」
と、誘うようにわらってみせる。
「明石です」
「ふうむ。十万石の松平隠岐守だな。そんなにバカ殿さまかね」
ぎくりとしながら、しかし感情の波はなるべく表に出さないようにと、日ごろやかましくしつけられてきた捨三郎だ。
「おれはきらいです。侍なんてつまらない」
「父御はなんといわれるのかな」
「松木要左衛門というんです。おれ、くわしいことはわからないが、今から四年まえに、お家へ今の斉信さまが養子にくることになったんです。先代さまには直之助さまというりっぱな若殿さまがあったんだ。だから、お父上は反対したんだけど、斉信さまは大御所の五十何人めかの子だもんだから、お父上の組のほうが負けちまったんだ。直之助さまは小名木川の下屋敷へ若隠居させられて、斉信さまがいまの殿様になったんです。それがバカ殿さまで、おれは将軍の子だというんで、いばってかってなまねをするんだ。それをお父上がいさめたら、まえのことがあるもんだから、手討ちにされちまったんだ。バカにしてやあがる、お家のためを思って、忠義をやって、それが手討ちになって、おれたちはあほう払いなんだ。侍なんて、まったくましゃくにあった商売じゃねえや。おれは大きらいだ」
憎悪に目をぎらぎらさせながら、要吉はひざの上でこぶしを握りしめている。
「そうか、明石侯はそんなバカ殿さまか」
わらってはいたが、自分がその小名木川の下屋敷へ若隠居をさせられた直之助なのだから、斉信の暴君ぶりはいちばんよく知っている捨三郎なのだ。
「それにしても、おまえたちには親戚も知人もあるだろうに、だれもめんどうを見てくれる者

はないのか」

「そんな人がひとりでもありゃ、おじさん、母上だって死なずにすんだし、ねえさんをこんな病人なんかにしやあしねえや。小名木川の若隠居だって、見舞いひとつよこしゃしねえんだからな」

不平満々の要吉である。

8

「けしからん若隠居だなあ」

ほおを紅潮させて力んでいる少年を見つめながら、捨三郎は苦笑せざるをえなかった。

正義派の松木要左衛門が、明石藩には正統な嫡子があるのだから幕府の押しつけ養子はことわるべきだと、強硬に反対していたのは捨三郎もよく知っている。

しかし、幕府にしてみれば、当時西丸へはいって大御所と呼ばれていた十一代家斉将軍には、一妻二十一妾に産ませた子女が五十三人ある。女のほうは嫁にやるのだからいいとしても、男のほうはいちいち分家させるだけの封地があるわけではないから、どこかしかるべき諸侯の家へ押しつけなければならぬ。

ねらわれたしかるべき諸侯の家こそ迷惑千万だった。正統な嫡子があろうとなかろうと、老中、若年寄にあげられるほどの当代の人物が、知恵と手腕にかけて押しつけ、いやだといえばどんな難題を持ちかけられるかしれたものではないのだから、松木の正論などとおるはずはない。

嫡子直之助は病弱につき廃嫡の手続きが家来どもの手によって取られ、しからば大御所の血統を養子に下げつかわそうと恩にきせられて、当主斉信が松平家十万石をついでしまった。つまり、大御所家斉の乱淫の結果が、当然十万石の諸侯たるべき五体満足な直之助を、病弱な若隠居にはみ出してしまったのである。

「なにごともお家のためでございますから、し

ばらくおしのびくださいますように」

そのとき家来たちは沈痛な顔をして、この世にも不運な若殿をなぐさめていた。

当時は直之助も、たとえ若隠居はさせられても、人間として斉信に負けてはならぬ、そういう意地から、人一倍武士としての修業を心がけてきたが、ひそかに競争相手と見ていた斉信は、はじめからおよそ身を修めるなどということには縁の遠すぎるけたはずれの人間だった。

わがままで、好色で、酒乱で、しかもおれはこんな家へ養子にくる身分じゃない、まかりまちがえば天下の将軍にもなれるからだなのだという自負があるから、まったくこわいものなしで思いきったぜいたくはする、女にはかたっぱしから手をつける、気に入らない家来は手討ちにする、文字どおりの暴君だった。

天降り養子を反対した正義派はことに憎まれて、手討ちにあったのはけっして松木要左衛門ひとりではないのである。

この暴君は、去年参勤の途中、木曽街道の尾張領で三歳の幼児が供先を切ったのを怒り、宿場投人はじめ村人おおぜいが助命嘆願したにもかかわらず、

「おれは将軍の直系だ。ほかの大名の行列とは違う」

と、突っぱねて手討ちにしてしまったほどの非常識ぶりなのだ。家来の手討ちは発狂、急死、なんとでも世間のてまえはごまかせるが、天下の街道で堂々と幼児を無礼討ちにした非道はどう取りつくろいようもない。これが大御所の子でなければ、むろん重くて家名断絶、軽くても押しこめ隠居はまぬがれなかったろう。が、公儀でも自分のほうから押しつけた養子だけに、どう小言の持っていきようもない。憤慨したのはご三家の尾張藩であった。

9

尾張藩では自分の領地でそんな気ちがいじみ

た乱暴を働かれ、しかもそれを公儀でうやむやに捨てておかれたのでは、領民に対して藩主の権威を疑われる恐れさえある。直接松平家へ使者を立てて、

「以後、当領内のご通行はきっとおことわりする」

と、厳重に申し送ってきた。

明石藩では、東海道にしても木曽街道にしても、尾張領を通らなければ帰国ができない。こともやがて交替の時期が近くなっているのに、どうしたものかと家来たちはまったく当惑しているようだ。

暴君にはまた必ず佞臣がつく。それでなくてさえ、家来のうちには、藩主に取り入るか、藩主の愚に乗じるか、いずれにせようまく立ちまわって自分の勢力を張ろうとねらっている者が多いのだ。直之助が小名木川へ若隠居させられたとき、もっともらしい顔をして、しばらくご隠忍くださいますようと平伏していた江戸の重役のうち、塚越主計、平田作十郎、大内右源太の三人が、たちまち斉信を取りまいて、わが党を作り、主君にもかってなまねをさせるかわりに、自分たちもかって藩政をかきまわしている。迷惑なのは苛斂誅求をやられる領民と、俸禄さえろくに支給されぬ正直な家来たちだ。

直之助は隠居の身だから、苦々しく思ってはいたが、藩政には一言も口は出さなかった。しかし、当然当主たるべき直之助の人間らしい日常を見ていれば、心ある者が、いまの暴君にくらべて、もしあのおかたがご家督をついでいさえすればと思うようになるのは自然の人情で、一藩の信望はおのずから小名木川に集まってきた。それがわがままな斉信にとっては、しゃくにさわるし、三佞臣にとってはひどくけむったい目の上のこぶになってくるのも、また当然な話である。ばからしいと思われるほど、小名木川派と目される家来たちは、次々に君側を退けられていった。

こうしてこの四年間隠忍自重してきた直之助だが、ついにがまんしかねる事件がおこったのだ。

直之助は大御所ひとりの節度なき荒淫から数数の悲劇が生まれているのを見ているし、自分もまたそのために大名からはみ出されたひとりなのだから、けっしてめかけというものを持たなかった。隠居だから、というより多少意地もてつだって、正室はめとらない。菊乃という女ひとりを妻とも思い、そばにおいてきた。

その菊乃が、去年十一月のはじめ、中屋敷に隠居している老侯夫人の茶の席に招かれ、帰邸するとすぐ居間へこもって自害してしまった。遺言もないし、遺書もなかったから原因はわからないが、当日ふいに上屋敷から斉信が客になって押しかけてきたという。菊乃の首に痛々しいつめの跡が残っているのを見ても、直之助にはおよその事情がのみこめた。

名義は側妾でも、直之助にとっては妻にも等しい菊乃であった。そのこまやかな愛情に身をもって答えていた菊乃だから、そんなからだにされては、生きて二度とあわせる顔はないと、悲しい覚悟をきめて帰ったのだろう。

直之助はこの哀れな妻のために、百日のあいだ仏間にこもり、読経と写経に専念して冥福を祈ってやった。その百カ日の供養を果たした今夜、家人にも告げず、ふらりと小名木川の下屋敷を家出してきたのである。

むろん、深い決意があってのことなのだ。

10

「小名木川の若隠居も若隠居だけれど、要ちゃんのおとっつぁん、そんなみじめな死に方をしたのかねえ」

小稲の強い目がまたいきいきと光りだしてきた。

「おやじさまばかりじゃないや。おっかさんもそのために病気になって死んだんだし、ねえさ

んがこんな病気になったのもみんなそのバカ殿さまのためです」
「かたきを討ってやるんだね。なあに、大名だって親のかたきはかたきだ。そんなバカ殿さまは、ぎゅっというめにあわせてやんなさるがいい」
上がりかまちに腰かけている油屋伝次が、けしかけるように少年のほうを向く。
「油屋のだんな、かたき討ちはいいけれど、要ちゃんに妙な知恵だけはつけないでくださいね。石川五右衛門のようなのは、あんまり感心しませんからね」
小稲がしんけんな顔をする。
「わたしはそんなへまはやらないよ」
平気で答えたところを見ると、この男はやっぱり義賊で、かたきを討たせる気でいるのだろう。
「要ちゃんうじは侍はいやだというが、いまになんになるつもりかね」
捨三郎はふと興味をひかれて聞いてみた。
「医者になります」
「医者にねえ」
「どんな難病でもなおせる天下の名医になって、バカ殿さまを見かえしてやります」
要吉の返事は明快だった。毎日姉の難病に心を痛め、一方には旧主の無情冷酷が骨身にこたえている少年としては、そこへ思いいたったとき、はじめて夜が明けたような希望に輝いたことだろう。
「そこへ気がついたのはりっぱだな」
捨三郎はなにかほのぼのとしたものを感じながら、
「しかし、一度志をたてたら、それをやりとげなければ男じゃない。よろしい、わしが要ちゃんうじにきっといい先生を世話してあげよう」
と、力づけるようにいった。
「いいんです。今はまだだめなんだ。それはねえさんがなおってからの話なんです」

少年は、ちらっと姉のほうを気にして、けっして暗い顔は見せない。いじらしい姿だ。

「あたしが、もっとなんとかできれば、小品ちゃんをうちへ引き取ってあげるんだけれどねえ」

ついそれが口に出る小稲は小稲で、あすに迫る憎い万七の三十両へさえ目がつかず、またしても胸が重くなってくる。

さしうつむいている小品の目から、ぽとりと涙がひざに落ちたようだ。

それと見てそっぽを向いた伝次が、

「名医もいいが、バカにつける薬はないっていうからね、バカ殿さまのバカは、とてもなおるまいよ」

と、これはしめった空気を吹き飛ばそうとする口から出まかせだったのだろう。と知るや知らずや、

「だんなにつける薬もないようでござんすね」

と、たちまち小稲がかみついていった。

「おかげで、おれは小稲ねえさんほどバカじゃないんでね」

その伝次の毒舌にも、まえほどの反感はこもっていないようだ。

やっかい者

1

梅びよりともいいたいよく晴れた朝だった。

松平隠岐守邸の御用べやでは、江戸家老上席の塚越主計、側用人平田作十郎、近習頭大内右源太の三人が、大火ばちをかこんで茶をのんでいた。

右源太にいわせれば、塚越はおくびょう、平田は鼻っぱしは強いが無能、どっちも御しやすい人間だ。そういう右源太は、斉信が気に入って先年国もとから抜擢してきたくらいだから、才気縦横、良心を悪魔に売ってしまったような

男で、年もふたりにくらべればずっと若く、まだ三十五まえの若輩だった。

抜擢動機は献妻だったという評判がある。大御所家斉に輪をかけたような漁色の斉信は、初国入りのおり、一日藩士の子女に身分の上下を問わずお庭拝見を許した。綺羅を飾って集まる子女のうちから気に入った女を犠牲に取るのが目的で、物好きな斉信にそういう乱暴な悪知恵をさずけたのも右源太だという話だ。結果は皮肉にも右源太の妻冬が目にとまり、右源太はさっそく妻を離別して、まもなく冬はお冬の方に出世した。

「いくらなんでも、右源太がお庭拝見の策をさずけたというのはうそだろう」

斉信の目にとまるくらいだから、冬は美人だったにちがいない。右源太がそんな悪策をさずけた発頭人なら、当日自分の妻をお庭拝見には出すまい、というのがそれを否定する常識組だ。

「いや、それが右源太のずるいところなんだ。はじめから女房をお冬の方にはめこむ腹があって、お庭拝見を策す。あの男は出世のためならどんなことでも平気でやれる悪党にできているんだ」

一方にはそういう説もある。

いずれにせよ、右源太の妻がお冬の方におさまり、国もとでは大きな勢力を持っているのは事実で、お庭拝見の催しはそれ一度でさたやみとなった。二度めをやろうとしたのだが、まえの話に驚いた藩士たちは、だれも子女を出すまいと事前にわかったからである。すると、斉信は、こんど夜討ちといういたずらを考え出した。むろん、これも右源太の献策である。

夜ふけに、斉信がふいに近習二、三人をつれて、家臣の屋敷へ押しかけ、湯づけを所望して引き揚げるのである。これはあらかじめ押しかけられたほうで用心して、どこでも女を接待に出さないようにしたから、そのほうは成果はあまりあがらなかったようだが、家人の狼狽ぶり

がおもしろいというので、相当長くつづいたようだ。もっとも、気まぐれな斉信だから、毎晩やるというわけでもなかったのだ。

「なにを考え出すかわからない」

いまは斉信より、そういって恐れられている右源太だった。

「困ったものだな」

塚越が軽くまゆをよせていいだした。困ったものだなは、小心の塚越の口癖である。

「尾州のほうも早くなんとかせんと、ことしもおいおいご帰国の日が近くなってくる」

このごろでは、これが明石藩の一番の悩みの種であった。

あけ放した庭先から、のどかにうぐいすの声がきこえてくる。

2

「相手がご三家の尾州さまでは、大御所さまのご威光もあまりききめがありませんしな。どう考えても、あれは少しまずかった」

平田は、その責任はおまえにある、というようにに右源太のほうを見て、おれの知ったことじゃないという顔つきだ。

木曽の幼児切りのとき、右源太はすでに近習頭として、主君斉信のそばについていた。そのおりの道中奉行はじめ、おもな責任者はそれぞれ藩で謹慎閉門させて、ともかくも公儀への謝罪の意を表してある。

「隠岐どののご日常については、檜下でも相当強硬な意見も出ている。どういうござたになるか責任は持てぬが、畢竟おてまえらの監督不行き届きはまぬがれぬことになるやもしれぬ。気をつけてくれなくては困るではないか」

当時いちばん苦い顔をした老中首席水野忠邦が、ご倹約令行きすぎの責めを負わされてこの秋引退したため、そのほうのござたはいまだにうやむやに延引しているが、そのなるべくうやむやに延引させるためには、藩でも要所要所へ

相当以上の金をつかって、塚越も平田もひどく苦労してきた。

ただひとり、だれよりも主君の身近にいて、どうにでも斉信をあやつれる立場にあった大内右源太だけが、なんの処罰もうけず、しかものほほんとした顔で、人の苦労を当然のことのように見物している。塚越にしても平田にしても、それがすこぶるおもしろくない。

そこへ、尾州藩からの、当領内通行禁止の抗議問題がおこってきた。ふたりとも、こんどはおまえが働けという気持ちで、というより一度このいなか侍を思いきり困らせてやろうという腹もあって、

「てまえの手にはおえません。しかるべくおさしずを願います」

と、右源太のほうから手をついてくるのを待っていたのである。

が、右源太には右源太の腹があって、いっこうその問題にふれてこようとはしないのだ。

「いまさらまずかったと申しても、あとの祭りだ。そのために檜下からはさんざん痛めつけられて、こっちはさいわいなんとか切り抜けはしたが、ことしご帰国ができないとなると、また問題がぶりかえしてくる恐れがある。わしはそれを心配しているのだ」

塚越の目も右源太のほうへ向いている。

「てまえの考えでは、ともかく尾州さまに泣きを入れる一手しかない。それにはご苦労でも、当時事件のそばにいた大内から、よく事情を説明して、家来どもの苦衷という立場から、わびを入れる、このほかに手はないと思うのですがなあ」

平田がもっともらしく切り出した。

「まず、その辺のところだろうな。場合によっては、お席拝借と出て、腹を切る意気ごみをほのめかす。まさかにおそばの者が黙ってもいられまいから、なんとか道をつけてくれるだろう。どうだな、右源太」

ふたりでしめしあわせてでもいるか、きょうはのっぴきならぬ手詰めに出てきた。
「海路を取る手もありますな」
右源太がけろりとして、そんなとっぴなことをいいだす。
「海を歩いていこうというのかね」
平田はさすがにむっとしたようだ。

3

「船で歩いていけばいいでしょう」
涼しい顔つきで、右源太は少しも動じない。
「その船をどうするのだ。今からこしらえようというのかね」
平田も負けずに皮肉な出方をする。
「そんな日限もないし、だいいち金がないと、平田さんはいいたそうですな」
右源太はにやりとわらって、
「参勤交替は公儀のいいつけです。某藩の妨害によってそれができないということは、某藩の責任でもあり、そんなことを黙って見ている公儀にも一半の責任はあります。たって帰国せよというのなら、船は公儀から借りればよろしいでしょう」
と、これはまた思いきった理屈だ。
しかし、こっちに非がなければ、そこは大御所さま直系をかさにきて、相手困らせにはちょいとおもしろい思いつきなので、塚越も平田も顔を見合わせてしまった。
「むちゃをいってはいかんな。へたにそんなことを持ちこめば、せっかくおさまりかけている木曽事件がまたいぶりだす。尾州の難題は難題だけで、直接お家がつぶれるまでには至るまいが、櫓下にへそを曲げられると、家名が立たなくなる恐れがあるぞ」
こんどはさとすような塚越の口ぶりだ。
「ご家老がいわれるとおり、尾州のほうも、難題を承知で持ちかけている問題ですから、てまえが行って腹を切ったぐらいではおさまらない

でしょう」
それをいけしゃあしゃあとした顔つきでいってのけるのだから、平田は癇にさわるのである。
「あっちもだめ、こっちもだめではしようがない。ことしはご帰国延期届けでも出しますかな」
ついいやがらせが口に出る。
「それは殿がご承知をなさらないでしょう。あのご気性ですからな。ご三家に妨害されて帰国ができないなどと世上のうわさにのぼっては、だいいち家来の無能を天下にさらすようなもので、それこそわれわれ一同切腹しろと仰せつけられても、言いわけのしようがありませんからな」
事実そのくらいの乱暴はいいだしかねない斉信なのだから、平田はまたしても横っつらをぴしゃりとやられたような感じだ。
「では、そのほうになにか名案でもあるのか」
「ご帰国さえできればよろしいのでしょう」
「むろんのことだ」
「打つ手はいくらでもあります」
右源太は自信ありげに、にやりとわらってみせる。
「そうか。さすがは右源太だな。聞かせてくれ。お家にとっては容易ならぬだいじの場合だ。わしからもよろしくたのむ」
老巧な塚越は、急に折れて出た。こづら憎いやつとは思うが、その半面、こやつならなんとかするかもしれぬと、その才気にたよりたくなってくる。
「申し上げます」
小姓がきて、次の間へ両手をついた。
「ただいま、小名木川下屋敷からご用人梶原弥兵衛さまがまいり、取りいそぎご家老さまのお耳に入れたい大事があると申していますが」
「通しなさい」
小姓をさがらせてから、
「若隠居がどうかいたしたのではないかな」
と、塚越は太いまゆをよせる。

4

小名木川の若隠居直之助が、それ以来仏間から一歩も出ないことは、もう上屋敷でだれ知らぬ者もない。

「正気のさたではありませんからな、ご発病でもなされたのではないでしょうか」

隠居させられてからは、藩政についてはけっして口出しをしてこないが、聡明な人がらであるだけに、これだけは三人にとって常に共同の敵だ。いっそ病死でもしてくれたほうが始末がいい、と平田はわれながらだいそれたことを考える。

「わしもな、今それを心配しているのだ。ただのご発病ならしかたもないが、ひょっと気でもふれられたのだとすると、相当事がめんどうになる」

「なるほど」

いわれてみると、これはありそうなことだし、はなはだやっかいなことになる。あらぬことを口走るだろうし、刀を振りまわさないともかぎらない。

「しようがない、さっそく厳重な座敷牢を用意させるのですな」

「一服盛ったほうが早いでしょう」

右源太がずばりといってのける。

「一服――」

こやつはどうしても一枚うわてだと、平田はなんとなくぞっとする。その顔をながめて、

「まだ気ちがいときまったわけではないでしょう。お重職がたは気が早いから、いらぬ苦労が多くなるんですな」

と、わらいだす右源太だ。

ずぼしだから、平田は妙に腹の中を見すかされた気がして、

「いや、取り越し苦労ともいえまい。自分の思い者を人に取られたのだからな。あれはどう考えても少しひどかった。なんとかならなかった

ものかなあ」

と、そのときも右源太がそばについていたのだから、ちくりと刺してみたくなる。いや、あれは偶然ではなくて、献妻さえ平気でやってのけるような男だから、あらかじめ右源太が筋書きを書いたのではないか、そんな疑いさえあるくらいなのだ。

「だめでしょうな。ほかの点はずいぶんご名君にわたらせられますが、大御所さまゆずりですからな、たってお止めすると、どうしてもお気が荒くなられる。木曽のおりもそれでしてな。あれがいちばんいいお手討ち止めです」

いっこうに責任は感じていないふうに見える右源太である。

若隠居付きの用人梶原弥兵衛がそこへきて両手をついた。四十年配のりちぎそうな男で、ひどく青ざめた顔をしている。

「どうしたな。なにか火急の大事ということだが」

塚越が鷹揚に声をかける。

「直之助さまが家出をなされたのではないかと思われます。昨夜、いつの間にか屋敷を脱けられ、けさまでお帰りがございません」

「家出――」

塚越ははっとなりながらも、まだふにおちない。町人や平侍の家ならとにかく、大名の一門が家出をする、あまり前例のないことだからだ。

5

「おひとりでか――」

われながら愚問を発せざるをえない塚越だ。

「はい、いつものとおりお仏間でお夜食をとられまして、このごろはひどく人をおきらいになりますから、おやすみのお時刻にお小姓がお迎えにあがりますと、お姿がお見えになりません。それっきりけさまでおもどりがございませんので――」

おろおろと弥兵衛が答えた。

「お姿がお見えにならなかったおり、そのほうはそのままほっておいたのか」
「いいえ、ご書斎からお居間、庭の内外まで、くまなくお捜しいたしました。すると、裏木戸のしまりがはずれておりましたので、たぶんお気まぎらしのご散策かと存じていたのです」
「たわけめ、なぜそれを昨夜のうちに届け出なかったのか。おひとりで屋敷の外まで出られる、それからして異常なことではないか。そんなことで下屋敷の用人がつとまると思うか」
「申しわけございません」
「お気まぎらしのご散策ではなくて、お気が狂われた、そんなご様子はこの二、三日お見うけしなかったのか」
平田がいちばん気になるのはそれだ。
「いいえ、そんなご様子は少しもございませんでした」
「と断言できるのか。狂人も初歩のうちは、あまり常人と変わりがないように見えることがあるぞ」
それを見わけろというのは、いうほうが無理だとは気がつかないようだ。弥兵衛は冷や汗をかいて当惑している。
「とにかく、困ったものだな」
いくら弥兵衛をしかっても追いつかないほど、事実のほうが重大なのだから、塚越は思わずそれが癖の困ったなが、ため息といっしょに出た。
「やっかい殿が、ほんとうにやっかいなことになりましたな。お気が変になったとすれば、いまごろどこをうろついているかわからない。お家の恥になりますからな、至急人を出さなくては――」
平田にはどうしても気が狂っての家出としか考えられないようだ。
「弥兵衛、金子は調べてみたか。若隠居は無一文で出られたのか」
右源太が静かに聞く。

「はい、手文庫のお手もと金五十両がなくなっております」
「仏間にこもっていたそうだが、そのあたりの様子はどうだ」
「きれいに取りかたづけられまして、お仏壇のとびらもしまっておりました」
「そこまでわかっていながら、覚悟の家出と気がつかないのは、少しうかつすぎはしないかね」
ぎくりとしたのは、弥兵衛よりむしろ塚越と平田のほうだった。またしても右源太に一本やられた形である。
「申しわけございません。実は、お手もと金の儀は、けさになってわかりましたものでございますから」
「さがってござたを待て。うろたえ者め」
家老、側用人をさしおいて、ぴしりっと右源太の口からむちのようなことばが飛ぶ。

6

死刑の宣告をされた男のように蹌踉とさがっていく弥兵衛を見送りながら、塚越も平田も、右源太の出すぎた専断にはまったくうっかりしていた。
それどころではない、小名木川の若隠居が覚悟の家出をしたとなると、前例のないことだけに、公儀のてまえをなんとするか、松平家の浮沈にもかかわる重大事だし、いったい家出の目的がなんにあるのか、それがなんともぶきみでもある。
「で、右源太、そのほうはどう見るな。覚悟の家出だとすると、その覚悟というのはなんだな」
塚越がおだてるように右源太の顔を見る。
「厭世か、復讐か、まず復讐でしょうな」
「復讐。復讐というと？」
平田の声は明らかにふるえていた。
「なにか不満があるから、家出をしたのでしょ

う。やっかい殿が日ごろどんな不満を持っていたか、それを考えてみれば、およその見当はつくでしょう。どうせ他人にかってなまねをされる家なら、松平家十万石を取りつぶしてやれぐらいの腹になったかもしれませんな。世間知らずのくせにバカげた空想をするもんだ」

右源太はせせらわらっている。

「とにかく、早く捜し出さなくてはならんな。なんとでもして小名木川へおもどり願わなければ、迷惑千万だ」

「絶対におもどりにはならんでしょう。たとえ行くえがわかってだれがお迎えに出ようともですな」

「しかし、ほうってはおけまい、むりにでもお連れをして――」

「座敷牢へでも入れますかな」

そうずばりとろこついわれてみると、塚越も、平田も、苦い顔をして、二の句がつげない。

「おなじことなら、もう一歩積極的に出ることです。ほねをおって家へつれてきて一服盛るのも、外で始末してしまうのも、結果はおなじだ。気が狂って家を飛び出された、浪人者とけんかをして、あやまって切られた、口実はあとからなんとでもつく」

ここまでくると、ひとり家出をした直之助ばかりでなく、塚越も平田も、右源太に匕首を突きつけられたようなものである。万事一任するからうまくやってくれるようにと、下から出るほかはなかった。

そのころ――。

大新地の小稲は、稼業がらもう昼に近いおそい朝飯をしまうと、すぐよそゆきに着替えて、

「ちょいと滝田屋さんへ行ってきますからね」

と、ばあやにいいおいて家を出た。

昨夜、洲崎の小品の家を出るとき、油屋伝次はそれでもなにがしかの金を紙包みにして、送って出た要吉にそっと握らせていたが、口ではさんざん同情したようなことをいいながら、捨

三郎はなんにもおかない。ふところに五十両持っているはずだのに、なんて気のきかないお平の長芋なんだろうと、けいべつしていると、

「小稲ねえさんの家はどこだえ」

と、やがてにぎやかな色町へはいってから、捨三郎は妙なことを聞くのである。

7

「捨さん、あたしの家なんか聞いて、どうするんです」

小稲は少し中っ腹だった。

「わしは今夜、大新地の五明楼という家へ案内してもらいたかったのだが、もうおそいからそれはあすのことにして、今夜はねえさんの家で茶をひとつふるまってもらって、帰ることにしようと思うんだ」

「だんな、おそいったって、色町はまだ宵の口ですぜ」

油屋伝次は苦笑したようである。

「いや、わしは早寝の癖がついているものだから、眠くなったんだ」

そんなわがままなことをいいだす捨三郎だ。

「じゃ、いっそこのまま帰んなさいましよ。芸者の置屋へなんかきたがるのはやぼだって、さっきも教えてあげたでしょ」

遊びの金を五十両持っているなんてうそなんだ。この男はとんだ食わせ物かもしれないと、小稲はすっかり興がさめてしまった。

「そういえばそうだったな。では、ねえさんの家の手前まで行こう。家をおぼえておかないと、あすさそいにこられないからね」

かってにおしよ、こっちはお座敷がたくさん待っているのにと、小稲は迷惑だったが、考えてみると、油屋伝次とのけんかを、とにかく一時おさめてくれた男なのである。しようがない、ふたりを家へつれていって、からっ茶ってわけにはいかないから、一口飲ませて別れようと思い直した。

まもなく、ごたごたと置き屋ばかり並んでいるおしろいくさい路地へはいって、迷路のようにぐるぐるひっぱりまわしながら、
「ここよ、あたしの巣は。せっかくきたんですから、ふたりともちょいとお上がんなさいよ」
と、わが家の格子の前へ立つと、
「なに、ここでいいよ。家さえおぼえておけばいいんだから」
捨三郎はにこりとして、ふところからふくさ包みを出した。それを小稲の手に握らせて、
「ほんとうはこれをねえさんの家へ黙って忘れていこうと思ったんだが、やぼになっては悪い。ここでまにあわせておこう。これは黙って手をつけても、けっして帯など解けとはいわないから、小品ちゃんをたのみます」
冗談のようにいったかと思うと、
「油屋うじ、さあ行こう」
伝次をさそって、もうさっさと歩きだしていた。

どきりと胸を突かれた小稲は、ずっしりと重いふくさ包みを握ったままぽかんとして、それから顔がまっかになって、いつの間にかぽろぽろと涙が流れてきた。
——おくゆかしいことをする男。
うれしいし、恥ずかしいし。うれしいとは小品ちゃんのきょうだいのために、恥ずかしいとはこっちの器量が小さいために、しばらくでも、お平の長芋などとけいべつしたことだった。
お平の長芋どころか、ゆうべは一晩じゅう、その高雅な面ざしが、凛と澄んでいた男らしい目が、まぶたにちらちらして、あたしおかぼれしちまったのかしらと、われながら生娘のように、胸がせつなくなってきて、ため息さえ出てくるのであった。

8

けさ目をさまして、なんだかたのしいことがあるような気がして、ああそうだっけと、すぐ

に思い出したのは、今夜あの人に会えるということだった。

——うれしいな。

小稲は胸がわくわくしてくる。はじめて女の幸福というものにめぐりあったような気持ちなのだ。とうとうあたしにも好きな人ができた。あたしはもうひとりじゃないんだからと、大声にどなって歩いて、早く深川じゅうへ知らせてやりたいような気さえしてくる。

——でも、捨さんのほうはどうなのかしら。

ふっと心配になって、もう一度胸へ手をあてて、よく考え直してみた。

あの人はおまえが好きだなどとは、ゆうべひとこともいっていやしない。たいていの男はすぐあたしにほれてもらいたそうな目をするんだけれど、あの目はいつも深い清水のように澄んでいて、そんないやらしいところは少しも見えなかった。じゃ、あたしの片思いかしら。

そんなことはない。きらいなら洲崎までのこのこついてきやしないはずだし、だいいち五十両なんて大金をあたしにあずけていくものか。あたしの気性が気に入ったからこそ、小品ちゃんのことをたのむといって、すっかり任せてくれたのだ。その気に入ったというのが好きな証拠だし、現に今夜、きっとたずねてきてくれる約束があるくらいなんだもの、捨さんだってひと目であたしが好きになっているにちがいないのだ。

男だから、いや、深川の小稲ねえさんがひと目ぼれするほどの男のなかの男だから、ほかのいやらしいやつのように、すぐべたべたなんかしたがらないだけなのだ。

——けど、今夜は少しくらいべたべたしてくれてもいいな。

あの人、どんなお上品なべたつき方をするかしら。そう考えただけでも、うっとりとしてしまって、押えている胸乳の下がくすぐったいような、せつないような——。

「早く夜にならないかねえ」
と、小稲は思わず口に出してしまった。
「ねえさん、お呼びですか」
聞きとがめてばあやが台所から顔を出す。
「ふ、ふ、朝なんだねえ、まだ」
「いいえ、朝のしたくはさっきからすっかりできてますよ。もうほんとうはお昼に近うございますからね」
「たいへんだ。起きるよ、ばあや」
小稲は憎らしい滝田屋万七の顔を思い出して、むくりと起き上がった。
ちくしょう、あんな病人の小品ちゃんにかせがせようなんて、兼次ねえさんも兼次ねえさんだ。いや、ほんとうは万七が、あわよくば小品ちゃんのからだをと、変な野心をおこして押しかけたのかもしれないけれど、それならそれで、なおさらのこと、きょうこそふたりの前へ残りの三十両をたたきつけて思いきり毒づいてやらなくちゃと、ひと足家を出た小稲は、もう甘い恋の小稲ではなく、張りのある目をつんと闘犬のようにみはった伝法芸者の小稲になりきっていた。
滝田屋は路地をひとまわりした路地のかどで、ちょうど五明楼の裏手にあたっている。来てみると、若いかかえっ妓がしりっぱしょりでせっせと格子をみがいているところだ。

裏の裏

1

「こんにちは——。兼次ねえさんはおうち?」
若い妓に声をかけると、格子につかまったまま振りかえって、
「おいでなさいまし。——ねえさん、小稲ねえさんがみえましたよ」
と、そこから奥へどなってくれる。
「おや、そうかえ。小稲さん、どうぞ」

三畳の玄関の間のすぐ奥が六畳の茶の間で、ここも、いま朝の世話場がすんだところらしく、兼次と自称若い亭主の万七が長火ばちを中にして、小楊枝を使っているところだった。

兼次はもう三十七、八の石臼のように太った女で、それが案外あか抜けのした女に見えるのは、さすがに長年色町でみがきこんだ年の功とでもいうか、そのかわりあんまがわり若い男めかけがいなくては一日もいられないといったようないやらしさが、なんとなく膚にしみこんでいるといった感じだ。

むろん、ここでは兼次が亭主の座へどっかりとみこしをすえ、万七はどう亭主づらをしてもその前へ引きすえられて、絶対に頭があげられないのである。

今も小稲がずかずかとはいっていって、かまわずふたりを見くらべられる位置へすわると、ゆうべのことがあるから、万七は用ありげにつと長火ばちの前を立とうとした。

「にいさん、ちょうどよかった。ご迷惑でも、もうしばらくそこにいてくださいよ」

小稲は先手を打って逃がさない。

「ふうむ、おれになにか用かえ」

「小品ちゃんのあと金三十両、どうしても今夜までに持ってこいっていうお掛け合いでござんしたね」

「そうだったかなあ」

もう逃げられないと観念したか、万七はなるべく兼次のほうを見ないようにしてそらっとぼける。

「おや、万さん、おまえいつ小稲さんにそんな掛け合いをしたんだえ」

茶を入れていた兼次が、案の定たちまち聞きとがめる。思うつぼの小稲だから、

「小品ちゃんの家で、ゆうべのことなんですがねえ。——兼次ねえさん、あと金の三十両を持ってこなければ、あの病人の小品ちゃんをお座敷へ出すって話は、ほんとうにねえさんのロか

ら出たことなんですか」
と、開き直った。
「おやまあ、この人がそんなことをいったんですかねえ」
「たしかに病人の前でいいました。ただ口でいっただけじゃありません。弟の要ちゃんに酒を買ってこいといいつけて、きっと小品ちゃんがお座敷の用に足りるかどうか、にいさんは自分でためしてみる気だったんでしょうね。いいあんばいに、そこへあたしたちが見舞いに行きあわせたもんですからね、病人をとんだためしにかけられないですんだようなものの、——それじゃねえさん、話が少し違やしませんかねえ。あたしはねえさんに五十両という身のしろ金をお渡しして、小品ちゃんをあずかっているんです。そのあたしに黙って、このにいさんをそんな使いに小品ちゃんの家へ出すなんて、もしそれがねえさんの口から出たのなら、いったいどういう訳なんでござんす」

小稲はいよいよ火ぶたを切った形だ。

2

「万さん、おまえほんとうに、ゆうべ、そんなまねをしたのかえ」
兼次はあきれたような顔はしたが、その表情のどこにもおこったふうなところはない。
「ゆうべ、ちょっと寄るには寄ってみたが、そのねえさんの話は少しおおげさのようだな」
万七はずるそうにわらっている。
「なにがおおげさなんです、にいさん。おれは滝田屋の亭主だ、顔をつぶすの、つぶさないのというんなら、残りの三十両きれいにここへならべてからいえと、大あぐらであたしをにらみつけていたじゃありませんか」
躍起になる小稲だ。
「いったとも。そのとき、おまえこそごたいそうなことをいっていたっけな。あたしは金貸しじゃないから、そんな大金は持って歩かねえが、

家へ帰れば千両箱を踏み台がわりにしているんだってね、その踏み台がわりの千両箱の中から、たった三十両、きょうは持ってきたとでもいうのか」

「滝田屋のお若いご亭主さん、小品ちゃんの証文を出していただきましょう」

ちゃんと金が懐中にあるのだから、小稲は気が強い。

「ふうむ、じゃ、三十両持ってきたのか」

万七が意外そうな顔をする。

「はばかりさま、うちじゃからの千両箱なんか踏み台にしちゃいないんです」

「大きく出たぜ。おい、兼次、聞いてのとおりだ。小品の証文を出してやんねえ」

行きがかり上、万七がぐいとそり身になって亭主づらをしてみせると、

「七公、おやめ、バカバカしい。おまえが滝田屋の亭主づらなんかしたって、だれもほんとうになんかしやしないよ」

と、兼次が頭から子どもあつかいにたしなめて、そのたしなめるのが、ほれたというのはこうもだらしのないものか、まるでよだれがたまったようなことばつきなのだ。

「小稲さん、かんにんしてくださいよ。あたしがあんまりかわいがりすぎるもんだから、このあんぽんたんがずに乗って、どんな口から出まかせをいったかしれないけれど、あたしは小稲さんの顔をつぶして、小品をお座敷へ出すような、そんな義理知らずじゃござんせん。いいんですよ、あと金なんかいつだって。おまえさんの苦しいのはあたしがよく知ってるんだから、けっして無理はしてくれなくたっていいんです。七公、おまえ小稲さんにあやまんなさい」

「なにもおれはあやまるような悪いことはしてやしねえ。いいじゃねえか、踏み台の千両箱から三十両出してきたっていうんだから、証文をまいてやれよ」

「おまえ、あたしのいうことがきけないのかえ」

じろりと兼次の目が光る。
甘い顔は見せてはいても、この女のすごい性根はそのねこの目のようにかわるところにあるので、その目とけんかをしにきた小稲なのだが、きょうはどうも少し様子が違う。いってみれば、小稲に対してははじめからねこなで声なのだ。
「あやまることはねえんだがなア」
万七はまだ不服そうである。

3

「とにかく、ねえさん、ここへあと金の三十両、耳をそろえてきましたから、小品ちゃんの証文を巻いてくださいまし」
小稲はいいたいだけのことはいってしまったのだ。それで兼次がおこらなければ、けんかのしようもないし、男めかけの万七なんかに頭をさげさせてみたところで、自慢にもならない、と思い直したから、懐中からふくさ包みを取り出して、小判で三十両、わざとそこへざらざらとぶちまけてやった。
「おやまあ、なんにもそんなに無理をして、いそいでくれなくてもよかったのにねえ」
さすがに兼次も意外だったらしく、目をみはっている。
「いいえ、ちっとも無理なんかしたんじゃありませんのさ。あたしにもこのごろ、ちょいと好いたらしい人ができましてねえ、これからは金のことでおまえに苦労はさせたくないからって、——ほ、ほ、男らしい男の心意気ってうれしいもんですね、ねえさん」
おおっぴらでのろけながら、今はちゃんと捨三郎という男が心の中にあるのだから、小稲は胸がすうっとする。
「へえ、小稲ちゃんがほれる男って、どんな人かしら」
ほんとうにしていない兼次の顔つきだ。
「指の曲がった男か、手の長いやつか、あけてびっくり玉手箱って話があらあね」

そっぽを向きながら、万七がそんな悪態をつく。

「七公、きいたふうな口をおききでない」

兼次がたしなめながら、たんすから小品の証文を出してきてくれたので、

「とんだおじゃまをしました。——あんまのおじょうずなにいさん、二度と小品ちゃんの見舞いだけはお断わりしますよ」

と、わらいながら一本きめつけておいて、小稲は颯爽と立ち上がった。

「あのはねっかえりあま、どこからこんな大金を引き出したんだろう」

小稲が帰ってしまうと、兼次の顔はがらりと変わっていた。

「いいじゃねえか、どこから引き出したって、こっちの手へはいってしまえば、もうこっちのもんだ」

「バカ、なんだっておまえ、あのはねっかえりにあと金の催促なんかしたんだえ」

「いけなかったのか」

「あんまのくせに、よけいなまねをおしでない、あたしはこの金で小稲を縛って、ひともうけする口があったんじゃないか。それでなくて、あんなおちゃっぴいの小生意気な啖呵をだれが黙って聞いているもんか」

「ふうむ、そいつはうっかりしていたなあ」

臍に傷を持っている万七は、いやに神妙だが、その傷を見のがしておくような兼次ではない。

「七公、おまえなにしにゆうべ小品の家へなんか行ったのさ。小品にどんな用があったんだえ」

「だからよう、あいつがお座敷へ出られるようなら、遊ばしとくことはねえと思って」

「うそをおつき、バカ」

ぴしゃりと兼次の平手打ちが男のほおへ飛んで、いい音をたてる。

4

その日、京橋大根河岸の岡っ引き佐平は、北の与力川村町之進によばれて、ご苦労でも夕がたになったら、深川大新地の五明楼へ出かけ、明石藩の大内という人をたずねてみてくれとたのまれた。

佐平はもう五十近いその道の経験者で、仲間では大根河岸のおじさんでとおる大親分株だ。

「だいたいどんな用件か、おわかりでござんしょうか」

町方と違って、藩内の仕事は管轄外だからやりにくい。手をつけてしまってから、あっしの手にはおえません、というのも恥っさらしだからと、そこは用心深い佐平だった。

「だれかさがし人のようだ。くわしいことはその者に会って話すから、腕のきいた岡っ引きをひとり推薦してくれとたのまれてきたんだ。明石はわしの出入り屋敷のことだし、なにぶんたのむ」

つまり、腕っきき と見こまれての依頼なのだ。

「だんなの前でござんすが、明石さまはこのごろ、あんまり評判がよくないようでござんすからね」

そういいながら、佐平ふっと思い出したことがあって、

「その大内さまとおっしゃるかたは、どういうご身分の方なんでござんしょう」

と、聞いてみた。

「今は近習頭というお役だが、なかなか才物だそうで、家老なども一目おいているようだ。なにしろ、殿さまがひどくお気に入りだというから、たいていの言い分はとおることになるんだろう」

「よろしゅうございます。とにかくお目にかかって、お話をうかがってみましょう」

佐平はいちおう承諾して、町之進の前をさがった。

佐平の同町内に、伊丹屋宗兵衛という大きな質両替商がある。お美代という娘が十六の年から明石の奥へ腰元にあがっていて、ことし十八になるが、この十日ばかりぱったりたよりがない。こっちからたずねていっても、

「いまご用中だから、ここへつれてくるわけにはいかんが、無事にご奉公しているから安心なさい」

とか、いま表使いに出ているからとか、そのまた応対に出る者が行くたびにかわっていて、一度も当人に会わせてくれない。

それでなくてさえ、親たちは、当主の乱行がだんだんひどくなってくるうわさを聞いて、この節季にはぜひお暇をと願い出ていたほどで、ことによると手討ちにでもあったのではないかと親類じゅうを集めての大騒ぎになった。

そして、手をつくしてさぐってみると、お手討ちではなくて、座敷牢だということがやっとわかった。

数日まえ、気まぐれな斉信は、朝から大森のほうへ探梅の遠乗りをかけた。帰りには高輪の下屋敷へはいって休息するということで、上屋敷からお膳番や腰元たちが出向き、酒肴の用意をして待っていたが、そのおり腰元たちの中にまじっていたお美代が、ふと荒淫な斉信の目にとまってしまった。

しかも、それが、一盞傾けてふらりと庭へ出たときのことだという。

5

高輪の下屋敷には、品川の海が見晴らせる疎林の中に、風雅な茶室ができている。

斉信は酔いざましにぶらぶらとそっちのほうへ歩きながら、少し離れて四、五人ついてくる紫矢がすりの若い腰元たちを振りかえり、立ち止まって、

「あれは――」

と、先頭から二番めのぽったりと色白な腰元

を目でさした。
「美代と申します」
そばについていた老女が答える。
「一服所望しよう。のどがかわいた」
そういい置いて、斉信はずんずん茶室へはいっていった。
わざわざその腰元の名を聞いて、茶を所望する、それは美代をひとりで茶室へよこせという常套手段であって、つまり白羽の矢が立ったのだ。あとの者は、呼ばれるまで外で待っていなければならない。
「お美代どの、お召しでございます。そそうのないようにお供を――」
老女がそばへきておごそかに告げた。
お手がつくということは、玉の輿にのることだ。ほかの腰元たちははっとほおを赤らめながらも、なんとなく嫉妬の色がうかぶ。そのうちでも当然まっかになるべき美代が、
「はっ」
と、地に三つ指ついて、一度は赤くなったが、深くうつむいたまま容易に立とうとしない。
「お美代どの、どうなされたのじゃ」
「はい」
石のようにからだじゅうを堅くして、いつの間にかまっさおになっている。ただごとではない。
「手間どっては御意にさわります。どうしたというのじゃ。こわいのかえ」
気をもんで、老女がそこへしゃがみ、顔をのぞきこむようにして聞くと、
「美代は、美代は御意にしたがいかねます」
と、ふるえながら、はっきり答えたという。
主君の意にそむく、めったにないことだし、老女はすっかり狼狽してしまった。なだめたり、すかしたり、果てはおどしもしてみたが、そこへすわってしまった美代は、がんとして立とうとしない。
からだのつごうかえ、と聞けばかむりをふる。

からだのつごう以外に、主君の意にしたがわぬということは絶対にありえないのだが、けっきょく美代は斉信という人間を毛ぎらいしたらしい。

生まれてはじめて女から拒絶された斉信は、むろん激怒した。一同はその場で手討ちを予想して、青くなったが、そのときもおそば去らずの右源太が呼ばれて、茶室でなにごとか言上していたようだが、まもなく老女に、

「美代は座敷牢に入れておくように」

と、斉信の意を伝えた。

今もって美代は高輪の下屋敷の急造された座敷牢へ入れられているという。

そこまでさぐり出した伊丹屋では、なんとかして美代を無事に救い出したいものと、必死になりだした。

同町内で、出入り先だから、佐平も相談をかけられているのだが、大名の屋敷内のことなので、これだけはどうにも手のつけようがなくていたのである。

6

——大内という人が明石藩の寵臣なら、話の様子で、ことによるとお美代ちゃんを引き替えに下げわたしてもらえるかもしれねえ。

佐平はそこへ気がついたのである。

で、夕がたになるのを待って、深川の五明楼へ足を向けてみた。

深川はなわ張りちがいだが、顔の広い佐平だし、この土地から出ているきかん坊の小稲は、女房の姪にあたるので、まんざら縁がないところでない。五明楼の玄関へかかると、

「おや、大根河岸の親分さんでございますね。なにかご用なんですか」

と、そこに居あわせた中年の女中が、こっちは知らないが、向こうではどこかで顔をおぼえていたのか、如才なく迎えてくれた。

ただし、頭から、なにかご用なんですかと出

たのは、こっちが岡っ引きのせいもあるが、岡っ引きふぜいでは寄り合いでもないかぎり、こんな大きな料亭へひとりで遊びにこられるがらでないことを、相手にちゃんと見すかされていることになる。内心苦笑せざるをえない。

「お手の筋だよ、ねえさん。おれたちふぜいには、こういう大店は歯がたたないからね」

「あら、そんなつもりでいったんじゃないんです。どうしよう、あたし」

「は、は、そんなに気にしなくたっていいや。御用できたにちがいないんだからね。明石のご家中で大内右源太さまってだんながみえているかね」

「ええ、おみえになっています」

「北の与力川村さまからのお話で、おれという男がたずねてきたと、取り次いでみてくれないか」

一度去ったその女中が、すぐに引きかえしてきて、どうぞこちらへという。

案内されたのは茶室がかった静かな小べやだった。こういう土地はおもに夜の世界にはちがいないが、夜も昼もない物好きはどこにもいるから、もう太鼓をたたいているにぎやかな座敷が幾組かあるようだ。

「ご倹約令なんてのは、もうまるで夢のようだな」

そんなことを考えているうちに、三十四、五のりっぱな侍が気軽にはいってきた。きっすいの江戸そだちではないが、それなりにあか抜けがして、どこかゆだんのできない男と、佐平は稼業がら目で見てとる。

「大内右源太だ。見知りおいてくれ」

相手は座につくなり、至極さばけた調子だ。

「京橋大根河岸の佐平でござんす。さっそくですが、さがし人というお話で――」

てきぱきとやったほうが話しいい相手だと、佐平の勘はさすがに鋭い。

「うむ、家出人だ。重役どもはなにぶん外聞に

かかわるから、できれば藩内でという腹のようだが、融通のきかない屋敷者になにができるもんか。江戸は広いからな」

「ごもっともで――」

「町のことは町方にかぎる。ひとつ引き受けてくれぬか。ただし、秘密だけは絶対に守ってもらいたいんだが」

「だんな、口の軽い者にゃこの稼業はやっていけやせん。いったい、どなたが家出をなすったんでござんす」

佐平はじっと相手の顔を見る。

7

「その家出人は、小名木川の下屋敷に隠居させられている若殿直之助どのだ」

右源太はずばりと切り出しながら、その目の底にあきらかに軽侮の色をたたえている。

「へえ、若殿さまがねえ」

地獄耳を持っている岡っ引きのことだし、伊丹屋のお美代のこともあるので、佐平も明石藩の内情は多少聞きこんでいる。が、若殿の家出というのはちょいと前代未聞だから、思わず目をみはった。

「いつのことでござんす、それは」

「まだ昨夜の話だ。場違いな人間が場違いなところをふらふらしているんだから、その道の者が見ればすぐわかると思うのだが」

右源太は至極簡単に考えているようだ。

「わかることはすぐわかることでござんしょうね、場違いのところにいてくれさえすれば。しかし、若殿さまでは、まさかおなわもかけられませんからねえ」

「いや、お行くえがわかったら、そっと知らせてくれさえすればいいんだ。あとはこっちで始末をつける。どうだろうな」

「てまえはまだ若殿さまにお目通りしたことがござんせん。人品骨がら、日ごろのご性質、前後のご事情など、お打ち明け願えますか」

「それは小名木川の用人梶原弥兵衛というものをそのほうにつけるから、くわしく聞いてもらえばいい」

佐平はしばらく考えなければならなかった。行くえを突きとめるくらいは、さほど困難な仕事ではなかろう。が、この男は家来のくせに、家出した若殿に少しも同情がない、むしろ、バカ殿あつかいにして、迷惑がっているようだ。

いってみれば、お家騒動の悪人と、その悪人どもからじゃま者あつかいにされている若殿、行くえを突きとめて知らせたあとのことを考えると、べらんめえ、江戸っ子がそんなふてえ了見の家来どもに、あごで使われてたまるもんか、ついそんな気になってくる。

しかし、こっちにはお美代の問題があるのだ。

「だんな、あっしのほうにも、お願いが一つあるんですがねえ」

「なんだ、願いとは」

「くどいことは申し上げません、だんなのお力で、伊丹屋のお美代を、なんとか親もとへおさげわたしが願えませんでしょうか。近所に住んでいて、親どもの愁嘆が見かねやす。どんなものでございましょう」

「ふうむ、腰元美代を知っているのか」

右源太は意外そうな顔をしたが、ちょっと考えて、

「つまり、交換条件だな。よかろう、こっちも急を要することだ。おまえが小名木川の行くえを知らせてくれたら、即日なんとか取り計ってみよう」

と、うなずいた。

「失礼ながら、男の約束でございすね、だんな」

「やぼな念を押すな、おれも大内右源太だ」

右源太はにやりと笑って、

「これで用談はすんだな。席をかえて、梶原弥兵衛にも会っておいてもらおう」

と、あっさり立ち上がった。

8

まもなく五明楼を辞した佐平は、思わずぺっとつばを吐いた。

——ちんぴら悪党め、いい気になってやがる。

佐平はどうしても右源太に好感が持てない。座をかえて酒席へ行ってみると、若い妓がずらりと並び、取り巻きらしい侍が三人、きちんとすわって待っていた。ばばあ芸者の兼次が、大さま大さまと、まるで殿さまあつかいにしてきげんを取りむすぶのを、鷹揚にかまえて、そっくりかえって、てまえの偉そうなところを人に見せつけようって腹だから、鼻もちがならない。

二つ三つ酒の相手をすると、佐平はいま引きあわされたばかりの小名木川の用人梶原弥兵衛に耳うちをして、そっとさっきの別室へ座をはずした。

「大内さまはまだお若いようなのに、ご家中では相当のきけ者のようでございますね」

その前でこわごわと顔色ばかりうかがっていた弥兵衛に、それとなく皮肉をいってやると、

「才物でな、ご老職も一目おいていられる。正直にいうと、こんどのことでは、わしは切腹の座へ片足かけているようなものだ。なにぶん力ぞえをたのみ入る」

年配の弥兵衛がみえもなく、ため息まじりに頭さえさげるのだ。よっぽど右源太におどかされているのだろう。

それだけに、若殿家出の前後の事情は、かなり突っこんだところまで、これは愚存だから、そのほうの胸だけにとめておいてもらわねば困るがと、幾度か念を押しながら、くわしく話してくれた。

ことに、菊乃自害のいきさつは、他人の佐平が聞いても、激しい義憤を感じないではいられない。

——べらんめえ、それじゃだれだってじっと

していられるもんか。いったい、おまえさんがたおそばについているご家来がたは、きんたまを持っていなさるのかね。

佐平は口まで出かかるいやみを、やっと押えつけた。

家出をする若殿も若殿だ。家出なんてものは、たいがい町のいたずら娘か、放蕩むすこがふてくされてやることで、一人まえの武士のやることじゃない。なんだって堂々と上屋敷へのりこんでいって、悪い家来を取って押え、気ちがい殿さまを一本きめつけてやらないんだ。その度胸がねえんだな、きっと、さんざん踏みつけにされて、ふらふらと女みたいに家出をするないくじのねえ若殿にも、なんだか腹がたってくる。

「くそおもしろくもねえ」

ぺっともう一度つばを吐いて、胸がむかついてしようがない佐平だ。

お美代のことさえなければ、どうもあんまりごりっぱなごたごたすぎるんで、あっしには手のつけようがございません、と頭からけってやりたいのだが、ついでに弥兵衛から聞き出したお美代のことを考えると、こっちも一刻も捨ててはおけないようなどたん場になっているようだ。

「まったく、とんでもねえ色気ちがいを、養子にしたもんだな」

がらりと格子をあけて、ぴしゃりとしめてから、なんだ、もう小稲の家の玄関かと、佐平は気がついて苦笑する。

9

路地はすでにたそがれていて、家々にはもう灯がはいっていた。

「お稲坊、いるかえ」

玄関からふすまの向こうの茶の間へ呼んでみると、

「あら、京橋のおじさんなの。いるわ」

と、すぐ返事があった。
「なんだ、まだおまえ顔もこしらえていねえのか」
芸者が今ごろふだん着のままで、長火ばちの前に屈託顔をしているようじゃ、あんまり景気がよくない。実は、大内の座敷で顔見知りの兼次が、
「京橋のおじさん、大内のだんなは小稲さんが大のごひいきで、さっきから口をかけているんですが、いまだに顔を見せないんですよ、どうかしたんですかねえ」
と、陰で当惑したような顔をしていた。そして、ためになるお客なんだから、ぜひおじさんからすぐ顔を出すようにすすめてみてくれと、まだその奥があるような口ぶりだった。
いくら姪でも、りっぱに一本立ちにやっている女に、奥の話までは大きなお世話だし、だいいち、大内って男が気に入らないので、
「どうせ帰り道だから、寄って話だけは通していこう」
と、表のほうだけあっさり返事をして、別れてきた。奥の話はともかくとして、芸者がお座敷で毛ぎらいしたんじゃ稼業にならないと考えたからである。
「どうしたんだ、お茶っ引きか。いやに不景気な顔をしてるんだな」
佐平はわざとからかうように笑いながら、長火ばちの前へすわった。
「ううん、お座敷はいくらもあるんだけど、今夜は気がすすまないんです」
「かぜでもひいたのか。そういえば顔色が少し悪いようだな」
「かぜじゃないんです、恋わずらいなんです」
にこりともしない小稲だ。
「あきれた女だな。恋わずらいなんてものは、おじさんの前でそんなにはっきり口がきけるもんじゃねえはずだがな」
「そうかしら。でも、ほんとうなんだわ」

ふだんから変わっている女で、こっちをたったひとりの身寄りだとたよりにしているせいもあるのか、男みたいになんでもさばさばと打ち明けつけてはいる。が、どう考えても恋わずらいをするがらではないし、ほんとうの恋わずらいなら、当人の口からいきなりこうはっきりと切り出せないのが常識だ。

待てよ、案外しおらしい顔をしているところを見ると、まんざら冗談でもなさそうだ。——そうか、男みたいな女が自分でそんなことを口にする、それだけ本気なのかもしれないな。ふっとそう気がつくと、佐平も真顔にならずにはいられなかった。

「お稲、相手はどこのだれだ。おまえが本気なら、おじさんがどんな相談にも乗ってやろうじゃねえか。まさか天の星を取ってくれったって、そいつは無理というもんだが、とにかくひととおり話してみな」

「それがねえ、おじさん、どこのだれなんだか、聞いた名まえも本名じゃなさそうだし、もし天の星だったら、あたしこんなに思い詰めちまって、どうしようかしら」

熱ぼったい目をうるませていうので、こいつはいけねえ、相当度が強いと、佐平はあきれながらも、いささか心配になってきた。

10

「まさか、おまえ、絵草紙の男にほれたんじゃねえだろうな」

佐平はためすようにじっと姪の目を見つめる。春先はひょっと頭の病が出がちなものだからだ。

「いやなおじさん——。そういえば、おじさん、ここへはいってくるなり、色気ちがいがどうしたとかいって、おこってたようですね」

けろりとして、小稲がそんなことをいいだす。

「うむ。おれのほうにも色気ちがいでとんだ騒動がおこりかけている話があるんだが、おまえ

のほうの天の星から話をかたづけよう」
「あたし、そのお星さまにゆうべはじめて会ったばかりなんです」
「どこで会ったんだね」
「八幡さまの前で拝んでいたら、うしろに立っていたんです。色気ちがいかと思ったから、そんなところでなにしてるんですと、にらみつけてやると、深川へ遊びにきたんだが様子がわからない。おまえ芸者のようだから、どこかへ案内してくれないか、五十両持っているって、きっとどこか旗本の気まぐれ若さまなんですね。やっぱり天の星かしら」
「五十両――」
はてな、とすぐぴんとくる佐平だ。
「ええ、ほんとうに持ってたんです。あとでわかったわ」
「年ごろ二十四、五、黒羽二重の着流しで、鼻筋のとおった目の涼しい、どこかおっとりとした面だちの侍じゃなかったか」
「あら、知ってるんですか、おじさん、あの人を――」
はっと、小稲が飛び立つように目を輝かす。
「名まえはなんと名のっていたね」
「浮世捨三郎――。どうせ口から出まかせなんでしょ。そのときはあたし、お平の長芋のくせになまいってると腹がたったもんだから、あたしはこれから洲崎へけんかに行くんだけど、それがすむまで待ってますかって、わざと聞いてやったんです」
「おまえ、ほんとうにけんかに行く途中だったのか」
やくざな父親の血をひいて、かっとなると女のくせにだれにでも啖呵をきりたがるむてっぽうな小稲だから、ひそかにまゆをよせる。
が、その結果は意外な話になってきた。油屋伝次の五十両で、小品を家で養生をさせていることから、その小品、要吉のきょうだいがもとは明石藩の松木要左衛門の子どもたちで、捨三

郎があと金三十両の用にと、五十両をふくさ包みのまま小稲にあずけていった話まで、すっかり聞いてみると、その捨三郎がどうやらゆうべ小名木川の下屋敷を家出した松平家の若殿直之助だろうとは、その道の佐平ならずとも想像はつく。

「じゃ、おまえは、その捨さんて人が今夜たずねてくるのを待っているんだね」

「そうなの。だから、恋わずらいでしょ。お願いだから、おじさん、もし捨さんがきたら、おじさんから、姪がこれこれだって、今夜橋渡ししてくれないかしら、あたし男をくどくなんてはじめてだから、考えるとなんだか胸がせつなくて、死んじまいそうなんです」

そういいながら、小稲はほっと腰をうかせた。がらりと玄関の格子があいたからである。

心ごころ

1

「こんばんは——。小稲ねえさん、お迎えでござんす」

聞きなれた箱屋の幸助の声だ。

なあんだ、と小稲はがっかりして、浮かせた腰をぺたりと落とし、

「ご苦労さま。どこ、幸さん。あたしさっきもいったとおり、なんだか今夜は寒けがするんで、どこもおことわりしているんだけど」

と、気のない返事をする。

「そういっておいたんですがね、五明楼さんでぜひ、ふだん着のままでもいいからってお話なんです」

「せっかくですけど、今夜はやっぱりかんにんしといてもらってくださいな。すみませんねえ、

何度も足を運ばせて」
「そうでござんすか。ちょいとでもいいから、顔だけ出してくれないかっていっているんですがねえ」
「だって、出るとなれば、まさかふだん着ってわけにもいかないもの。やっぱり、今夜はよすわ。幸さんからよろしくいっといてくださいよ」
「そうですかね」
箱屋はしばらく玄関で当惑していたようだが、
「じゃ、そういってみます。おだいじになさいまし」
と、いって出ていった。
「五明楼の客ってのは、大内とかいう松平家の家来じゃねえのか」
兼次からのことづけもあるので、佐平はたぶんそうだろうと思った。
「よく知ってるんですね、おじさん」
「なあに、いま五明楼で会ってきたばかりだ。滝田屋の兼次がいて、ためになる客だから、おまえにぜひ顔を出すようにって、実はおれも伝言をたのまれてきたんだ。大内って男はなかなかきけ者だって話だが、おまえを世話でもしようっていうんかえ」
「おもちゃぐらいにはしたいんでしょ。おあいにくさまみたいだわ。おじさんは大内にどんな用があったんです」
「どうせおじさんのはやぼ用さ」
苦笑いにまぎらせて、これはいくらかわいい姪にでも打ち明けられない佐平だ。
それにしても、世の中は広いようで狭い。まさか、こんなに早く若殿の行くえが知れようとは思いがけなかったし、それが姪のおかぼれの男だとなると、あんまり世の中が狭すぎて、ちょいと途方にさえくれざるをえない。
——はてな、そういえばお稲のやつ、とんだ天の星におかぼれしたもんだな。
はっとそこに気がついて、まじまじとその年

増盛りの顔を見なおしていると、
「来たわ、おじさん。こんどこそほんとうよ」
外へばかり聞き耳を立てていた小稲が、いきなり子どものように玄関へ走りだした。たしかに格子があいて、
「ごめん、小稲ねえさんは在宅かな」
と、おとなう声がする。
「まあ、捨さん、うれしいわ。ほんとうにきてくれたんですね。さあ、上がってくださいまし」
はずみきっているような小稲の声だ。

2

「いや、わしは約束のかたい男だ。したくがよければ、今から五明楼へ案内してくれぬか」
こっちで聞いている佐平の耳に、どこかのんびりとした男の声が答えている。もしそれが家出をした小名木川の若殿なら、さぞ鬱憤があることだろうから、語尾に激しさか暗いひびきがありそうなものだが、そんなものはみじんも感じられない。
「ですから、ちょいと上がってくださいっていうのに」
「しかし、置き屋へ上がりこみたがるのは、いけ好かない客だと、ゆうべ聞いたばかりだからなあ。やぼなまねはよそう」
「なにいってるんですよう。それは用もないのに遊びにきたがるやつのことで、あんたには用も話もたくさんあるんじゃありませんか。いいからお上がりなさいってば」
小稲はどうやら男のたもとをつかんだらしい。
「そうひっぱってはいかん。——油屋うじ、どうするかな」
「あっしはこの辺でおいとましたいんですがね」
この男の声には、なんとなく濁りがある。
「いや、おまえが帰っては困る、まだ仲裁の役を果たしていないんだからな。とにかく、せっ

かく小稲があいうんだから、おまえもやぼになりなさい」
「さあ、油屋のだんなもどうか上がってくださいまし」
小稲はうきうきと男の肩を押してきた。
男はちらっと長火ばちの前の佐平を見て、
「やあ、客があるのではないか」
と、ふすまぎわへ立ち止まろうとする。
「いいんですってば。あたしのおじさんなんだから、かまやしないんです」
肩で肩を押すように、小稲は今まで自分のすわっていたところへ男をつれていって、むりにすわらせる。
差し向かいは恐れ入るので、その間に佐平は長火ばちの前をしさって、ずっとへやのすみへよった。
あとから不承不承について上がった油屋が、佐平を見て、きらりと目を光らせたが、これはそのままふすまぎわへすわってしまう。
「捨さん、大根河岸のおじさんなんです。ことばをかけてやってくださいまし」
男のそばへぴったりからだをくっつけてすわりながら、小稲はとろけそうな目をしている。橋渡しもなにもありはしない。だれが見ても、からだじゅうがもう男のものになっているような、大胆といおうか、押しつけがましいといおうか、まったくあきれたのぼせあがり方だ。
「わしは捨三郎という浪人者だ。見知りおいてくれ」
にっこりと会釈をしながら、捨三郎は別にてれたふうもなく、さりとて小稲に特別な関心があるとも見えず、至極鷹揚なあいさつである。
——いけねえ、こいつはやっぱり天の星だ。
このまのびがしているかとも見える鷹揚さと気品は、身についた育ちで、まねようったってまねられるものではない。ひと目で松平直之助と見ぬきはしたが、
「へえ、京橋大根河岸の佐平と申しやす。姪の

やつがいつもお世話になっておりやすそうで」
と、さりげなくあいさつをかえした。

3

「ばあや、ばあや、早くおちょうしのしたくをしてください」
逃げられないように男のひざを手で押えつけて、自然しなだれかかったかっこうになりながら、小稲が台所のほうへいいつける。
「お稲、もうひとりお客さんがおいでなさるじゃねえか」
佐平は苦笑しながら姪をたしなめて、
「だんな、小稲の伯父の佐平でござんす。このたびは姪がとんだご迷惑をおかけいたしやしたそうで、申しわけありません」
と、油屋のほうへ自分から頭をさげた。
「なあに、迷惑はおたがいっこでね。あっしは捨だんなと張りあってでも、小稲を一度は手に入れなければ承知できない執念男さ。どうかこのつらをよく見おぼえといてください」
油屋は度胸をすえたか、むっつりと答えて、少しも悪びれない。
「ふ、ふ、捨さん、油屋のだんながやきもちをやいていなさるわ」
からかい顔の小稲だ。
「冗談いいっこなしさ。おれはやきもちなんかやくようないくじのねえ男じゃない。いまにおまえのほうから、好きでたまらなくなってくるんだから、おもしろい世の中さ」
油屋はけろりとして、うそぶいてみせる。
「しょってるのねえ、だんなは。あたしの好きで好きでたまらないのは、はっきり申し上げておきますけど、世界じゅうでたったひとり、この人だけなんです。どうもはばかりさま。ねえ、捨さん」
とろんとした目をして、横から男の顔を見あげるのだから、これも正気のさたではない。
「好きになってくれて、ありがとう。わしはせ

いぜいやぼにはならないつもりだ」
　捨三郎は行儀よくすわっている。
「あら、おかしな返事ね。好いたどうしにやぼも通もいらないわ。さあ、遠慮なくひざをおくずしなさいよ」
「いや、きょうは仲人だからね。五明楼へ行って、小稲ねえさんと油屋うじを仲直りさせるまでは、きちんとしていよう」
「仲直りなら、五明楼へ行かなくても、ここでだってできます。ちょうどおじさんもいてくれるし、――でも、油屋のだんなが仲直りを承知してくれるかしら」
「承知はするよ。おれも男だからね。しかし、ゆうべもことわっておいたとおり、あとはおたがいに腕ずくだからね。遠慮はしないよ」
　油屋伝次はじろりと捨三郎と小稲の顔へ挑戦の一瞥をくれる。
「ああ、貞操のほうの戸じまりか。そこまではわしも番はしかねるから、小稲ねえさん、自分で用心することだね」
「ぶんなぐってやるから」
　小稲の目が闘犬のように引きつってくる。
「ふ、ふ、ぶんなぐろうとした手で、首っ玉へからみついてこないようにすることだね」
「色気ちがい、もう一度いってごらんよ」
　小稲が本気になって立ち上がろうとするので、
「よさねえか、お稲」
　苦笑しながら、佐平が口を出した。佐平の目から見ると、三人が三人とも、どこか調子が一本狂っているとしか思えない。

4

「だんな、色気ちがいといえば、あっしの近所にこんな話があるんですがねえ」
　佐平はそれとなく捨三郎のほうへ話しかけた。この若殿らしい男の本音がどこにあるのか、ちょいと気をひいてみたくなったからだ。

「あっしの町内に伊丹屋宗兵衛という大きな質両替屋がありましてね、そこのお美代って娘が、さるお大名の奥へ腰元にあがっているんです。ことし十八になるんだが、それがこのあいだ、高輪のお下屋敷で殿さまのお目にとまった。お庭先でのことだったそうです」

「まあ、あのお美代さんがねえ」

小稲は顔を知っているだけに目をみはる。

「ところが、あのお美代坊、あんなおとなしそうな顔をしていて、芯はしっかりしているんだな。お中老さまがお茶室へお供をといいつけると、ぴたりと庭へすわってしまって動かない。どうしてもいやだというんだ。もっとも、その殿さまってのが、いまいう色気ちがいで、おまけに酒乱で、評判のおかただ。それが腰元に振られたんだから、どうしてもお手討ちということになる」

「切られちまったの、おじさん」

「いや、お気に入りのご近習頭が、お手討ちだけはとめた。そのまま座敷牢入りさ。そのとめ方が変わっている。平ったくいえば、女に振られるなんて男の恥だ。座敷牢へ入れておいて、気長に責めてものにしなさい。それからお手討ちにしてもおそくはありません。さようか、それも一興だな、というんで座敷牢入りになった。人間のすることじゃありやせんね。もっとも、片一方が色気ちがいだからしようがねえが、それにひきかえて、その腰元の覚悟ってのがりっぱなもんだ。高輪の座敷牢で、お中老がひとり番についている。番というより、体のいいやりてばばあだ。強情を張らないで、早く御意にしたがえと、責めたり、すかしたりする役なんでさ」

「お美代さん、なんていってるんです」

「わたくしは行儀見習いにご奉公にあがったので、お側妾になる約束はございません。たとえお手討ちにされても、殿さまのおもちゃになるのはいやでございます。つまり、好きでもない

男に身を任せるのは、女の恥だってがんばっているのさ」

「そらご覧なさいな。あたしだって好きでもない男が変なまねをしたら、ただはおかないんだから」

小稲はまたしても油屋に食ってかかりながら、こっちは好きなんだからかまわないというように、ちゃんと捨三郎のひざは手で押えている。

「きのどくな話だねえ」

捨三郎はぽつんとつぶやいただけだ。別に顔色ひとつ変えている様子もない。

まだ通じねえのかなと、佐平の相手は捨三郎ひとりだから妙にはがゆくなって、

「実は、その色気ちがいの殿さまに追い出されて、家出をした若殿さまがありやしてね、世の中はさまざまでさ。なんのつもりの家出か、そんなまねをすれば、きっとご家来が八方へ飛んで、へたをすればこのおかたも座敷牢ということになるんですがねえ」

と、じっと顔を見てやる。

5

「おじさん、お美代さんのあがっていたお屋敷は、明石の松平さまじゃなかったのかしら」

小稲はやっと気がついたようだ。

「うむ、そうだ」

「きょうおじさんが五明楼で会ってきた大内さまも明石でしょ」

「そのとおりだよ」

「小品ちゃんたちのおとっつぁんの松木要左衛門さまをお手討ちにしたのも、その明石の色気ちがいの殿さまなんです」

「しっ、大きな声を出しちゃいけねえ」

佐平はいそいでたしなめた。名まえを出しての悪口は、どこに人の耳があるかわからないし、聞きとがめられたとなると、冗談だったではすまなくなるのだ。

あつらえ物がとどいたとみえて、ばあやがやっと酒肴の膳を運び出し、
「みなさん、おいでなさいまし。どうもおそくなりまして――」
と、男たち三人の前へ、めいめいにおいた。
ちゃんと一本ずつちょうしがついている。
「さあ、おじさんも、油屋のだんなも、なんにもございませんけれど、どうぞお手酌で一口あがってくださいまし」
小稲はふたりにそういいながら、捨三郎だけには特別で、当然のように杯を取ってわたし、慣れた手つきで酌をしてやる。
それをまた平気でうけて、黙って飲んでいるやつもやつだ。大名育ちなんてのは、やっぱりどこかおっとりしすぎてるもんだなと、佐平は内心苦笑しながら、
「油屋のだんな、ここにゃ女がいねえんだからしようがねえ。こっちはこっちということにして、さあ、ひとつ行きやしょう」
と、伝次のほうへちょうしを取りあげる。
こいつも臭いやつと、さっきからにらみながら、色にも出さない佐平だが、にらまれていると知っていて、けろりとしている伝次だから、黙って酌をうけ、こんどは酌をしてかえす。
「どうもすみません。つい遠いもんですから」
小稲はどっちへともなくいって、
「くやしいねえ。どうかしてお美代さんを座敷牢から助けてあげられないもんかしら。ねえ、油屋のにいさん、あんたならできるんじゃない。おはこなんでしょ、音をたてないのが」
と、つい口に出てしまった。
「人聞きの悪いことをいいなさんな。おれのおはこは、おまえのものを盗むときまで取っときさ」
聞こえないふりをしている佐平だ。
「また始まった、色気ちがい」
「座敷牢がありゃ、おれもおまえを入れておいて、気長にやるんだがな」

「自分がはいらないようにお気をつけなさいまし」
いいっと小稲が白い歯をむいてみせる。
「小稲ねえさん、大内という男はまだ五明楼にいるかな」
捨三郎が思い出したようにきく。
「いるかもしれないわ。捨さん、大内を知ってるんですか」
「うむ、知っている。その五明楼へ案内してくれぬか。大内に会ってみよう」
じろりと目をみはったのは佐平である。

6

「じゃ、捨さんは、捨さんは、小名木川の――」
小稲ははっと気がついて、捨三郎の行儀のいい顔を見なおしたが、
「いやだわ。そんな、――まさかねえ」
天の星になられてはたいへんだというように、あわててひざを押えつけながら、自分で自分のことばを打ち消してしまった。
「いや、わしは浮世捨三郎という天下の浪人だ。とにかく、その五明楼というのへ案内してくれぬか」
「それがねえ、今夜はあたし、困るんだけど」
と、いいかけたとき、こんばんはと玄関の格子があいて、
「小稲ちゃん、お客さまのようね」
滝田屋の兼次が声をかけながら、もう遠慮もなく茶の間へはいってきた。
「おや、みんなおそろいで、――大根河岸のおじさん、さきほどはどうも。いいえね、大さまが小稲ちゃんにもって、ご祝儀をおいてお帰んなすったもんだから、ついでに寄りましたのさ。はい、これ」
兼次はどっかりとすわって、なめらかにしゃべりたてながら、帯の間から紙包みを出してそこへおいた。
「あら、あたしお座敷へも出ないのに、ご祝儀

なんかいただいちゃ」

小稲はなんだかまが悪い。

「いいわさ。くださるってものは、遠慮なくもらっておきなさいまし。お客さまはくださるのがご商売、芸者はいただくのが稼業。それでかぜっけだって聞いたけど、起きていてもいいの。大さまがたいそう心配なすってね、家へたずねてやろうかっていいなすったけれど、やぼはおよしなさいましって、それだけはとめました。罪だねえ、おまえさんも。ちょいと顔だけ見せてあげるもんですよ」

表情たっぷりな目をしながら、わざと捨三郎には目もくれず、どこか口に毒がある。

「ああ、兼次ねえさん、うちの人なんです。——捨さん、小品ちゃんがお世話になっていた滝田屋の兼次ねえさんよ、あいさつをしてくださいまし」

けさのおかえしだと思うから、とろんと男のひざをゆすりながら、小稲も度胸がいい。

「兼次ねえさんか。わしはやぼの捨三郎だ。見知りおいてくれ」

「おやまあ、申しおくれまして、滝田屋の兼次でございます。——小稲ちゃん、こう申しちゃ失礼だけれど、りっぱなお人がらね、どこかのお殿さまのようなお品がおありになるじゃないの」

兼次は臆面もなく、じろじろとふたりの顔を見くらべる。

「兼次ねえさんは笑い絵の殿さまを思い出しているんだろう」

油屋のだんなは歯に衣をきせない男だ。

「ほ、ほ、だんなはおじょうずなことをおっしゃる」

明らかにけいべつしたいいぐさだから、さっと小稲の顔色が変わった。

「兼次ねえさん、右源太はもう帰ったのかえ」

その鷹揚さがいたについている捨三郎だ。

「おや、こちらは大さまをご存じのかた——」

意外そうな兼次の顔だ。

7

「うちの人はこう見えても、とても顔が広いんです」

船頭あがりの万七なんかとは人間が違うんだから、と小稲は内心みえはきってみたものの、この人がもし小名木川の天の星だとすると、大内右源太とは敵どうしということになる。そう気がつくと、急に心配になってきて、いつもの啖呵が出なくなってしまった。

「惜しいことをしたねえ、それならいましがたまで五明楼にいらしたんだけど、小稲ちゃんが顔を見せないもんだから、なんだかつまらなそうで、いまお帰りになったばかりなんです」

兼次のいうことにはいちいちとげがある。

「おもしろくなったねえ。その大内ってだんなも小稲をねらっているんだとすると、だれがいちばん先にたいせつな戸締まりをこじあけるか、いよいよ男の腕の見せどころだ」

油屋伝次がぶすりと横からけんかを買って出る。

「おやおや、そういえば油屋のだんなもでしたっけねえ」

くすりと兼次がわらってみせる。

「あたしがいちばん先口さ。大内って人にそういっておいていただこうかね、勤番者に小稲はちょいと荷が勝ちすぎますとね」

「小稲ちゃんは果報者さ。どっちへころんだって、この勝負は、お金があって、力があって、そのうえ知恵のある人が勝つにきまってるんだから。ほ、ほ、油屋のだんな、しっかりなさいまし。——あらあら、とんだ長っちりをしちまって。じゃ、小稲ちゃん、大さまのご祝儀はきっと届けましたよ。みなさん、ごゆるりと」

兼次はちょいと取り澄ましたおじぎをして、大関のようにゆっくりと立ち上がり、一座をしりめにかけんばかり、敵ながらまことにあざや

かな引き揚げぶりだった。
「あたし、こんなご祝儀、たたっかえしてやればよかった」
思い出したように、小稲はそこにあった紙包みを手に取るなり、いま兼次が去った玄関のほうへたたきつける。捨三郎に見てもらいたいせめてもの女の心意気だったが、
「小稲ねえさん、五明楼はまたあすの晩にしよう。油屋うじ、出かけようかな」
その捨三郎があっさり立ち上がった。
「いやだな、捨さん。どうしたんですよう。まだ小品ちゃんの話だって残っているんだし」
「いや、あすまたやぼになりにくる」
「いやだったら」
泣きそうになって、夢中で腕へぶらさがるようにする小稲を、そのままぶらさがらせておいて、
「佐平老、じゃまをしたな」
と、軽く会釈して、すっと玄関へ出ていく。
これもみごとな引き揚げぶりだ。
「油屋うじ、こぬか」
「あっしはもう少し残りてえと思うんですがねえ」
「まあいいから、そこまで行け」
「そうでござんすか」
しぶしぶと立ち上がる油屋伝次だ。

8

「またあしたくるよ」
玄関で、まだしっかりと腕にしがみついている小稲の肩へ、捨三郎はあいた手をかけて、なだめるようにいった。その語気にはまた、今夜はどうしても帰るという意志が、はっきりくみとれる。
「きっときてくれますね」
小稲はせめても念を押して、男の腕を放すほかはなかった。
「わしは約束はきっと守る男だ」

捨三郎はべそをかいているような小稲の顔へ、にっこり笑ってみせて玄関へおりた。
「おれも約束は守る男さ」
からかうように油屋がいったが、小稲はもう胸がいっぱいで、とっさにやりかえしてやる気力さえなかった。
「おしりの用心、さっしゃりやしょうか」
油屋伝次はそんな捨てぜりふを残して、捨三郎のあとから外へ出ていった。それさえうわの空に聞き流して、
——きらわれていない。
と、最後にわらってくれた捨三郎の深いまなざしをまぶたにとめながら、ぼんやりと玄関に立ちつくす小稲だった。
「お稲——」
いつの間に立ってきていたか、ふいに佐平がすぐうしろで呼びながら、小稲のからだをかきのけるように、つと玄関へおりた。
「あら、おじさんも帰るの」
「ありゃ天の星らしい」
「えっ」
「くわしいことはあすきて話すが、あんまり思い詰めねえほうがいいぜ」
「だって、おじさん」
「いや、あすのことだ」
すばやく格子をあけて外へ出た佐平のからだつきには、獲物を追うときの猟犬、なにかそんな闘志がみなぎっているように見えた。
——おじさんは捨さんのあとをつけるんだわ。
小稲はどきりとして、なんのためにと思い、きょう伯父が五明楼へ行ったのは、大内右源太に呼ばれたのだということにすぐ思い当たった。
——いやだわ、おじさんは捨さんの行くえをつきとめて、大内に密告する気じゃないのかしら。
はっと青くなった小稲は、思わず下駄を突っ

かけて、夢中で外へ飛び出したが、まだ宵をすぎたばかりの路地は、人通りが多く、三人の姿はどっちへ曲がったか見当もつかない。

——どうしよう。

格子につかまったまま、小稲は足ががくがくして、どうにも走れない。

「こんばんは、小稲ねえさん」

お座敷着の芸者たちが、ひとり、ふたり、びっくりしたような顔をして、声をかけながら通っていく。

そのころ——。

表通りへ出た捨三郎は、

「油屋、この辺にかご宿はないか」

と、あとからむっつりとついてくる伝次に聞いていた。

「いくらもありますがね、どこへ行くんです」

油屋は気のない返事をする。

挑戦

1

——あの野郎、ことによると家出をした小名木川の若殿ってやつかもしれねえな。

深川からかごに乗って、前のが捨三郎、あとのが油屋伝次、その伝次はかごにゆられながら、うつらうつらとそんなことを考えていた。

ゆうべから、人の前では油屋うじなどと、とぼけた呼び方をしているが、ふたりきりになるとそれが油屋とか、伝次とか、横柄な呼び捨てにかわって、まるで家来あつかいだ。

昨夜は小稲に別れると、油屋、どこか泊まる家はないかという。

「だんなは帰る家がないんですかえ」

「今のところないな」

「勘当されたんですね」

「まあ、そんなところかな」
「じゃ、今夜はあっしが吉原へ案内しやしょうかね、勘当祝いに」
「いや、遊ぶのは、あす、深川でいい」
こんちくしょう、と思った。澄ました顔をしていて、こいつも小稲にいろけを出しやがったな、ゆだんはできねえ、と思った。
そういえば、別れぎわに五十両、ふくさ包みごと、しゃれたまねをしやがると思っていたのである。
——いまさらこんな青二才に、小稲を横取りされてたまるもんか。
小稲が自分のわざと忘れていった五十両で小品を助けているとわかり、しかも、それをおくびにも出さず、自分と命のやり取りまでしようとしたむてっぽうさかげん、その伝法を向こうみずに、伝次は女房にするならどうしてもこの女だと、いよいよ煩悩をかりたてられてしまったのだ。
悪いことには、小稲のような風変わりな女は、めったな男にはほれないが、ひょっとすると捨三郎のようなバカバカしい男には引っかかりやすい。ということは、自分もそのバカバカしい男のうちだから、もしやという野心を起こしたので、——それがあるから、ゆうべは捨三郎のめんどうを見て、今夜いっしょに小稲の家へついていってみたのである。
はたして、小稲はゆうべのけんまくに引きかえ、ころりとこのお平の長芋にまいっているふうだ。別れぎわのあの五十両のしばいがきいたのにちがいない。
——おなじ五十両なんだがなあ、おれの打ったわざと忘れていくなんてしばいも、なかなかしゃれたもんなんだが。
しかし、相手にそれがしゃれたものと通じなければ、いくら愚痴ってみたところで始まらない。こうなればどうしても腕ずくだ。
ところで、このお平の長芋が、小名木川の家

出の若殿だとなると、いったいどういうことになるのだろう。

この野郎は家来たちに行くえを追いまわされて、けっきょく座敷牢入りか、へたをすれば一服盛られるのが落ちではなかろうか。今夜の話の様子では、そのほうの大将が大内右源太というやつで、こいつも小稲をねらっているようだ。

——ふん、おもしろくなりやがったな。

油屋伝次はにやりとしながら、で、このお平の長芋は、なんだって家出なんかする気になったんだろう。じっとさえしていれば、とにかく大名の若隠居だ、食うには困らねえだろうになと、そこがどうもふしぎになってくる。

2

明石の養子はたいへんな気ちがいだっていうから、おそらくこの野郎はいじめ出されたのかもしれない。たとえ家出をしたにもせよ、いじめ出されたにもせよ、このせちがらい世間へ、こんな場違いな殿さま育ちがひょろひょろと迷い出してきたって、どうせ野たれ死にするほかはないだろう。

そうとは気がつかないで、

「今夜は品川へ行く」

と、大きく出やがった。

どうせ、このかご賃だって、人のふところをあてにしているにちがいない。一文なしなんだから、遊びの金も、おまえ、よきにはからっておけとくるのが落ちだ。

世間さまじゃ、金を出すほうがだんなと相場がきまっているのに、そんなことさえ知らねえんだから、まったくとんだ唐変木にできあがっているもんだと、伝次は考えるとおかしくもなる。

——けど、ただ一つだけ取りえはあらあ。

この唐変木は小稲がのぼせあがっているほど、小稲のことは考えていないようだ。

あるいはむっつりなんとやらで、人前は知ら

んふりをしていながら、ふたりきりになると、愛いやつとかなんとか奥の手を出しやがって、いきなりひっくりかえしたがるロかな。

——それだとゆだんはできねえな。

悪いことに、ひっくりかえされるほうで、いつでもひっくりかえされたがっているんだから、なお始末が悪い。やっぱり、少しぐらい金はかかっても、当分離れねえほうが無事かもしれない。

そんなことを考えているうちに、左手に波の音が聞こえてきた。かごは高輪海岸へ出たのだ。品川の宿はもう近い。

と思っているうちに、

「あと棒、とまるよ」

「ほいきた」

突然、かごが止まって、とんと地におりた。

「お客さん、着きやした」

「そうか。暗いじゃねえか」

たれをはねあげてみると、目の前は海だ。風が冷たい。

「どこなんだ、ここは」

「へえ、大木戸のそばなんで——」

「なんだってこんな半ちくのところへおろしたんだ。宿までもうひとまたぎじゃねえか」

「前のお客さんが、ここでいいとおっしゃるんで」

唐変木め、またなにを勘違いしたのかなと、伝次はしかたがないからぞうりを突っかけて往来へ立った。

先におりた捨三郎が、黙って海のほうを見ながら突っ立っている。

「だんな、こんなところでおりていいんですかえ」

「うむ、駄賃を払ってつかわせ」

一文なしのくせに、いちいちさしずするからしゃくにさわる。

「いったい、こんな海っぱたへおりて、どうしよっていうんですね」

「黙ってついてまいればよい」
ゆっくりと先に立って、大木戸を出ていくのだ。

3

時刻にして、やがて五つ半（九時）ごろだろうか。
この辺は品川の色町を控えて、街道筋はかごを飛ばす者、鼻歌をうたいながら行きかう遊客がちらほらと絶えないが、一つ右手の横町へはいると、道は高輪台の坂にかかって、諸侯の下屋敷が多く、ほとんど人の住来はなくなる。
捨三郎はふらりとその暗い横町へはいっていく。
「ああ、わかった。だんなはお屋敷へ帰ろうってんですかえ」
それなら、ゆうべから立て替えてある勘定を、かえしてくれようっていうのかもしれない。
「いや、帰るのではない」
「おかしいねえ。こんな屋敷町へきちまったんじゃ、つじ切りをやろうにも、ろくなかもはひっかかりやせんぜ」
つい毒舌が出る伝次だ。
「心配するな、かもはどこにでもいる」
「とおっしゃると、押し込もうっていうんですかえ。よしたほうがいいな。ここいらは屋敷町で、構えこそ大きいが、みんな下屋敷ばかりだ。中身はがらんとしていて、手軽に持ち出せるものはなんにもない。ふたりで汗をかいて石灯籠をかつぎ出したって、だれも買っちゃくれやせんからね」
「あながち、そうともかぎるまい。石屋が引き取ってくれるだろう」
「本気かね、だんなは」
「本気だな。わしはかねてからねらっている石灯籠がある」
「こいつは驚いたな。ふたりでかつげやすかえ」
「ふたりなら楽だろう」

「なるほど、地金が銀で、細工に金が使ってある。床の間の置き物だね」

こいつ、勘当されたてまえの親の屋敷へでも忍びこんで、よくかってがわかっているから、おれに蔵の中から宝物でも持ち出させようっていうのかな、と伝次はそんな気もしてくる。

「床の間の置き物よりは少し大きいな」

「あんまり重いとやっかいだが、目方にしておよそどのくらいの見当なんです」

「十二、三貫、——もう少しあるかな」

「おきなせえ。あき巣ならともかくも、人のいる武家屋敷へ忍びこんで、十貫からあるものがどうかつぎ出せるんだ。あっしはかつぎ人足じゃねえ」

「いや、かつぐのはわしがかついでもよい」

人をからかっているにしては、至極まじめな声音だ。

道は坂をのぼりきって、昼間ならこの辺からひと目で青い品川湾が見晴らせるだろう。そこを左へ折れて、右も左も長い下屋敷のへいつづきだ。

「すると、あっしの役は、ただかぎをあければいいのかね」

「うむ、おまえは戸締まりをこじあける名人だそうだからな」

「十二、三貫もひとりでかついで、だんなは走れますかえ」

「いや、たぶん走る必要はあるまい」

伝次には捨三郎のいうことが、どうもわかりかねる。

4

——この野郎、ほんとうにどろぼうをやる気かな。

伝次はまだ半信半疑ながら、一方ではしきりに好奇心がわいてくる。

「だんな、藤四郎がつまらねえでき心を起こして、つかまったっておれは知らねえよ」

「そんな心配はいらぬことだ」
「すると、あき家へはいるんですかえ」
「人はおおぜいいるだろうな」
「いやにおちついていなさるが、人目がたくさんあって、その中から十二、三貫の宝物をかついで持ち出す、しかもつかまる心配がないとすると、こいつはしばいでやる自来也か天竺徳兵衛だ。だんなはがまの妖術ってやつを知ってるんですね」
「まあ、いまにわかる。——ここだ、この辺から押しこむとしよう」
捨三郎がふっと立ち止まったのは、何軒めかの左側の屋敷の、長い板べいの途中で、庭の大けやきの森がへい越しに、暗く往来までおおいかぶさっているところだった。
「大きなお屋敷のようでござんすね」
「五、六千坪はあるかな」
「かってがわからねえと、肝心の宝蔵をさがしあてるまでに夜が明けちまいますぜ」
「その辺のことは、名人油屋の勘を信頼しておこう。おまえ、先へこのへいを乗りこえてみろ、まぼろし流の手練を見てつかわす」
青二才め、このおれをためす気だな。よし、おどろくな。
むっとした油屋伝次は、ふところから手ぬぐいを出すなり手早くぬすっとかむりにして、前後のやみをすかしてみながら、はいていたぞうりをぬいで腰の帯へはさむのと、しりっぱしょりになるといっしょで、もうひらりと六尺のへいへ両手で飛びついていた。
ひじを立てて、上半身がへいの上へ出ると、すばやく中の地形を見まわしてから、するっとへいに馬乗りになり、次の瞬間には音もたてず、もうからだが庭へ飛びおりて、ぬっと突っ立っていた。
——ふん、どんなもんでえ。
われながらあざやかな手口に得意になりながら、

「ああ、ちくしょう」
どきとして、思わずあたりを見まわしてしまった。
外の捨三郎がへいに飛びついたらしく、どすんという音が、あまりにも大きく耳についたからだ。
「バカ野郎、へいと相撲をとってやがる」
はらはらしているうちに、それでもどうやら庭へすべりおりてきた。
「だんな、おまえさんとつるむのはやめたよ。おまえさんのは忍びこむんじゃなくて、遠からんものは音にも聞け、ここからぬすっとにはいるよと、まるで名のりをあげているようなもんだ」
「しかし、おまえはみごとだね。たしかに感心した。まあ、そういわずにいっしょに行け」
「よしやしょう。ひやひやするだけ身の毒だ」
「そんなに、おまえ、こわいか。人の家へはいるのがこわければ、以後どろぼうはやめなさい」
「なんだと――」
油屋はつい大きな声にならずにはいられなかった。

5

「まあ、そうおこるな。こわくなければ、いっしょに行け」
捨三郎はわらいながら、暗い森の下から平気で道へ出ていく。別に人のけはいに気をくばるふうもなく、表門のほうへ歩いていくようだ。
――よし、藤四郎のくせに、野郎、大きな口をたたきやがって、いまに見ろ、どんなどじを踏むか、見物してわらってやるからな。
伝次は中っ腹であとについていく。
それにしても、世の中に藤四郎ほどこわいものはない。いくら無人の下屋敷でも、道のまんなかを歩いていれば、いつどこから夜番の足軽中間が出てこないともかぎらないのに、そんなことはいっこう気にもかけていない様子で、や

がて表玄関の前へ出たようだ。
むろん、雨戸がもうぴったりとたてきってある。
「油屋、おまえこの戸締まりが音もなくあけられるかね」
その前へ立ち止まって、捨三郎が普通の声で話しかけるのだ。
「だんな、義理がたいぬすっとですね。表玄関からはいろうってんですかえ」
しゃくだから、伝次も普通の声で答えてやった。見つかったってかまうことはない、こっちはどろんとひとりで消えてやるだけのことだ、と腹をきめている。
「うむ、どこからはいっても同じだ。ひとつあけて見せてくれ」
「いっそ、頼もうと取り次ぎをたのんではいったほうが、世話なしでさ。この時刻じゃ、まだたいていみんな寝ついちゃいないでしょうからね」
ぬすっとは宵の口に忍びこんでも家人の寝しずまるまで待ってから仕事にかかる。人のものをただもらっていくのだから、そのくらいのしんぼうとがまんは当然だ。そういう心得書き第一条さえ知らない相手なのだから、まったく話にもなにもならない。
「まぼろし流の奥の手が見たい。まあやってみろ」
「冗談いいっこなしさ。あっしはなにも道楽や酔狂でぬすっとをやっているんじゃありやせん」
ついまたしても腹がたっている伝次だ。
「さては、まぼろし流は、女の戸締まりだけにしか通用せんとみえるな。口ほどにもないやからだ」
「ちぇっ、いちいちいうことがしゃくにさわるな。見ていなせえ」
つかつかと玄関式台へあがっていった伝次が、ひらりと六尺ばかり、はじかれたように飛

びさがった。とたんに、がらりと中から大戸一枚引きあけられて、

「そこにいるのは何者だ」

大喝といっしょに、さっと手燭のあかりがやみへ流れる。見ると、若侍がふたり、仁王立ちになっているのだ。

——ざまあ見やがれ。だから藤四郎はつきあいにくいってんだ。

伝次はとっさに光の外へ消えて、暗い羽目板へぴたりはりついている。

捨三郎はと見ると、ぬっとあかりに向かって立ったまま、若侍の顔を見ているようだ。

「おやッ」

次の瞬間、若侍がふたりともぎょっとしたようにそこへひざまずくのを見て、伝次は思わず目をみはる。

6

「わしを存じているか」

捨三郎の声はいつもと少しも変わらぬ。

「はっ」

若侍ふたりは丁重にこぶしをついた。

「存じていればさいわいだ。美代が入れられている座敷牢へ案内してくれ」

「はっ」

ふたりの顔にちらっと当惑の色が流れる。

——あれえ、やっぱりそうだったのか。

こっちから見ていた伝次は、いまさらのようにぽかんとしてしまった。考えてみると、きのどくな腰元が座敷牢へ入れられている明石の下屋敷は高輪にあったのだ。一度は小名木川の若殿だと気がついていながら、その腰元を救い出しにきたんだなと、どうしてもっと早く気がつかなかったんだろう。われながらぼんやりしてやがると苦笑しながら。

——しかし、こいつはたいした石灯籠をねらったもんだ。これならなるほど十二、三貫あっても、ひとりでかつげるわけだ。

と、根がつむじの曲がった性分だから、急にうれしくなってきた。

「通るぞ」

捨三郎はきものをぬいで式台へあがり、

「まぼろしうじ――まぼろしうじ」

と、うしろを振りかえった。

「ここにいやすよ、だんな」

のこのこと伝次があかりの中へ出ていく。

「おまえの手練はたしかに見た。なるほど、みごとな消えっぷりだな」

「おだてっこなしさ」

「いっしょについてまいれ」

「かしこまりやした」

若侍たちはものいいたげにぎろりとにらみつけていたが、おどろくもんか、くやしけりゃだんなをにらみねえと、伝次はぬすっとかむりのまま、たびのほこりを払っただけで、のこのこ式台へあがっていく。

「案内せよ」

「はっ」

若侍たちはもう一度顔を見合わせてから、しかたないというように、手燭を取って立ちあがった。

しかし、案内していくのはひとりで、雨戸のしまった廊下をゆっくりといくつか曲がりながら奥へ進む。その間にひとりは別のほうから用人にでもご注進に飛んだのだろう。

――だいじょうぶかな。

あとからついていく伝次は、ちょいと不安になったが、なあに、いざ一戦となったら、そのどさくさまぎれに、こっちはだんなにかわって、生きた石灯籠をかつぎ出すばかりだと、たちまちずぶとい腹をきめる。

「ここでございます」

案内の若侍は、やがて障子にぼうっとあかりのうつっている一間の前へひざまずいて告げた。

「障子をあけなさい」

「はっ」
若侍がおじぎをして、障子を左右にひらく。
中は十畳ほどの座敷で、その奥に五寸角の格子を組んだ座敷牢が見え、それを守るように左に中年の侍がさっきの若侍をしたがえ、右に中老がひとり打ち掛け姿で、じっとこっちを見つめながらすわっていた。

7

「九兵衛、久々であるな」
捨三郎はつかつかと座敷へはいって、中年侍の前に立つ。おそらく、これがこの下屋敷の用人なのだろう。
それにしても、同じ声なんだが、伝次の耳にもいかにも若殿の声らしくひびいてくるから豪勢なものだと思う。
「はっ」
九兵衛はうろたえたように平伏した。
「玉野、そのほうは美代の牢番か」
「はい」
三十五、六の強い顔の中老で、ちらっと白い目をしながら、しかたなさそうにこれも両手を仕える。
——あれえ、お主に対してふくれっつらをしたぜ。そんな了見だから、てめえなんかにはいつまでたってもお手がつかねえんだ。
伝次は廊下へしゃがみこみながら、いちいち見のがさなかった。こいつらはどうも若殿を迷惑がっているようなのが、妙にしゃくにさわってくるのだ。
「九兵衛、美代をこれへ出してくれ」
「なんとあそばすのでござります」
「わしがもらいうけて帰りたい」
「おことばではござりますが、それはならぬかと存じます」
形はいんぎんに両手をついているが、からだじゅうで反発している九兵衛だ。
「なぜならぬ」

「美代儀はご当主さまにふつごうのことがあってお怒りにふれ、かように窮命仰せつけられておりますもの、てまえ一存には計らいかねますでございます」
「さようか。美代が斉信どのにどんなふつごうを働いたか、九兵衛は存じているのか」
「――」
さすがに九兵衛は返事ができない。
「返事がないところをみると、知らぬとみえるな。教えてつかわそう。美代は斉信どのの御意にしたがわなかった。この場合の御意とは、下々でいう貞操をもてあそぶことだ。斉信どのは日ごろ素行がおさまらぬ。潔癖な美代の目には淫乱としかうつらなかった。それゆえ斉信どのをきらったのだ。行儀見習いにはあがったが、めかけになる約束で奉公にあがったのではない。それが美代の考え方だ。――玉野、そちはどう考えるかな。やはりふつごうと思うか」
「はい。奥にご奉公の女性は、身命共に主人に任せましたもの、主人の御意にそむくことはふつごうかと存じます」
中老は用人より気が強いようである。
「しかとさようか」
「はい」
「主人が人の道にそむき、畜生道におちても、いさめようとは思わず、共に畜生道におちるのが女の道だというのだな」
「よかれあしかれ、主、夫に殉じ従いますのが、女の美徳かと存じます」
女だけに、なかなか口が達者だ。もっとも、口も八丁手も八丁でないと、大名の奥の中老などはつとまらない。
――いけねえ、だんなの負けかな。
伝次はむかむかしてきた。

8

「玉野は、夫が姦通いたすのを見ても、喜んで従っているか」

捨三郎の声は少しも激していない。
うまいところを突っこんだぞ、ざまあ見やがれ、と伝次はうれしくなる。
「喜びはいたしませぬが、その罪をあばこうとは思いませぬ」
玉野の声もすこぶる冷たい。
「そちは夫婦というものの味を知っていたかな」
「存じませぬ」
「そうか。それでは無理な問答であった。ことばを変えてみよう。殉じ従うとは、道を知っている者のことばだ。道を知らずに従うものは盲従といって、人にあわれまれこそすれ、けっして尊敬はされぬ。悪魔畜生に従えとは聖人も教えておらぬ。上は天子より下庶民にいたるまで、身を修めるをもって本となす。そちが今夜口にしたことを、ひとりでもう一度静かに考えてみなさい。たぶんわかるはずだ」
さとすようにいってから、
「九兵衛」
と、捨三郎は用人のほうを向いた。
「はい」
「筆を借りたい」
「はっ」
若侍が立って、すぐにすずり箱を運んできた。
捨三郎は懐紙を出して、ちょっと考えてから、
——腰元美代儀は不憫な者ゆえ、無断にてもらいうけ申し候、家来どもはあずかり知らぬことなり
小名木川無宿　捨三郎
斉信どの
と、達筆にしたためて、用人にわたした。
「あとでそのほうどもの迷惑にならぬよう、それを残してまいるから、座敷牢のかぎを出しなさい」
「おことばではございますが、かぎはてまえ預けられてはおりませぬ」

うつむいたまま九兵衛が答える。あくまでわが身を守ろうとする白々しいうそだ。
「かぎは玉野があずかっているのか」
「いいえ、お殿さまがお持ちかと存じます」
これもずるい逃げ口上である。
「九兵衛、万一出火などのあったおり、おまえたちは美代が焼け死ぬのを平気で見ているつもりか。天下の法を犯した罪人といえども、非常の場合は切り解きにされる例になっておる。そのくらいのことさえ心得ず、よくたいせつな御用がつとまるな。座敷牢の合いかぎは、しかとここにはないのか」
さすがにふたりとも返事ができぬ。
「おまえたちは世にも無残冷酷な人間だな。それほどまでにして、わが命が惜しいか。もうよい、たのまぬ」
捨三郎は憎むというより、むしろあわれむように言い捨てて、
「油屋、——油屋」
と、廊下の伝次を呼んだ。
「へえ。待っていやした。かぎをあけろってんでしょう、だんな」
「たのむ」
「わけのねえことだ」
ぬすっとかむりの伝次は、うれしそうに座敷牢の戸口へ飛びついていく。

9

用人九兵衛、玉野をはじめ、若侍たちも、今は石のように黙ってうなだれているきりだ。
その座敷からの灯かげをうけて、うす暗い座敷牢のまんなかに、美代はきちんとすわっている。
「聞いていたろう、お美代さん。小名木川のだんなが今夜、家へつれてってやるとよ。安心していなせえ」
ふところから用意のくぎを出して、かぎ穴を細工しながら、黙っているのはもったいない、

そんな気持ちの伝次だ。
ふっと美代が肩ですすりあげて、たもとを目にあてた。
いけねえ、なにもおれまでおつきあいに涙をこぼさなくたっていいやと、伝次はことりとかぎをはずした手で、あわてて涙を横なぐりにする。
「あいたぜ、お美代さん。なあに、こんな錠前は、見かけはいかめしくても、からくりはあめえもんだ。まるでどっかの殿さまみてえなもんよ。さあ早く出なせえ」
「すみません」
美代はていねいに会釈をして、伝次があけてくれた戸口をくぐり、静かに座敷へ出た。立っている捨三郎の前へ進んで、しとやかに両手を仕える。
「ご恩は、ご恩は一生、——かたじけのうございます」
幾日かの心労に面やつれはしているが、いきいきとしたまなざしの、聰明そうな娘である。
「長い間、窮屈であったろう」
「は、はい」
またしても涙があふれてくる美代だ。
「歩けるか。立ってみなさい」
「はい」
「油屋うじ、この石灯籠をつれて、先に立て」
「かしこまりやした。だんな、暖かい石灯籠なんて盗むのは始めてですぜ。——さあ、お美代さん。立つんだ」
伝次は美代の手をつかんで引っ立て、
「あっしたちは今夜はぬすっとなんだからね。ぬすっとの仕事がすんだら、長居は無用。そのかわり、おじぎもいらねえもんさ。ぬすっとがいちいち、どうもありがとうございましたと、仕事のたびに仁義をきっていた日にゃ、首がいくつあったって足りねえやな」
と、軽口をたたきながら廊下へ出る。
捨三郎もわらいながら、あとへつづいたが、

家来たちはまだ石のようにすわったまま、ひとりも立とうとする者はなかった。
「だれも見送りに出やせんね。だんな」
玄関へきてから、伝次が不平そうにいった。
「ぬすっとに見送りはいらなかろう」
「ちがいねえ。お美代さんのはきものを借りようと思ったんだが、——じゃ、これをはいてもらいやしょう」
伝次は腰から自分のぞうりを取って、美代の前へならべた。
「だんな、へいを乗り越えて出やすか」
「ぬすっとははいるとき、出口をこしらえておくものではないのか」
「お見それしやした。だんなもどうして、いうことだけは藤四郎のようじゃない」
かまわず表門から出ることにする。

10

高輪通りへ出れば、品川へ遊客を送ったもどりかごがいくらもある。
「油屋うじ、美代を親もとへ送ってやってくれ」
大木戸のあたりまできて、捨三郎はふと立ち止まった。
「だんなはいっしょに行かねえんですか」
伝次が変な顔をする。
「夜中、家の者を騒がせるのも本意ない。おまえにたのもう」
「つまらねえ遠慮だ。こんな騒ぎなら、夜中だろうが朝っぱらだろうが、町内じゅうたたきおこして騒いだって、いっしょによろこびこそすれ、だれもいやな顔をするやつはありませんぜ。なあ、お美代さん」
「はい」
つつましやかに立っている美代は、ちらっと捨三郎の顔を見あげた。こうして助けられたことがまだ夢のようだし、それにも増して、小名木川の若殿がこんなふうに町に立っているのが、どうにも信じられない気持ちである。

「いや、今夜は美代をゆっくりやすませてやるがいい」
「そうですかねえ」
油屋はちょっと不平そうな顔だった。
「だんな、もし上屋敷からお美代さんを取りかえしにきたら、どんなことになるんです」
と、急にそこへ気がついた。
「そのときこそ、町内じゅうでたたかうがよい」
「だから、そんなときだんなが大将になってくれたほうが、つごうがいいんじゃないでしょうかねえ」
「心配するな。そのために江戸には町奉行もいるし、また町内にはけっこう知恵者もいるだろう。一わがまま大名の横車など許しておくようでは、天下の法が立たぬ。町内じゅうが結束して、鳴り物入りでたたかってみろ、無理のほうが必ず引っこむ」
「なるほどねえ」
理屈はたしかにそのとおりだが、はたしてうまくいくかなと、伝次の才覚ではどこか割りきれぬものがある。
「夜は冷える。かぜをひかぬうちに、早く送ってやりなさい」
「じゃ、だんなはこれからどうしやすね。失礼だが、文なしでござんしょう」
「わしの心配はいらぬ」
「そうはいきやせんや。いっしょにひと仕事したからにゃ、仁義がありやすからね」
心配というより、なんとなく捨三郎と別れがたい伝次の気持ちなのだ。
「もし、小名木川のだんな――」
ふいに呼んで、くらやみから出てきたやつがある。
「やあ、大根河岸の親分か」
捨三郎は別におどろいたふうもないが、伝次はぎくりとしたようだ。
「よろしければ、あっしがお美代さんをおあずかりして、親もとへ送りやしょう」

「そうか。同町内だったな。では、親分にあずければ安心だ」

捨三郎は美代が無事に親もとへ届きさえすればいいのである。

「親分、これは贓品ですぜ。承知かね」

さっきのぎくりの腹いせだろう。伝次はそんなふてぶてしいことをいって、にやりと笑う。

行く道

1

小名木川の直之助が品川の下屋敷へあらわれて、美代をつれ去ったという知らせは、その夜のうちに半蔵門外の上屋敷へとどいていたが、斉信の耳にはいったのは翌朝であった。

例の小名木川無宿の一札を持参して、御前へ出たのは側用人平田作十郎で、介添い役といったかっこうで大内右源太が控えている。

「たわけめ、九兵衛と玉野をこれへ呼べ。ふらちなやつだ」

あきらかに自分を愚弄しているような一札を見ると、驕慢な斉信は、その白皙な額へ、たちまち癇癖の青筋をふくれあがらせて、激怒しだした。

——そら始まった。まるで白鬼だな、これは。慣れているから、右源太は涼しい顔をしてそっぽを向いている。

きのう直之助が家出をしたと言上したときは、捨ておけと意にもかけなかった斉信だ。将軍家直系の斉信の目から見れば、直之助は、右源太、作十郎同様、ただの家来にしかすぎない。だから、直之助の愛妾菊乃を手ごめにしたことも、当然自分には許さるべきこととして、少しも良心には感じていなかった。

が、その直之助が自分に盾をついて、こんな生意気な挑戦をしてきたとなると、もう許せなかった。

おれが菊乃を自由にしたのは、当然の権利だ。それを恨んで、おれが目をつけた美代を、これ見よがしに奪っていく。家来のくせにおれに仕返しをたくらむなどとは、もってのほかの謀叛人だ。

だいいち、そんな直之助などを主人として恐れ、みすみす美代をわたしてしまった九兵衛、玉野が憎い。

「作十郎、なぜ両人を呼ばぬ。早くせい」

「はっ。ふらちな者ども、九兵衛も玉野も品川下屋敷に謹慎申しつけてございます」

平田はおそるおそる答えた。実は、ふたりとも昨夜の報告に、すぐ上屋敷へ駆けつけている。が、こんなときここへ呼び出しては、有無をいわせず、手討ちだ。手討ちはかまわないが、あと始末がなにかとうるさい。

「たわけめ。ただちに呼びよせろ」

「はっ」

「美代のほうはいかがした。すぐに取り返しの手配はいたしたであろうな」

ちらっとその娘らしい姿態を思いうかべ、これはどうしてくれようか、と思う。自分の意にしたがわなかった女だ。一度は激怒してみたが、たいていは自分の思うままになる女のうちに、ひとりだけ盾をついたやつ、日がたつにつれて、その強情な娘の肉体になんとなく好奇心をひかれていた。

征服してやったら、どんな顔をするか、それがたのしみでもあった。召し出して、意にしたがわせるか、それともすぐ手討ちにしてしまうか。

「美代儀は、まだ実家へもどっていないそうでございます」

これも平田の方便だったが、

「それでは、まだ直之助のもとにいるのだな」

そう考えることは、まるで斉信の嫉妬に火をつけたようなものである。

2

斉信には、自分が菊乃を奪ったから、直之助はつらあてに美代をつれ出したのだろう、としか思えない。美代はすでに直之助に征服されたと考えると、家来のくせに不遜なやつという憤りといっしょに、そんなものにおめおめ征服された美代への憎悪と未練愛着が、二重にも、三重にもなって、ふたりともならべておいて手討ちだと、怒り狂わずにはいられなくなってくるのだ。

「作十郎、直之助の行くえはわかっているだろうな」

「はっ、まだ江戸のどこかにひそんでいるものと思われますが――」

「たわけめ。なぜ、ただちに手配をせぬ。すぐさがして、つれてまいれ」

「はっ」

「美代の親もとはどこか」

「京橋の伊丹屋宗兵衛にござります」

「美代のことについては、親もとへしかと掛け合って、三日のうちに美代をつれもどすか、それができなければ宗兵衛を手討ちにすると申し聞かせろ、よいな」

さすがにこれは、平田もうっかりはっとお受けしかねる。直之助と美代のほうは、まだ行くえがわかりませんでもすむが、伊丹屋宗兵衛は京橋に大店をかまえている大町人だ。いかに世間知らずの斉信でも、逃亡しました、ではごまかされないだろうし、たったこれだけの理由で手討ちなどすれば、天下の問題になる。

「なぜ返事をせぬ。そのほうは耳がないのか」

「はい。伊丹屋をお手討ちにあそばされましては、ご当家にいささか傷がつくのではないかと、心痛つかまつります」

「黙れッ、明石十万石にかえても、直之助と美代は手討ちにせねば、斉信の面目がたたぬ。ふらちな両人をかばう者は、みな同罪だ。不服が

ある者はいとまをつかわすから、即刻当家を去れ」

「はっ」

斉信にとっては明石十万石ぐらいなんでもなかろうが、それによって生活している家臣団にとっては、そう簡単にはいかぬ。いってみれば、藩禄は主君ひとりのものではなく、同時に家来たちのものでもあるのだから、それをみだす暗君があれば、家臣たちの手で更迭する権利を、諸家の家臣団はひそかに持っているのだ。

が、幕府からあまくだりの養子では、それがそう簡単にいかぬ事情があるうえに、平田らの場合は、その暗君を利用して、日ごろうまいしるを吸っている曲事があるから、主君の非をあばくとなれば、自分も同罪にならなければならない。

——しようのない暴君だ。

腹はたつが、さりとてこのままではうっかり座が立てない平田である。

「作十郎、なぜ立たぬ。わしのいいつけが不服か」

斉信はじりじりしながら、かさにかかってきた。

「殿、右源太にひとくふうがございます」

平田にさんざん冷や汗をかかせておいて、右源太がもっともらしくひざをすすめた。

3

「なんだ、右源太、申してみい」

斉信はいつも右源太がすばらしい思いつきを用意しているのを知っている。ときには心憎いやつと思いながら、たいていその悪知恵におどらせられてしまうのが常だ。わがままな斉信にとっては、憎さも憎し、かわいさもかわいしという碁がたきによく似ている。

「小名木川さまの家出の目的は、昨夜のことで、およそ推測がつくかと思われます」

「どう推測がつくのだ」

「殿をおこらせて、明石十万石を棒にふらせようというのでございましょう。どうせ自分のものにはならぬ十万石、小名木川さまにとっては、これは痛快な仕返しでございましょうからな」

「黙れ。直之助ごときがどんな小細工を弄したところで、明石十万石を棒にふるはずはないではないか」

「いや、殿がお怒りになればなるほど、小名木川さまはさぞ満足でございましょう。そのうえ、殿が激怒あそばして、あまり無理な手段をお取りになりますと、けっきょくは小名木川さまと刺しちがえる結果となりましょう」

それを平然といってのける右源太だ。

「右源太、わしがかように侮辱されても、そのほうは家来として、わしにおこってはならぬ、と意見をする気か」

ひざの上の斉信のこぶしが、ぶるぶるとふるえてきた。

「お怒りあそばすな、とは申しあげませぬ。お怒りになるのが当然でございます。しかし、そのために家来どもをお手討ちにあそばしたり、美代の実家へ直接掛け合ったりなすっては、それ見ろと、小名木川さまの思うつぼにはめられたようなもので、敵は手をうってわらいこそすれ、少しも苦痛は感じませぬ。まして、伊丹屋宗兵衛をご成敗あそばすごときは、天下にわが藩の無能、狼狽ぶりをさらすようなもので、けっして名誉にはならぬかと存じます」

「どうせよというのか。そのほうはわしのこの鬱憤をどうして晴らす気か。申してみい」

「殿のご立腹は、小名木川どのがおこらせるようなことをしたからでございましょう。その仕返しには、小名木川さまがいちばん苦痛とするところを突いて、手も足も出ず、自分から憤死するような立場へ追いこんでやることでございます。このほうが、直接のご成敗より、当人にとっては数段身にこたえると存じます」

「そんな手段があるか」

「ございます。まず美代を取りもどし、そのうえで伊丹屋宗兵衛を苦境に立たせ、いい子になろうとした小名木川さまを恨むようにしかけてやる。あてがはずれて、小名木川さまはじたんだをふむことでございましょう。かように、小名木川さまの望むところを、かたっぱしから打ちこわし、小名木川さまに厚意を寄せる者をできるだけ離間していけば、ついには安住の地を失い、路頭にさえ迷って、憤死するほかはございますまい。いかがでございましょうな」

そばで聞いていた平田は、こやつはたしかに悪魔の子だと、いまさらのように慄然とせずにはいられない。

「おもしろい。そのほうに任せるから、わしの胸の晴れるよう、存分にやれ」

斉信はとうとうその手に乗ってしまったようだ。

4

捨三郎はその朝、芝浦の旅籠で朝をむかえた。むろん、昨夜のまかないも油屋伝次である。

「だんな、今夜こそ品川へ案内しやしょう」

昨夜、佐平が美代をかごへのせて別れていったあとで、伝次はあかるくさそってみた。

「品川へなにをしに行くのかね」

「今夜は人助けってやつをやったんで、ひどくいい気持ちでさ。凱旋祝いに、ひとつ品川へくりこんで芸者を総あげっていうわけにもいかねえが、わあっとひと騒ぎやりやしょう。それから、好きな女を抱いて、錦のふとんでふかふかとおしげりになる、一夜大名ってやつでさ。悪い気持ちはしやせんぜ」

あれえ、いけねえ、だんなは大名のせがれだったと気がついて、

「もっとも、だんなにゃ錦のふとんなんか珍しくもねえでしょうがね」

と、苦笑しながらいいなおした。
「おまえは小稲に思いをよせているのではないのか」
捨三郎はいぶかしそうな顔をする。
「思いだなんて、そんななまやさしいもんじゃありません。戸じまりを盗んででも一度はかかあにしなけりゃ承知できねえ。それがどうしたんです」
「ひとりの女に思いをよせたら、ほかの女には手を出さぬものだ」
「へえ。じゃ、だんなは、小稲が好きだから、小稲に義理をたてて、女郎買いはしねえっていうんですかえ」
ここがたいせつなところだと思い、本音を吐くなと、伝次はひそかに相手を見つめる。
「わしは別に小稲をかかあにしようと考えたことはないが、女をもてあそぶことは好まぬ」
「もてあそぶったって、だんな、女郎は客にもてあそんでもらわなくちゃ、稼業にならねえんですぜ。うんともてあそんでやるほうが、いっそ功徳になるんでさ。お腰元なんかとは違いやすからね」
「だれもよろこんで苦界に身を沈めた女はなかろう。それをもてあそんで功徳になると考えるのは、男の身がってだ」
「よしやしょう。よしやしたよ。女郎買いをやったあとで、おやじの意見てやつはつきものだが、これから乗りこもうってしょっぱなから意見されちまったんじゃ、せっかく金をつかっても、お通夜に行くようなもんだ。だんなは理屈っぽくていけねえ」
「いや、意見というわけではない。行きたければ、おまえひとりで錦のふとんへ寝てきなさい」
「また始まった。文なしのくせに、あっしに行かれちまったら、だんなはひとりでどうする気なんだね」
おれがついていてやらなくちゃ、なんにもできねえくせにと、そう思うことにいつの間にか

伝次はよろこびと誇りとを感じている。もうこんなちくしょうとも、この野郎とも思えなくなってくるのだ。

が、困ったことには、一度捨三郎にほれこんでみると、小稲をどうしたものかという問題に突きあたってくる。兄弟分にも等しい仲で、ひとりの女を争うということは、伝次の良心が許さないのだ。

芝浦の宿へついた一晩じゅう、伝次はそれを考えぬいた。どっちをあきらめようかと——。

5

「だんな、あっしは小稲のことは、すっぱりあきらめることにしやしたぜ」

朝になって、海の見える二階の障子をあけ放した座敷で、おそい朝飯の膳につきながら、伝次は突然いいだした。

「どうしてかな」

捨三郎はおだやかにわらっている。

「いろいろ考えてみたんですがね。だんなのねらっている女を、兄弟分のあっしがねらっちゃおとなげない。あっしは世の中の裏街道は歩いているが、畜生のまねはいやだ。すっぱりとあきらめやした。だから、だんなが小稲をいろにしようとかかあにしようと、もうあっしに遠慮気がねはしねえでもらいやしょう。——ああ、さっぱりした」

ほんとうにさっぱりしたような顔つきの伝次だ。

「いや、わしは別に小稲をかかあやいろにしなくてもいいが、おまえが小稲をあきらめるというのは賢明かもしれないね。先方はなんとも思っていないようだからな」

「いやなことをいうね、だんなは。たとえなんとも思っていなくても、なんとか思うようにしてしまうのが男の腕でさ」

「おまえのはやっぱり、女を座敷牢へ入れても、意にしたがわせようという組らしいな」

「おこるよ、だんな」
伝次はぷっとふくれてしまった。
こっちが親切であきらめてやろうというのに、いい気になりやがって、そんなうぬぼれたことをいうんなら、どこまでも小稲を張りあってやるぞと、つい謀叛気がおこってくるのは、まだじゅうぶん女に未練があるせいだろうか。
いや、小稲に未練があるんじゃねえ。いってみれば、世間知らずの若僧のくせに、おれより偉そうなつらをしたがるからしゃくにさわるんだ。
「そういや、だんな、昨夜のお腰元さんもだんなにゃぽっときていやしたね。娘なんてものは、少し親切にしてやれば、すぐにほれたがる。おまけに、親もとは金持ちときているし、だんなのやることはさすがにそつがない。どうですえ、これからひとつ乗りこんでみやしょうか」
いやがらせ半分に出て、どこかできゅっといわせてやりたい伝次だ。
「実は、おまえにそれをたのみたいと考えていたところだ」
「へえ、あっしにですか」
「ご苦労でも、大根河岸の佐平をたずねて、美代はどう始末をしたか、その後屋敷からなんのさたもないか、様子を聞いてみてくれぬか」
「どうして、自分で行かねえんです」
「わしが行くと迷惑をかける。それに、別に行ってやりたいところもあるしな」
「ああ、そうか。ひとりで深川の小稲の家へ行ってみようっていうんだな」
「いや、小品を見舞ってやろう。あれはどうしても、一度、名医にみせてやらなくてはなるまい」
いやがらせもいやみも、少しも通じないふうである。それとも、わざと通じないふりをしているのか、——いっこうに相手にしようとしないのが、伝次はいよいよしゃくにさわってくる。

6

「なるほど、あの小品ってのも、病人じゃあるが、なかなかいい女ですからね。だんなは気が多いや」

つむじ曲がりの伝次は、なんとかして一度捨三郎をおこらせてみなければ虫がおさまらない。

「あれは不憫なきょうだいたちだ」

「そういやあ、あのきょうだいのおやじどのは、だんなのために手討ちになったようなもんだっていってましたね」

「正しいものが、正しくないもののために苦しめられているのは、許しがたい不合理だ。わしはあくまで戦ってやろうと思う」

冷静な目の底に、たくましい闘志がはっきりと読みとれる。

が、それさえひねくれた伝次には、そういつも問屋で卸すかな、ゆうべはちょいとうまくいったが、あれだって半分はおれがついていてやったからじゃねえかと、小バカにしたくなるのだ。

「けっこうでござんすね。そうやってだんなが戦ってくださりゃ、世の中が明るくなりやす。で、あっしは京橋へ行くとして、どこでだんなと落ちあえばいいんです」

「小稲の家へ行って待っていてくれ」

「さあ、あっしひとりで行って、あのじゃじゃ馬が家へあげてくれるかな」

「いかんといったら、五明楼へ行っていなさい」

その勘定もあっしが払うんですかえ、とよっぽど皮肉ってやりたかったが、それは取っておきにした。そのまえに、この一文なしの若殿は、別れぎわに、どうしても金を貸せといわなければならないはずである。そのとき溜飲をさげてやろうと思ったからだ。

――だんな、ぬすっとに銭を借りて、世の中を明るくするんですかえ。

そういってやったら、どんな顔をするだろう。世の中を甘く見ているようだから、少しはとっちめてやらなくちゃ身のためにならねえ。

そんなことを考えると、伝次はひどくうれしくなってきた。

「じゃ、だんな、出かけやすかね」

食休みがすんでから切り出すと、

「うむ」

と、鷹揚にうなずいたが、もちろん捨三郎はふところへ手を入れようとはしない。

いまに見ろと思いながら、そこの勘定を払って宿を出ると、往来はきょうも春びよりだった。

ぶらぶらと歩いて、汐留橋までくると、深川へは三十間堀のほうへ出たほうが近道だ。

「だんな、深川はそっちへ行ったほうが近道ですぜ」

「そうか」

「あっしは本通りを行きやす、じゃ、五明楼でまた会いやしょう」

「ご苦労だな」

捨三郎は教えられた堀ぞいに、すっと別れていく。そのゆうゆうたる後ろ姿を見送りながら、

——あれえ、だんなは自分が文なしだってのを、忘れているのかな。

と、伝次はあてがはずれて、ぽかんとしてしまった。

7

「じゃ、お稲、小名木川さまのことは、くれぐれもたのんだぜ」

京橋大根河岸へ引っかえす佐平は、これから洲崎の小品を見舞ってやるという小稲と表通りまで連れだって出て、もう一度改めて念をおした。

「だいじょうぶよ、おじさん。きっと引きうけました」

わざと男のようにそりかえって、ぽんと胸をたたいてみせる小稲だ。

そのおおげさな姪の表情を見て、思わずにこりとした佐平は、例の足早で、もうとっととにぎやかな人の流れの中へ泳ぎ出している。昼をすぎたばかりで、明るい春の太陽はちょうど頭の上にうららと輝いていた。

そして、きょうの小稲の顔もいきいきと輝いてみえる。

さっき、伯父が風のように舞いこんできて、

「お稲、捨だんなはやっぱり天の星だった。かわいそうだが、あきらめるよりしようがねえだろう」

と、頭からやられたときは、たぶんそうだろうと半分は考えていただけに、さっと顔色の変わったのが、自分でもはっきりわかった。

聞いてみると、捨三郎は昨夜あれから油屋伝次をつれて、かごで品川へ向かい、伯父はそのあとをつけたのだという。

暗い高輪海岸でかごを捨てたふたりは、まもなく高台にある屋敷町へ出て、一軒の下屋敷のへいを乗りこえた。中でどんなことがあったか、外で待っている佐平にはわからなかったが、しばらくたって、ふたりは、腰元美代をつれて、こんどは堂々と表門のくぐりから出てきた。だれも追ってくる者はなかったという。

伯父は高輪通りへ出てから、美代をあずかり、かごで京橋の伊丹屋へとどけた。

「ゆうべのおじさんの役は、まったくもうけものさ」

主人宗兵衛をはじめ、伊丹屋の一家がどんなに泣いてよろこんだか、それは話を聞いている小稲でさえ、ぼろぼろと涙がこぼれたほどだった。

しかも、美代の口から、小名木川の若殿が、用人九兵衛や中老玉野にどんなことをいい、どんなふうに美代を座敷牢から出してくれたかくわしく事情がわかると、

「美代、なぜ若さまにたってお越しを願わなかったのだ。お礼はもとよりのことだが、若さま

はそれではお泊まりになる家がないではないか」

と、宗兵衛は娘をしかって、ひどく残念がっていたという。

「なあ、お稲、小名木川無宿だなんて、だんなはなかなかしゃれた若殿さまさ。さすがに江戸っ子だな、聞いただけでも、胸がすうっとするじゃねえか」

伯父の佐平はうれしそうに目を輝かして、何度もそれをくりかえしていた。

何度おなじことをくりかえされても、聞いている小稲は、自分のことをいわれているような気持ちがして、うっとりと聞きあきない。

「あっ、おじさん。で、ゆうべはあの人、どこへ泊まったんです」

気がつくと、急にそれが心配になりだす小稲だった。

8

「それが、どこへ泊まったかわからねえ。油屋がついているから、だいじょうぶだとは思うが、小名木川さまはおまえに五十両わたしちまったんで、金はお持ちにならねえようだし、伊丹屋のだんなもそれを心配なすって、ぜひ寮のほうへでもおいでを願おう、ごつごうによっちゃご恩返しに、一生お世話を申し上げてもいいという力の入れ方なんだ」

そういう佐平も、ひどくことばに力を入れている。

「よけいなお世話じゃありませんか」

小稲はぷっとふくれてしまった。

「おじさん、伊丹屋のだんなにそういっておいてください。あの人のことは、あたしのほうが先口なんだから、あたしが引き取って、りっぱに立て引いてみせます。横から出てきて、変なおせっかいはしてもらいたくございません」

「ああ、そうか」
佐平は目を丸くして、
「けどなあ、お稲、いくらなんでも、おまえ、殿さまをこんな芸者屋の長火ばちの前へすわらせようってのは、少し無理じゃねえかな」
と、苦笑いをする。
「殿さまだと思うから、おじさんは天の星にしたくなるんだわ。ご当人は小名木川無宿の捨さんでいいと考えているんだもの、芸者屋の亭主にだってなんにだってなってくれます。あたしはもうそうきめちまったんですから、よけいなお世話はやかないでください」
「そういえばそんなもんかもしれねえが、けど、お稲、ここはやっぱりいけねえよ」
「なぜ、いけないんです」
「大内右源太が殿さまをねらっているんだ。現に、おじさんはきのう、大内から殿さまの行くえをさがしてくれと、たのまれている。その殿さまがご当主さまに盾をついて、ゆうべお美代さんをつれ出したとなると、それでなくてさえああいうむちゃなご当主さまのことだから、ただではすまない。きっと命までねらうかもしれねえ。ここにおくのは、まるで早く見つけてくださいっていうようなもんだぜ」
あっと、小稲は顔色を変えてしまった。たしかに、それはそうにちがいない。
じゃ、どうすればいいのだろう。
「いいわ、おじさん。あたしが芸者をやめればいいんでしょう。あの人、今夜きっとうちへくるにちがいないんだから、あたしがうまく誘い出します。ですから、おじさんは伊丹屋のだんなとよく相談して、どこか寮を一軒用意しておいてください」
その隠れ家で捨三郎といっしょに暮らす、どんなにたのしいだろうと、小稲は単純に考えてしまったのだ。
「実は、おれもそのことで、ここへやってきたんだ。とにかく、殿さまをこの土地へ置くのは

あぶない。今夜みえたら、なんでもいいからすぐにつれ出して、とにかく伊丹屋へご案内申しあげてくれ。あとのことは、おじさんがだんなとよく相談しておくからな」

きっとたのんだぜと、佐平が別れぎわに念を押していたのは、そのことだった。

——早く小品ちゃんにもこの話をして、よろこばせてやろう。

捨三郎は小品たちきょうだいにとって旧主にあたるのだ。どんなにびっくりするかしらと、胸がわくわくする小稲なのだ。

9

——小品ちゃんも、ほかの人に助けられたのと違って、ご主人さまなら安心していられるだろうし。

そして、あの晩、偶然にもはじめて主従を引きあわせる仲立ちになったのは自分だった。そう考えることも、なにか因縁めいて、小稲はたのしい。

平野橋をわたると、南にからりと晴れた海が見晴らせてきた。その海にそって、はるか東に小さく見える洲崎弁天の森のほうへ、慣れた道だから、小稲は気にもしないでいそぎ足に歩いた。

この道は北側に疎林と堀をめぐらして、その向こうが木場町になっているが、洲崎弁天のあたりまで、近くに人家は一軒もない。まもなく潮干狩りのころになれば、この広い砂浜が人でうまるほどにぎやかになるが、いまはがらんと人かげさえまれで、汀に鳥がおりてえさをあさっているくらいだ。

——あたしもよっぽどきかないんだな。このあいだの晩は、こんなところへひとりできて、油屋とけんかをするつもりだったんだもの。

いま考えてみると、ちっとそら恐ろしい気もする。せっぱ詰まって、破れかぶれの気がたっていたから、負けるもんか、いざとなったら伝

次の額を撥でたたきわってやると、自分ではそのつもりでいたが、捨さんがいっしょにきてくれなければ、ひょっとするとあの男の手ごめにされているかもしれなかった。

——それを捨さんに助けられたんだもの。あたしはどうしても、捨さんに縁があるんだわ。

しかも、八幡さまの境内でめぐりあうなんて、たしかにこれは神ごとなのだ。そうだ、帰りには八幡さまへまわって、お礼まいりをしていこう。そんなことまで思いつく正直な小稲だった。

ふっと左手の疎林の中に立って、木場のほうをながめていたぬすっとかむりの男が、つかつかと道へ出てきた。

「小稲——」

目がぎらぎらと燃えている。

「おや、だれかと思ったら、滝田屋の若い万七だんなじゃありませんか。ほおかむりなんかして、どうしたんです」

ぎくりとはしたが、こんなときけっしてそれを顔色へ出すような気の弱い小稲ではなかった。

「おまえに礼をいいてえことがあって、待っていたんだ。ちょいとあそこまで顔を貸してくんな」

万七は砂浜に押しあげてある大きなぼろ船のほうをあごでしゃくってみせる。このあいだはその船のかげに油屋伝次が待っていたのだ。

「なんのお礼か知りませんけれど、いいたいことがあるんなら、ここでうかがいましょう。こう見えても、あたしはいそがしいからだなんですからね」

つんとして、小稲は突っぱねてやる。

「ふん。てめえ、おれがこわいのか」

万七はじっとこっちを見すえながら、小バカにしたようにせせら笑う。

10

「あんなところへあたしをつれていって、どう

しようってんです、にいさん」
小稲は鼻であしらうようなもののいいかたをする。
「このあいだの小品のことについて、あらためておまえに掛け合いがあるんだ」
「ふうんだ。掛け合いだなんて、大きな口をおききでない」
きのうの朝、自分が帰ったあとで、この男めかけは、そのことで兼次に横っつらを張りとばされていたと、小稲は滝田屋のかかえっ妓から聞かされているのだ。ついにやりと冷笑せずにはいられない。
「じゃ、おまえは、小品がどうされたっていいっていうんだな」
万七はてれもしないで、というより、張り飛ばされの一件が相手の耳にはいっているとはさすがに気がつかないのだろう、ひとりで悪党ぶってすごんでみせる。
「妙なことをいうねえ、にいさん。小品ちゃんの借金は、きのうちゃんときれいにしてあるんですよ。もうおまえさんなんかに、指一本ささせやしませんからね」
「いいから、ちょいと顔を貸してくんな。そのことについて、もう一度掛け合っておきてえことがあるんだ」
またしてもぼろ船のほうをあごでしゃくってみせる万七だ。
この野郎と、小稲は思った。
どんな難癖をつける気か知らないが、小品のことについては、こんなやつにもう四の五のいわせる理由はない。変にからんでくるようなことをいったら、こっぴどくとっちめてやろうと、こっちに弱みがないだけに、小稲はむかっとしてきた。
「ようござんす。どこへでも行ってやるから、先をお歩きよ、あんまり人を甘く見ると、承知しないから」
「甘いか辛いか、黙ってついてきてみな」

万七は先に立って、さく、さくと、砂地へはいっていく。

まっ昼間のことで、今こそ近くにはどこにも人かげはないが、まるっきり人が通らないという場所ではない。まさか変なまねもしないだろうと思ったから、小稲はあとにつづきながら、それでもいざというときの用意に、すばやく髪から銀の平打ちのかんざしを抜き取って、その手をそでで口へしのばせた。

往来からぼろ船のところまで、小一町とはない。なんのためにわざわざ、そんなところへひっぱっていきたがるんだろう、といぶかりながらついていくと、万七がくるりとこっちを向いて立ち止まった。

「おい、小稲、掛け合いというなあほかでもねえ。てめえはこのあいだの晩、とんだところへきやがって、よくも小品のじゃまをしてくれたから、その礼にきょうはてめえのからだにやきを入れてやろうっていうのよ、変にじたばた騒ぎやがると、あたら命までなくなることになるぜ」

右手をぐいとふところへ突っこんで、匕首の柄をにぎりながら、いきなり左手でこっちの腕をつかんでくるのである。

11

「正気なの、万七さん」

小稲はまったくあきれかえってしまった。

「正気だとも。だれがまっ昼間から寝言なんかいうものか」

そのまっ昼間だから、正気のさたとは思えないのだ。

「おまえ、いつ犬におなりだえ」

「なんだと――」

「いいかげんにおしよ、バカ」

そで口のかげでさか手につかんでいた銀かんざしが、声といっしょに力いっぱい、こっちの腕をつかんでいる手の肩のあたりへ、ぐさっと

突き刺さっていた。おなじことでも目をねらわなかったのは、まだしもの女心である。

「わあッ、こんちくしょう」

ふいのいたでに、万七は思わずよろめきながら手を放す。

その間に、小稲は往来のほうへ、いっさんに駆けだした。

「おい、みんな来い」

うしろで万七の怒号が聞こえ、

「それ、逃げたぞ」

「やっちまえ」

いずれもほおかむりをした船頭仲間が三人ばかり、ばらばらとぼろ船から飛び出すのを、小稲はちらっと振りかえって顔色を失った。

まさかこんな伏勢があるとは思いがけなかったし、つかまって船の胴の間へかつぎこまれでもしたら、もうおしまいだと、とっさに頭へひらめいたからである。

しかも、下駄ばきで、駆けにくい砂地だ。気がついて、すぐはだしにはなったが、そのときはもうおそかった。

「待たねえか、あま」

しり切れはんてんにも引きという足さばきのいい男の足だから、たちまち追いついて、うしろからだっと飛びかかってきた。

「助けてえッ」

金切り声をあげたときには、どっとそこへ前のめりに激しく突き倒されて、はでなすそが花のように散る。かんざしの手を振りまわすひまさえなく、ひとりが肩を、ひとりが両足を、折り重なるように押えつけて、

「早く縛っちまえ」

「さるぐつわだ、さるぐつわだ」

相手は大の男が三人がかりだから、どうもがいてみたところで、もうかなわない。

「おい、人のこねえうちに、早く船へかつぎこめ」

こうなれば、あとは時間の問題である。痛む

肩を右手で押えながら、万七は舌なめずりをしたい気持ちで、いそがしくあたりを見まわした。

「あっ」

意外にも、往来のほうから、大またにこっちへ歩いてくるやつがある。しかも、たしかに小品の家でおとといの晩会った捨三郎とかいう若い浪人者だ。

——こんちくしょうめ、どうしてくれよう。町人ならなんとかおどして追っ払ってしまうんだがと、万七はいらいらしながら、ふところの匕首に手をかける。

12

「これこれ、おまえたちはそこで、なにをしているんだね」

捨三郎は落花狼藉の場へぬっと立ち止まりながら、道でもたずねるようなのんびりとした調子だ。

「おや」

手は手、足は足、さるぐつわはさるぐつわと、三人別々にあとの分けまえに胸をかりたてられながら、おもしろ半分に荒仕事をいそいでいたやつらが、びっくりして一度に立ち上がった。

万七はふところの匕首を握りしめたまま、じっと捨三郎をにらみつけている。

砂にまみれて、すでに手足を縛られていた小稲は、男たちの手が離れると、くるりとからだを横に、くの字なりに折りちぢめながら、ひしと捨三郎を見上げた。

「はてな、いじめられているのは大新地の小稲じゃないのか」

「やいやい、黙って早くあっちへ行っちまえ」

「そうか、いじめているのは、おとといの小品の家で会った滝田屋の万七うじか」

「野郎、ここはおれのなわ張りうちだ。変なじゃまなんかすると承知しねえぞ」

日ごろこづかい銭をくれて手なずけてある仲間が、三人もついているんだから、万七は気が

強い。
「女をいじめてはいかんな」
「この野郎、あっちへ行けというのに、てめえの耳にゃ聞こえねえのか」
「わしは女をいじめてはいけないと申しているのだ」
あんまりおっとりしているので、強いんだか弱いんだか、万七にはちょいと見当がつかない。
「野郎、どうしても行かねえ気だな」
「そんなやぶにらみのような目をしないで、早くなわを解いてやりなさい」
「事のよしあしもよく知らねえで、もし小稲に縛られるだけのわけがあったら、てめえはどうするつもりだ」
「そんな小りこうぶった口をきくものではない。ほおかむりなどして、女を縛るやつに、あまり善人はなかろう。おまえたちこそ、ぐずぐずしていて、もしこんなところを町役人にでも見られたらどうするつもりだな」
「うぬッ、——やっちまえ」
おどしもだましもきかぬと見ると、ここまできて獲物をあきらめるのは惜しいし、万七はもう暴力よりほかに手がなかった。いきなり匕首を引き抜くなり、からだごとだっと突っかけていく。
のんびり立っているようでも、捨三郎にゆだんはなかった。いうだけいってきかせて、それでもわからなければやむをえない。軽く右へ体をひらいて、空を突いた万七が前のめりになる背へ、抜き打ちの一刀がびしッとぶきみな音をたてた。はじめからごろつきを切る気はなく、峰打ちにしたからだ。
「わあッ」
万七はてっきり胴切りにでもされたと思ったのだろう、悲痛な絶叫をあげながら、どっと砂の中へつんのめっていく。

恋というもの

1

「おまえたちはどうするね」

捨三郎は抜き身をさげたまま、くるりと三人の船頭のほうへ向き直った。

「いけねえ」

相手が強いとわかると、口ほどには義理も人情も持っていない連中のことだ。三人が三人とも、いまの手なみにどぎもを抜かれていたところだから、びくっと飛びのきざま、われさきにと往来のほうへ逃げ出していく。

そこまで見ていて、小稲はがくりとほおを冷たい砂の上へおとした。

こんなかっこうにされちまって、なんというみじめな、かわいそうなあたしなんだろう。それをあの人は、どんなふうにいたわりなぐさめてくれるかしらと思うと、ほろほろと甘い涙が流れてくるからふしぎだ。

捨三郎は刀を鞘におさめてしゃがみこみ、手早くうしろ手のなわを解いてくれた。痛かったろうとも、どこかけがはないかえ、とも聞いてはくれない。ぐいとうなじに手を入れて起こして、

「あとは自分で解けるだろう」

と、にっこり笑っている。

「薄情ねえ、あんたは」

さるぐつわをかなぐり捨てるなり、小稲はうらめしそうに男の顔をにらんでしまった。がっくり髷の根は落ちているし、衣紋はくずれているし、さんざんな姿ながら、妖艶ともいいたいふぜいがある。

「いいから、早く足のなわを解きなさい」

「ついでに解いてくれたっていいじゃありませんか。ゆうべはお美代さんに、あんなに親切だったくせに」

ついはしたないやきもちが口に出てしまった。そして、はっと気がついた。この人は殿さまだから、人の足に手をかけたくないのかもしれない。

いいえ、殿さまだなんて思うから、天の星になっちまうんだわ。あたしはどこまでも捨さんだと思っていなくちゃいけないんだ。

「足のなわ、解けたわ。どうしてくれるの」

「解けたら、立ってごらん」

捨三郎は自分も立ちながら、手をさしのべてくれた。

その手をつかんで、だだっ子のようにひっぱりつけながら立ち上がったが、よろけようともしない捨三郎だ。

「そのくらいの元気があれば、だいじょうぶ歩ける。砂だらけだねえ」

ぽんぽんと背中のほうの砂をはたいてくれるのだ。

「下駄はそこにあるよ。片一方はあそこだ」

親切には親切なんだと思うと、少し心がとけてきて、小稲は衣紋をつくろいながら、自分で下駄をはきに行った。その下駄のはね飛び方から見ても、なんというめにあったのだろうと、いまさらながら、くやしいような、恐ろしいような——。

憎い万七は、まだだらしなく両手を突っ張るような形をして、砂の上へうつ伏せに気を失っているようだ。

2

「さあ、出かけようかな」

捨三郎はしきりに髪を気にしている小稲をうながして、のんびりと歩きだす。

「あ、そういえば、捨さん、あんたどこへ行くところだったんです」

時も場所も思いがけないこんなところへと、小稲はやっとそこへ気がつくだけのおちつきを取りもどしてきた。

「小品の病気を見舞ってやろうと思ってね」
「じゃ、うちへ寄ってきたんですか」
「いや、小稲ねえさんのうちへは、帰りに寄ろうと思っていた。昼間から寄って、大やぼになると悪いからねえ」
なんだか気に入らない返事である。
「もういいんですってば、そんなこと。やぼだの、やぼでないのってのは、他人のうちだけのことじゃありませんか。みずくさいのね、いつまでも」
そのみずくさいで、はっと思い出した。
「あんた、ゆうべどこへ泊まったんです」
「芝浦の旅籠屋だった」
「油屋伝次といっしょだったんでしょう。油屋はどこへ油を売りに行ったんです」
「大根河岸の親分のところへ使いに行ってもらっている」
「あら。じゃ、るすへ行ったかもしれないわ。おじさん、ついさっきまで、うちにいたんだもの。だから、あんた、うちのほうへ先に寄ってくれればよかったのに」
そして、小稲はまた思い出してしまった。
「捨さん、大内右源太って男が、あんたを捜しているの、知ってるんでしょうね」
「たぶんそうだろうな」
「おじさんがいうには、ゆうべのお美代さんのこともあるし、これからいっそうきびしくなりはしないか、右源太も深川へよく足を入れるし、お稲、だんなの身にまちがいがないように、くれぐれもたのむぞって、あたしたのまれちまったんです」
「そんな心配はしなくともよい」
捨三郎はいっこう気にもしないふうである。
「そうはいきません。あの男は、たとえご主人に対しても、なにをするかわからない男だし、ご当主さまがああいうかただから、心配なんだって、おじさんはいってました。ですから、捨さんのことなら、他人じゃないし、あたしがき

っと引き受けますって、約束をして帰したんです。あんた、あたしのいうことはなんでも聞いてくれるでしょうね。みんなあんたのためを思って、世話をやくんですからね」

その返事いかんによって、伊丹屋の寮のことも話さなくてはならないし、だいいち、捨三郎が天の星になるか、あたしの捨さんになってくれるかのわかれめだから、小稲は思わずしっかりと男のたもとをつかんでいる。

「ありがとう。おまえの親切はうれしいな。しかし――」

「やめてッ」

そのしかしのあとを聞くのは、やっぱりこわくて、

「しかしだなんて大きらい。だれがなんったって、死んだってあたしはあんたの世話をやくんですから、そのつもりでいてもらいます」

と、こっちから押しつけずにはいられない小稲だった。

3

「捨さん、ちょいとここで待っていてくださいね」

小品の家の見える土手の上までくると、小稲は立ち止まって、捨三郎にいった。

「どうしてだえ」

捨三郎がいぶかしそうな顔をする。

「いきなり押しかけていって、病人に恥ずかしい思いをさせちゃ悪いもの。あたしは慣れているからいいけど、あんたは男なんですからね」

そういうところは、さすがによく気のつく小稲である。

「世話をやいてくれて、ありがとう」

捨三郎はにっこりしながら、きげんよくおじぎをした。

「いやな人――すぐ要ちゃんを迎えによこしますからね」

小走りに土手をおりていく小稲には、ほかに

も少し考えがあったのだ。
小品の家の戸口に立って、二、三十間も離れた土手の上の男のほうへ小娘のように手をふっておいて、
「小品ちゃん、こんにちは」
と、小稲はいそいそと土間の戸をあける。
ここはあばら屋ながら南をうけて日あたりがよく、小品はきょうも床の上へ起きなおって、要吉となにか話しこんでいるところだった。
「いらっしゃいまし。まあ、どうなすったんです、ねえさん」
目ざとく小稲のこわれかけた髪を見て、小品はびっくりしている。
「いま訳は話すけど、どうなの、きょうは。ぐあいよさそうね」
「ねえさんのおかげで、なんですかあたし、もう起きられそうな気がするんですけれど」
いきいきと目を輝かせている小品だ。
「だめよ、まだそんなはやまったことをしちゃ」
「そうらごらんな。おいらも今、そういっていたところなんだ。せっかくよくなりかけたのに、いま無理をしちゃだめだっていうのに、いつまでも遊んでいちゃ小稲ねえさんに申しわけないっていうんだもの」
救いを求めるように要吉がいう。
「なにがあたしに申しわけないの、小品ちゃん」
ちょいとけしきばんだが、小稲はすぐに気がついて、
「その話はあとにして、あたしそこへ一昨夜の捨さんをつれてきているんです。ぜひ小品ちゃんを見舞ってやりたいっていうもんだから」
と、あらためて切り出した。
「ありがとうございます。お礼も申し上げなくてはなりませんし、こんなむさくるしいところですけれど、どうぞ、ねえさん」
「そのまえにねえ、ちょっと耳に入れておきたかったんです。あたしもけさになってわかったんですけれど、実はあの人、小品ちゃんたちに

はお主さまにあたる小名木川の若殿さまだったんです」

「まあ、ほんとうですか、ねえさん」

目をみはって、やせた肩のあたり、急に堅くなったのが、はっきりと小稲にもわかる。

「へえ、あれが若殿さまだって」

要吉は要吉で、あわててすわりなおして、ぽかんと口をあけている。

4

きょうだいふたりがびっくりするのを見て、その人があたしの捨さんなんだからと思うと、小稲は内心得意でもあり、うれしくてたまらなかった。

が、その捨三郎が家出をした事情から、ゆうべ品川の下屋敷からお美代を助け出したこと、だから大内右源太という家来が、ご当主さまのいいつけで、血眼になってあの人をさがしているのだと、手短に話しているうちに、得意どころか、ひどく心配にもなってきた。

「小稲ねえさん、その右源太ってやつは、若殿さまをさがして、どうしようっていうんだろうな」

要吉はひざの上で、ぎゅっと握りこぶしをかためている。

「あ、要ちゃん、その若殿さまはいっちゃいけないのよ。あの人は小名木川無宿の捨三郎だって、自分から名のって、もう殿さまはきらいなんだから、知らん顔をして、だんなって呼んでおいてください。小品ちゃんも、わかったわね」

なにもかも自分ひとりでのみこみ顔の小稲だ。

「よくわかりました。けれど、お屋敷を出てしまわれて、だれもご家来はおつれにならないのですか、ねえさん」

「家来なんかつれているもんですか。まるっきりひとりなのよ。たよりになる家来なんて、ひ

とりもいないんでしょ。それどころか、もしあの人が、いまいった大内に見つかりでもすれば、有無をいわせず屋敷へつれもどされて、それこそ一生、座敷牢か、へたをすれば一服盛られるのが関の山だろうって、おじさんは心配しているんです」

「だから、おいら侍は大きらいだっていうんだ。けど、若殿、じゃない、小名木川のだんなは、急に家来がいなくなっちゃ、不自由じゃねえかな。なんなら、おいらしばらく家来になってやってもいいぜ、小稲ねえさん」

要吉はまじめにそう考えているようだ。

「それより、要ちゃん、たのみがあるのよ」

「おれ、できることなら、なんでもやるよ」

「いまいったように、あの人はのんきだから平気でいるけれど、深川には右源太の目が光っているんです。現に、いまここへくる道で、万七のやつを手痛いめにあわせているし、うっかりあの人ひとりでほうってはおけません。すまないけれど、要ちゃん、ひとっ走り大根河岸へ行って、捨さんがあたしとここにいるからって話して、おじさんをつれてきておくれでないか。岡っ引きの佐平、知ってるわね、要ちゃんは」

伯父の力をかりて、ここから小稲は伊丹屋の寮へ、捨三郎をつれていってしまう腹である。

「知ってるよ。すぐ行ってきます」

「お願いするわ。そのかわり、要ちゃんが帰るまで、小品ちゃんのことはあたしが引き受けます。——ああ、それから、あの人、土手の上に待っているはずだから、もう家へはいってもいいって、ついでにそういってあげておくれな。きっと、ぼんやり突っ立っているでしょうから」

小稲はそのかっこうが目に見えるようで、ふっとおかしくなる。

5

その日、大内右源太はいつもより少し早く、八つ（二時）すぎには取り巻きをつれて、深川

の五明楼へ乗りこんでいた。

大根河岸の佐平を呼びよせて、小名木川の捜索をもう一度厳重にたのみこもうというのである。

右源太ははじめから、小名木川の若隠居など、たかが世間知らずの大名育ちの青二才として、頭から小バカにしていた。大名と家来という身分の相違は、生まれだからいまさらどうしようもないが、一個の人間としての価値力量からいえば、斉信や直之助など問題ではない。おれは天下を相手に仕事のできる男だと、大きな野心を持っている右源太だ。

現に、その野心の種は、国もとのお冬の方の腹から斉信の嫡子として信丸がこの秋生まれてきている。もう七、八年も待てば、明石十万石は自分の手にはいったも同然になる。

——献妻で出世したなどと、目先のことだけしか見えない人間が多いんだから、世の中は甘いものだ。

そう腹の中でせせらわらっている右源太である。

だから、斉信が暴君であればあるほど、右源太には好都合であって、小名木川の直之助が家出をしてくれたのも、実はこっちの思うつぼだった。

が、その直之助が昨夜、品川の下屋敷から腰元美代を堂々と奪い去るような大胆なまねをしたとなると、右源太も少しゆだんができなくなってきた。おそらく、直之助のは単に斉信へ対するつら当てにやったまでのことだろうが、それにしてもそういう骨っぽいものを持っている男だとすると、破れかぶれになにをやりだすかわからない。

今のうちに早く捜し出して、災いの根を断っておく必要がある。一度必要ありとみとめれば、けっして手段は選ばない右源太だ。

きょうも伊丹屋のほうへは、中老玉野を乗りこませてある。

「あなたはゆうべの責任者ですからな、殿にはただちに呼びよせよと、例のご癇癖だから、ご前へ出ればどういうことになるかわからない。失礼ながら、てまえが一時おあずかりしました。これからすぐ伊丹屋へおいでなさい。美代に会うまでは帰らぬ覚悟で、目的は小名木川さまと美代がいまどこにいるか、それを探り出せばよろしい。連絡はこちらから取ります」

気の強そうなしっかり者だが、必ずおさしずにしたがいますと、涙をうかべていた。

——あの女も、もうおれの薬籠中のものだ。

右源太はひそかにほくそえみたくなる。

いまごろはさぞ権高な御殿女中風を吹かせて、伊丹屋の家中を手こずらせていることだろう。

おしろいの厚い顔は高慢と意地とにかたまってはいるが、あぶらの乗りきった大年増で、いざとなったらどんな顔を見せるか、それも右源太のたのしみの一つにはいっているのだ。

「あ、大さま、あたしは昨夜、どうも小名木川さまじゃないかと思われる若いお侍を見かけたんですがねえ」

遊びのほうの取り持ち役をつとめさせておく滝田屋の兼次が、その日もいちばん先に顔を出して、あいさつもそうそうにいいだしたのだ。

6

「耳寄りな話だな。どこで、おまえ、小名木川さまを見かけたのだね」

口ではいったが、右源太は兼次のいうことなど、どうせちょっとでも客をよろこばせようという追従のたぐいで、おや、それじゃ他人のそら似でしたかしらとくるぐらいが落ちだと、腹ではあまり信用していなかった。

「それが、大さま、妙なところで会ってしまったんですよ。どこだとお思いになります？」

「さあ、わからんな」

「そうでござんしょう。あたしもびっくりしち

まったんです。ゆうべ大さまのご祝儀をとどけてやりに、ここの帰りに小稲ちゃんの家へ寄ったら、なんと、そこの長火ばちの前に、ちゃんとすわっているじゃありませんか」
「ふうむ。その男が小名木川だとでも、自分から名のったのかね」
「いいえ、捨三郎という浪人者だと、自分ではいっていましたが、年ごろといい、ご様子といい、小名木川さまにちがいありません。それでなくて、五十両なんて大金を、労咳芸者のためにぽんと投げ出すはずはありませんからね」
「待て――」
五十両と聞いて、右源太の目がきらりと光った。
「おのおのがたは遠慮なくすごしていてくれ。――兼次、いっしょにこい」
どうやらほんものらしいとわかると、たとえ味方の者にでも必要以外の密談はなるべく耳に入れない主義の右源太だ。すぐに座を立って、きのう佐平と用談をすませた下の茶室へ、兼次をつれていった。
「さあ聞こう。話してみてくれ」
「ほ、ほ、御意にかなったら、大さま、ごほうびが出るんでござんしょうね」
冗談のようにわらいながら、兼次もなかなかぬけめがない。
「わしは話のわかる男だ」
「ですから、ゆうべもあたしは小稲ちゃんにいってやりましたのさ。金があって、力があって、話のわかる殿方に身を任せるのが、女のいちばんしあわせだってね。おかしかったのは、油屋伝次という変な男が小名木川さまといっしょでござんしてね。大きな声じゃいえませんが、この男の本職はこのほうらしいんです」
兼次がおおげさに人さし指を曲げてみせる。
「梁上の君子、――ぬすっとか」
「ええ、たぶんその君子。それがまた、小稲はおれのものだと、小名木川さまと本気で張りあ

っているようなんです」

もうまちがいない。ゆうべ直之助といっしょに品川の下屋敷へ押し入って、座敷牢のかぎをあけたのは、その油屋伝次というやつだ。

「どうして小稲は小名木川さまを知っているんだね」

「なんでも、おとといの晩、うちの万七が洲崎の小品の家へ見舞いに行っていたら、小稲ちゃんがあとから小名木川さまと油屋をつれてきたっていうんです。そういえば、うちの小品はもと明石のご藩中で、松木なんとかいうご家来だと、耳にしたことがございましたっけ」

兼次はそれを、やっといま思い出したような顔をする。

7

主家の押しつけ養子を強硬に反対した松木要左衛門が、斉信に憎まれて、些細のことから手討ちにされた事件は、右源太がまだ国もとにいたころのことだが——小品がその松木の娘だとすれば、直之助が家出のおり持って出た五十両を、小稲の手からそっくり小品にやった気も、なるほどとうなずける。

「で、昨夜の様子だと、小名木川さまは小稲に気があるということになるのかね」

「そりゃ長火ばちの前へのっぺりとすわっているくらいですから、まんざらいろけがないこともないんでしょうが、いまのところでは小稲ちゃんのほうがのぼせあがっているようですね」

どっちにしても、そんなふうでは今夜も直之助の捨三郎が小稲の家へあらわれることだけは確実と見てさしつかえあるまい。いや、ひょっとすると、もうすでに来ているかもしれないのだ。

「兼次、おまえにこんなことを聞くのはやぼのようだが、万七は小取りまわしのきくほうか」

「さあ、どうでございましょう。あれでも子分のような者を、五、六人は持っているようですけ

れど」

人に聞かれれば、やっぱり悪くはいいたくない兼次だ。

「子分があるようならなおけっこうだ。たのみたいことがある。すぐ呼びにやってくれぬか」

「かしこまりました。うまく家にいてくれるとようございますが」

「とにかく、使いを出してみてくれ」

佐平を待つまでもなく、こう簡単に小名木川の行くえが知れたからには、もうこっちのものだと、右源太は思った。まず万七をしっかりとひもにつけておき、小品たちきょうだいを小名木川の下屋敷へ引き取って、おとりに使ってやる。

いい気になっている直之助のことだから、ゆうべ美代をさらった伝で、必ず小名木川へ乗りこんでくるだろう。こんどは自分のはいる座敷牢が待っているばかりだ。

——おとりは、場合によっては小稲でもいいわけだな。

むしろ、小名木川が小稲に少しでも気があるとすれば、これを斉信のいけにえに供えてやる。このほうがバカ殿さまもおよろこびだろうし、おもしろいしばいになるかもしれぬ。

「——おとなしくさえしていれば、一生若隠居で飼い殺しにしておいてやるものを」

そんな不敵なひとりごとをもらして、にやりと残忍な冷笑をうかべながら、右源太は手をたたいて女中を呼んだ。なにをするにも、つれてきた取り巻きだけでは人数が足りないのである。

そのころ——。

小品の家では、ふしぎなままごとが始まっていた。

要吉の迎えをうけて、ふらりとはいってきた捨三郎は、身をかたくしている小品に容体を聞いてから、

「すまぬが、湯づけを一つ所望したいな。わし

は文なしで芝浦から歩いてきたので、少し空腹になった」
と、いいだしたのである。

8

「はい」
小品は当惑したように床の上へ三つ指をつきながら、目で小稲のほうへ救いを求めた。
人の情けで、今は三食に困ってはいないが、炊事は弟まかせだし、旧主に湯づけが出せるような用意は、器からしてなにもない貧乏所帯なのだ。
「捨さん、病人の家へきて、そんなことをいったって無理だわ。もう少しがまんできないんですか」
鏡台を借りて、へやのすみでこわれた髪を直している小稲が、わらいながらたしなめるようにいう。
「いや、無理を所望したわけではない。ほんのありあわせの冷や飯でよいのだ。しかし、迷惑ならがまんしてもよい」
「そんなにおなかがすいてるんですか」
「うむ、遠慮なくいえばすいているな」
「困った人ねえ」
色町へ出ればどんな料理屋でもある。が、使いに出した要吉が帰ってくるまでは、約束だから小品ひとりをおいて家はあけられないし、その要吉が京橋まで行って帰ってくるには、どう早くてもまだ一刻はかかるだろう。
そうだ、それまでこの人をここへつないでおくためにも、ここで政岡もどきのまま炊きをやったほうがいいかもしれない。
小稲はふっとそう気がついたので、
「小品ちゃん、台所借りてもいい？」
と、さっそく鏡台をかたづけながら聞いた。
「かまいませんけれど、ほんとうになにもないんですよ、ねえさん」
どうしても小稲ほどに大胆になれない小品

は、困ったように顔を赤らめている。
「冷や飯でもいいって、殿さま自分でおっしゃるんだから、せめてたきたてのご飯で、お握りでもこしらえてあげましょうよ」
手ぬぐいを姉さまかむりにして、かいがいしくたすきをかけ、台所へ出てみると、なんだか新所帯のような気がしてきて、小稲は急にうれしくなってしまった。七輪に火をおこし、土鍋で米をとぎながら、
「捨さん、伊丹屋さんがねえ、ぜひ寮を一軒お世話したいっていってるんですって、あんた借りてあげる？」
うむといってくれれば、自分がいっしょに押しかけていって、それこそ新所帯になるのだ。
「考えておこう」
「どうしてさ。考えるにも考えないにも、あんた寝泊まりする家がないんでしょ。借りてあげれば、伊丹屋さんだってよろこぶんだもの、そうしたらどうなんです」
「なに、泊まる家はどこにでもある」
「あら、一文なしで泊めてくれる家、そんなにどこにでもあるの。どこなのよう、その家」
そんなふうに、思ったことがなんでもずばずばいえる小稲を、うらやましいと小品がじっと伏し目に控えていると、
「小品ちゃん、疲れたら横になりなさい。わしは窮屈がらせにきたのではないから、遠慮をしてはいけない」
と、捨三郎はいたわるように病人のほうを見た。

9

「いいえ、まだ疲れませんから」
知らないうちならともかく、これが小名木川さまとわかってしまっては、顔を見るのさえまぶしい小品である。
「小稲ねえさん、小品ちゃんはなんだか窮屈そうだ。長居をしては悪いな」

捨三郎は気軽に台所へ声をかけて、なるべく病人をくつろがせようとする。

「あんたがそんなことを気にするから悪いんじゃありませんか。お握りができるまで、おとなしくすずめの歌でもうたっていればいいんです」

小稲はばたばたと七輪の下をあおぎながらきめつけた。

「すずめの歌をね。——すずめといえば、越後のなんとかいう俳人が、七つのとき、おらときて遊べや親のないすずめ、という句を作ったそうだ。自分がみなし子になって寂しい。遊んでくれる友だちはないし、しょぼんとすずめを見ているうちに、そんな気持ちになったんだな。夕がたすずめの声を聞くと、わしはよくその句を思い出したものだ」

捨三郎のはみなし子になったからではなかった。唯一の伴侶であった菊乃をむざんに死なせて、百日のあいだ仏間に閉じこもりながら、夕がたになるとすずめの声を聞いて、しみじみと片羽鳥になった自分をあわれみ、その句に目がしらを熱くしたものだった。周囲に心を許せる者をひとりも持たない自分にとって、菊乃は母であり、妻であり、たった一輪咲いてくれた心の花でもあった。

ふっと小品がすすりあげる。気がついてみると、これは世にも痛ましいみなし子のきょうだいたちだった。

「ああ、許せ。これは悪いすずめの歌をうたってしまったようだ」

「いいえ、とんだ、とんだ、ぶちょうほうを——」

「小品、おまえがしっかりしておらぬと、要吉すずめがかわいそうだぞ。すずめはすずめどうし助けあって、たのしい世の中を作る、そう思って、早くからだをなおしなさい。病に負けるのがいちばんいけない」

「負けません、わたくし——」

「捨さん」

小稲がわざと台所からとがった声を出して、
「そんな病人を泣かすような、つまらない歌をうたう人がありますか。舌をちょん切ってやるから」
と、この深川すずめはいうことが荒っぽい。
「困ったな。わしは舌を切られても帰るお宿がない」
「そうそう、だから伊丹屋さんの寮を借りればいいんだわ」
「すずめのお宿にそんな大きな家はいらぬ」
「いいじゃありませんか。小品ちゃんすずめや要ちゃんすずめとみんなでいっしょに住めば」
小稲の夢はだんだんふくらんでいくようである。
「おい、おい、なんだって、おまえさん、そんなに人の家をのぞきこんでいるんだね」
表のほうからわめきたてる油屋伝次らしい声が聞こえて、すぐ窓の外をだれかばたばたと逃げ出す足音が耳についた。

10

「だれッ」
気の強い小稲は、いきなりがらりと台所の腰高障子をあけてみた。ほおかむりのはんてん着がひとり、どんどん土手のほうへ逃げていく。
そこに立って見送っているのは、油屋伝次だった。
「油屋のだんな、どうしてつかまえてくださらなかったんです」
小稲はついからんで出たくなる。
「なあに、つかまえなくたって、正体はたいていわかっているんだ」
「あき巣ねらいかしら」
「あき巣をねらっているのはおれさ。野郎は殿さまだんなをねらっているんだ」
「あら、うちの人をねらっているの」
「お天道さまの前で、おくめんもなく、うちの人とはいい度胸だ」

「そういえば、あき巣のだんな、さっきはうちの人を、芝浦から一文なしで歩かせてくだすって、どうもありがとうございました」
「だんなも相当強情だからね、少しは苦労させたほうがためになるのさ」
「大きなお世話だわ。あたしがついていて、だれがあの人に苦労なんかさせるもんですか」
ぷっとふくれて、たちまち目が三角になってくる小稲だ。
「おっと、おくめんなしのあねごと掛け合いばなしなんかしちゃいられねえ。きのどくだが、またその大きなお世話をやかなくちゃならねえことが持ちあがっちまったんだ。ごめんなせえよ」
伝次はこにくらしい顔をしながら、台所口と並んでいる表戸を引きあけて、つと土間へすべりこむ。
「小品さん、ちょいとまたじゃまをさせてもらうよ」
「おいでなさいませ。どうぞお上がりくださいまして」
だれにでもつつましい小品の姿が、きょうの伝次にはひどくいじらしい。
「だんな、さっそくですがねえ、ちっとばかりおもしろくねえことになりましたぜ」
「佐平と行きちがいになったようだな」
「まの悪いときはしようがありませんや。深川だっていうから、すぐにどこかのおくめんなしで啖呵のうまいねえさんの家へ行ってみると、いま帰ったところだ、ねえさんはここへ見舞いだとわかった。伊丹屋さんにゃ別に変わったことはないと聞いてきたんで、また引っかえすまでもなかろうと思いやしてね、ここへ追ってきて、またべたべたとおくめんのねえしばいを見せつけられるのも能のない話だし、いっそ五明楼で待つことにしようと、ふらりとはいっていったら、とんだ野郎にぶつかっちまいましてね」
「大内でもきていたか」

「御意のとおりなんで――。しかも、兼次をつれて茶室へおしのびのところだ。まさか、いくら野郎が物好きでも、あの石臼をくどくはずはなかろうと、ついていくやつのほうがよっぽど物好きだとは思ったが、気になるからそっと様子を見ていると、兼次の口からべらべらと、小名木川さまのゆうべのご乱行が、残らず大内の耳へはいってしまった。それからがことだ」

伝次はうっかりタバコ入れを出しかけて、気がついたように腰へ差しなおす。

火花

1

小稲は強情に台所から出てこないが、小品はときどき心配そうな目を、捨三郎の横顔へ向けている。

そのうるんだきれいな目に、心配以上の深沈たる感情が動いていると見るのは、伝次の思いすごしだろうか。

――こんな目つきを、小稲に見られたら、それこそことだぞ。

人ごとながら、ひやりとさせられる。

当の殿さまだんなは、殿さまらしくおっとりとすわって、畳の一点へ目をおとしながら、どっちかといえばばかんとした顔つきだ。話をつづけるのに、ちょいと張りあいがない。

「聞いてるんですか、だんな」

「聞いている」

「もう、こんなとこにぐずぐずしちゃいられませんぜ」

「そうか。すると、いま油屋うじがしかっていたのは、右源太のまわし者というわけだな」

「そうなんです。野郎はさっそく万七を呼んで、どこまでもだんなのあとをつけろ、人は何人使ってもいいと、金をやっていいつけていましたからね。――そういや、だんなはさっき洲崎の

浜で、万七と出会ったそうですね」
「うむ、小稲をいじめていたから、しかってやったのだ」
「いじめていた――？」
「仲間と待ち伏せをして、ぼろ船へかつぎこもうとしていたようだ」
「へえ、そいつはゆだんができねえな」
万七のような小悪党が、一度小稲をねらったとすると、こんどは金と人の力が自由になるのだから、どんなあくどいまねをやらないとはかぎらない。
「まあ、それはそれとして、大内はそのまえに、小名木川の用人だという梶原弥兵衛と、ゆうべの高輪の北崎九兵衛を茶室へ呼びつけたんでさ。どんなことをいいつけたと思いやす」
「さあ、わからんな」
「小名木川の下屋敷へ、いつでも座敷牢が取りつけられるように用意しておけ。屋敷の者ではどうしても遠慮が出るだろうから、腕のたつ浪人者を至急集めて、長屋へ入れておくがよい。それから、藩中にだれか先年死んだ松木要左衛門の親戚の者はないか、と聞いていましたがね、つまり、小品さんをおとりに使って、だんなを小名木川の座敷牢へ誘いこもうっていう計略なんでさ」
驚くだろうと思った捨三郎は、白皙の顔に微笑をただよわせただけだったが、そばで聞いている小品の顔色のほうがさっと変わってきた。
「もう一つあるんだ、だんな。伊丹屋のほうへも、あっしが帰ったあとで、ゆうべの中老さまを乗りこませたようですぜ。こっちへは、死ぬ覚悟でお美代さんに会ってこいと、いいつけてあるんだそうです。野郎はお美代さんも取りかえす気なんですね」
「ご苦労だった。いろいろと小細工をやるもんだな」
殿さまだんなは、あいかわらず人ごとのようにわらいながら、少しも動じた色は見せない。

2

「冗談じゃねえ、もう四方八方手がまわっちまっているんだ。いつたい、だんなは、どうする気ですねえ」

あんまり相手におちついていられると、油屋伝次のほうが気が気でなくなってくる。

「しかし、油屋うじはそんな密談を、よくすっかり聞いてきたものだな。どこに隠れていたんだね」

捨三郎が妙なことを感心する。

「あっしはこう見えても、梁上の君子ってやつでさ」

伝次はちょいと得意そうにそりかえって、

「あの野郎があっしのことをそういっているのを、このあっしが梁上からたしかに聞いていたんだからおかしいや」

と、わらいだす。

「なるほど、梁上か。さすがの右源太にも、どこか手ぬかりはあるわけだな」

小稲が台所から、たきたての飯を塩むすびにして、いくつか大ざらに盛り、取りざらをそえて盆にのせて運んできた。

「お待ち遠さま。いまお出花をいれますから、たくさん召しあがれ」

はしで二つ取りざらにわけて、まず捨三郎にすすめ、一つを別の取りざらにとって、

「小品ちゃんも一つ、お相伴なさい」

と、小品の前へおく。

「いいえ、ねえさん、わたくしは――」

「辞退は失礼ですよ。小品ちゃんとあたしは、お毒味です」

きめつけるようにいってから、別に一つ取り、

「油屋のだんな、いいことを知らせてくれたごほうびに、だんなにも一つおすそわけをいたしましょう」

と、伝次の前へもさらをおいた。

「なんのおまじないだね、こいつは」

満足にそろったさらがあるわけではなく、一つ一つ違った傷だらけのさらに、握り飯が一つ、じろりと見て、つい皮肉が口に出る伝次だ。

「ふ、ふ、だれかさんがけちんぼだもんだから、とんだ千松ができちまったんです。そのかわり、毒なんかはいっていませんから、よろしかったら安心してあがってくださいまし」

小稲はわらいながら番茶を入れて、めいめいの前へくばり、自分も一つお握りを取って、客はしなどという気のきいたものはないから、

「さあ、みんなでいただきましょう」

自分がまっさきに手で口へ運んでみせる。まことにあざやかな政岡ぶりだ。

「では、ちそうになるかな」

捨三郎は取りざらを両手で取りあげて、軽く押しいただくように会釈をしてから、ゆうゆうと手でつまんで食いはじめた。

四人がおもいおもいに握り飯を食っている姿は、おたがいになんとなくほほえましく、それは塩むすびのほかになにもない貧しい食事ながら、だれもが心ゆたかに、俗にいう一つ釜の飯のたとえで、ぐっと親しみを増してきた感じだった。

「政岡あねご、もう一つおすそわけ願えないかね」

ぺろりと一つ平げてしまった伝次が、まじめな顔つきであいたさらを小稲のほうへさし出す。

3

「たくさん召しあがれ。おなかがすいてはいくさができないっていいますからね」

小稲は捨三郎にあてつけるように答えながら、伝次のさらへ握り飯を二つわけてわたす。

「そのことさ。雑兵は勇みたっているんだが、ごらんのとおり千松大将がひどくおっとり構えこんでいるんでね」

思いは同じだから、二つめの握り飯をつまみ

上げながら、伝次はあけすけに不服そうな顔をしてみせる。

捨三郎はおだやかに微笑しただけだ。

「ただいま――」

がらりと戸があいて、要吉が飛びこんできたのは、ちょうどこの珍妙な食事が終わりかけた時分である。

「小稲ねえさん、いまここへ、伊丹屋のだんなと、大根河岸の親分がきます」

「ご苦労さん。おなかがすいたでしょ。要ちゃんのお握りもこしらえてあるのよ」

小稲はねぎらうようにいいながら、さっそくよごれ物を台所へかたづける。

まもなく佐平にともなわれて、五十四、五とも見えるいかにも大店(おおだな)の主人らしい伊丹屋宗兵衛が、静かに土間へはいってきた。

「みなさん、ごめんなせえまし。――殿さま、昨夜は失礼いたしやした。伊丹屋の主人がぜひお目どおりして、ひとことお礼が申し上げたいといいますんで、いっしょにまかり出ましてござんす」

佐平は上がりかまちへ両手をついて、土間から捨三郎にあいさつする。

「おじさん、上がったらどうなんです。狭いとこですけれど、そこからじゃあんまり端近ですもの」

台所から出てきたお稲が取りなすようにいう。

「ああ、お稲、さっそくだが、いまここを妙な男がのぞいていたようだぜ。知っているのかえ」

「要ちゃんもそんなことをいってましたから、出てみてもらっています。たいていだれだかわかっていますけれど」

「そうか。そんならいいが、――じゃ、伊丹屋のだんな、ちょいと上がらせていただきやしょう」

佐平はあとへさがって、宗兵衛に道をゆずる。

「ごめんくださいまし」

宗兵衛は上へあがって、丁重に両手をつかえた。

「はじめてお目通りつかまつります。てまえは昨夜お助けをいただきました美代の父、伊丹屋宗兵衛と申します者、このたびはなんとお礼申し上げてよいものやら、昨夜から娘ともどもご恩は一生忘れまいと、肝に銘じて泣いております。ただただこのとおりでございます」

心から額を畳にすりつける宗兵衛だ。

その深い親心に、小稲も小品も思わずそでを目へあてている。

「だんな、こちらが油屋さんです」

佐平が伊丹屋にささやく。

「おっと、伊丹屋さん、おまえさんに手をつかれると、あっしは平ぐもにならなくちゃならねえ。あっしのはほんの殿さまだんなのお供でやったことだ。それより、昨夜の中老さまが、いまお宅へすわりこんでいるってのは、ほんとうですかえ」

長い仁義はもどかしいというように、伝次がいきなり切り出す。

4

「はい、美代にひと目会うまでは、役目のてまえ屋敷へもどれぬと申しまして、美代はまだ宅へもどっておりませんと申し上げたのですが、お聞き入れがございません」

伊丹屋は伝次にというより、むしろ捨三郎のほうへ当惑の顔を向ける。

「そりゃそうでござんしょうね。うしろで大内右源太が糸をひいているんだ。それでなくてさえお手討ちというところを、大内が助けて、お店へのりこませたんだから、お中老さまもここでひとてがらたてなければ、てこでも動けねえでしょう。——小名木川のだんな、なんとかなりやせんかねえ」

伝次はまたしても捨三郎に決断をうながす。

「要吉うじ——」

捨三郎が窓の外へ呼んだ。
「なんです、殿さま」
窓障子の影法師がこっちを向いたようである。
「近くに怪しいやつは見えないかな」
「土手の上へ、ふたりばかり、さっきから出たり引っこんだりしていますよ」
「そうか。もうしばらく見張りをたのむぞ」
「はい」
要吉の少年らしい声が勇みたっている。
「伊丹屋、ちと無心がある」
「なんでございましょう」
「小稲の話では、寮が一軒あいているそうだな」
「今戸の八幡さまの近くと、根岸の梅屋敷の隣と、どちらもあいておりますが」
「病人には根岸のほうがよかろう。当分小品きょうだいを静養させてやりたい。貸してくれぬか」
「さっそくそうじをいたさせますでございます」
「いや、これからでは夜になるかもしれぬが、すぐにかごで送りこんでもらいたいのだ。実は、小品たちも右源太にねらわれている。尾行がつかぬよう、これは大根河岸の伯父御にたのみたいな」
「佐平めがたしかに引きうけやした」
ぽんと胸をたたいてみせる。
「捨さん、あたしもついていったほうがいいんでしょう」
いよいよすずめのお宿で新所帯だと思うから、小稲が目を輝かしてひざをのり出す。
「おまえは、わしと油屋うじと三人で、五明楼へまいる約束ではないか」
「なんですって――」
「わしは約束を守る男だ」
「そんな、そんなむちゃばっかり――。五明楼にはまだ大内がいるんですよ」
はっとしたのは、小稲ばかりではないようで

ある。
「いたら、しかってやるからかまわぬ」
冗談のようにわらっている捨三郎だ。
「おもしろいねえ、だんな。惜しいことに、犬が一匹足りねえな」
伝次はやっと捨三郎の本音にぶつかったような気がして、急にうれしくなってきた。
「犬――」
小稲はぽかんとした顔つきだ。
「ねえさんがけんかの早いきじあねごで、おれがちょっかいの早いぬすっとざる、鬼ガ島へのりこむには、どうしても犬が足りねえ」
ひとりで悦に入っている伝次だ。

5

「小品、途中気をつけて、寒くないようにしたくをしていくことだな」
「は、はい」
両手をつかえた小品は、なにかいいたそうな目をしたが、捨三郎はもう伊丹屋のほうを向いて、
「宗兵衛、玉野は今夜わしがしかりに行ってやる。それまで取りあわずに捨てておくがよい」
てきぱきといいつけて、すっと立ち上がった。
「恐れ入りましてございます」
「親分、怪しい尾行は、今のところわたしたちだけをねらっていると思うが、なにぶん病人のほうをたのみおく」
「へえ」
「ほんとうに、捨さん、五明楼へ行く気なの」
小稲は中腰になりながら、まだ不安そうな顔だ。
「だんな――」
佐平がいそがしく伊丹屋に目くばせする。
「そうかえ。いや、親分、失礼のないように、おまえさんからよくお話し申し上げてな」
宗兵衛はふところに用意してきた重そうなふくさ包みを取り出して、佐平にわたした。

「承知しやした。——そうだ、お稲、おまえにあずけておこう。伊丹屋のだんなが、殿さまにご不自由があってはと、失礼ながらお手もと金を少々用意してきなすったんだ。これから五明楼へ行けば、またどんなことでご入用のことがあるかもしれねえ。殿さまの恥にならねえように、おまえがうまく采配を握ってな」

佐平はさすがに老巧である。一つには姪の気持ちをくんで、なるべく女房役に押しつけてやりたい親心だ。

「ようござんす。きっとあたしがおあずかりいたします」

小稲はひとりでのみこんで、捨三郎には文句をいわせない気らしい。

「油屋さん、聞いてのとおりだ。遠慮なくお稲をしかって、さしずしてやっておくんなさい」

佐平は姪かわいさに、如才なく伝次にまで頭をさげる。

「とんでもねえ、うっかりそんなまねをしようもんなら、横っつらを張りとばされるのが落ちでさ」

油屋はわらいながら、捨三郎のあとから土間へおりた。

「小品ちゃん、あたしもあしたあたり見舞いに行ってあげるけれど、これはみんな小名木川のだんなのおさしずなんですからね、気がねなんかしないで、病人なんだから、なにもかもおじさんに任せておくんですよ。——伊丹屋のだんな、おじさん、どうかよろしくお願いいたします」

気がせくから、おじぎもそこそこに立ち上がる小稲だ。

「ねえさん、どうか気をつけてあげてくださいまし」

小品は自分のことより、小名木川さまのほうが気になるようだ。

「まいるぞ」

伝次と小稲をうながして、捨三郎はふらりと

表へ出る。

6

まだ明るい夕がただった。

五明楼の二階の広間の障子をあけ放して、すわったまま甍越しに品川の海を見晴らしながら、右源太はやっとほんのりと酒気が顔へ出てきたようだ。

取り巻きの侍どもが妓たちを相手に、たわいなくわらい興じているのも、いざとなれば自分の手足となって働く家来も同様だと思うと、悪い気持ちはしない。

妓たちのうちに、あのてきぱきとけっして人見知りをしない小稲がいないのはちょっと寂しいが、どれも若くて美しい。ここに並んでいるほどの芸者のうちから、これをと兼次にひとこと耳打ちさえすれば、どの妓でもすぐ自分のものにできるのだと、そう思ってながめているのも、ちょいと大名になったようでおもしろかった。

そして、いま右源太がいちばん得意なのは、なんといっても小名木川の若隠居が網にかかったことだった。

直之助を当分放し飼いにしておいて、斉信をさんざんじらしてこっちの思うつぼに利用してやる手もあるし、いい気になっている小生意気な若隠居のすることなすことをかたっぱしからぶちこわして、じりじりといじめつけながら、ついには網をしぼって降参させるか、しなければ一服盛るか、どっちみちおれの勝ちだと、優越感の持てるのは、残忍冷酷な右源太にとってこの上もないたのしみでもあった。

「大さま――」

中座してもどってきた兼次が、そっと呼んだ。

「いま万七からご注進がきましてね、小名木川さまが小稲と油屋伝次をつれて、小品の家を出たそうですよ」

「そうか」

「小稲はまたふたりを家へ引っぱりこもうっていうんでしょうね、そのほうが安あがりだもの」
兼次は忠義顔に、わざと冷笑をうかべてみせて、
「そういえば、京橋の伊丹屋と佐平があとからきて、これはまだ小品の家に残っているんですって」
と、いい足す。
「ふうむ」
右源太は軽くうなずいただけで、目はいま始まった若い妓の踊りのほうを見ている。たいていのことには無関心をよそおって表情を見せないのが右源太の常套手段だ。そのほうが人間が大きく見えるし、相手に乗じるすきを与えないからである。
——伊丹屋は玉野の処置に困って、小名木川にすがりに行ったんだろう。
右源太はひそかに見当をつけてみる。
そうだとすると、まず京橋へ行って、今夜は美代のかくれている伊丹屋の寮へ泊まる気かもしれぬ。
それなら、油屋はともかくとして、まさか小稲はつれていかないだろうから、これは途中で家へ帰すだろう。
「兼次、もう一席小稲に口をかけてみろ」
「大さまからだってことが、小名木川さまへ知れてもいいんですか」
声をひそめて、石臼は目をみはった。

7

「知れてもさしつかえない」
右源太はあくまでも追う立場だという自負がある。
「いいえ、こっちはかまいませんけれど、小名木川さまのほうで用心してしまやしないかと思って」
「そのために万七がつけてあるではないか」
「そういえばそうでしたね」

ゆうべも小名木川さまは、五明楼にまだ右源太がいるかとしきりに気にしていたようだ。追われる者の哀れさ、せっかく大名の家へ生まれてきながら、なんだって家出なんかしたんだろうと、考えてみると人ごとながら、兼次はちょっときのどくにもなってくる。

「じゃ、とにかくもう一度小稲さんに口をかけてみましょう」

重いからだをどっこいしょと立ち上がりかけて、兼次はあっとまたすわってしまった。

あけ放した廊下から、つかつかとはいってきて、踊っている妓をしりめにかけ、立ったままじっと正面の右源太を見すえた男、たしかに昨夜の小名木川さまだ。

いっしょにきたらしい油屋伝次と小稲が、これは人の座敷だから、遠慮して廊下へすわりながら、さすがに緊張した面持ちだ。

踊っていた妓はぽかんと棒立ちになり、取り巻きの侍たちはぎょっとすわりなおして、一瞬座敷はしいんとしらけわたってしまった。すわったまま傲然と捨三郎の顔を見あげているのは、右源太だけだ。いや、正直にいえば、右源太もこの意外な逆襲に、瞬間はっとはした。が、ここへあらわれた捨三郎は、もう主人直之助ではなく、小名木川無宿の捨三郎としてあしらってかまわぬと、とっさに持ちまえのずぶとさを取りもどしたのである。

「右源太、しばらく遊興のじゃまをするぞ」

捨三郎の声はおだやかだが、自然とそれだけの重みのあるのはあらそわれなかった。

「ご随意に――」

冷たくはねつける右源太だ。

「そのほうは、わなに落としてももう一度わしを小名木川へ連れもどすよう、ほねをおっているようだが、無用にいたせ」

「それはならぬかと存じます」

「なにゆえだ」

「あなたさまにふらふらと町をさまよい歩かれ

ては、ご当主さまの迷惑に相なります」
「口だけは人並みなことを申す。ご当主さまもそのほうたちも、迷惑とはどんなものか存じているのか」
皮肉をいってるのではなく、頭からあわれんでいるような口ぶりだ。
――くそ、小生意気な。
右源太は思わずぎらりと目を光らせたが、しかし急には返すべきことばがうかばぬ。
「ご当主さまやそのほうどもが、あまり破廉恥な迷惑を人にも世間にもかけて、少しも反省する色がないから、わしは外からこらしめてつかわすために屋敷を出たのだ」
「挑戦でございますな」
くるならこいと、右源太はわざと小バカにしたような冷笑をうかべる。

8

「そのほうは文字の使い方を知らぬと見える な」
捨三郎はまたしてもうわてに出る。
「挑戦とは、双方に言い分があって争いになることだ。そのほうどもに一つとして人間らしい言い分があるか。権力をかさにきて我意につのり、領民を責め取って奢侈をむさぼり、人命をそまつにして、色魔淫獣のごとく婦女を犯したがる。ただ人に迷惑をかけ、人を泣かせるだけの能しか持っておらぬではないか。そういう者が上に立てば暴君、下にいれば悪臣、役人の中にいれば奸吏、庶民の中にまじれば悪党、必ず天の制裁をうけるのは当然のことだ」
思いあたることのある取り巻き侍どもはむろん、芸者たちまでなにかおされた感じで、だれひとり頭をあげている者はない。
ざまあ見やがれ、ちょいとこれだけの啖呵がきれるのはうちの殿さまだんなぐらいなもんだろうと、大いに得意の油屋伝次が、おつきあいに下を向いたまま、ちらっとそばにいる小稲の

ほうへ横目を使ってみると、これはとろんとした目をあげて、ほれぼれと捨三郎の横顔に見とれているのだ。

——ちぇっ、ここでよだれなんか流されちゃ、ぶちこわしなんだがなあ。

伝次はそんなことまで気がもめてくる。

「どろぼうにも三分の理というやつですな。しかし、夜盗に類するまねをすれば夜盗、主家にそむけば謀叛人、やはり天下の法にしたがっていただかなければならないでしょう」

ぬけぬけと正面をきって、ずぶといことをいい出す右源太だ。

「そのほうどもに、天下の法を盾にとって口をきくだけの勇気があるか。あれば、堂々と天下に訴えて、広く意見を求めてみなさい。かげへまわって、こそこそと浪人者を雇ったり、人質を取っておとりに使いたがったり、ならず者に尾行させてみたり、男一匹があまりおとなげない小細工はやらぬものだ」

「知者の知、仏には方便、小細工と侮りすぎて、わなにかからぬご用心が肝心ですな」

「そのほうどもこそ、自分のかけたわなにおちぬようにせよ。自業自得とわらわれるぞ」

「どっちがものわらいになりますか、時が解決してくれましょう」

右源太はあくまでおのれの才知と力を信じているようだ。

「そのほうは少しも反省してみようと思わぬらしいな。ひとこと申しておこう。そのほうはおのれのさる知恵に慢じて、ならば大名にもなりあがってみたいと、ひそかにたくらんでいるようだが、しょせん小細工は小細工、正しからざる知恵と力が、正しい知恵と力に及ぶものではない。きょうからはわしのこの正しい目が、いつもそのほうどもの身辺に光っていることを、よく肝に銘じておきなさい。——遊興のじゃまをして、きのどくであった」

捨三郎はすっと廊下へ出て、来たときとおな

じように、風のごとく去っていく。
——味なことをやるやつだ。
そのうしろ姿へ、人前だから右源太は傲然と冷笑を投げつけてはいたが、さすがにわきの下へじっとりと冷や汗をかいているのは、いわゆる位負けというやつだろうか。

9

「兼次——」
まだぽかんとしている石臼に、右源太は鋭く目くばせした。
「ああ、そうでしたっけ。引きうけました。こんどこそ、しっかりやらせます」
さすがにすぐのみこんだらしく、兼次はそそくさと万七のところへ立っていく。
「踊りはどうした。かまわぬからやれ」
右源太は杯を取りあげながら、芸者どもにいいつけ、
「貴公たちも通夜にきたときのような顔はもうよせ」
と、鷹揚にわらってみせた。
「しかし、ちょいと驚きましたな」
用心棒の桑山太市がわざと首をすくめておどける。酔って、けんか相手のならず者を、たちどころに三人まで切って捨てた豪傑だが、参勤の供に加わっている道中、ある宿場で夜遊びに出て、気に入らぬ茶屋女を二階から畑の中へほうり出してけがをさせ、あやうく長のいとまにもなるべきところを、右源太のとりなしで事なきを得た札つきの乱暴者だ。
「驚くことはあるまい。裸になれば同じ人間だからな、世間知らずのやっかい者などになにができるものか」
「しからば、驚かぬことにしましょう。諸君、通夜の顔はよせ」
こういう横紙破りがひとりでもいると、にぎやかにするのは芸者の稼業だし、座敷はたちまち浮きたってくる。

座が浮きたってくると、右源太はひそかに腹の中の火のかたまりを、もう一度見つめた。じゅうぶん相手を見くびっているくせに、どうにも怒りがおさまらない。

——あんまり甘く見るととんだけがをするぞ。機会をつかんだらかまわず切れ。

しきりにそんな気がしてきてならないのだ。

そのころ——。

女中に案内されて、下の座敷へはいった捨三郎は、

「お女中——」

と、座につくなり静かに声をかけた。

「はい」

今のいきさつを見てきたばかりだから、女中はなんとなくからだを堅くしている。

「わしたちはさっき、握り飯で腹ごしらえがすんで間がない。お出花というのだけをもらって帰っては悪いかな」

「なにをいうんですよう、捨さん」

小稲があきれた顔をして、

「お茶屋さんへあがって、お出花だけで帰る人がありますか、それじゃまるでひやかしにあがったようで、恥ずかしいじゃありませんか」

と、いそいでたしなめた。

「いいえ、よろしいんですよ、小稲ねえさん」

「ごめんなさい、ねえさん。この人ときたら、まるっきりこの里のことは知らないんだもの」

「では、こういたそう。わしはもう一軒京橋へ用たしに行ってくるから、それまで小稲ねえさんにここで待っていてもらおう」

「なんですって——」

小稲が開きなおろうとすると、

「いや、こりゃだんなのおっしゃるとおりがいいぜ」

と、横から油屋伝次が口を出した。

10

「じゃ、ねえさん、とにかくお出花をあげてく

ださいまし」
　捨三郎が京橋の伊丹屋へ行かなくてはならないのは知っている。それに、二階にはまだ大内がいるのだし、油屋に目くばせされてみると、小稲もこれは出直したほうがいいとすぐに気がついた。
　が、自分ひとり置いていかれることは承知できない。
「捨さん、京橋へはあたしもいっしょに行きますからね。そのつもりでいてくださいよ」
　女中が茶を取りに去ると、小稲はきっぱりと言いきった。
「いや、今夜は小稲ねえさんは行かないほうがいい」
　捨三郎の返事もはっきりしている。
「おや、どうしてさ、捨さん」
「京橋へはお中老さまをしかりに行くのだ。女というものは、人の前でしかられると、妙にいこじになりたがるものだ。遠慮してやるほうが女の情けというものだな」
「表で待っていればいいでしょ。なにも、あたし、奥までついてあがるなんていやしないじゃありませんか」
　人前でしかられた小稲は、ぷっとふくれてしまう。
「あねご、そんなわけのわからねえことをいうと、しまいにはうちの人にあいそをつかされてしまうぜ」
　伝次がそばからひやかすようにたしなめた。
「どうしてです、だんな、あたしがなにがわからないっていうんです。変なことをいうと、あたしほんとうにおこるから」
「こいつはおっかねえ。女なんてものは、おこるととても器量がよく見えるもんですね、だんな」
　意地悪く突っぱねられてみると、そこはほれた弱みだから、小稲ははっとせずにはいられない。

「だいいち、亭主のしりへくっついて、どこでもでしゃばりたがるかかあなんてのは、あんまり感心しませんや。ねえ、だんな。あっしはもうだれかさんの戸締まりなんかねらわねえことにしやす」

くやしいが、小稲はひとことも返すことばがない。

「それでなくてさえ、だんなは変な野郎にねらわれているんだ。三人でぞろぞろつながって歩いていたひにゃ、どんな逆手をとられるかわかりゃしねえ。だれかさんは、座敷牢がだんなを待ってるってことを忘れているんかなあ」

「もうたくさん」

小稲はけろりとした顔をあげて、

「捨さん、じゃあたし家で待ってますから、あいそなんかつかさないで、今夜はきっとうちへ泊まってくれますね」

と、わざと油屋を無視して、手詰めの談判だ。

「ありがとう。わしは小稲ねえさんの親切はけっして忘れないつもりだ」

にっこりしながら捨三郎がいうのを聞いて、うめえ殺し文句だなと、伝次が感心したとたん、

「ほんとうね。——うれしいわ」

小稲はこんどこそ油屋など眼中にないごとく、いきなり男のひざへすがりついていた。

大川ばた

1

「だんな、やっぱりついてきやすぜ」

小稲を残して五明楼を出た油屋は、捨三郎と肩をならべるようにして歩きながら、そっと告げた。

尾行はばらばらになって三人、まだほかにもいるかしれないが、半纏着と素袷と、どこかの下足番らしいやつと、みんなほおかむりをしているから、伝次は勘でぴんときたのだ。

「そうか」
捨三郎はひとこと答えただけで、むろんふたりともふりかえってみるような愚はしない。
色町はもううっすらとたそがれかけて、家々のあかりが目にまだういういしい。
——大将はどこでやつらをまく気かな。
三人もいちゃちょいとやっかいだとは思ったが、伝次はそれをいわずに、
「小稲はひどくだんなにのぼせていやすね」
と、わざとのんきな話を持ちかけてみた。
「あの生一本はなかなかいいところがある。少しロやかましいが、いい世話女房になれる女らしいな」
「もらってやりますかえ、だんな。きっと情が深うござんすぜ」
「わしは妻はいらぬ」
「おめかけにしてやればいいでしょう」
「あれにはもっとまじめな亭主を持たせて、しあわせな世話女房にしてやりたいな」
その口ぶりが、あいかわらず少しも色恋は感じていないようなので、
「だんなはどうしても、小稲にほれられねえっていうんですかえ」
と、伝次はわれにもなくむきになってきた。
自分はきれいさっぱり小稲をあきらめたかわりに、ぜひこの殿さまだんなに押しつけなくては気がすまなくなってきたのだ。どう考えても、ほかの男には小稲をわたしたくない。
「あんなにのぼせて、いっしょうけんめいになっているのに、そいつは罪が深いや」
「そういうものかな」
「だんなはほんとうに、小稲がちっともかわいくねえんですかえ」
「そんなことは気にしなくていい」
「気にするねえ、あっしは。自分が一度ほれた女だから、あっしはだんなに小稲をもらってもらわなくちゃ、どうにも気がすまねえんだ」
「だいぶおせっかいな性分だな」

「なんですって」
なるほど、おせっかいな性分にはちがいないが、そこまではっきりいわれると、ついむっとしたくなる。
——ようし、いまにみろ。うんと小稲をけしかけて、きっといっしょに寝なくちゃいられねえようにしてみせてやるから。
こいつはおもしろい、と伝次は思った。いくら冷淡ぶって、えらそうな顔をしたって、男は男だ。きっと手を出さずにいられるもんか。手をつけたら、紙問屋からまくら紙を一行李(ひとこうり)しょっていって、どかりとふたりの前へおいてやる。どんなつらをするか見てやりてえもんだ。
「油屋うじ、かごにしようかな」
捨三郎がふらりと立ち止まったのは、昨夜の鴛籠(おしどり)甚(じん)の前だ。

2

「だんな、かごじゃやつらをまけませんぜ」
伝次ははっと当面の問題へもどってきた。
「ほうっておけばよい」
捨三郎は少しも気にかけていないようである。たかがならず者の寄せあつめなどに、なにができるものかと、甘く見ているのだろうか。
「ゆだんはいけませんぜ。やみ夜のつぶてってことがありやすからね」
「なるほど、つぶてはしかってもまにあわぬな」
にこりと笑って、
「なに、まくときがきたらまく。それまでほうっておこう」
と、まんざら無計画でもないようだ。
ふたりの乗ったかごが、京橋大根河岸の伊丹屋宗兵衛の店先へおりたのは、やがて六つ半(七時)ごろでもあったろうか。むろん、もう店の大戸はおりていた。
伝次の案内で玄関のほうへまわり、声をかけると、待ちかねていたとみえて、すぐに主人宗兵衛が番頭といっしょに出迎えに出た。

「ようこそお越しくださいました。どうぞお上がりくださいますように――」
「宗兵衛、玉野はまだいるか」
「はい、奥にお控えでございます」
「ただちに会おう、案内してくれ。それから、かごを三丁至急用意しておいてもらいたいな」
「はい、ともかく別間で粗茶なりとお一つ――」
「いや、それには及ばぬ。しかるほうを先にいたそう」
「さようでございますか」
宗兵衛は別間になにかしたくがしてあるらしく、どうしたものかというように、油屋のほうへ目で意見を求めてきた。
「だんな、殿さまのいうとおりになさい。いいだしたら強情で、なかなかあとへひく人じゃない。気をもむだけ損でさ」
ずけずけと答えながら、あれえ、おれはいつの間にかご家老になったようだぜと、伝次はわれながらおかしかった。
「それでは、おことばにしたがいまして――」
宗兵衛は小腰をかがめながら先に立つ。
番頭はかごの用意に、店のほうへ走ったようだ。
おれはどうしようかなと、伝次はちょいと迷ったが、ご家老さまなんだからそばを離れねえほうがいいだろうと、すぐに思い直して、あとからついていくことにする。
さすがに大店だから手広い住まいで、廊下を二つほど曲がったいちばん奥座敷の前で宗兵衛は立ち止まった。
「ごめんくださいまし」
宗兵衛が障子の外へひざまずいて、おそるおそる声をかけると、
「はい」
中から冷たく取り澄ました玉野の声が答える。
捨三郎は宗兵衛が障子をあけるのを待って、つかつかと座敷へはいった。

「あっ」
床の間を背にして、厚い座ぶとんの上へ権高にきちんとすわっていた打ち掛け姿の玉野は、この不意討ちに、ひと目その顔を見るなり、さっと色を失った。

3

しかし、さすがに玉野はすぐおちつきを取りもどしたらしく、おしろいの厚い顔を冷たくこわばらせながら、静かに座ぶとんからすべりおりて、そこへ両手をつかえた。
伊丹屋と伝次は廊下へひざまずいて捨三郎の出ようを待っている。
「玉野――」
捨三郎は立ったまま、静かに呼んだ。
「そのほうは昨夜の美代のことから、だいぶ迷惑を被っているようだな」
「はい」
「右源太のさしずで、当家へすわりこむよりほかに、身の置きどころがないか」
「はい、美代どのにひと目対面して、もう一度お屋敷へもどっていただきませいでは、玉野のつとめが相すみませぬ」
なにをぬかしやがる。てめえのつとめだけはそれですむかもしれねえけれど、お美代さんが屋敷へ帰るってことは、座敷牢へはいることじゃねえかと、聞いていた伝次はむかっときて、思わず玉野の顔をにらみつけてしまった。
「そちは役目のてまえ、死ぬ覚悟で当家へまいったのだな」
「ご推察のとおりにござります」
玉野には玉野の怒りがあるらしく、死ぬ覚悟というのもけっしておどしではないようだ。また、そのくらいの覚悟がなくては、女だてらに人の家へはすわりこめない。
「そちはここで死ぬよりほか、よい分別がつかぬか」
「はい」

「よい、わしにも責任があることだ。そちをここで死なせてはきのどく、また死なれては当家が迷惑、わしが身のたつようにしてつかわそう。いっしょについてまいれ」

「はい」

玉野は疑わしそうにじっと捨三郎の顔を見上げる。昨夜の伝で、また理詰めの説教をして、恥ずかしめられるのではないか、そうなったらしかたがない。つら当てに目の前で自害してやろうと、実は女の片意地でひそかにそこまで思いつめていたのだが、今夜の小名木川さまは、ひとこともこっちを責めるようなことは口にせぬ。意外だった。

「女は心が狭い。あまりものごとを片意地に考えぬことだ。人はかたきどうしではない。悪いようには計らわぬから、立ちなさい」

その目に少しも邪心のないのが、玉野にもはっきりわかる。

「は、はい」

玉野はどうしていいかわからなくなって、思わずうなだれる。いつの間にか反抗心が、日にあたった朝顔のようにしぼんでいる。

「伊丹屋、かごはまいったろうか」

「はい。ただいま――」

宗兵衛はつと立って玄関のほうへ小走りにいそぐ。

「油屋うじ、少し歩いてもよかろう。春宵一刻なんとやらいうからな。――まいれ、玉野」

捨三郎はわらいながら、つと廊下へ出る。

――冗談じゃねえ、こんなおひきずりのお中老さまをつれて、外にはまだおおかみどもが待っているんじゃねえか。

伝次はあきれてしまった。

5

玄関へ出てみると、さいわいいまかごが三丁、やっとまにあったところだ。

「主人、じゃまをしたな」

そこへ両手をついている宗兵衛に、捨三郎は立ち止まって気軽に声をかける。
「なんのおもてなしもいたしませいで、失礼いたしましてございます」
宗兵衛は感謝にみちた顔だ。
「そう申せば、さいぜん親分は無事にまいったであろうか」
小品たちきょうだいは無事に立ったかというのである。
「はい。今ごろはもう到着している時分かと存じます」
「手数をかけた。なにぶんたのむぞ」
すっと玄関へおりる。
あとにつづく玉野が、宗兵衛に軽く会釈して、さすがに掻取りさばきはあざやかだが、半分はひきずられていくような、魂のない人形の姿である。
前のかごに捨三郎がのった。次のへ玉野をのせてやってから、
「だんな、どこへ突っ走るんですえ」
と、伝次は捨三郎のかごのとびらの前へしゃがんで聞いた。
「浜町河岸へやれ」
「へえ」
かご屋にそれを伝えながら、あいかわらずおおかみどもが二、三人、そこここのやみにうごめいているのを、伝次は見のがさなかった。
「だんな、おじゃまいたしやした」
伝次はそこへ出て見送っている宗兵衛や番頭たちにおじぎをして、いちばん後ろのかごにのった。
「油屋さん、どうかお気をつけてあげてくださいまし」
宗兵衛がそばへ寄ってきて、特に声をかけた。
「承知しやした。——かご屋、やってくんな」
「へい。いいか、相棒」
「そらよ」
とんと前のかごからあがって、見送る一同が

おじぎをしている間に、三丁のかごはひたひたと表通りへ走りだす。

——浜町河岸といったが、いったい大将、あのおひきずりをどこへつれこむ気なんだろうな。

まさか大川へほうりこむ気でもあるめえがと、油屋にはまったく見当がつかない。

が、さすがの玉野が、今夜はほんとにぎゅっとまいっていた。しかられるよりよっぽどこたえたらしく、あのゆうべの高慢ちきが、ぐうの音も出ない。まったくだんなの殺し文句はたいしたもんだと、感じさせられてしまう。

——けど、なんだな、あのおひきずりをしょいこまされる家こそ、とんだ迷惑じゃねえかな。ぞうきんがけひとつてつだえるがらじゃないし、だいいち、当人がつらいだろう、どこへしょいこませる気かな。伝次はどうにも行く先が気になってたまらない。

5

かごは三十間堀から堀留へ出て、橘町のほうへ道をとる。

——ご苦労さまに、野郎どもは汗をかいて駆けだしているだろうな。

いまにくたくたになって、音をあげるだろう。そのなかにあの万七もまじっていると思うと、油屋はなんだか、ふふんと鼻の先でわらいたくなってきた。それだけ送りおおかみにもなれっこになって、気にならなくなってきたのである。きょうは朝からさんざん飛び歩いたので、いつの間にかうとうとしたらしい。

とんとかごが地におりるけはいに、はっとわれにかえった。

「だんな、着きやした」

「そうか、ご苦労だったな」

かご屋がそろえてくれたぞうりを突っかけて立つと、捨三郎も玉野ももうおりて、どこか大

きな屋敷の門に立っている。
——ここはどこかの大名屋敷だな。
見ると、前側もそれらしい土塀で、その横町を出たところが大川になっているようだ。
——そうか、だんなは大名の出だった。どこか親類の大名へでも、あのおひきずりをあずける気なんだ。
それを育ちなりに、普通の町家へでもあずけるのじゃないかと思って、とんだ取り越し苦労をした自分が、伝次はおかしい。
「かご屋、駄賃はいくらだね」
「いいえ、もう伊丹屋さんでちょうだいしましたんで」
たぶんそうだろうと考えていたので、
「そうか。じゃ、これはほんの酒手だ。帰ったら、伊丹屋のだんなによろしくいってくんな」
と、いくらか祝儀をわたしてやる。
「かしこまりました。——おい、みんな、だんなにご祝儀をいただいたぜ、礼をいってくんな」
「ありがとうございやす」
三丁のかご屋は、口々に礼をいって引き返していった。
あたりを見まわしたが、おおかみどものかげはどこにも見えない。見えないが、どこかにひそみかくれていることだけはたしかだ。
「殿さま、ゆうべみたいに、へいを乗りこえっこするんですかえ」
閉ざされた門の前に、ぬっと立っている捨三郎のそばへ寄りながら、伝次は小声でいってわらった。
少し離れて、じっとうなだれている玉野の顔が、夜目にも白い。
「いや、今夜は乗りこえなくてもよい、そこのくぐりをたたいて、門番を呼んでみろ」
それは下郎の役だ。ご家老さまがたちまち下郎に早変わりか。いや、下郎になったり、ご家老さまになったり、使い奴にされたり、ひどく人使いの荒い殿さまだと感心しながら、

「こんばんは——門番さん、こんばんは。起きていやすかえ」
とんとんとくぐりをたたいてみた。
「だれだな、今時分。なんの用だ」
門のわきの格子窓があいて、ふきげんそうな声が聞く。

6

「用があるなあ、あっしじゃねえんです。あっしはお供でさ。すまねえが、門番さん、ちょいとここまで顔を貸してくれませんか。おもしろい道行きをお目にかけやすぜ」
伝次は格子窓の下へ行って、つい軽口が出てしまった。
「無礼なことをいうな。ここをどこと心得ている。ふざけたことを申すと、そのままにはおかぬぞ」
門番足軽はくそまじめなやつとみえて、えらいけんまくだ。
「こいつはいけねえ、殿さま、どうしやしょう」
「小名木川の若隠居だと申してみろ」
捨三郎はわらっている。
「もし、門番さんえ。こちらは小名木川さまのお供なんでござんすがね。小名木川の若隠居ってのをご存じですかえ」
こんどは返事がない。びっくりしたのか、それとも相手にしないつもりか、もう一度念のために声をかけてみようかと思っていると、ぎいとくぐりがあいて、五十年配のがんこそうな門番が、ちょうちんを持って出てきた。
そのちょちんをかざしてみて、その黄ばんだあかりの中へ捨三郎のすらりとした姿がうかび出すと、はっとしたらしい。
「おお、これはこれはご無礼つかまつりました。ただいま開門つかまつります」
「いや、世をすてた捨三郎だ。それには及ばぬ。くぐりから案内してくれ」
「はい。少々お待ちを願います」

門番はあたふたと内へ駆けこんで、相番にそれと告げたらしく、まもなく中からくぐりがひらき、ちょうちんで足もとを照らしながら、
「なにとぞお通りくださいませ」
と、ていねいに小腰をかがめた。
「玉野、まいれ」
捨三郎は先に立って、つとくぐりをはいる。
玉野がそれにつづいた。
油屋、まいれ、とはいわなかったが、おれがついていてやらなくちゃ不自由だろうと思ったから、伝次も大きな顔をしてあとにつづいた。こんどは門番も別にとがめようとはせぬ。
りっぱな玄関へかかると、すでに相番から奥へ知らせがとどいていたとみえ、六十を越した用人とも見える老人が、羽織はかまで、ぼんぼりを持った腰元をふたりしたがえ、玄関にすわって出迎えていた。
こいつはしばいがかりだと、伝次はまたうれしくなる。
「富右衛門、久々であるな」
「これはこれは若殿さま、ようこそお越しなされました」
「夜半突然ながら、お方さまにお目にかかって、願いの儀があってまいった。まだお目ざめであろうか」
「はい、ただいまおうわさを申し上げていたところでございます。まずお上がりくださりませ」
富右衛門老人はうやうやしく会釈をしてから、
「玉野をおつれでござりますな」
と、あらためて玉野のほうを見た。
見られた玉野は、小羊のようにしょんぼりとしているようである。

7

「今夜は玉野の儀についてまいったのだ。玉野、あがりなさい」
捨三郎はそういって式台へあがる。

はてな、おれはどうするんだろう、まさか屋敷の中へまでのこのこついていける身分じゃねえからなと、さすがに伝次が遠慮していると、

「富右衛門、あれは油屋伝次というわしの親友だ。粗略のないように、しばらく別間を貸してやってくれ」

と、思い出したように、老人にいいつけた。

「かしこまりました。油屋どの、おあがりください」

「へえ」

おどろいたな、下郎からいきなり親友になりやがったと伝次は恐縮はしたが、しかし人見知りをするような男ではないから、さっさとぞうりをぬぐ。

その間に、捨三郎は腰元のぼんぼりに案内されて、廊下を奥へ進んだ。

ここは先侯夫人お松の方が静かに余生を送っている浜町の中屋敷だった。死んだ菊乃は、お松の方の気に入りの腰元だったのを、直之助がもらいうけて愛妾にしたのである。

この菊乃は、お松の方の茶席へ招かれて、あたら名花一輪、この中屋敷でむざんにも心なき斉信のためにむしりとられてしまったのだ。

切り髪姿の先侯夫人は、まだ四十を越したばかりで、清楚といった感じの美貌のうえ、子どもを持たなかったから、年よりはずっと若く、まるで直之助の姉のようにしか見えない。先侯を父として生まれた直之助には、義母にあたるひとだが、気持ちの上からも姉のごとく親しんできた間がらで、

「直どの、一度ぜひお目にかかりたいと思っておりました」

白羽二重の上から濃紫の被布をつけて迎えたお松の方は、直之助の顔を見るなり、いたましそうに青いまゆをくもらせていた。おそらくは、菊乃の横死が、胸に重くつかえて離れないのだろう。

「お方さまにはいつもおかわりもなく、祝着に

存じます」
　直之助は明るい微笑をうかべながら、わざとあたりまえなあいさつをする。
「なにからお話し申し上げてよいか――」
　そういいながら、直之助のうしろへ少し離れて両手をつかえている玉野のほうを見て、
「玉野、きょうは直どののお供ですか」
と、やさしく声をかけた。
「はい。ご後室さまにはごきげんうるわしくいらせられましておよろこび申し上げます」
「ご当主さまにも、おかわりなくいらせられますか」
　これはお松の方の儀礼である。
「きょうはお方さまに、少しお願いがあって、夜中突然押しかけてまいりました」
「松にできますことでございましたら、なんなりと――」
「昨夜、直が高輪の下屋敷へ押し入って、夜盗を働いたことは、もうお耳にはいっておりましょうか」
　直之助は単刀直入に切り出した。

8

「あなたは小名木川を出られたそうでございますね。松は胸を痛めております」
　半分はとがめるような、半分は自分にも責任があるのだから、同情しているような、お松の方はきれいな目をじっと直之助に向けた。
「ご心配をおかけして申しわけありません。少し考えるところがあってのこと、世をすねたり、下世話にいうやけになって、ことさら気違いじみたまねをする、それほど意志の弱い男でもないつもりですから、しばらくお見のがしを願います」
　直之助のロぶりにも、態度にも、いつもとかわったところは少しもないようだ。
「屋敷を出て、不自由なことはありませんか」
「いや、浮き世は思ったより住みよいところの

ようです」
「どこへ身をお寄せになっているのです」
「これと定めてはいません。町には旅籠屋というものがございまして、どこでも好きなところへ気楽に泊めてくれますから、なかなかちょうほうにできております」
「身のまわりのめんどうは、だれがみてくれるのです」
「自分でできることは自分でやりますし、できないことは人がやってくれます。そういう点は、下世話の者のほうが親切で、心やすいようです」
直之助はたのしそうだったが、お松の方は身のまわりということばから、急に菊乃のことを思い出したらしい。
「菊乃はふびんなことをいたしました」
「お方さま、それはもう申さぬことにいたしましょう。死児の年を数えるの愚と、おなじことになりましょうから」
「あなたは百カ日の間、供養してやってくださいましたそうですね。あれはさぞあなたの暖かいお心を、泣いてよろこんでいることでございましょう。松からもあらためてお礼を申し上げます」
心から会釈をして、目にいっぱい涙をためるお松の方であった。侍女たちも、玉野も、はっと下を向いてしまう。
直之助は黙念と会釈をかえしただけである。
「あれはほんとうに心のやさしい娘でしたが、あれに劣らぬやさしいおなごを、松がきっと心がけておきましょう」
「いや、せっかくですが、当分は小名木川無宿、女はいりません」
きっぱりといって、直之助は微笑した。
「直どの、あなたはよもや、あのかたに盾をついて、どこまでも争うお心があって、屋敷を出られたのではないのでございましょうね」
一門が血で血を洗う、お松の方の心痛はそこにあるようだ。

「ご安心ください。直は女敵を討とうとするような未練者ではないつもりです。ただ、お家のためにも、天下のためにも、正しい者がいつも泣き寝入りにしなくてはならない世の中であってはなりません。直はそれを考えているだけです」

「美代を助け出したのは、そのお心からなのですね」

お松の方は、昨夜のことも、ちゃんと耳にしているようだ。

9

「その儀について――」

直之助はちらっと玉野のほうを見ながら、

「ひとりを助けるために、ひとりを殺してはなんにもなりません。玉野はご当主さまのお怒りにふれて、身のおきどころがなくなりましたそうで、お方さまのおそでにすがりたく、夜中なながらつれてまいりました。おかくまい願えませぬでございましょうか」

と、すかさずたのみこんでみた。

「それはまあきのどくなこと、かならず玉野はあずかりましょう」

「さっそくお聞きとどけくださいまして、重荷が一つおりました」

「美代のことは、早く松がおとりなしすればよろしかったのですが、ついのびのびになっていたのが手落ちでございました。直どの、玉野はきっとあずかりますが、そのかわり、これからはあなたも、あまりご自分の身を危うくするようなまねは、慎んでくださるでしょうね。正しいものを正しく、そのお心持ちはよくわかりますが、正しいものを正しくするために、法もあれば、その役々の者もいるのではないでしょうか。どうか、血気にはやって、身を誤りませぬよう自重してくださいませ」

「きっと心がけます。夜盗のまねなどは、われながら感心したことではありませんでした」

お方さまをつかまえて、議論でもあるまいと、直之助はあっさりかぶとをぬいで、
「玉野――」
と、静かにそっちへ向いた。
「そちの身は、いま聞いてのとおり、お方さまがおあずかりくださる。きょうからお方さまのお情けにすがって、女がいつまでも御殿づとめでもあるまい、もう一度よく世間を見なおして、よき配偶者があったら早く身をかためなさい。そちがしあわせな家庭を作る日を、よそながら捨三郎は必ず見ているぞ」
「は、はい」
そんなやさしい意見をされようとは、夢にも思わなかったのだろう、はっと両手をつかえた玉野は、ひどく胸にこたえたらしく、そのまま顔をおおって思わず嗚咽をもらしていた。
「お方さまのお情けに甘えて、直はもう一つお願いがございます」
「遠慮なくおっしゃってごらんなさいませ」
「にわか浪人の捨三郎、なにかと入用が多く、目下のところ無一文になりました。お手もと金を少々借用させてください」
直之助はあかるく持ちかけた。
「あなたは捨三郎と名のっておいでになるのですか」
「はあ。松平直之助では浪人するわけにもまいりません。大名の浪人というのはございませんからね」
「もう屋敷へはもどらぬおつもりですか」
「いや、もどれるようになれば、いつでももどります」
お松の方はそういう直之助のつら魂を憂わしげに見て、なにかもっと突っこんだことが聞きたそうだったが、思いかえしたように、
「不自由なときがありましたら、いつなりと富右衛門に申しつけてください。そして、一日も早く屋敷へもどりますよう、松が胸を痛めていることを、お忘れになってはいけません」

と、きれいな目をしばだたいていた。

10

玄関に近い表座敷では、油屋伝次が酒肴をちょうだいして、はじめは遠慮していたが、富右衛門から、ここはお方さまの中屋敷で、お方さまと小名木川さまとは親子の間がらにあたり、敵のまわし者はひとりもいないから安心して飲めといわれ、とうとう無礼講で、いい気持ちになって気炎をあげていた。

「あっしはほんとうのところ、ぬすっとですがねえ。ゆうべぐらい気持ちのいい押しこみをやったことはありやせん。なにしろ、役者がそろってるからねえ」

伝次は大あぐらでまくしたてる。

「そうか、そんなにおもしろいしばいだったか」

聞きじょうずの富右衛門老人は、にこにことあいづちをうちながら、いかにも聞きたそうな顔をしている。

「おもしろいのなんのって、見せたかったな、ご用人さんに。殿さまだんなが若侍に案内させて、あのとおりの調子でぬうっと座敷へはいっていく。あっしがほおかむりのまんまであとへつづく。座敷牢の前に、今夜つれてきた玉野のおひきずりと、九兵衛とかいう用人がふくれっつらをしてすわっていたが、相手が小名木川さまじゃ、ぐうの音も出ねえ。だが、お美代坊をつれていかれちゃたいへんだから、ご当主さまを盾にとって、座敷牢のかぎはここにはねえとぬかしやがる。そのとき、殿さまだんながうまいことをいいやしたぜ」

「なんと申されたな」

「おまえたちは人間が薄情にできているとみえる。もし火事があったら、自分たちだけ逃げて、美代は焼き殺す気か。伝馬町の牢にさえ切りほどきという情けはあるぞとね」

「これは一言もない」

「あたりきでさあ。べらんめえ、合いかぎなん

かいらねえのになあと、あっしがうずうずしていると、油屋うじ、とおいでなすった。意気がぴったりあうんだからうれしいや」

「なるほど、ここはどうしても梁上の君子の働きどころだ」

「そうそう、その君子で思い出した。きょうは深川の五明楼で、大内右源太っていう、先代萩でいうと仁木弾正ってやつさ、その野郎をだんながぎゅってめにあわせたんですぜ」

「ふうむ、そんな一幕もあったのか」

びっくりしたように目をみはってみせて、用人津川富右衛門は家出後の若殿の行状を、洗いざらい聞き取っていたのである。

「ご用人さんは話のわかる人だからいうんだが、あっしはこう思っているんでさ。小稲に深川で小料理屋を出させるんだ。長火ばちの前へだんなをすわらせて、こう見えてもおれは板前くずれで、包丁を持たせりゃ八百善の板前にだって負けねえ。あっしが板場をあずかって、小稲とふたりで働く、屋号は明石屋がいいね。なあに、金は伊丹屋が二つ返事で出しまさ。そうなりゃ、小品だってからださえよくなりゃよろこんでいっしょにてつだうだろうし、——ああ、こいつはちょいとまずいな。小品の目つきが、きょうは違っていたからな」

そんなおだまであげながら、つむじ曲がりの伝次がひどく上きげんなのは、富右衛門老人の人がらが奥深くてやわらかいせいだからだろう。

「ご用人さま」

ふすまの外で腰元の呼ぶ声がした。

11

中座した富右衛門老人が、ややしばらくたってから、重いふくさ包みを持ってもどってきたときには、伝次はそこへひじまくらでいい気持ちそうにぐっすり寝こんでいた。

「油屋、——油屋」

さすがに三声とはかけさせない。はっと起き直って、身がまえるように鋭い目を富右衛門に向けたが、

「こいつは大しくじりだ。つい酔いがまわっちまって、――ご用人さん、どうもすんません」

と、てれくさそうに頭をかく。

「いや、ここにはひとりも敵はおらんから、なんとやらの昼寝をしていても安心なものだ」

老人はからかうようにわらいながら、

「ところで、これはお方さまから下しおかれる小名木川さまのお手もと金だが、親友にあずけておいてくれとのことだから、おまえあずかっておいてくれ」

と、ふくさ包みをわたした。

「そうでござんすかえ。さっきもちょいと話したように、金なら小稲が伊丹屋さんからあずかっているし、これからだっていくらもよろこんで出すはずだから、なにもお方さまにおねだりしなくてもいいんですがねえ」

伝次は習慣で、手にしたふくさ包みの重みを計るようにしながら、どうもわからねえといった顔つきだ。

「まあ、あずかっておきなさい。屋敷は出られても、小名木川さまは当家の若殿、他人に迷惑はかけたくないお心なのだろう」

「なるほどねえ。そういえば、あれでなかなか意地っ張りだからなあ。じゃ、おあずかりしておきやす。ご用人さん、玉野の話はどうついたようでござんす」

「あれはお方さまがおあずかりくださる」

「うれしいねえ。ゆうべはこにくらしい理屈をこねやがって、生意気なおひきずりめと思ったが、だんなはただしかるばかりでなく、先の先まで考えていなさるんだから、たいしたもんさ。ああいうかたが殿さまになりゃ、たしかに名君てのになるんですがね」

「油屋、ここでそんな口をきいてはいかん」

「へえ」

「ご聰明なおかたではあるが、まだお若い。それに、世間なれぬおかただ。あまりあぶないまねはおとめしてくれるよう、わしからもなにぶんたのみおくぞ」

深い悲しみの色をたたえている老人の目だ。

「承知しやした。こう見えてもあっしは親友ですからね、命にかけても親友の仁義はつくしてみせまさ」

「ぜひたのみおく。わしに用があったら、またいつでもたずねてきてくれ」

「あっしはねえ、ご用人さん、ここだからいうんだが、なんてえ薄情な家来どもがそろってやがるんだろうと、実はあきれていたんでさ。けど、ご用人さんにお目にかかって、あながちそうとばかりでないことがわかってきたようです。世の中はむずかしいもんでござんすね」

伝次がもっともらしい顔をしたとき、廊下に人々のけはいがして、

「ご用人さま、おもどりでございます」

と、腰元がふすまの外から告げた。

12

伝次が富右衛門老人につれられて玄関へ出てみると、捨三郎はもう式台におり立って待っていた。

腰元がぼんぼりをささげ、そこのついたての前に、切り下げ髪の上品なかたが被布姿ですらりと立っている。そのうしろに玉野が神妙にひざまずいているのを見て、

——あっ、お方さまだな。

と思ったとたん、伝次はわれにもなくそこへぺたりとすわって、ていねいにおじぎをしていた。

「お方さま、捨三郎の町の親友、油屋伝次と申す親切者でございます。お見知りおきください」

捨三郎がわらいながら、あっさりと披露してくれた。

お方さまはにっこりとうなずかれて、やさし

い目を向けたが、ことばはかけてくれぬ。
——権式の高いもんだな。やっぱり、玉野おひきずりとは位が違う。
気品があって、おきれいで、せっかくお目にかかれたんだ、とてものことになんとかひとこと口をきいてくれねえもんかなと、伝次は急にそんな欲が出てくる。
「失礼でござんすが、お方さま、ただいまは親友の捨だんながお手もと金をおねだりして、申しわけございません。そんなことをしなくたって、あっしがついていて、だんなをひぼしにする気づかいはねえんでございますが、この親友はまったく義理が堅いもんでございますから」
すらすらとそんな口をきいているのが、自分でもなんだか自分でないような気持ちだ。
「たのみおきます」
お方さまのきれいな声がたしかにいった。
「へへッ」
思わず頭が下がって、さあ口をきいてもらったぞと、伝次はすっかりうれしくなる。
「まいれ、油屋うじ」
捨三郎がぞうりをはく。
「せっかちだね、だんなは。いま行きやすよ」
伝次はまだ立つには惜しく、
「玉野さん、ようござんしたね。あっしはこういうお屋敷にはあんまり縁のねえ男だから、二度お目にかかるときもねえでしょう。どうかお達者でおくらしなさいまし」
と、半分はお方さまにもいっていることばだ。
「いろいろお世話になりました。一度は必ずご恩がえしをさせていただきます」
しとやかに両手をつかえながら、これも半分は小名木川さまにいっていることばだろう。年だけに、うまいことをいいやがると感心して、しかし悪い気持ちはしない伝次だ。
「親友が待っていやすんで、おいとまいたします。どなたさまもごめんなすって」
伝次はもう一度ていねいにおじぎをして、捨

三郎のあとを追った。
「おやすみなされませ」
玄関先へ立った捨三郎が、丁重にお方さまに会釈する。
「またお目にかかれますね」
愛情のこもった答礼だった。
「はい。——富右衛門、じゃまをしたな」
捨三郎は老人に声をかけて、すっと歩きだす。

13

「だんな、おひきずりさんよろこんでいたようですね」
門を出て大川ばたのほうへ歩きながら、伝次はまだうきうきとしていた。うきうきしてはいても、すばやくあたりを見まわすことだけは忘れていない。おおかみどもはどこにも見えないようだ。
時刻はかれこれ四つ（十時）すぎになる。あんまりゆっくり話しこんでいたので、今夜は中屋敷泊まりと、かってにきめこんでゆだんしているのか。
大川ばたへ突きあたると、捨三郎はむっつりと新大橋のほうへ曲がった。
春とはいっても、船にはまだちょいと早い季節だし、夜がふけているから、このあたり乙（おと）がら淵と呼ばれる百十六間の川幅は、満々とたたえた夜潮に星かげをうかべているばかりだ。
——ふん、こっちへくるようじゃ、今夜は小稲の家へ泊まる気だな。
新大橋をわたれば深川なのだ。伝次はちょいとくすぐったい気持ちで、
「だんな、せっかくお方さまからたんまりおこづかいをいただいてきたんですから、今夜吉原へ討ち入りとしゃれこみやしょう」
と、わざとからかってみる。
「小稲が待っていると悪い」
あっさりと答える捨三郎だ。
「なるほど、だんなは約束の堅い人でしたっけ

ね」
しめた、このぶんだとあすあたりは紙問屋へ飛ばなけりゃなるめえと、伝次はにやりとしかけたが、
「たぶん、大根河岸の親分もきているだろう」
と、捨三郎はふっと妙なことをいいだす。
「ああ、小品のおちついた先を知らせにですかえ」
「それもある。が、肉親の情として、小稲をあのままひとりではおいてはおけまい」
たしかにそれはそうだ。ここんところ敗北つづきの右源太が、くやしまぎれにいつどんな手を打つかしれない危険はじゅうぶんある。
「だから、だんなが長火ばちの前へすわっていてやれば、いちばんいいんでさ」
「わしにはほかに仕事がある」
「じゃ、その仕事がすんだら、すわってやりますかえ」
さっきおせっかいとわらわれて、へそを曲げたことを、伝次はけろりと忘れているようだ。
「油屋、途中で妙なやつが出たら、わしにかまわず、ひと足さきに小稲の家へ走れ」
「なんですって――」
ぎくりとしながら、行く手のやみへ目をすえると、新大橋まで右手はずっと大名屋敷がつづく土塀の木の下やみへ、ちらっと黒いかげが走りこんだようだ。そのあたりが屋敷と屋敷の間の横町になっているのかもしれない。
「万七のやつかもしれやせんね」
捨三郎が平気で歩いているから、伝次もわき目ひとつせず、声だけは小さかった。
「万七ではなかろう。右源太の小細工にちがいない」
なるほど、おおかみどもが五明楼へ走って、右源太がなにか小細工をするだけの時間は、たっぷり中屋敷で話しこんでいたのだ。

14

——冗談いっちゃいけねえや。ひと足さきへなんか逃げられるもんか、お方さまにたのまれてきたばかりの親友じゃねえか。

伝次はお松の方の高貴な微笑をありありと思いうかべた。あんなしっとりとおちついたいい女は見たことがねえと思い、いい女だなんて、あたりまえの女のようにこころやすく考えちゃ失礼だぞと、あわてて首をすくめた。

とたんに、たしかにこの辺だったがなあと思うやみから、猛獣のような勢いで何者かが飛び出してきたすさまじい殺気に、伝次はひやりとして、われにもなく二、三間、一気にあとへ飛びさがって、しりもちをついていた。その目の前で、

「とうッ」

飛び出してきたやつが振りかぶっている抜き身を、からだごと捨三郎にたたきつけていくのを見た。

「わあッ——」

てっきりやられたと見た瞬間、絶叫をあげて大きくのけぞっていたのは黒ずきんで顔をかくしているやつのほうで、次の瞬間、片ひざついて抜き打ちに胴を払ったらしい捨三郎が、すっくと抜刀をさげたまま、大川を背に立ち上がるのを見た。

「しめたッ。こいつあ強い」

こっちも一度はだらしなくしりもちをついたが、突いたとたんに起きなおって、そのまま大川ばたへしゃがみこんだ伝次は、夢中で口走りながら、立つひまがない。

すっくと立った捨三郎を、ばらばらっと三本の白刃が三方から取りかこんだからだ。

——いけねえ、中屋敷へ知らせなきゃ。

そうは気がついたが、はたしてまにあうかどうか、それを思うと、どうにも目が放せない気持ちだ。

「何者だ、名のれ」
捨三郎が軽く青眼につけながら、しかるように鋭くいった。
黒ずきんどもは無言で、ひどくあせっているような必死なからだつきである。
「右源太にいいつけられたな」
「――」
「ふらち者め、主に手むかいするか」
この舌刀は敵の胸にこたえたらしい。いっそうあせってきたようだ。
「ごめん」
だっと中央のやつが捨て身で切りこんだ。
背後が川ばただから、捨三郎は左右にしか動けぬ。ひらりと右へかわしながら、前が川と見て突んのめるように危うく立ちなおろうと、敵がそっちへ気をとられ、体勢がわずかにくずれたすきへ、
「えい」
捨三郎は横なぎをくれておいて、身を沈めるように振りかえりざま、返す一刀を右へ払った。
右からおどりこんできたやつの太刀風を、はっきりと左のほおに感じたくらいだから、勝負は紙一重の差だったのだろう。
「わっ」
どぶん、どぶん。
ふたりの敵がほとんど同時に大川へ飛びこんで、水煙をあげていた。
「うぬッ」
最後にひとり残ったやつが、逃げようともせず、不敵な一言をもらして、堂々と向かってくる。

15

「おまえはなりあがり者の用心棒か」
捨三郎はいかにも相手をけいべつしたように浴びせかけた。今の激闘で乱髪にはなっているが、心のゆとりだけはいつの場合でも失いたくないと心がけている捨三郎だ。

国もとに桑山太市という腕のたつ無法者がいて、それが右源太の腰ぎんちゃくになって出てきていると聞いている。きょう五明楼の取り巻きの中にいたやつだろうと思うが、ずきんをかぶっているからわからない。捨三郎はとっさにかまをかけて、相手の出ばなをくじこうとしたのだ。

「勝負は実力ですからな。身分は通用せんようです」

相手は平気で嘲弄してきた。

「目的が悪いと、勝っても悪名を残す、存じているか」

「愚痴ですかな。それこそご身分にかかわりますぞ」

わざと怒らせて、逆上するのを待っているようにも見える。

「馬の耳ではなにをいってもわかるまい。愚かなやつだ」

捨三郎はにやりとわらう。

「くそッ」

馬は猛然と地をけって、まっしぐらに突きを入れてきた。無法者だけあって、捨て身とも見える激しい太刀さばきだ。

かわしきれないから、引っ払って、飛びちがえた。憂然と二つの剣が春のやみに火花を吐き、両者の位置がかわった。川ばたへ飛んだ馬が、よく川へ飛びこまずに一歩手前で踏み止まったのは、ちゃんとそれを計算に入れての突きだったのだろう。侮りがたい腕まえだ。

くるりと立ち直った馬は、これも計算の中に入れてあったらしく、

「とうッ」

火のような第二の突きを入れてくる。

捨三郎がまだじゅうぶん立ちなおらぬうちに、意表に出て勝敗を決する腹だったのだろうが、あまり功をあせりすぎた馬は、わずかに足もとがもつれて、第二の突きにはまえほどの速さがなかった。

ひらりとかわして、もう一度飛びちがえながら、捨三郎は敵の白刃を胸もとへ感じながら、無意識に一刀を右片手なぎにしていた。

「わあッ」

たしかに馬の悲鳴は耳にしたが、捨三郎もまた目測が狂って、一度は川ばたへ足がついたが、惰性で踏みとまることができない。

「しまった」

と思ったときには、もう黒い夜潮がぐうんと足もとから目の前へ、大きく盛りあがってきていた。

「いけねえ」

伝次は思わず棒立ちになった。

どぶんという水音だけは耳にしたが、伝次もまた捨三郎の行くえを見さだめている余裕はなかった。

「やっちまえ。敵の片割れだ」

「たたっ殺せ」

さっきから土塀のかげにうごめいていたおおかみどもが三、四人、手に手に匕首を引き抜きながら、こっちへ殺到してきたからである。

根岸の里

1

四人の刺客が大川ばたで切られたと、万七から報告をうけた右源太は、往来に倒れている桑山太市ともうひとりの死骸はその夜のうちに、川へ落ちこんだふたりの死骸は、翌朝中州の蘆の中へ流れ寄っているのを、それぞれに小名木川の下屋敷へ運ばせ、あまり目だたぬようにすぐ始末をつけてしまった。

四人とも右源太が国もとから抜擢してつれてきた軽輩あがりだから、表向きは酒の上のけんかということで、簡単にすんでしまったのである。

「だんな、油屋のほうはすばやく川へ飛びこん

じまったからしようがねえが、桑山さんはたしかに小名木川に一太刀浴びせていましたぜ」

そのとき万七がいっていたので、右源太は念入りに川筋から洲崎、大森のあたりまで、人を使ってひそかに洗わせてみたが、残念ながら捨三郎の死骸はついに発見できなかった。

これはたとえ手傷は負っていたにもせよ、油屋伝次がうまく助けて逃げたと想像するほかはない。

いずれにせよ、その日の勝負はまったく右源太の黒星だった。人質にとろうとした小品きょうだいはどこかへかくされ、玉野は伊丹屋から、ちょいと手のつけにくい中屋敷へつれ去られてしまうし、刺客四人を切られたあげく、尾行のひもさえ中断された結果になるのだ。

——思ったより強敵だぞ。

腕といい、度胸といい、大名育ちにしてはずばぬけた生まれそこないにできている、さすがに緊張はさせられたが、しかし右源太はまだ恐ろしいとまでは思っていなかった。たぐり寄せる手段はいくらも残されているし、どうしても自分が手を下さなければならない最悪の場合がきたとしても、まさか大名剣術などに劣ろうとは思わぬ。

——当分いい気持ちにさせておくだけの話だ。

右源太にはあくまでもそういう自信がある。が、その夜の捨三郎の行動をくわしく耳にした塚越主計と平田作十郎は、内心色を失ってしまったようだ。かれらがいちばん恐ろしいのは、いつ小名木川さまの天誅の刃が自分たちに向けられないとはかぎらないという不安にあるのだろう。

「右源太、ご当主さまのご迷惑になっては相ならん。だいじょうぶだろうな」

主君の名を盾にとって、非常手段もまたやむをえないと、暗ににおわせるのである。

「ご安心なさい。ご当主さまにご迷惑がかかる

ようなことだけは絶対にさせません」

意地の悪い右源太は、そのロで、ご両所の命はきっと引き受けますなどという人のいいことは、けっしていわなかった。

「しかし、殿のご帰国も間近い。ご出発前になんとかくふうがつくのだろうな」

そのご帰国について、尾張領通過の件も、まだそのままになっているのだが、それより今となっては斉信の帰国といっしょに右源太はどうしても供をしていかねばならぬ。そのまえに小名木川さまをなんとかしていってもらわなければ、塚越と平田とでは、相手が正統な主人であるだけに、とても対抗できる自信は持てないのだ。

2

「困ったものだな」

平田が奥からの迎えをうけて立っていくと、塚越は思わず口癖が出たようだ。

胸に一物ある右源太は、わざと知らん顔をしている。

「国もとでは百姓どもの間に、ひどく不穏の形勢があるそうだ。殿のご帰国も近いから、なにごともそれまで待つようにと慰撫させてあると、次郎右衛門から申してきておるが、たとえ殿がご帰国あそばしても、年貢増しのほうは引きさげるわけにはいくまい。対策はあるかな」

「ないこともございますまい」

「そのまえに、尾州の難題もかたづけなくてはならんしな」

「その懸念には及びません」

右源太はあっさりひとりで引きうけながら、こうしますという結論はけっして説明しようとしない。

「それなら安心だが――」

塚越は口だけで安心してみせて、

「小名木川さまが消息を断ってから、もう五日ほどになるようだが、このほうはどうだ」

と、皮肉な顔で話題をもどしてきた。

「そっちも、そろそろ網にかかるころでしょう。だいぶ陽気もよくなりましたからな」

ちゃかしているようにも見える右源太だ。

「そうか。すると、なにもかもそちひとりに任せて、親船に乗った気でいればよいのだな」

「ご家老、ぶしつけですが、拙者にご息女をくださらんか。そうなれば勇婿、いっさいご家老に心配はかけません。いかがでしょうな」

右源太は冗談のようにずばりといってのける。

塚越の長女田鶴は、ことし十八になる藩中でも評判の小町娘で、とっくに斉信が目をつけていたのだが、すでに婚約者があるからという理由で、これだけはうまく右源太が押えてきた。押えてきたいちばん大きな理由は、右源太にそういう下心があったからである。

「せっかくだが、あれはそちも知ってのとおり、藤崎小弥太につかわすことになっているでな」

塚越はぎくりとしたように、苦い顔をした。

藤崎はおなじ江戸詰め家老の列にある名門である。

「いや、たってと申し上げるのではございません。正直に申せば、拙者はなんといっても成りあがり者、ご家老を舅にいただけば、箔がついて、もっと仕事がやりやすい、そう考えたからのことで、ぜひお考えおき願いたいと存じます」

考える余地のないことを、ぜひ考えろという。ほかの者なら、たわけたことをいうなと、一喝してやりたいところだが、相手が右源太ではそれができない。塚越もしばしば、考える余地のないことを考えろと、この男に無理をたきつけている弱みがあるからだ。

「大内さま、ただいま表御門へ深川の万七とかいう町人がまいって、至急ご注進があるんだと申しているそうですが、どういたしましょう」

小姓が廊下へきて両手をついた。

「そうか。すぐ行くから、門番小屋へあげておけ」

なにかひっかかったなと、ひそかにほくそえむ右源太である。

3

その朝、小稲はとうとうたまりかねて、根岸へかごを飛ばしていた。

あの晩、捨三郎は、きっと家のほうへ行くからと、あんなに約束をして出ていったのに、ついにきてくれなかった。おそくなってきてくれたのは、伯父の佐平である。

「なんだ、浮かねえ顔をしているじゃねえか」

姪の気持ちはわかりすぎるほどよくわかっている佐平は、わらいながらタバコ入れを出していた。

「小品ちゃんたち、無事に――」

「おっと、行く先を口にしちゃいけねえぜ。壁に耳ありのたとえだ」

如才なく小稲の口を押えて、

「ちゃんと無事に送りとどけてきたから安心しねえ。実は、それをだんなにお知らせしようと思って、おじさんも寄ってみたんだ」

と、佐平も捨三郎はここへきているものと決めているようなことをいう。

「だって、もうこんなにおそいんだもの、あの人こない気じゃないかしら」

「そんなことはねえだろう。伊丹屋さんから玉野をつれて、なんでも浜町の中屋敷へ行った様子だっていうから、まもなくみえなさるだろう。だんなは約束のかたい男だ」

しかし、その晩はついに姿を見せず、佐平もどうしたんだろうなあと、ひどく心配して泊まってくれたが、そのこられなかった理由は、翌朝出入りの箱屋の才助がやってきて、そっと教えてくれた。

「ねえさん、大きな声じゃいえないが、ゆうべ大内のだんなは、浜町河岸で小名木川さまにやみ討ちをかけさせたという話ですぜ」

こっちは四人、小名木川さまが強いんで、四

人とも切られてしまったが、小名木川さまも一太刀やられて大川へ落ちこんでしまった。それと見た万七たちが、お供の油屋伝次へ襲いかかると、こいつは自分から川へ飛びこんでいった。

「もう一息というところで、惜しかったって、滝田屋の仲間が自慢してるのを聞いたんです。すぐに調べてごらんなさいまし」

というのである。小稲はまっさおになってしまった。

ちょうど伯父が二階に泊まっていてくれたので、これも顔色をかえて飛び出していってくれたが、その晩おそくやってきての話では、たしかにそれに相違ない、そのとき川へ落ちこんだ刺客ふたりの死骸もあがって、小名木川の下屋敷へ運びこんだ、あっちではもしや小名木川さまの死骸もあがりやしないかと、まだ川筋を洗っていると、いうことだった。

「お稲、力を落とすなあまだ早いぜ。小名木川のだんながめったに死ぬもんか。もし万一のことがありゃ、第一に油屋がここへ飛んでくるはずじゃねえか」

佐平はそういいおいて、あたふたと帰っていった。

——あの人が死んでたまるもんですか。

意地でもそう信じていた小稲だが、それにしても油屋伝次がどうして早く顔を見せてくれないんだろうと、それがひどく気にかかる。

4

苦しいときの神だのみで、小稲はその日から八幡さまへ朝まいりをして、お百度を踏んでいた。

——もしあの人が死んでいたら、あたしは大内のやつを刺し殺して、捨さんのあとを追うんだ。ちくしょう、だれがあんな悪党、無事になんか生かしておくもんか。

くやしくてくやしくてたまらない小稲だ。が、ふっとまた考えるのである。腹にそんな

殺伐な気があって、いくらお百度を踏んだって、神さまはそっぽを向いてしまうのではないかしら。神さまにそっぽを向かれたんでは、それこそ助かる命もためにされてしまう。たいへんだと気がついたので、

「南無八幡大菩薩さま、お稲はもうなんにも考えません。どうかお情けで、一日も早く、無事なあの人をあたくしにおかえしくださいまし」

八幡さまの前では、ただそれだけを祈念することにした。

それからきょうで五日めになる。

八幡さまの前ではきれいな心になっている小稲だが、家へ帰ってくると雑念ばかりおこって、いても立ってもいられない小稲だった。

あれ以来、大内は一度も土地へあらわれないようである。兼次は兼次で、お座敷で顔があうと、

「小稲さん、ひどくおやつれのようだね。もしかお胤でも宿したんじゃないかね」

と、しらじらしい冗談口をたたく。

毎晩夢にこそ見ない日はないけれど、夢でお胤を宿すほどそそっかしい女だと思っているのかしら、ばからしい。

——いまに見ているがいい。ほんとにお胤を宿してびっくりさせてやるから。

それにしても、どうして油屋はきてくれないのだろう。ことによると、あの人が手傷ぐらいうけていて、その看病で手が放せないのではないかしら。そう考えるよりほかに、伝次が今まで顔を見せないという理由は考えられない。

——それならそれで、使いをよこしてくれれば、あたしがすぐに看病に飛んでいくのに。あんぽんたんのまぬけってありゃしない。

そして、はっと思いあたったのだ。

いったい、あの人、どこに寝ているのだろう。もしや根岸の寮ではないかしら。

根岸の伊丹屋の寮なら、小品もいるし、お美代もいるはずだ。

このあいだの晩、お美代さんも根岸にいるんですかと、伯父に聞いてみたら、
「まさか、労咳病みといっしょに、いくらなんでも伊丹屋がたいせつな娘をおくはずがねえじゃねえか」
と、伯父はわらっていたが、一昨日ふらりと様子を見に来たときは、
「お稲、親バカとよくいったもんだな。お美代坊はとうとう根岸へ移ったようだぜ」
と、うっかり口に出していた。
「どうしてさ、おじさん。なんだってお美代さんは、労咳病みなんかといっしょになりたがるの」
小稲はつい目にかどを立ててしまった。

5

伯父の佐平も、はっと気がついたらしい。
「なあに、お美代坊のいうには、あたしは小名木川さまのお助けをいただいたのだから、そのご恩がえしに、若さまがお目をかけられている小品さんの看病をするのはあたりまえだと、むりにおとっつぁんを説き伏せたんだってことだ」
「そうお——ずいぶん義理が堅いんですね」
そのときはそれですましたが、もしや捨三郎は根岸の寮に寝ているのではないか、一度そう気がついてみると、それではすまされなくなってきた。
——おじさんはあたしをだましたんだ。お美代さんは小品ちゃんの看病に行ったのではなく、あの人が根岸にいると聞いたもんだから、むりにも行く気になったにちがいないんだわ。
なぜだろう。そんなことは聞かなくたってわかっている。あの人はあんなりっぱな殿ごだし、おまけに命まで助けてもらっているんだもの、お美代さんも捨さんにほれこんでしまったのだ。そうにちがいない。
——どうしよう、あたし。

小稲はかっとからだじゅうが熱くなってきた。

相手は金持ちの娘で、美人だし、若いし、しかも御殿女中の心得があるときているのだから、それがほんとうなら、どう考えても勝負になりそうもない。

——こうなったら、どっちがしんけんでほれているか、真心の見せっこだわ。

首ったけという点になれば、負けやしない。あたしのは足駄をはいて、傘をさして、それでも足りなければ、屋根へだって五重の塔へだってのぼってみせてやる。

そうは思うのだけれど、そのみせてやりたい人が、あいにく向こうへとられている。

「お稲、当分小品ちゃんの見舞いは遠慮しなくちゃいけねえぜ。そんなことから大内のほうへそれが知れると、せっかくの小名木川さまの志が無になる。伊丹屋さんでさえ、用のあるときはいっさいおじさんが代理をすることになっているんだからな」

と、伯父から堅くとめられているのだ。

考えてみると、なにもかもお美代のほうへばかりつごうよくできているのだからくやしい。

——そんなはずじゃなかったんだわ。伊丹屋さんの寮を借りたら、あたしがいっしょについていって小品ちゃんのめんどうを見たり、あの人の世話をやいたりする約束だったんだもの。

それをお美代が横取りして、いやに御殿風をひけらかしながら、若さま、お目ざめでいらせられましょうかなどと、わがもの顔にいちゃいちゃとあの人の看病をしているとしたら——。

「もうあたしはがまんできない。いらせられましょうなんかに、負けていられるもんか。捨さん、すまないけれど小稲はなぐりこみをかけますからね」

小稲はとうとうやきもちの火の玉になって、その朝八幡さまのお百度をすませての帰り、永代まで行ってかごを拾い、

「若い衆さん、急病人なんだから、根岸までいそいでくださいよ。酒手ははずみますからね」

と、のっけからかご屋をあおりたててしまったのだ。

6

小稲は根岸の御行の松のそばでかごをおりた。いくら火の玉になってはいても、自分が小品のかくれ家へ万七のひもをひっぱっていくような結果になってはそれこそ申しわけがたたなくなるということぐらいはけっして忘れてはいない。

だから、かごをかえして、ゆっくり音無川にかかっている橋をわたりながら、尾行はないかとそれとなく何度もあとをふりかえってみた。

この辺は、橋をわたれば金杉村になって、いわゆる同じかきねのいく曲がりという根岸の寮地の外側になるから、あまり人通りはなく、それらしいやつがいればすぐ目につくはずだが、別にうさんくさいやつも見あたらぬ。

――まず、だいじょうぶ。

と見たから、小稲はさっさと音無川にそった道を北へのぼりはじめた。

音無川と名は一人まえだが、これは幅二間足らずの小川で、源は王子の滝から出て、飛鳥山のふもとを流れ、田端、日暮里を通って、ここから入谷のほうへ流れていく。

小稲が歩いていく道は、小川の向こうは根岸の寮のかきねつづき、それが西は上野の森から谷中へかけての丘でくぎられ、東は入谷から三河島村へかけて、たんぼのところどころに花菜畑がうらうらと明るいかげろうに燃えている。鶯谷に近い根岸はまたうぐいすの名所で、ときどき野うぐいすの声が遠くなったり近くなったりするのも、町屋住まいの小稲にはひどく珍しい。

――いきなり飛びこんでいったら、あの人どんな顔をするかしら。

梅屋敷の手前と聞いている伊丹屋の寮が近くなるにつれて、小稲は春げしきも、ひものことも、もうけろりと忘れてしまっていた。

「なにしにきたんだ」

と、あの人が聞いたら、

「看病にきたんです。あたりまえじゃありませんか」

と、あたしは平気でいってやろう。

もし、お美代が紫矢がすりかなにかで、あの人のお腰元を気どってそばについていたら、

「いろいろお世話をおかけして、ありがとうございました。この人はのんきなたちで、ちっとも人さまの迷惑なんてことは考えないんですから、あたしは苦労が絶えませんでねえ、ほんとに世間知らずで困ってしまいます。おほ、ほ」

と、わらってやるからいい。だれがなんていったって、捨さんはあたしの亭主なんだから、そのつもりでおちついていなくちゃ。ここが女一生の意地の見せどころなんだものと、いやがうえにも闘志をかりたてられてくる小稲だ。

右側にばらばらとつづいていた人家もいつかつきて、青麦畑が見えてくると、まもなく左手に梅屋敷の林が目についた。

その手前に石橋があって、正面にわらぶきの古風な門が大けやきの森につつまれている。

「ここだわ」

なぐりこみみたいなまねと、よく承知しているだけに、小稲はさすがにどきりと胸が鳴ったが、しかし、いまさらしりごみするようなそんな気の弱い女とは違う。

7

小稲は石橋をわたって、門の前に立ちながら、それでももう一度、今きた道のほうを振りかえってみるのを忘れなかった。

百姓が帰り車をひいて、のんびりと歩いているほかは、近くに人かげも見えない。いそいでくぐりへ手をかけたが、桟がおりているとみえ

て、開こうともしなかった。
やっぱり用心しているんだなと思いながら、門のわきに寮番小屋の屋根が見えるので、
「ごめんください。——こんにちは」
と、声をかけながら戸をたたいてみた。
「どなただね」
老人らしい声が、すぐにくぐりの向こうへ出てきて聞く。
「大根河岸から、佐平の使いできた者なんですけれど」
ここが伊丹屋の寮なら、それで通じるはずだと思っていると、
「そうかね、いまあけますだ」
はたして、寮番の老人は疑いもせず、くぐりをあけてくれた。
「すみません」
中へはいると、寮番小屋の前に立って、じっとこっちを見ている要吉と、ぱったり顔が合った。
「やあ、小稲ねえさんだ」
「まあ、要ちゃん、りっぱになったわねえ」
小稲はにっこりしながら、目をみはった。いつものつぎはぎだらけの半纏股引(はんてんももひ)きではなく、きちんと前掛けまでしめて、すっかりお店の小僧さん姿になっているからだ。
「大根河岸のおじさんが、こうしていなくちゃいけねえっていうんだ。しようがないや」
「そりゃそうよ。ここはお店の寮なんですもの、でも、要ちゃん、よく似合うわ」
ほんとにきりっとしたいい小僧さんだと、親身の姉のような気持ちで、しみじみとながめながら、小稲はふっと気がついて、
「じいやさん、要ちゃんたちがいろいろお世話になります」
と、すぐくぐりの桟のしまりをしている寮番のほうへ、ていねいに小腰をかがめた。
「なあに、かえってにぎやかになって、わしらよろこんでいるだ」

「小稲ねえさん、おれ今じいやさんに、うぐいすの取り方を習っていたんだ。この庭にゃずいぶんうぐいすが飛んでくるんだよ」

それに答えるように、寮番小屋の縁側のほうから、うぐいすがいい声で鳴きだす。

「要ちゃん、おまえねえさんを奥へ案内してくれるかね」

「うむ、案内します」

要吉はうれしそうに先に立つ。

「お手数をかけました」

小稲はじいやに会釈して、要吉のあとを追った。

玄関まで敷石がつづき、両側にはかきねがわりに茶の木が植わっている。どこを見てもこんもりとした深い植え込みで、なるほどこれならうぐいすもしじゅう遊びにくるだろう、まったく浮き世離れした閑寂さで、春の日ざしがしいんと膚へしみとおってくるようだ。

「要ちゃん――」

肩をならべなら小稲が呼んだ。ちょうどいいから、今のうちに聞いておきたいことがあるのだ。

8

「なあに、ねえさん」

うれしそうな要吉の顔に見あげられてみると、まさかいきなり小名木川さまがここへきているでしょうとは、いかにもやきもちを見すかされそうな気がして、小稲は口にしきれなくなってしまった。きているよとあっさり返事をされたとき、自分の血相がどんなふうに変わるか、ちょいと自信が持てないので、

「ずいぶんこの寮、広いようね」

と、心にもないほうへ逃げている。

「うむ、とても広いんだ。あの山の下まで、ずっと伊丹屋さんの庭なんだよ」

西をくぎるその丘の上は谷中で、花に間もない桜のこずえが、もう赤く色づいて見える。

「夜は寂しそうね」
「昼間だって寂しいよ。おれたいくつで困っちまった。なんにもすることがないんだろう。うぐいすだって、毎日聞いているとあきちまうしな。夜はふくろうが鳴くんだよ」
町の子はやっぱり洲崎が恋しいらしい。
「でも、お美代さんがきているんでしょう」
「うむ。小稲ねえさんだからかまわねえけど、ほんとうはそれ、だれにもないしょなんだ」
正直に声をひそめられて、小稲はどきりとする。
「お美代さん、毎日なにしているの」
「お嬢さんもたいくつしてるようだな。よくねえさんと話しこんでいるけど、ほかになんにもすることがないんだもの、琴だって毎日じゃあきちまうだろうしね。小稲ねえさんがきたっていえば、きっとみんなよろこぶよ」
「そうかしら」
小稲はなんだか急にぼかんとしてしまった。じゃ、あの人はここへもきていないのかしら。
なんだって、あたしはまた、捨さんがここへきているものと、ひとりで早がてんしてしまったんだろう。おまけにさんざんありもしないやきもちまでやいてと思うと、がっかりしたような、ほっとしたような——。
「それで、小品ちゃんはその後どうなの」
やっと今になってそんなことばが出るのだから、われながら気恥ずかしい。
「おかげさまで、ねえさんはとてもいいんです」
なにも知らない要吉は、姉のことになると、そんなおとなびた口をきく。だれにどういって感謝をしていいのか、いつも心にはあっても、ことばにするすべを知らないからだろう。
「よかったわねえ。ここへきて別に窮屈だなんてことはないんでしょ」
「ありません。ここへお店の人はだれもこないし、寮番のじいやさんと、ばあやさんと、お嬢さんについている小間使いのお時さんと、台所

のおばさんと、それだけなんです。だから、ねえさんもお嬢さんも、大根河岸のおじさんがきてくれるのを、なによりもたのしみにしているんです」

植え込みを曲がると、そこにものさびた玄関があった。

「小稲ねえさん、玄関で待っててください。おれ、こっちからねえさんに知らせてくるから」

要吉はそういって、建仁寺垣をめぐらした内庭の木戸のほうへ駆けだした。

9

——あら、あたしうっかりおみやげを忘れてきちまった。

玄関に立ってそう気がついた小稲は、思わず顔が赤くなってしまった。うっかりではなく、はじめから自分がってにやきもちの火の玉になっていて、みやげのことなどてんで考えもしなかったのだから、なお気がひける。

「おいであそばしませ」

障子があいて、そこへ三つ指をついたのは、緋鹿の子の緒をかけた結い綿に結って、黒えりのかかった黄八丈、お七帯をむすんだ目のさめるような下町娘で、面だちに見おぼえがあるからお美代にちがいない。

「まあ」

紫矢がすりの御殿ふうとばかり思ってきた小稲には、これも意外だった。

「伊丹屋の美代でございます。このたびは大根河岸のおじさんに、いろいろお世話になっておりまして」

にっこりしながら、先にあいさつをされてしまって、どうしてきょうはこうだらしがないんだろうと、小稲はわれながらじれったい。

「お美代さん、あたしを見おぼえていなさるかしら」

子どものころは同じ町内にいて、身分が違うから口こそあまりきいたことはないが、どっち

もよく顔は知りあっている。
「ええ、よくおぼえておりますの。小稲さんはあの時分から、お強かったのですもの」
親しみをこめてそういわれてみると、またしても小稲の負けだった。
「あらあら、あの時分からよく男の子を泣かしていたっていうんでしょう」
「とてもうらやましいと思ったことがございますの。——さあ、お上がりくださいませ。あちらで小品さんもお待ちかねになっていますから」
如才なく人なれた応対のうちにも、ただ口先ばかりではない、しっとりとした人がらが見うけられるのは、さすがに御殿奉公でもまれてきているせいだろうか。
「改まってお座敷より、すぐ小品さんのお居間にいたしましょうね」
「どうぞ、そうしてくださいまし」
廊下づたいに、奥の日あたりのいい小品の居間へ案内されて、小稲はまた目をみはってしまった。
「ねえさん、ようこそ」
八畳の間に床こそのべてあるが、敷居ぎわまで出て、なつかしそうに両手をついた小品は、御殿ふうな高島田に結って、紫矢がすりに黒の帯をやの字にしめ、肩のあたりまだ細々とはしているが、これはきりっとしたいいお腰元になっている。
「小品ちゃん、もうそんなまねをしてもいいようになったの」
「ええ。こちらへお世話になりましてから、おかげさまで、すっかり気分がいいものですから」
ほおを赤らめながら見上げる目に、もういっぱい涙をためている。
「でも、よく似合うこと」
はっと気がついて、つい強くなっていたことばをやわらげながら、にっこりしてみせる小稲だ。

10

「たいくつなものですから、ついおいたをいたしまして――」

お美代もそばから、わらいながら申しわけをいう。

どっちも同い年の十八、考えてみれば小品はもと侍の娘だった。ふたりで御殿の話が出て、ついそんなふうがしてみたくなったとすれば、いじらしい気がしないでもない。

「いいえ、こんな元気になってくれたのはけっこうなんですけれど、あんまり思いがけなかったもんですから――。小品ちゃん、失礼してお床へかえったほうがいいわ」

「はい。ご心配をかけてすみません」

すなおな小品は、すぐに床の上へ帰ってすわった。

「お美代さん、このたびは妙ないきさつから、小品ちゃんたちがとんだお世話をかけるようになりまして、どうぞよろしくお願いいたします」

小稲はやっと姉らしいおちつきを取りもどして、あらためてお美代の前へ両手をついた。

「いいえ、そんな気がねはなさらないでくださいませ。ほんとうはわたくし、ここへまいってはいけないと、父から再三とめられたのでございますけれど、ただ遊び相手にうかがうのだからと、むりにわがままを申しましたの。ですから、ここのご主人は小品さんだとおぼしめして、きょうはごゆっくりお話しくださいませ」

正直に打ちあけながら、どこまでも控えめなお美代だ。

「おじゃまさせてもらいますわ」

こっちも気軽にうけはしたが、まかりまちがえば、鞘当てを覚悟できた小稲だったのだから、こんなりこうな娘とけんかをして、はたして勝ちみがあったろうかと考えると、内心ほっとしながらも、なんだかため息がつきたくなる。

「小稲ねえさん、小名木川さまはその後、おか

わりもございませんでしょうか」
小品がつつましやかに聞く。
「あら、小品ちゃんはまだ知らなかったの」
うっかりいってしまってから、小稲ははっと気がついたが、もうまにあわなかった。
「まあ。では、どうかあそばしたのですか」
「あたし、悪いことをいってしまったかしら。大根河岸のおじさんは、きっと小品ちゃんに心配させたくなかったんだろうけれどねえ」
そういいながら、お美代のほうをちらっと見ると、
「聞かせてくださいませ。小名木川さまはどうあそばしたのでございましょう」
と、不安の目をあからさまに、これも大きく胸をはずませているようだ。その様子がただごとでないように見えるのは、やっぱりこっちの気のせいだろうか。
「小品ちゃんも知ってのとおり、あの人ときたら、いくらあたしが心配しても、ちっともいうことをきいてくれないんだもの、困っちまうんです」
小品をだしに、小稲はわざと一本探りを入れてみるようなことをいったが、
「どうしましょう、心配ですわ、あたくし」
お美代はういういしく両のたもとを抱きながら、それはだれが見ても恋娘の姿を、少しもかくそうとはしないのだ。

活眼

1

大内右源太が門番小屋へ出てみると、待ちかねていた万七が、
「だんな、小品のいるところがわかりやした」
と、てがら顔に目を輝かしながらいう。
「そうか」
高い日当を払って、ちゃんと急所までさしず

して張りこませてあるのだから、これはわかるのが当然なのだ。
「おまけに、お美代のいるところもわかりやしたぜ」
「ふうむ、どこからひもがついたんだ」
右源太はけっして甘い顔は見せない。
「小稲がけさつれていってくれたんでさ。昼間だし、あまのほうも用心しているときているから、ほねがおれたのなんの」
いまさらのようにわしづかみにしている手ぬぐいで、首筋の汗をふいてみせる万七だ。
「すると、お美代と小品は一つところにいるのか」
「さすがに目が高いねえ、だんなは」
「場所はどこだ」
「根岸の梅屋敷の手前の伊丹屋の寮なんでさ」
「たしかにふたりの顔を見てきたんだろうな」
「そいつがまた大ほねおりでござんしてね。さいわい庭がばかに広いもんだから、裏のかきねから忍びこんで、ちゃんと三人で話しこんでいるのを、木にのぼって見てきやした」
「寮には別に見張りのような者はおいていないのか」
「夜はどうだか知りやせんが、あっしの見たところじゃ、門番小屋に寮番の年寄り夫婦、おもやにはお美代と小品きょうだい、あとは女中が二、三人、たったそれだけのようでござんす」
「ふうむ」
伊丹屋としては少し無用心すぎるようだが、そのかわり出入りの者は厳禁して、絶対に安全と見ているのだろう。
「小名木川のほうはまだわからんか」
念のために聞いてみた。
「へえ、そっちのほうは今のところまだ――」
「そうか。その根岸の寮と、伊丹屋と、小稲を張っていれば、もうどっちかへひっかかる時分だ。今後ともゆだんなくたのむぞ」
「かしこまりやした」

「ご苦労だったな」
右源太はいくらかの駄賃を投げ出して門番小屋を出た。
これで、お美代と小品は、いつでも人質にとれる。お美代のほうは、逃亡してから急に執心しだした暴君のえさに与え、小品のほうは小名木川の下屋敷へさらって、直之助のおとりにする。
それでもなおかつ直之助が出てこないようなら、あの晩死んだか、重傷でまだ起きられないか、どっちみちこっちにとって不利なことにはならないはずだ。
仕事は早いほうがいいな。今夜決行するか。
そんなことを考えながら、むっくり御用べやへもどってくると、
「右源太、殿がまた難題を持ち出されているようだ」
と、顔を見るなり塚越が当惑の目を向けてきた。

2

「どんな難題を持ち出されましたな」
暴君がむちゃな気まぐれをいいだすことは珍しくない。ぼんくらどもはいいだされてからいつもあわてだすが、右源太はいつも斉信の気まぐれのうわてを行く思いつきを用意しているから、ほとんどてこずるようなことはない。
それに、きょうは、お美代という斉信執心のえさと、小品という小名木川のおとりが手にはいったも同然なのだから、あとは舌刀しだいで打つ手はいくらもある。
「とにかく、さっきから再三そのほうをお召しのようだから、すぐにご前へまいってくれ。平田もだいぶ困っているようだでな」
塚越老人は急にひとごとのような顔をして、右源太に弱みをつかまれない用心をする。
「承知しました。なに、殿の気まぐれは今にはじまったことではありません。さんざんだだを

こねて、お疲れになれば、ご自分から自然におとなしくなります」

右源太はわらいながら、わざと火ばちのそばへすわり、ゆっくりと一服つけだした。これは、老人からぜひたのむといわれるまでは、動かない腹だ。

「困ったものだな」

塚越は娘のことがあるから、たのむとはいいたくない。苦しげに用もない書類を取り上げて、目を遊ばせている。

「殿にはそんなに美代にご執心だったのかな」

おちつきがないらしく、ひとごとのように話しかけてきた。

「逃げられてみたら、急に惜しくなったのでしょう」

「奥で酒をのんでもつまらぬ。新吉原の酒がのんでみたいと、さっき突然いいだされたそうで、享保の昔ならともかく、いまの時勢に大名の遊里通いなど、できるはずのものではない。むりにそんなまねをとおせば、たちまちやぐら下の問題になる。つまり、美代のいない奥はつまらぬというだだなのだな」

「ほう、それはまた、妙なことを思いつかれたものですな」

諸侯の吉原通いはもう昔話のうちで、今どきそんなバカげた浪費ができる大名はないが、それだけに諸侯が堂々とくるわへ行列をたてさせた話は、豪華でなかなか魅力がある。だれからそんな話を耳にしていたか、斉信ならぜひ一度はやってみたい遊興だろう。

「気まぐれもことによりけりだからな」

「しかし、殿はやぐら下など問題になさらなくてもいいご身分なのですから、思いつかれたら、これはやってみたいでしょう」

「バカな——。そのほうまでそういう気でいては困るではないか。たとえ殿はやぐら下を問題になさらなくても、松平家としてやぐら下の支配をまぬがれぬことは、ご三家といえどもおな

じことだ。それでなくてさえ、目をつけられているご当主のことだ。これだけはどんなことがあっても、ご諫言申し上げなくてはならん」

塚越はうっかりみえをきってしまった。

「だれがそのご諫言を申し上げるのです」

右源太は澄ました顔をして、老人の急所を突く。

3

「まあ、そのほうにでも働いてもらうほか、ここはだれの手にもおえまい」

いまいましいが、塚越はついにかぶとをぬぐほかはなかった。へたに開き直って諫言などをしたところで、それはこっちが命がけになるだけのことで、すなおに取りあげてくれるような斉信ではないと、よくわかっているからだ。

「しかし、とらをしずめるには生きえさがいりますからな」

右源太がぬけぬけとした顔でいう。

「生きえさとは――」

「つまり、生きえさに逃げられたから、とっぴなことを仰せ出される。美代にかわる生きえさがあれば、すぐお気がかわります」

「そのほうに、だれか心あたりがあるのか」

「ないこともございません。一度殿がおもらしになったことがございますが、すでに婚約者があるからと、そのおりはてまえがおとめしておきました。どうもむちゃばかり仰せ出されるご当主さまですからな」

「困ったものだ」

塚越はなにげなくうけはしたが、娘田鶴のことをいっている。おれにくれなければ、生きえさにするぞとおどしているのがはっきりわかるから、内心の狼狽をかくすことができず、

「とにかく、右源太、奥へまいってみてくれ。そのほうでなくては、ここはおさまるまい」

と、とうとうおだてあげるような口ぶりになっていた。

「承知しました。まかり出てみましょう」
右源太はじゅうぶんに代償をとったと見たから、きげんよく立ち上がる。
中奥では斉信がすでに仁王立ちになっていた。
平田をはじめ、近習たちは平伏したままだれも顔をあげている者はない。
「おお、右源太か。よいところへまいった」
斉信は右源太を見るなり、自分が救われたような顔をする。さんざんだだをこねてみたものの、家来たちがどうしてもこっちの要求を入れないとなると、まさかかたっぱしから手討ちにもできず、ちょいと引っこみがつかなくなっているのだろう。
「まず、お座におつきなされませ。どうかなされたのでございますか」
右源太は微笑しながら、静かに座についた。
「いや、すわらぬぞ。右源太、ただちに供ぞろいをさせい。予は新吉原へまいるのだ」
「これはまた風流な思いつきでございますな」
「そのほうも止めるか」
「いえ、お止めはいたしませぬ。大名の吉原通い、当今はあまりはやりませんが、昔はなかなか豪華なものであったようにうかがっております」
「さようか。そのほうに供を申しつける。さっそく取り計らえ」
「承知つかまつりました。しかし、大名の吉原通いには、少しめんどうな作法がございます。くるわと申すところは、なかなかやかましいところでございますからな。おなじ風流なら、右源太にもっと御意にかないそうな思いつきがございますが、いかがでしょうな」
右源太は思わせぶりな微笑をうかべながら、斉信を見上げる。

4

「右源太、吉原より風流なところがあると申す

のか」
　斉信の好奇心が動いたようだ。もっとも、右源太の思いつきは、いつも奇抜で、たいていはずれたことがない。
「御意――」
「申してみよ」
「他聞をはばかります。お耳を拝借つかまつりたく」
「うむ」
　斉信は子どものようにどすんとすわった。
　どうやら御意がかわったようなので、平田も近習たちもほっとしたように、そろりと頭をあげたが、思いきったことの好きな悪魔が、またどんな知恵をつけるのかと思うと、まだけっして安心できないという面持ちだ。
　そんな無能な家来たちなど、かぼちゃの頭ほどにも思っていない右源太は、しり目にもかけず、すっと斉信のそば近くよる。
「根岸に梅屋敷がございます」
「うむ」
「その隣が京橋の伊丹屋の寮になっております」
「うむ」
　きらっと斉信の目が光る。
「遠乗りをなさいませ。ふいに伊丹屋の寮へ立ちより、美代に茶を一服たてさせるという趣向は、いかがでございましょう」
「いるのか、美代が」
「そこがかくれ家でございます」
「直之助もいっしょか」
「いえ、小名木川どのはまだ行くえがわかりません。おそらく、手を負ったか、水にぬれて病を発しましたか、その辺のところでございましょう」
「おもしろい。すぐに遠乗りをかけよう。したくいたせ」
　斉信はすっかり乗り気になって、いきなり立ち上がった。

まもなく、半蔵門外の松平家から、騎馬の士が十五、六騎、さっそうと春の町へ乗り出した。先頭にくつわをならべた二騎が、斉信と右源太で、一行は神田橋御門を出ると、先頭から馬にひとむちくれ、下谷のほうへほこりをまいて走りだす。

そのぎょうぎょうしいひづめの音に、行人はあわてて道の両側へ飛び散りながら、びっくりしてこの傍若無人の疾駆を見送っている。

同じ朝——。

捨三郎は親友の油屋伝次を供につれて、下谷の蘭医、伊東玄朴の玄関へ、ふらりと立っていた。

あの晩、大川へ落ちこんだ捨三郎は、まもなく伝次といっしょに元柳橋あたりの岸へあがり、近くの船宿へ寄って衣類をかわかしてもらいながら、そこへ一泊したが、かぜをひきこんで、とうとうそのままきょうまでそこで寝こんでしまったのである。

「だんな、看病人があっしじゃしようがねえ。深川へ知らせてやりやしょうか」

伝次は何度も水を向けてみたが、捨三郎はけっしてうむといわない。

一時はちょっと熱が高かったので、いっそ黙ってつれてきてしまおうか、小稲なら気がねも心配もいらない女だからと思ったこともあったが、そのうちに伝次は、妙なうわごとを耳にしてしまったのである。

5

熱が高くて伝次が一晩じゅうおきて、頭を冷やしてやっていたとき、

「菊乃、——菊乃」

捨三郎はたしかに二声ほど、そう呼んでいた。

「だんな、なんです。——だんな」

ぎくりとして、顔をのぞきこんでみたが、やや荒い息づかいをしながら、捨三郎はうつらうつらしているようだ。

寝顔ってやつは、まったく子どもっぽくなるもんだな、とそのどこか高貴な面だちをながめながら、菊乃ってのはいったいだれのことか、伝次ははじめて耳にする名まえだったので、どうも見当がつかなかった。

が、うわごとにまで呼ぶ名だから、よっぽど思いこんでいる女にちがいない。これがもし小稲とでもひとこと出たんなら、すぐに深川へ飛んでいって、あのひどく向こうっ気の強い女に随喜の涙を流させ、さっそくひっぱってきてしまうんだが、——あいにく菊乃と仰せ出されたんでは、おせっかいのしようもなかった。

それに、うわごとにまでいうような女があるんじゃ、かわいそうだが、おれがどうやきもきしたって、小稲にゃ当分お手がつかねえと伝次はがっかりもし、なんにも知らずに人前で、おくめんもなく「うちの人」を振りまわしている小稲が、急にいじらしくもなる。

「だんな、だれか看病に呼んでもらいてえひとはないんですかえ。お方さまもちゃんとご承知の親友なんだから、なにもあっしにかくすことはねえでしょう」

捨三郎が目をさましたとき、伝次はなにげなく聞いてみた。

人のうわごとや寝言に出たことを口にするもんじゃない、そのくらいのことは伝次も心得ているので、菊乃の名は出さないつもりだが、やっぱりそれが気になるのだ。

「いや、別にない。看病は親友でたくさんだ」

「とかなんとかいって、ほんとうは胸ん中に、恋しいと思うひとがあるんでしょう」

「それはないこともないな」

「だから、あっしがその人をそっと迎えに行ってこようじゃありませんか。もっとも、相手が大名の姫君かなんかじゃ、あっしの手にはちょいと負えませんがね」

「それよりもっと手に負えないところにいる女だ」

捨三郎の熱ぼったい顔に、ちらっと寂しい微笑がうかぶ。
「へえ。じゃ、公方さまの姫君ですかえ」
「油屋、わしはなにかうわごとでも申したのか」
「そいつは聞かねえことにしてあるんでさ。人の仁義だからね」
「そうか。そんなに気にしてくれなくてもいい。今、菊乃が看病しにきていた」
「そ、その菊乃でさ。どこの姫君でござんす」
「あれは心がけのやさしい女だったから、たぶん極楽にいるだろう」
「極楽――。あの、冥土の、地獄極楽の、その極楽のことですかえ」
捨三郎はうなずいてみせて、軽く目を閉じる。

6

――なあんだ、菊乃ってのはあの世の人だったのか。
だんなも罪なうわごとをいうぜと、おせっかい伝次はひそかに苦笑もし、安心もしたが、捨三郎の熱はその夜が峠で、翌日からおいおい快方へ向かったので、とうとう小稲には知らせずにしまった。
また知らせないほうが安全だったことが、その後になってわかりもした。それとなく伝次が調べまわった様子では、伊丹屋も、小稲の家も、ずっと万七の仲間の目が光っているようである。これはむろん、小名木川さまや小品きょうだい、お美代の行くえを求めている右源太の目なのだ。
「だんな、このぶんじゃうっかり深川へも足ぶみできませんぜ。小稲に用があるんなら、あっしがそっと外へ呼び出して、どこかであいびきをするほかありゃせん」
伝次が冗談のようにいってわらうと、
「あいびきはともかくとして、小稲はむしろあのとき小品につけてやったほうがよかった」
と、捨三郎は真顔で答えるのである。

「どうしてです、だんな」
「あまりいつまでも獲物が手にはいらないと、右源太は業をにやして、小稲を人質にとるようになる。また、どんなことで小稲が気まぐれを起こして、根岸の寮へひもをひっぱっていくかもしれぬしな」
「そういやそうでござんすね。あっしがひとつなんとかしてみやしょうか」
「いや、おまえのいうことはすなおに聞くまい。なかなか強情だからな。もうあしたあたりはわしも起きられそうだから、なんとか考えてみよう」
そこまでだんなが心配しているところをみると、これでまんざら脈がないこともないようだなと、伝次はいよいよおもしろくなる。
そして、けさ、五日ぶりで捨三郎といっしょに伊東玄朴の玄関をたずねたのだった。
——だんなはまったく義理が堅いや。きっとこの先生に要吉をたのんでくれようってんだな。
いまさらのように伝次はそう気がついて、じいんと胸が熱くなる。
玄朴は高野長英などとともにオランダのシーボルトから長崎で西洋医学の教えをうけた高弟で、馬喰の小せがれから身を立てた苦学力行の人、江戸では下町派の総帥と立てられ鍋島侯の扶持をうけて、はじめて日本へ種痘を入れた恩人だった。
捨三郎は小名木川へ隠居してから、毎月一度ずつ屋敷へ招いて、しばらく蘭学の手ほどきをうけたことがあるが、非常に覇気のある人で、「語学というものは、そのほうの天分がないと、なかなか上達するものではありません。あなたさまは大名育ちとしては、珍しくご気性のすぐれたかただが、語学のほうはあまり筋がないようだ。別にどうでも蘭学をやらなければ身がたたぬというおかたではなし、西洋の知識がほしいのでしたら、いつでもてまえが翻訳してさし

あげますから、むだな苦労はおやめになってはいかがです」

と、とうとう語学のほうははっきりとあいそをつかされてしまった。

7

語学のほうを見かぎられたとなると、患家の多い多忙な公人を、そう毎月招くということは玄朴の迷惑にもなることなので、その後は会う機会こそまれであったが、医者としても人物としても、玄朴は当代師とするに足る活眼の人として、捨三郎はずっと師礼をとってきた。その意味でも、小名木川の屋敷を出てから、ぜひ一度たずねたいと思っていたのだ。

「これはこれは、ようこそおたずねくだされた」

十畳と八畳の書斎へ招じてくれた玄朴は、総髪、赭顔、いつもの白綸子に道服のようなものをきて、きのう別れたばかりの人のように心やすく迎えてくれた。

「突然じゃまをします。先生はますますご隆盛で、かげながらいつもよろこんでいました」

「あなたさまは、こんど屋敷を出られたそうですな」

玄朴の鋭い目が、いくぶんとがめたてるように、じっと相手を見まもりながら微笑して、

「顔色がさえない。おかぜですか」

すかさずもう医者になっている。

「がらにもなく、二、三日寝こみました。なに、だいじょうぶです」

「どれ――」

ずっと進んで、脈をとり、

「舌を拝見」

という。

「よろしい。診察には及ばないようですな」

「ありがとう」

「そう申せば、菊乃どのにはおきのどくなことをしました。あなたさまもさぞおつらかったでしょう。慎んで玄朴、哀悼の意を表します」

玄朴はちょっと黙禱するような形をとる。

ふいだったので、捨三郎は返事が出るまえにじいんと胸へこたえ、あやうく涙が出そうになった。自分がこの人にオランダ語の手ほどきをうける間じゅう、そばに控えて、じっと耳をかたむけていた菊乃の姿が、ありありとまぶたにうかぶ。

気軽な先生は、ついでによく菊乃にもいっしょに発音をさせたものであった。思えば忘れがたい情景である。

先生の口から、なにかそんなつかしい思い出でも出るかと思ったら、

「あなたさまのこのたびの家出は、それが原因なのですか」

意外にも、またしても急所を突かれてしまった。

「目的は別にあります」

捨三郎はとっさに冷静さを取りもどして答えた。

「目的といいますと――」

玄朴は科学者だから、けっして歯に衣はきせない。

「先生は、菊乃の自害の理由をご存じだろうか」

捨三郎はすわりなおした。尊敬する師匠だから、ここではなにも隠すまい。赤裸な人間になって、人間としての生きる道を教えてもらいたい。一つにはそれがあるから、きょう玄朴をたずねてきたのであった。

8

「あなたさまが、百日のあいだ仏間にこもられたとうかがって、ほぼ想像はつきました。自害せずにはいられなかったあのかたのいじらしい心根も、百日のあいだ身をもって供養なされたあなたさまの深い愛情も、玄朴は胸に痛いほど美しいものだと感じていました」

鋭い玄朴の目がうるんできたかにも見える。しかし、感情の涙をめったにまぶたの外へ漏ら

すような意志の弱い人ではない。
「直之助は百日の間、ただいじらしい者のために供養したのではありませんでした。むしろ、自分を苦しみ抜いたのです」
こんどは捨三郎のほうが、かえって感情に誘われようとしない冷静な人になってみえた。
「どうすればいじらしい人の魂が救われるかから、始まりましたかな」
「われ人共に、こういう悲惨事は絶対に許せないと憤り抜きました」
「憤りの目から見たら、いまの世の中は矛盾だらけでしょうからな」
「その矛盾を自分の力のあたうかぎり訂正してやらなければならぬ。と自分の知恵だけに、やっと気がついたので、まず小名木川無宿の捨三郎になりました」
「よこしまなるものを切るためにですか」
「そうです」
「邪なる大名を切りますか」
「切ります」
「邪なる老中を切りますか」
「必要があれば切ります」
「政事が切れますか」
「切れると思う」
「切られたら、どうなさる」
「たとえ路傍にもせよ、牢内にもせよ、松平直之助が切られて死んだというそのことが、天下の識者に政事の矛盾を少しでも感じさせれば、それで本望だと思う。小名木川無宿の直之助が、だれにも他人に迷惑をかけず、ひとりの力でできることはまずその辺のところでしょう。気宇が小さいと、先生はわらわれますか」
正直にいって、直之助は菊乃の死に無常を感じ、何度かあとを追いたいと思った。ただ、死ぬには憤りがありすぎる。斉信だけは一藩のためにも討っておきたいと考えた。
が、私憤のために死ぬのは小さい。大なり小なり将軍政事の犠牲にされて、自分とおなじ境

遇におかれ、世を憤っている者が何人かあるはずだ。どうせ死を賭するなら、公憤のために死ぬべきだと気がついた。そして、一度死を賭したからには、自分の力で及ぶ範囲の藩政改革をやってからだと、最後の腹がきまったのである。

ただ、そのために人を道づれにしたくはない。あくまでも他人に迷惑はかけず、自分ひとりの力で実行しようと決心している。

「独力であそばそうというお考えは、失礼ながら大名育ちのあなたさまとしては、よくそこへ決断がつかれましたな」

玄朴は明るい顔をして微笑する。

「つまり、そのための小名木川無宿というお心なのですな」

9

「てまえは医者ですから、医者の立場から少し愚見を申し上げてみましょう」

玄朴はそれが癖のように、左手を軽く火おけのふちへおきながら、改めて切り出した。

「医者というものは、どんなに命数のつきかけた重病人に対しても、その人間の命を寸刻でも長く守ってやるために、常にあらゆる努力をして、病と戦っているのです。人の命というものは、それほどたいせつにしなければならないものだと思います。そういうたいせつな人の命を、一方では大名が平気で手討ちにしたり、武士が無礼討ちにしたりしている。だれが大名や武士に、そんな特権を与えたのでしょうな」

「与えられたのではなくて、わしは、手討ちや無礼討ちは大名や武士の最も憎むべきわがままだと思う」

捨三郎は胸の底にたぎっている憤懣を、ちらっとのぞかせる。

「さよう。たしかに憎むべきわがままですな。しかし、そのわがままがともかくもみとめられているというところに、世の中の大きな矛盾がある。もう一歩突っこんで申せば、大名の家に

生まれたから大名で、馬喰のせがれに生まれた者は馬喰だと、はじめからきまっているところに、不自然が生じるのです。医者の目から見れば、大名であろうと、こじきであろうと、人間のからだと命には少しも変わりはない。つまり、人間そのものに貴賤があるのではなく、その人間に備わっている人格と見識とに貴賤が生じてくる。あなたさまは、そこへお気づかれたから、小名木川無宿になられた、玄朴はかように見ます。いかがですな」

「それは少し先生の過賞のようです。わしはただ女敵を討つような人間にはなりたくなかった」

捨三郎は正直に赤面する。

「いや、けっこうです。大名育ちのあなたさまがそこへ気がつかれる、ただ気がついたばかりでなく、大名であるよりも、ひとりの人間として生きがいを見いだすために、敢然と小名木川無宿を選ばれた、おせじではないが、玄朴は語るに足るよき心の友がひとりふえたような気がします」

そういう玄朴の目は、この若き受難者をいたわり励ますといったあたたかさを、深沈とたたえているようだ。

「それでは、先生は直之助のとった道を是とみとめてくれますか」

「みとめましょう。玄朴がいちばんうれしいのは、あなたさまが他人に迷惑をかけずに、身をもって藩政なり老中政事なりを啓蒙しようとしているすなおさだ。由来、革命家というものは、とかく自説を人にしいて、徒党を作りたがる。また、そうしなければ革命などということはできるものではありませんが、わしはそういう血をもってする革命より、進歩的な人間がそれぞれの人格をもって集まり、おたがいに啓蒙しあって、徐々に世の中を改革していく、消極的なきらいはあるが、そのほうをとります。血を流すということは、医者の立場からも、絶対に賛

成できません」

冷静な玄朴の視線に会って、捨三郎ははっと胸にこたえるものがある。自分はすでに四人の人命を奪っているからだ。

10

「ときに、先生、命数があるものかないものか、世の中の矛盾にしいたげられて、労咳にあえいでいるきのどくな娘がいるのですが、一度ご診察を願えまいか」

捨三郎はあらためてたのみこんだ。

「労咳な」

玄朴は太いまゆをひそめて、

「あれは病のうちでも、いちばんたちの悪い暴君のようなものです。娘がこの暴君に見こまれると、けっきょくは命取りでしょうな」

と、はっきりいう。

「実は、松木要左衛門の娘だが、先生は松木という名をご記憶であろうか」

斉信が要左衛門を手討ちにした事件は、ちょうど直之助が蘭学を始めたころのことだった。

今どきまだそんな野蛮なことが平気で行なわれるのでしょうかな。もっとも、自分の無知をたなにあげて、外国のことを日本に紹介して愚民を惑わすのはけしからんと、有能の先覚者たちを堂々と牢屋へ打ちこむお国がらですからな、と、そのとき玄朴は皮肉をいっていた。田原の渡辺崋山が『慎機論』を、蘭医高野長英が『夢物語』を書いて、共に罪を得た当時だったからである。

「おぼえています。お手討ちにあったかたですな」

「そうです。大名育ちのうかつさで、その遺族の者がどうなったか、ついうっかりしていたが、姉の小品という十八になる娘が、深川で芸者になり、無理がたたって労咳に倒れているのと、このほど偶然対面しました」

「ほう、奇遇ですな。そうですかがいましてはな

おさらのこと、病のほうの暴君と戦うのは玄朴の天職だ。いかにも投薬いたしましょう」
「弟を要吉と申して、十四になるが、この者がなかなか不敵なことをいいます」
「かたきを討たせとでもいいますか」
「侍は大きらいだと放言します」
「なるほど」
「忠義をつくして、手討ちになるなどと、バカな話だ。小名木川もその後なんのあいさつもない。侍は義理知らずだと、大憤慨です」
「これはなかなかおもしろい」
「なんになりたいかと聞くと、天下の名医になって、難病で苦しんでいる者を直してやりたい。これがおれのかたき討ちだという。姉の病苦を見て、ついにそこへ思いいたったのでしょう。大名育ちは、そこでも大いに啓蒙されました」
「なにかくやしいことがないと、人間は発奮しにくいものです」
「先生ご薫陶願いたいのですが、おあずかりくださるまいか」
「売りこみましたな。無宿になられてから、あなたさまもすみにおけなくなったようです」
玄朴は、あは、は、と笑って、
「よろしい、おあずかりいたしましょう。ものになるかならぬは当人しだいだが、とにかくよこしてごらんなさい」
と、こころよく引き受けてくれた。
厚く礼をのべ、小品を根岸の寮へ見舞ってくれるのはきょうの夕がたと約束を得て、捨三郎が玄朴の書斎を辞したのはやがて昼に近いころであった。

花にあらし

1

小稲がまたくるからと、根岸の伊丹屋の寮を辞したのは昼さがりのころであった。

「要ちゃん、かごのあるところまで、小稲ねえさんをお送りしてね」
小品がなごり惜しそうにいいつける。
「はい」
要吉は庭からぞうりを突っかけて、すぐ玄関へまわっていった。
「小稲さん、ほんとにまたどうぞお遊びにいらしてくださいませ」
小品といっしょに玄関まで送って出た美代が、おせじばかりでなく、心からいって、あらためてそこへ両手をついた。
どうにも憎めない娘である。
「ねえさん、どうぞからだに気をつけてくださいまし」
小品が心配するのは、身辺に気をつけろという意味だろう。
「おまえさんも、あんまり軽はずみをしないで、かぜをひかないようにしなくちゃだめですよ」
「ええ、こんどお目にかかるときには、きっともっとよくなっていますわ」
にっこりわらってみせた目が、かえって寂しく見えたのは、とうてい不治と心では悟りきっているせいなのだろうか。
「では、さようなら」
「さようなら」
ふたりの声を背に、門のほうへ歩きだした小稲は、なぜか心が浮かなかった。
「ご苦労さまだわね、要ちゃん」
並んで歩く要吉に声をかけたのも、われながら半分はうわの空だった。
とうとうあの人はここにもいなかった、そう思ってがっかりしているのと、ふたりを相手に、あの人が大川に落ちたまでのことを、知っているかぎり話してやりながら、ふたりがどんな目をしていたか小稲は敏感に見てとってしまったのだ。
——小品ちゃんもあの人を思っている。
隠そう隠そうとしながら、あの人が大川へ落

ちたっきり、いまだに行くえが知れないといったとき、ちらっと火のような目になって、じっとうなだれていた。それはあのおとなしいひとに似合わない、世にも激しい憤りの目だった。

その憤りが消えたとき、いつもの沈んだ目にかえって、それはあの人にもしものことがあったら、もう生きていたってつまらない、ひそかにそう思いつめてしまったように、しじゅうぼんやりとうわの空になっているときのほうが多いようだった。

しかし、小品のはからだがからだだけに、けっしてあの人をどうしようというのではなく、夢のようにおもかげを胸にいだいている。ただそれだけのようだ。いじらしいとは思うが、けっして恋がたきだとは思えない。

ところが、美代のほうはそうではなかった。

「どうしましょう、わたくし。もし小名木川さまに万一のことがあったら、美代は尼になります。もう世の中はつまりませんもの」

はっきりと意思表示をして挑戦してきたのだ。

「あら、尼だなんて、お美代さんはあの人になんかそんなわけがおありになるんですか」

小稲はわざとあけすけに聞いてやった。

2

「小稲さんは、小名木川の奥さまのことご存じですか」

美代はうっとりとした目をみはって、妙なことをいいだすのである。

「奥さま――」

そんなことは考えてもみなかったことだから、小稲はぎくりとなる。

「若さまには小名木川のお下屋敷に、菊乃さまとおっしゃる、それはお美しい奥さまがおありになりました」

「まあ」

小稲は二の句がつげない。

小品もひそかにびっくりしているようだ。

「もと浜町のお方さまづきのお腰元でしたのを、小名木川さまがご懇望なされたのでございますって。ですから、ほんとうはお側妾なのですけれど、小名木川さまは奥方をお持ちにはなりません。菊乃さまのほかに、おめかけもお持ちになりません。わたくしどもはご当主さまのご乱行をよく存じていますから、菊乃さまのことをみんなで奥さまと呼んで、とてもうらやましがったものでございます」

「あの人、そんなに菊乃さんてひとをかわいがったんですか」

なんだかおもしろくないから、小稲はつい荒っぽいことばづかいになる。

「ご不遇な小名木川さまは、この世のよろこびも悲しみも、菊乃さまとおわかちになる、下世話に申しますと、子どものように甘ったれていることもある、失礼ですけれど、そのような二本棒、好きになれないと、——ほ、ほ、奥では女どうしがずいぶん思いきったお話になることもあるものですから、そういう組もございましたけれど」

美代はほんのりとほおをそめてわらった。

この娘は、上品なような、あけすけなような、天真らんまんとでもいうか、小稲にはどうも判断がつかないところがある。

「菊乃さまがまた、小名木川さまの御意しだいで、遊女のまねまでよろこんでして遊んでいたと、これは陰口でしょうけれど、——でも、悪くいうひとたちでさえ、内心はみんな小名木川さまに片思いをよせていたのはほんとうです。それは女ですものねえ、だれだって菊乃さまのようにかわいがられたい、それも小名木川さまに、と思うのはあたりまえですわ」

「そんなに思いあっていたのに、どうしてあの人、その菊乃さんをすてて、お屋敷を出たんです」

小稲はもう多少中っ腹だった。

「あら、気の早い小稲さん。その菊乃さまがおなくなりになったから、いいえ、ほんとうは自害なすったから、小名木川さまはお家出をあそばされたのですわ」

「えっ、自害――」

「これはほんとうにここだけのお話ですけれど、菊乃さまがお方さまにお茶の席へ招かれたとき、ご当主さまがふいに押しかけて、手ごめになすったのですって。菊乃さまはその申しわけのため、その場で自害と思ったのですけれど、それではご恩をうけたお方さまに迷惑がかかる。それで、小名木川へ帰ると、若さまの顔を見ず、そのままお居間へこもって、自害をなすったのですって」

美代の目にたちまち露のような涙があふれてきた。

3

小稲も小品も、はじめて聞く菊乃の痛ましい死に、思わず女らしい涙を誘われ、それがやがておもいおもいの憤りに変わってきた。

そして、小名木川さまは百日のあいだ仏間にこもり、愛人の供養をすませてから、屋敷を出たのだとわかると、その目的はなんだろうと、また考えさせられずにはいなかった。

それとは別に、小稲はふっと思い当たったことがあった。

「じゃ、お美代さんは、座敷牢へ入れられてまで、ご当主さまの御意にしたがいたくなかったのは、ただいやだではなかったんですね」

「ええ、女というものは、一度このおかたと尊敬して、思いつめていると、いつかその人が、心の中で恋人になってしまうものではないでしょうか。わたくしはお手討ちにあってもかまわない、いっそ片思いのまま、あのおかたのおもかげを夢にいだいて、菊乃さまのように死のうと、考えていました。そのくせ、おかしいのでございますよ、ことによると、あのかたが助け

にきてくださるのではないか、いいえ、助けにきてくれたら、どんなにうれしいだろうと、そんな夢のようなことばかり考えていたのです」

美代がまたしてもうっとりとした目になってくるのを見て、——なんだって、あたしは、あんなつまらないことを聞いてしまったんだろうと、小稲は腹がたってきた。

が、いまさら、もうそんな話はたくさん、とはいいかねる。

「小名木川さまは、美代というものをご存じのはずはないのですし、そのおかたに助けられるなんて、そんなことはあるはずもないのに、座敷牢に入れられている間じゅう、わたくしはそういう夢ばかり見ていました。そして、一方では、なんというかわいそうな恋娘だろうと、自分がいじらしくて、さめざめと泣いたこともございますの。ですから、先夜その小名木川さまに、ふいに助け出されたときのうれしさ、ほんとうに、わたくし、夢ではないかと、ぼうっとしてしまって——」

ぱっと目を輝かしながら、美代は胸にたぎるよろこびと、激しい思慕の感情を、あいかわらずちっともかくそうとしない。

「夢に思いがかよったとでもいうか、深い宿縁だと、今でも、わたくし、そう信していますの。ですから、小名木川さまのお心はどうあろうとも、美代の心はちゃんときまっています。そのおかたが、もしこの世にないというのでしたら、もう世の中などつまらない、尼になるほかはございませんわ」

美代には確固たる信念があるようだ。おおげさにいえば、たとえきらわれても、小名木川さまのほかに男はないときめ、いっしょになれなければ、一生ひとりでこの世を送ろうと考えているらしい。

——おきのどくさまみたいなもんだわ。だれがどう騒いだって、あたしはだれにも捨さんは渡しませんからね。まあ、一生おひとりで夢と

遊んでおいでなさいませ。
小稲は胸の中で、そうぽんと相手を突っ放してやりながら、しかし、いい知れぬ不安に襲われてくるのである。

4

——あの人を美代に近づけては危険だ。
小稲はどう考えても、そんな気がする。
あの美代のむじゃきで大胆な情熱が恐ろしい。器量からいっても、人がらからいっても、菊乃を失ったあの人が、どっちを取るといえば、美代のほうへ気持ちがうごくのではないだろうか。
負けるものかと思っても、自分にあるものは、ただこのからだを投げ出して捨て身でかかる意地と真心だけなのだ。なんだか心細い。だから、気がめいる。
「小稲ねえさん、小名木川さまは、ほんとにどうしちまったんだろうね」
ふっと、要吉が、とても心配そうにいいだした。浮き世離れのした伊丹屋の寮を出て、もう御行の松に近いあたりである。黙って並んで歩いていた要吉は、その間じゅうそのことばかり考えていたのだろう。
「だいじょうぶよ。あの人は強いんだもの、いまにきっと、どっかからふらりと出てくるわ」
小稲はわざと明るく答えた。理屈ではなく、あくまでもそう信じていたい小稲なのだ。
「おれもそう思うんだ。あんなりこうな殿さまが、むやみに死んでたまるもんか」
「そうよ。死にゃしないわ」
「殿さまはどこかへかくれて、右源太のやつをふいにぎゅってめにあわせてやる計略を考えているのさ」
「そうねえ」
「ただ、おれ、心配なのは、大内には子分がたくさんついているし、殿さまのほうは油屋のおじさんひとりっきりだからね」

「要ちゃんだって、あの人の味方でしょ」
「うむ。けど、おれはまだ子どもだからね。なんの足しにもならないや」
　要吉はいかにもくやしそうである。
「いいのよ、要ちゃん。あんたはそんなこと心配しないで、早く天下の名医になればいいんです」
「おれ、考えているんだ」
「なにをさ」
「おれ、小名木川さまの家来になれるんなら、侍になってもいいんだ」
　相談するようにいって、恥ずかしそうに顔を赤くしている。なんとかして恩返しをしなければと、しじゅうそんなことを考えているのだろう。
「だって、あの人小名木川無宿になってしまったんだもの、家来なんて養っていけないんじゃないかしら」
「養ってもらわなくったって、食うぐらい、おれ、なんでもできるよ。小稲ねえさんから一度、殿さまに聞いてみてくれないかなあ」
「そうねえ」
　この子は自分をたよりにしている。そして、この子の目から見れば、あたしがいちばんあの人に近く見えるのではないかしら。そう思ったとたん、小稲は急にうれしくなってしまった。
「いいわ。一度あたしから、よくあの人に相談してみます。要ちゃんの一生のことなんですものね」
　思わず愛情をこめて、要吉の手をとったとき、ぱかッ、ぱかッと、もののしいひづめが近づき、遠乗りの騎馬の先頭が、御行の松の前の石橋をわたってきた。

5

　先頭に並ぶ二騎のひとりのほうの陣笠に、金紋がまぶしく輝いているのを見て、ちょうどとびとびにある家と家との間の花菜畑のふちだっ

たので、小稲は要吉の手を取りながら、いそいでその畑道へ身をよけた。

「あっ、大内だ、小稲ねえさん」

黄一色がむせるように明るい花の中へうずくまりながら、要吉があわただしく教える。

「えっ」

ぎくりとして、うわ目づかいにそっと目をあげると、並み足でもう間近に迫った二騎のうちの一騎、普通の陣笠をかぶったほうが、じっとこっちを見ているのと、ばったり視線が出あった。

たしかに大内右源太である。

すると、並んでいく金紋の貴公子は、たびたび話に出た斉信侯にちがいない。小稲があっけにとられているうちに、二つの白面の鬼のような顔は、ぱかッ、ぱかッとひづめの音をひびかせながら、前を通りすぎた。

つづいて供侍の十四、五騎、白いほこりを春風に舞いあがらせて、ずんずん梅屋敷のほうへ去っていく。

「どこへ行くんだろう」

待ちかねたように立ち上がって、その行く手をにらんでいる要吉はまっさおだ。

「まさか、まさか、寮を知ってるはずはないもの。だいじょうぶよ、要ちゃん」

だが、万一寮を襲うのだとしたら、男は寮番のじいやひとりきり、美代と小品はどうなるのだろうと思うと、小稲は胴ぶるいが出てきた。

あいにく、道は小川にそって、ゆるく西へ曲がっていくので、先頭はすでに森のかげで見えない。

「おれ、小稲ねえさん、そっと行って、見てくる」

「そうね、あたしも行くわ」

あの森のあたりまで引きかえせば、寮の石橋が見とおせるかもしれない。小稲と要吉は、花菜畑から道へ走り出ようとして、御行の松のほうからしりっぱしょりで走ってきた男と、ぱっ

たり顔があった。
「あっ」
滝田屋の万七だ。
「なんだ、ばかに小意気なねえさんがいると思ったら、小稲じゃねえか。いま帰りか」
万七は立ち止まって、にやりと笑った。
「いま帰りかって、じゃ、おまえ――」
たちまち聞きとがめる小稲だ。
「こいつあいけねえ。あわ、わ」
あわてて手で口をたたいてみせたが、
「わかっちまったんじゃしようがねえな。悪く思わねえでくんな。おれはけさから、おまえのしりを追っていたのさ」
と、万七は勝ち誇った顔だ。
「じゃ、今の、今の行列は――」
「おれもついそこで追い越されてね、こいつはまたばかに気の早い殿さまだと、実はびっくりしちまったのよ」
小稲は二の句が告げない。やっぱり、今の騎馬は寮を襲ったのだ。しかも、それを教えたのは自分なのである。
「いいじゃねえか、そんなこわい顔をしなくったって。殿さまは、別におまえをどうしようってんじゃねえ。お美代さえつれて帰りゃご満足あそばすんだろうからね」
万七はそんな人を食ったことをいう。

6

「悪党――」
歯をくいしばっていた要吉が、いきなり万七にむしゃぶりついていった。
「いてえッ、餓鬼」
どこかへかみつかれたらしく、万七は悲鳴をあげてたじたじとなったが、
「このちくしょう、なにをしやがる」
たちまち立ち直って、横っつらを張り飛ばし、おとなの力だから、あっとひるむところを、腰車にかけて、どさっと花畑の中へ力いっぱい投

げ飛ばした。

——もうかんべんできない。殺してやる。

小稲は目を血走らせながら、すばやく髪の銀かんざしを抜いてさか手につかみ、ぐいと万七の前へ立ちはだかった。自分も生きようとは思わない死にもの狂いだから、まっさおな顔が狂人のように引きつって、——その気魄に、さすがの万七もはっとうろたえた。

「よせやい。つまらねえまねをすると、ただはおかねえぞ」

力ずくで女などに負けようとは思わない。が、へたをやるとけがをしそうだし、白昼往来で匕首も抜きたくない。万七はじりじりとあとへさがりながら、どうしてくれようかと、とっさに思案がつきかねる。

そのころ——。

騎馬の行列は伊丹屋の寮の門前に止まって、いっせいに馬からおりていた。右源太が石橋をわたって進み、

「門番、門番、尊きおかたさまが茶を一つ所望あそばす。失礼のなきよう、開門せよ」

と、内へ声をかけたが、なんの返事もない。

「かまわぬ。だれか門を破れ」

むちを手にいらいらしていた斉信が、待ちかねて近習のほうを振りかえった。

「はっ」

ひとりが言下に駆けつけて、門のわきのへいへ飛びつき、乗り越えて、中へ消えたと思うと、すぐに門扉が八文字にひらいた。

右源太の先導で、斉信は近習四、五人をしたがえ、大またに奥へ進む。

右源太はわざと玄関にかからず、目についた木戸からいきなり内庭へ押し入った。飛び石づたいに進むと、泉水を前にした風雅な座敷の廊下のほとりへ出たが、白々と障子をたてきって、どこにも人のけはいはない。

「これ、だれかおらぬか」

右源太は廊下の前へ立って、大声に呼んでみ

た。

森閑として、だれも返事をせぬ。

「たのうむ。だれもおらぬのか」

逃げ出すすきはないはずだから、おそらくみんなどこかにひとかたまりになってふるえているのだろう。どうしても返事をしなければ、押しあがって家捜しをしてやるばかりだ。それもまたおもしろかろうと、内心ほくそえんでいる右源太だ。

「たのうむ。——たのうむ」

三度大声をあげたとき、

「はい」

すぐ目の前の障子があいて、静かに廊下へすべり出したのは、意外にも腰元姿の小品である。ついおとなげなくもわめきたてた右源太は、ちょいと肩すかしをくわされたのだ。

7

「小品、小品だな」

右源太はすぐ横柄さを取りもどした。

「はい」

小品は両手をつかえたまま、からだじゅうを堅くしているようである。

それにしても、腰元姿とは思いがけない。病にさいなまれて、細いからだではあるが、冷たいまでに青白いえり足、透きとおるような美貌に、またいいがたい一種のおちついたなまめかしさがにおうのは、十八という年の若さからだろうか。

突っ立っている斉信の目も、やや離れてひざまずいている近習たちの目も、みな白々とした小品に集まっている。

「殿さま、遠乗りの途中のお成りである。美代に茶を一服たてるよう、そうそういいつけなさい」

右源太はあくまで有無をいわせない高飛車だ。

「おことばでございますが、お美代さまはここ

におりませぬ」
　小品は顔をあげずに、静かに答えた。
「おらん――。偽りを申すな。ふいのお成りゆえ、そう改まった遠慮はいらん。気やすくまかり出るように申しつけなさい」
「いいえ、ここはわたしの療養の家、お美代さまはおりませぬ」
「黙れ。ここに美代がいると、たしかに告げる者があったから、殿にはわざわざお成りあそばしたのだ。隠してはかえって悪い。既往のことはおとがめあそばさぬにより、安心するようにと申すがよい」
　声をやわらげてみる右源太だ。
「お美代さまのことは、わたし、よく存じあげませぬ。ここはわたしが療養のために貸していただいている寮でございます。どうぞお引き取りくださいませ」
　小品は冷静そのもののような返事だ。
「御前であるぞ、小品。しかとそれに相違ないか」
「はい」
「面をあげてみよ」
　右源太はいたけだかにならざるをえなかった。
　小品はいわれるとおり顔をあげて、恐れげもなく右源太を見る。深く澄んだまなざしで、しかもその底に必死なものをたたえているようだ。
「そのほうがあくまでも強情を張ると、家捜しをいたすぞ。それでもよいか」
「ここはわたしの借りております家でございます。そのような無法をあそばしては、迷惑いたします」
「なにッ」
「どうぞお引き取りを願います」
　小品はあきらかに無礼とがめをしているのだ。
「黙れッ。そのほうはここにおいであそばすお

かたさまを、どなたさまと心得ているのか」
「存じあげませぬ」
斉信のほうははじめから見向こうともしない小品なのだ。
「右源太、その者は何者だ」
斉信の顔に、いらいらと怒りの色がこみあげてきたようだ。

8

「これは先年お手討ちにあいなりました松木要左衛門の娘小品めにございます」
答える右源太の目にも、小生意気なといいたげな色がある。
「なに、要左衛門の娘か」
斉信はちょっと意外という顔をしたが、
「かまわぬ。右源太、家捜しをしてみよ」
と、過去の暴逆などいっこうに気にもとめていない冷酷なつら魂だ。
「乱暴はお控え願わしゅう存じます」
きっぱりといって、小品はそこへ両手をついた。
貴人に対してはずいぶん思いきったことばで、女の口からまだ一度もそんな拒絶を聞いたことのない斉信だから、
「なにッ」
と、にらみつけたが、たちまち激怒がこみあげてきたらしい。
さすがに一同がはっと息をのんだとき、つかつかと小品のいる縁近くへ進んだ斉信は、
「おのれ、そちも予の手討ちになりたいか」
びしりっと手にしていたむちが、小品の細い肩から背中へ、力いっぱい鳴った。
一度はびくっとなったが、覚悟のまえの小品は、歯をくいしばって火のような激痛をこらえ、その姿がどう見てもからだじゅうで暴君に反抗しているとしか思えない。
「うぬ、憎いやつ」
斉信のむちがふたたび鋭い音をたてた。

それでなくてさえ病弱な小品の背は、裂けて血を吹いたのではあるまいか。気が遠くなりかけるのを、必死に耐えて、うめき声ももらさなければ、身じろぎひとつしない。このからだのどこにそんな気魄が残っているのかと思われるほど、それはすさまじい無言の反抗である。

「おのれ、まだ立たぬか」

三たび斉信がむちを振りあげた。

右源太のほかは、もうだれもそっちを見ている者はない。

「斉信どの、お気晴らしですか」

そのむちが振りおろされる寸前、背後から静かに声をかけた者があった。

「だれだ」

きっと振りかえった目に、いつの間にきたか、捨三郎の直之助が、ふらりとそこに立って冷笑している。

右源太の目が急に険しくなり、斉信は、

「おお」

と、にらんだまま棒立ちになる。

「地獄では、鬼がよく鉄棒で亡者どもを追いながら、気晴らしをするそうですな」

「無礼だぞ、直之助」

しかし、捨三郎はもう斉信に取りあわず、

「右源太、花盗人は風流のうちと申すが、これは少し無風流にすぎるようだ。やはり、そのほうがしくんだ茶番狂言か」

と、右源太のほうへ嘲笑の目を向ける。

「風流と無風流にかかわらず、御意にそむく者はなんびとたりと、ご主君のむちはまぬがれません。自業自得でございましょうな」

けろりとして、斉信をけしかけるような放言をする右源太だ。

9

「その御意にも自業自得の因果があることを、おろかなそのほうどもはまだ気がつかぬとみえる」

捨三郎は斉信をもふくめて、一段高いところからものをいう。くそっと右源太は反発して、
「おろかな御意とおおせられるのですか」
と、わざと念を押しながら、斉信の顔色をうかがう。
暴君が憤慨して、ここで切れという御意になれば、ひとりに六人、しかもこっちはご馬前のご奉公なのだから、一挙にじゃま者が葬れると、ひそかに期待しているのだ。
「たとえ大名たりとも、みだりに他人の屋敷へ押し入って、安寧を乱すものではない。自慢にもならぬおろかなど売り物にせずに、早く引きとりなさい」
「これは異なことを申される。伊丹屋の美代儀は、まだ松平家からお暇は出ておりません。さすれば当家の召し使い、その召し使いにふつごうのかどがあって取り調べにまいったに、他人の屋敷呼ばわりはちと見当違いでございましょう。申さば、あなたさまこそ他人のことによけいな世話をやかれるおせっかい者。そうそうにお引きとりあってしかるべきだと思います」
負けてはいない右源太だ。
よくぞ申した、といわぬばかりに、暴君はうなずいている。
「美代は当家におらぬと、小品は申していたようだな」
「おるおらぬは家捜しをしてみねばわかりません」
「そのほうどもは、それほどまでにして、たかが召し使いの腰元ひとりのふつごうを取り調べなければならぬか。松平家十万石の家中は、よほど暇人がそろっているとみえる」
「それこそ他人のこと、よけいなおせっかいでございましょう」
「見苦しいぞ、右源太。罪もなき者をみだりにむち打っておれば、路傍の人といえども黙視はできぬ。そのほうどもは、おのれのおろかのみか、主人の愚を天下にさらしているとは気づか

ぬのか」
「あなたさまはご前もはばからず、ご当主さまを天下の愚と面罵なさるのでございますか」
「こざかしい口をきく、天下の賢人が力なき女こどもにむざんなむちをふるうか。それを当然と見ているそのほうこそ、人間の皮をかぶった鬼畜外道、白昼人前へ姿をあらわすがらではない。さがれ、さがれ」
「殿に対して、申されたな」
右源太は刀の柄に手をかけて、御意を待つ。
「殿とはだれのことをいうのだ。そこにむちを持っている鬼のことか」
捨三郎がすかさず痛罵する。
「おのれ、予に対して、——無礼者」
こんな面罵をうけたのは生まれてはじめてのことだから、斉信の激怒は頂点で爆発した。
切れっと、家来どもにいいつけるのももどかしく、まっさおになって、いきなり佩刀を引き抜き、みずから手討ちに出た。

10

実は、その手討ちにくるのを、ひそかに待っていた捨三郎である。
おそらく、これまで、自分に手向かいする者など、ただのひとりもなく育って、世の中にこわいものなしの斉信だろうから、刀を抜いて切りつけさえすれば切れる、そんなおごった気持ちで、怒りに任せながら、腕力をたのみに振りおろす太刀だ。
捨三郎はひと足さがりながら、とっさに上体を右にひらき、空を切って流れる斉信の右小手を、手刀ではっしと打った。
ぽろりと刀が手から放れて落ちたので、あっと踏み止まって、一度は本能的に身をひいたが、その手向かいされたのが無上にくやしくなるわがまま育ちだ。
「うぬッ、無礼者」
斉信はまるでわんぱく小僧のように力いっぱ

いつかみかかってくる。
右手がその左腕を、左手が胸倉へかかったと見る間に、捨三郎は敵のからだを腹ですくいあげるようにして、
「えい」
思いきりうしろへ投げ飛ばした。
少しも心得のない斉信だから、まるで俵を投げるのと同じで、大きなずうたいがもんどり打ちながら、木戸口のほうへ二、三間すっ飛んで、どすんと地ひびきをたてた。
「あっ」
青くなった近習たちが、いっせいにそっちへ走り寄っていって助け起こす。
「切れッ、無礼者を切れッ」
斉信が火のついたようにわめきだすまでには、少し間があった。
「はっ、殿にはひとまずあれへ」
「なにをする、切れ、切れ、直之助を切れ」
「はっ、ただいま。——ともかく、ご尊体に万一のことがございましては一大事」
口々になだめすかしながら、近習たちは斉信を取りまき、からだで押すようにして木戸から出ていく。
ひとりが気がついたように駆けもどってきて、捨三郎に会釈しながら、斉信の刀をひろっていった。
残ったのは、右源太ひとりだ。
「みごとなお手なみでございますな」
じいっと顔を見つめながら、くるならこい、相手になろうと、さすがに悪びれた様子もない。しかし、事実は暴君があまり子どもじみたまねをしたので、惜しい機会はすでに去っているのだ。
「右源太、そのほうの手のうちを見せてもらうのは、まだ早いようだ。鬼どのを見てやるがよい」
捨三郎も玄朴に会ってきたばかりだから、好んで人は切りたくない。

「しからば、おことばにしたがいまして、次の機会をたのしみにしております」
「鬼どのはまだ子どもとおなじだ。水は器にしたがうのたとえ、耳があったらおぼえておきなさい」
にやりとわらいながら、一礼した右源太は、ゆうゆうと木戸のほうへ去っていく。
屋根の上からからすが鳴きだした。

11

見ると、小品は縁に両手を仕えたままの姿で、がっくりと突っ伏している。全身から力が抜けてしまったような形だ。
「小品、いかがいたした」
つかつかとそばへ寄って、捨三郎が肩へ手をかける。
「若さま」
はっと両腕を張るようにして、わずかに顔をあげた小品は、感謝にみちた目で、捨三郎を見あげたが、むち打たれた背が痛むか、たちまちまゆをよせたと見る間に、かっとまっかな血を、それでもいそいでたもとの中へ、むせるように吐き出した。
「あっ、小品ちゃん」
「ねえさん」
さっき御行の松のそばで捨三郎に助けられ、いっしょに寮へいそいで、玄関のほうからあがっていた要吉と小稲が、ころぶように次の間から駆けこんできた。
奥の廊下から小走りに姿を見せたのは美代である。
「静かにいたせ」
だれもが、小品のからだへすがりつこうとするのを、捨三郎がぴしりとたしなめた。
「はい」
美代はまっさおな顔をして、ぴたりと廊下へ平伏し、小稲と要吉はぺたりと座敷へすわっておろおろ顔だ。

「小品、しっかりいたせよ。なるべく心をおちつけてみなさい」
捨三郎はゆるやかにやせた背中をなでおろしている。
肩をはずませて、せき込むようにおびただしい血を吐いた小品は、投げ出した両手で、必死に砂でもつかむように苦しみもがきながら喀血すると、ぐったりと血の海の中へのめっていきそうになった。
その肩を抱きこむように、しっかりとささえてやって、
「しばらくのしんぼうだ。楽にして、なにも考えぬがよい。ゆっくりと息をととのえることだ」
と、捨三郎は力をつけてやる。小品は額にじっとりとあぶら汗をうかべながら、かすかにうなずいた。
「ねえさん」
たまりかねたように、要吉は中腰になって呼ぶ。
「心配いたすな。すぐおさまる」
捨三郎が代わって答えてやった。
——小品ちゃん、満足だろうな。
小稲はふっとそんなことを考え、胸にしみるようなあたたかい情景に、ぽろぽろと涙が流れてきた。
「だんな——」
庭木戸からつかつかと早足にはいってきた油屋伝次が、はっとそこへ棒立ちになった。これは今まで門のかげにかくれて、騎馬の一行を見送っていたのだろう。
捨三郎はうむとうなずいたきりで、小品から目を離そうとしない。

12

「おさまったようだな」
捨三郎は小品の息づかいを見まもりながらいった。
「はい、とんだぶちょうほうを——」

「まだ口をきいてはいかん。じっとしていなさい」

いそいで身をひこうとするのをたしなめて、肩の手を放さず、

「美代、小品の寝所はどこか」

と、両手を仕えている美代に聞く。

「はい。あちらでございますが、こちらへお床を移しましょうか」

「いや、抱いていこう。案内いたせ」

捨三郎は静かに小品の上体をおこしながら、

「気を楽に持って、目をつむっていなさい」

つまらぬ神経をつかわぬようにという心づかいだ。小品がわずかにうなずくのを見て、右手を背からわきの下へかけ、しっかりと抱きかかえて、左手を足へかけ、すっと軽く抱きあげた。

そのまま美代に案内させて、用心深く廊下を奥の小品の居間へ進む。

要吉と小稲が糸にでもひかれるように、そのあとにつづく。

ぐったりと身をまかせて、目をつむっている透きとおるような病人のまぶたから、静かに涙があふれているのは、おそらくくやし涙ではなく、小名木川さまへの感謝の涙、口に出していうべきではない思慕の人に、せめてこの身を抱かれて、あたたかく介抱されているよろこびの涙とでも見るべきだろうか。

「小稲、帯を解いて、ついでに衣類を着がえさせてやりなさい」

病人をそっとふとんの上へおろしてから、捨三郎ははじめて小稲をかえりみた。

「はい」

「如才もあるまいが、あまり口をきかせぬように。眠れたら、しばらく眠らせるがいいぞ」

そういいつけて、捨三郎は病間を去ろうとした。

「帰るんですか、捨さん」

見とがめるように、小稲が聞いたが、それはだれもの心だったらしく、小品までぱっちりと

目をあいて、不安そうにしている。
「いや、着がえがすむまで、別室におる」
それはむしろ病人にいってきかせることばだった。
もとの廊下へ引きかえしてくると、伝次がばあやにてつだって、もうすっかり喀血の始末をしたところだった。
「だんな、手をお清めなすって」
ちゃんと縁に洗面だらいまで用意して、塩がそえてある。
「ここにゃ着替えがねえんですがねえ」
「いや、そうよごれてもいまい。焼酎があったら、よごれをよくぬぐいとって、しばらくひなたへほしておいてくれ」
捨三郎は上着をぬいで下着姿になった。
伝次はすばやく自分の羽織をぬいで、うしろから着せかける。
ばあやが、ぬいだ衣類をもったいなそうにまとめ、ていねいにおじぎをして、いそいでさがっていった。

13

「ちくしょう、ひどい真似をしやあがる」
まず一服とタバコ盆を引きよせた伝次は、病間のほうを気にしながら、小声で義憤をもらした。
御行の松のそばで、それと見た万七が、いっさんに逃げ出し、夢中で走りよってきた要吉から、いま殿さまの行列が寮へ向かったと聞いたときは、とっさにこれとは逆な想像が目にうかんでいた。
美代が鬼の目の前で高手小手に縛りあげられ、みんながぼうぜんとあっけにとられている間に馬につまれてさらわれていく、なるべく寮の門内でこっちがぶつからねえと取りもどすのにちょいとほねがおれると、そんな心配をして、道をいそいだのである。
寮の門前で馬をあずけられていた家来たち

は、小名木川さまの姿を見ると、はっと一同立ちなおって、当惑げに会釈をしていた。

——ざまあ見やがれ、てめえたちだって良心にとがめるだろう。

伝次は大手を振らんばかりの気持ちで、捨三郎のあとにつづいた。

そして、要吉の案内で玄関からこの座敷の向こう側へ出て、少しふすまをあけてのぞきこんだときには、斉信が二度めのむちを振りおろして、三度めを大きく振りかぶったところだった。

「おじさん、と要ちゃんがあっしの背中へしがみついて、がたがたふるえだしたと思うと、いきなり夢中で飛びこみそうにする。無理もありませんや、肉親の背中でびしりとむちの鳴る痛さが、それもただのからだじゃねえ、あっしだって骨身にこたえたほどだから、もう見ちゃいられなかったんですね」

伝次はあやうく涙が出そうになるのを、ぐっと飲みこんで、庭へ目を逃げた。

春の日ざしがくらくらと、泉水のさざなみにおどっている。しいんとして、病室のほうからはなんの物音もしない。

「眠ってくれたかな」

捨三郎がぽつんとつぶやいた。見ると、まゆのあたりに濃い憂愁の色がただよっている。

「だんな、玄朴先生を迎えに行ってきやしょうか」

「いや、今いっても、家にはいまい、夕景には必ずまわってくるはずだが」

「持ちますかねえ、それまで」

思わず口に出てしまって、伝次は急に胸がしめつけられてきた。

「鬼どのは、おとなしく帰ったようか」

別のことをいいだす捨三郎だ。じりじりするような不安、それをじっと押えているのだろう。

「切れ、切れとねえ、じたんだふんで、まるで餓鬼でさ。右源太のやつが、これもしかるようになだめて、右源太の野郎にだけは頭があがら

ねえようだからおかしいや。苦手なんですかねえ」

「その苦手の持ちかけようひとつで、少しは人間らしくもなれる鬼どのだと思うのだが」

捨三郎は嘆息するようにいう。

ふっと廊下を小走りに、病間のほうからだれか足音を忍ばせてくるけはいがしたので、ふたりともぎくりと顔を見あわせる。

14

「捨さん、早くきてみてください」

小稲が走りこんでくるなり端近へぺたっとすわって、あわただしく告げた。

「どうした、容体が変わったか」

「ええ、捨さんをさがしているようなんです。どうしよう、あたしが、あたしがうっかりここへきたばかりに、小品ちゃんに、もしものことがあったら」

さっきから自責の念にかられているのだろう、小稲はむしろ捨三郎に思いきりしかってもらいたそうに、訴えるのである。

「だれしも、あしかれと思ってしたことじゃねえんだ。いまさら、愚痴はよそう」

悪いやつはちゃんとほかにいるんだと、腹がたってしようがない伝次だ。

「とにかく、まいってみよう。油屋、こい」

捨三郎はすっと立ち上がる。

小品はやや荒い息づかいをして、軽く目を閉じていた。急にげっそりとやつれた顔に、もうはっきりと死相が漂っているようである。

自分に残された命の全部をかけて、憎むべき鬼に、毅然と反抗しつくした。そのときすでに死は覚悟していたのだろう。思えば薄幸の娘である。

「小品、いかがいたした」

静かに声をかけてやると、小品はぱっちりと目をあいた。しげしげと見つめている目に、感謝と永別の色が深く、しきりになにかいいたそ

うだったが、
「若さま、弟を、要吉を――」
と、一瞬すがるようなまなざしになる。
「心配いたすな、要吉は、わしが、しかとあずかる」
捨三郎はきっぱりと答えた。
「お願い、申し上げます」
なにかまだいいたそうだが、いいきれないでいるらしい。
「小品、きょうのそなたはりっぱであった。さすがは松木要左衛門の娘、直之助心からほめてつかわすぞ」
「はい」
にっこり微笑して、急に顔があかるくなったのは、
それでもう思いのこすことがなくなったのだろう。
「要吉、これへ進め」
「はい」
「姉の手をとってつかわせ」
「ねえさん――」
要吉は姉の細い手を両手で握りしめて、
「しっかりしてくれよ。死んじゃだめだ」
と、涙声になる。
「だいじょうぶよ」
小品は不憫そうに答えて、その目を、捨三郎があごで呼び集めた小稲、美代、伝次の顔へと、順々にうつし、
「小稲ねえさん、お世話になりまして」
とつぶやきながら、ふっと目をつむった。
「小品ちゃん――」
小稲が乗り出すように呼んだときには、荒い息づかいが、消えるように止まっている。
「あっ、ねえちゃん」
その胸へすがりついていた要吉が、もうだめだとわかると、
「ちくしょう、鬼め、鬼め、鬼め」
狂ったようにわめきながら、わっと姉の胸へ

泣き伏してしまった。

第二のわな

1

上野も、向島も、花は三分どおり咲きだしたというわさに、江戸の人気は、花見に行くも行かぬも、急に浮きたってきたようだ。

——ちっとも浮きたたないのは、あたしひとり。

小稲はもろはだぬぎになって化粧をいそぎながら、鏡の中の自分に重いため息をついた。

きょうは、花もまたずに哀れに死んでいった小品の初七日で、これから浅草の誓願寺へ墓まいりに行ってやらなければならない。

鏡の中にある年増盛りの白々とした膚、むっちりと豊かな双の乳ぶさ、われながらその美しさにうっとりなりかけながら、いつかそれが湯灌をしてやったときの、あの小品の痛々しいからだと思いあわされてくる。

病に虫ばまれると、このからだがああも板のようになってしまうものかしら。いや、それより恐ろしかったのは、あの背中にどす黒く生き物のように残ってた二筋のむちの跡だった。

湯灌のときは、美代と自分とばあやがてつだって、男は肉親の要吉だけだったが、

「痛かったろうな、ねえちゃん」

その傷をなでさすりながら、要吉が泣きだしたときには、美代も自分も、思わず嗚咽がとまらず、

「いつまで仏を裸にしておくんだ、しようがねえな、おまえさんたちは」

と、ひょいと顔を出した大根河岸の伯父にしかられ、あとはものなれた伯父の手で、さっさと経帷子に着がえさせられていった。

通夜は、捨三郎を正座に、要吉、伝次、伊丹屋のだんな、美代、伯父の佐平に自分、ほんの

うちわだけでしめやかに行なわれた。
美代は小品を身がわりにしたという自責の念が深いようだし、自分にはその緒を作った申しわけなさがある。だれもそんな話にふれようともしなかったが、ふたりともどうしても捨三郎の顔がまともに見られない。
翌日の午後、小品の棺は通夜の人たちにまもられて、誓願寺へ送られ、両親の墓のそばへ手厚く葬られた。
——しあわせな小品ちゃん。
悲しいし、申しわけないし、それでいて小稲は心のどこかでそう思わずにはいられなかった。しじゅう捨三郎が心からつきそって、あんなにしてもらえるなら、自分も死んでみたい、ふっとそんなねたましい気さえしたくらいだった。
埋葬をすませて別れるとき、
「小稲も、美代も、すんでしまったことを、いつまでもくよくよと考えずに、なにか思い出すことがあったら、そのたびに称名をとなえてやるがよい。小品はともかくも、おまえたちに心から感謝していたのだ。あれは心の美しい娘であった」
と、新しい墓標の前で、みんなのいるところで、捨三郎はしみじみといってきかせてくれた。
「申しわけございません」
「すみません」
いっしょに声が出て、いっしょに顔をおおったのは美代と自分で、
「ねえちゃん、今の殿さまのことば、聞いてくれたかなあ」
と、要吉はじっと姉の新しい墓を見つめていた。

2

あの日、誓願寺から、美代と要吉は伊丹屋宗兵衛につれられて、京橋へ帰ったか、それとも別の寮へ送りこまれたか、小稲は伯父の佐平に

つきそわれて深川へ帰った。みんな捨三郎のさしずだったのである。

「では、いずれまた初七日に、ここでお目にかかります」

みんなはそうあいさつをして別れた。

肝心の捨三郎は、油屋伝次をつれてどこへ引きあげたのか、こっちにひけめがある場合だから、どうしていっしょにきてくれないんですとは、さすがにだれもこねられず、小稲は重い気持ちを抱いて帰ってきた。

――でも、きっと一度はたずねてきてくれるにちがいない。伊丹屋さんからのお手もと金はそのままあずかりっぱなしだし、現にあのとき、すんだことは気にかけるなと、わざわざいってくれたほどなんだもの。

小稲はそれを心だのみに、きょうまで捨三郎が顔を見せてくれる日を、毎日ひそかに待ちかねていたのだ。が、とうとう一度もきてはくれなかった。

――やっぱり、あさはかな女だと、あいそをつかされたのかしら。

そう考えると、ほんとうにやりきれなくなる。ゆうべはそれで、一晩じゅう考えぬいてしまった。一度よくあの人の気持ちを聞いてみて、それはなんといっても身分違いなんだから、奥さんにしてくれなんて、そんな欲の深いことはいわない、せめて一生そばにおいてもらって、身のまわりの世話ぐらいさせてくれる心があるのかないのか、それだけはたしかめておかなくては、安心していられない。

たしかめてみて、もしそんな気持ちは少しもないなんて、あっさりいいきられたらどうしよう。生きているかいがありゃしない。

そのときは、目の前で死んでやるからいい。あすは剃刀を持っていこう。のどを突いて死んでやったら、いくらなんでもかわいそうにといって、小品ちゃんみたいに抱いてもらえるのではないかしら。

そんなことを考えて、涙がこぼれてしようがなかった。

「あんた、ほんとに剃刀を持っていく気」

小稲は思い出して、鏡の中の自分の顔に聞いてみた。きょうはお寺できっとあの人に会えるのだから、だれがなんといっても帰りにどこかへひっぱっていって、ふたりっきりでひざ詰め談判をしなければならないのだ。そして、剃刀を持っていけば、振られたとき、いやでものどを突かなければならないことになるのだ。

「それでもいいの。ほんとにあんた死ぬ気」

鏡の中の自分の顔が、なんとなく青ざめてくる。

「ねえさん、なにかおいいになりましたか」

ひょいとばあやが台所から顔を出した。

「なんにもいいやしないわ」

あわてて答えて、聞かれたかしらと、思わず顔が赤くなったとき、

「ごめんなすって、小稲ねえさんのお宅はこちらでござんすか」

と、だれか声をかけながら、玄関の格子のあく音がした。

3

「はい」

ばあやが答えて、すぐ玄関へ出ていったが、

「おや、かご屋さんですね。なにかご用――」

と、聞いていた。

「へえ、新大橋のそばからたのまれてきたんですがね、小名木川の捨三郎といえばわかる。きょう浅草の誓願寺へいっしょに出かけたいから、つごうがよかったらお連れ申してくれということなんで――」

捨三郎と聞いて、小稲はもうはっと中腰になっていた。

「お武家さんなんですか、そのたのんだ人ってのは」

ばあやが聞いている。

「いいえ、縞の羽織を着た三十がらみの、渋い身なりのだんなでござんした」
油屋伝次だ。もうまちがいない。
「ねえさん、どうなさいます」
「今すぐだから、ちょいと待っていてもらっておくれ」
小稲はたんすから着物を出して、いそいで着がえはじめた。
お寺へ行ってしまってからでは、人前があるのでゆっくり話もできない。川ばたをふたりで歩きながら、なにかこれからの相談をしようというんじゃないかしら。
どっちにしても、こうして自分を忘れずにわざわざ誘ってくれるようなら、もう剃刀はいらないかもしれない。小稲はふっと迷ってみたが、
——でも、どんなことで、ひょっと別れ話にならないとはかぎらないんだから。
と、お美代の顔を思いうかべ、鏡台の引き出しから紅絹の布にくるんだままの剃刀を取り出して、帯の間に深くしのばせた。
「お待ち遠さま」
玄関へ出てみると、ちゃんと町かごが一丁、軒下についていた。
「小稲ねえさんでござんすか。どうぞお乗んなすって」
しゃがんで茶をのんでいたかご屋が、いそいで立ち上がっておじぎをした。
「ばあや、あとをたのみますよ」
「行っておいでなさいまし」
ばあやに見送られて、かごへ乗りこむと、かごはすぐあがった。
——いったい、あの人、きょうまでどこにかくれていたんだろう。
こうなると、それが何より気にかかる。あたしのほうへはちっとも顔を見せてくれないで、お美代さんのほうへはちょいちょい行っているのではないかしら。そんな邪推はいまに始まったことではなく、ついこのあいだも伯父がきて

くれたとき、
「おじさん、あの人まだ一度もきてくれないんだけど、どこにいるんだか、おじさんは知っているんでしょう」
と、わざと高飛車に聞いてみた。
「そいつが、おじさんにもわからねえ。なにしろ、殿さまはねらわれているからだだからな。そう女の思うようにゃいかねえやな」
佐平もそれだけはほんとうに知らないようだった。

4

「お美代さんと要ちゃんは、京橋なんですか」
小稲はまた別のほうからさぐりを入れてみた。
「うむ、こりゃ小名木川さまのおさしずでね、なまじ別なところへ隠すより、京橋のほうがよかろう。町のまんなかでは、このあいだのような乱暴もできまい。もし屋敷から掛け合いがあったときは、家にいない、小名木川がどこかへつれていってしまったと、しらをきっておけ、とこうおっしゃるんだ」
「いやだな、あたし。小名木川さまはほんとうにお美代さんをどこかへつれていってるんじゃないの、おじさん」
おおっぴらでやきもちをやく小稲だ。
「バカなことをいっちゃいけねえ。小名木川さまには藩政改革という大きな目的がおありのようだ。女なんかに目をくれていられるもんかな」
「藩政改革って、どんなことをしようっていうんです」
「そいつはおじさんにもよくわからねえが、あの通夜の日の夕がた、下谷の伊東玄朴先生が小品を見にきたな。そのまくらもとで、小名木川さまが、この仏の忠義はけっして無にしないつもりだから、要吉のことはなにぶんたのみおきますと、いっていた。玄朴先生がうなずいて、よろしい大いにおやりなさい。あなたさまがひ

とりの力で、大なり小なりまき起こすうずは、必ずやぐら下へもっと大きなうずとなって伝わる、思いきっておやりになるがよろしい。要吉のことは玄朴がきっと引き受けますと、励ましていたんだ。それを小耳にはさんで、なるほどこりゃただの家出じゃなかったんだと、おじさんにもはじめてわかったんだ」

「じゃ、あたしはどうすればいいんです。おじさん」

男は仕事がたいせつだろうけれど、女には自分の恋のほうがよっぽどたいせつなのだ。藩政改革だなんてこむずかしいことは、聞いたってよくわからない小稲である。

「どうすればいいって、おまえ――」

佐平もいささか気ちがいじみた姪の目を見ると、当惑した面持ちで、

「まあ、時を待つことだ。こんなことは、おまえ、そう自分ばかりやきもきしたって、どうにもなることじゃねえ」

と、苦笑していた。

どうにもならないからって、こっちがやきもきしなければ、あっちへ取られてしまうんだもの。

かごにゆられながら、小稲は考えこんでしまうのである。

おじさんのいうことがほんとうなら、あの人は京橋へも顔を出してはいない。やっぱり、藩政改革のほうがいそがしいからなのだろう。

とにかく、きょうはふたりきりになれるのをさいわい、どっちかにはっきりきめてもらって、あっちが好きだというんなら、目の前で剃刀だし、話がこっちにきまれば、きょうからでもあたしはあの人の藩政改革とやらをてつだわなければならないのである。

――小品ちゃんの初七日に、あたしも生きるか死ぬか。

小稲は帯の上から、剃刀のあるところをそっと押えてみて、ひとりでにため息が出る。

5

かごは永代から大川ばたにそって、新大橋のほうへいそぐのを、小稲はたれのすきから見るともなく見ていた。

きょうは花曇りとでもいうのか、薄日がさしたり消えたりして、にぎやかな弦歌をのせた船が、いくつとなく大川をのぼっていくのは、向島へ向かう花見船だろう。これから当分の間は、毎日これがつづくのである。

河岸(かし)づたいにも、そういう一行がわらいさざめきながら、幾組みとなく歩いているのを、かごはどんどん追い抜いていく。なんだか悪い気がして、胸に思いはあるし、小稲は途中から軽く目をつむっていた。

そのかごが、やがてとんと地へおりて、

「ねえさん、着きやした」

と、かご屋が告げながら、たれをはねあげてくれた。

見ると、どこかりっぱな武家の玄関へ横づけになっている。

「ここはどこ――」

はっとして、小稲は目をみはった。

「小名木川のお屋敷でござんす」

「お屋敷――」

じゃ、あの人は小名木川の下屋敷へ帰っていたのかしら。なんだかおちつかない気持ちで、式台へ立って、あたりを見まわしているうちに、かご屋はもうからかごをかついで、さっさと帰りかける。

「あ、かご屋さん、まちがいじゃないんでしょうね」

「いや、まちがいじゃない。よくきてくれたな、小稲」

ついたての前へ立って、わらいながら声をかけたのは、思いもかけない大内右源太だった。

「あっ、大さま」

はかられたと気がついて、小稲はさっと顔か

ら血のけがひく。
「まあ、そう驚かんでくれ。これには子細がある。おり入っておまえにたのみたいことがあって、わざわざ迎えにやったんだ。ひととおり話を聞いてくれぬか」
きょうの右源太は、少しも尊大ぶったところがなく、ことばも至極おだやかだ。
「女をだましてつれこむなんて、ひきょうですよ、大さま」
だまされた自分のうかつさがくやしいが、そこは生娘とは違う伝法芸者だから、とっさに度胸をすえて、むらむらと敵愾心さえおこってきた。
「うむ、きょうはなんとしかられても一言もない。しかし、小名木川さまにあしかれと思ってやったことではないんだ。ここはおまえも知ってのとおり、小名木川さまが家出をされるまで住んでおられた下屋敷だ。ここに捨三郎さまが百日の間こもられた仏間がある。その仏間で、きょうはぜひおまえにたのみたいことがある。どうだ、ひととおり聞いてくれぬか」
悪党のねこっかぶり、あてになるもんかと思ったが、あの人が菊乃さんのために百日の間こもった仏間、そこで話したいという一言に、小稲はふっと気をひかれたのである。

6

仏間は床の間に重々しい仏壇を安置した北向きの陰の間のような八畳で、違いだなに観世音の一尺ばかりの木像が、名工の作らしい温顔をたたえ、書巻、文箱、すずり箱などが置いてあるほか、なにもない薄暗い一間だった。
その北の廊下に面した丸窓の下に、経机が一つおいてある。
小稲はこの陰気なへやで、あの人が写経などして、百日のあいだ静かに愛人の冥福を祈り暮らしたのかと思うと、なつかしいような、えりを正したいような、なんとなく敬虔な気持ちに

されて、とびらはかたく閉ざしてあるが、仏壇の前でしばらく合掌してから、右源太と向かいあってすわった。

「大さま、ご用をうけたまわりましょう」

ここには菊乃の位牌がまつってある。どこからか菊乃の霊が自分を見ていてくれるのだと思ったとたん、急にその魂が自分のからだにのりうつってきたような気さえした。

「実は、ご当主さまがこの四、五日、小品の夢ばかりごらんになるらしい。すっかりおやつれあそばしてな」

まゆをひそめる右源太の顔を見て、小稲は思わずはっとした。

「きっと、思いがのこるんです」

「そうかもしれぬな。なんとなく後悔の気味で、一門が仲たがいのまま反目しているのは心苦しい。一度小名木川と会って、よく話してみたい。非は非としてわびもしようし、それで心が解ければ、仲直りがしたいと、かよう仰せ出されたのだ」

「小品ちゃん、どんな姿で出るんでしょう」

いい気持ちだわと、小稲はその話のほうをもっとくわしく聞きたい。

「さあ、どんな姿で出るか――」

右源太はちらっと苦笑しながら、

「殿は、わしに至急小名木川さまをさがすようにといわれるのだが、あいにくわしにはそのてはずがつかぬ。また、たとえ居どころが知れたとしても、これまでの行きがかりがあるのでな、わしの口は小名木川さまが信用なさるまい。おまえにたのみたいのは、ここなんだ」

と、じっとこっちの顔色を見るようにする。

「あたしに、どうしろというんです」

「おまえの口からなら、小名木川さまは必ずすなおに耳を傾けられるだろう。きょうは小品の初七日だ。人情に厚いおかただから、小名木川さまはたぶん小品の墓まいりをなさると、わしは見たのだ。かってなまねをして、まことにす

まんが、ここはぜひお家のためにもおまえにはねをおってもらうほかはないと思いついたのだ。どうだろう、法事の帰りに、小名木川さまにここへお立ち寄りくださるよう、おまえからよく話してみてもらえまいか」

「さあ、あの人なんというかしら」

おまえのいうことならきく、と見てくれたのはうれしいが、捨三郎がはたしてなんというか、そこまでは自信が持てない小稲だ。

「とにかく、あたしこれから行って、よく話してみます」

「いや、それは困るのだ」

右源太が当惑したような顔をする。

7

「なにが困るんです、大さま。どうして、あたしがあの人を迎えに行っちゃいけないんです」

小稲には、まだ右源太の腹の中が、よくわからなかった。

「おまえが迎えに行って、たぶんそんなことはなかろうとは思うが、万一小名木川さまがいやだとなると、ご当主さまのてまえ、わしの立場がなくなるのだ。一藩のためにも、ぜひここでご当主さまとあのおかたさまに和解をしていただかないことには、家来としてわしどもの役目がすまぬ。それも、知ってのとおり、ご当主さまはご帰国の時期が迫っているので、きょうをおいてはまたという機会がない。そんな事情で、なんとかおまえに橋渡しをしてもらいたいと思ってな。——どうだろう、手紙を一本書いてくれぬか。わしがお家のことでたのみたいことがあって、ここでおまえと待っているから、すぐきてもらえないかと、簡単に書いてくれればいいんだ。くわしいことは、小名木川さまに会って、わしからよくお話しすることにしよう」

ことばは巧みだが、人質にとって手紙でつり寄せる、そうとしか思えない。

「大さまは、あたしを、あたしをおとりに使お

うというんですね」
　小稲は顔色をかえた。
「そう悪意にとってもらっちゃ困る。だましておまえをここへ連れこんだのは、わしが悪かったが、なにごともお家のため、わしの微衷をくんでもらえないものかねえ。わしの悪いところは幾重にもわびる。このとおりだ」
　右源太は頭まで下げてみせるのだ。
「そんなことをいって、まさか、まさかあの人をわなにかけるんじゃないんでしょうねえ」
　なによりもそれが心配になる。
「バカなことをいっちゃいかん。小名木川さまにあしかれと考えるくらいなら、なにも女をだしに使わなくても、いくらも手はある。だいいち、小名木川さまともあろう傑物が、こんな見えすいたわなにかかるかどうか、考えてみたってわかるではないか」
　そういわれてみれば、それもそうだと思う小稲である。それに、小品の亡霊という話が、いかにもありそうなことに思えたので、
「ようござんす。あの人があたしの手紙で、きっときてくれるかどうかはわりませんけれど、とにかくすずり箱を貸してくださいまし」
　と、つい手紙を書く気になってしまった。一つには、あたしが手紙さえ書けば、あの人はきっときてくれるという自信があったし、もしきてくれないようなら、いよいよ剃刀だという腹もあって、男をためしにかけてみたい気がたぶんにあったのだ。
「やあ、すまなかったな。じゃ、これをすぐ使いの者に誓願寺へとどけさせることにしよう」
　右源太は、小稲が考え考え書いた手紙を手にすると、すぐに立って仏間を出ていった。
　――それにしても、あの人がくるまで、あたしはここにひとりで待たされるのかしら。
　小稲はなんとなくうとうしくなって廊下の障子を一枚あけてみた。
「あっ」

いやに薄暗いと思ったのも道理、その廊下の外側に厳重な牢格子が取りつけてあるのだ。

8

誓願寺では、定刻になっても小稲が姿を見せないので、みんな心配していた。

「出がけに、あっしが寄ってくりゃようござんした」

大根河岸の佐平は申しわけなさそうな顔をする。

「いや、もうすぐくるでしょう。要ちゃんをのぞけば、いちばんきょうの仏には俗縁の深かった小稲さんだ。もう少し待ってみてはどうでございましょう」

年寄り役で、伊丹屋宗兵衛がみんなにというより、ついいましがた油屋伝次と顔を見せてくれた捨三郎のほうへ、相談するようにいった。

捨三郎が軽くうなずいて同意したので、

「じゃ、あっしがお住職にそうおたのみしてまいりましょう」

と、佐平がすぐに立っていった。

要吉とならんでいる美代は、髪も身なりもすっかりもとの下町娘にかえって、顔まで明るくなったようである。

「美代は、武家奉公はもうこりごりしたであろうな」

捨三郎はほほえましくなって、ふっと声をかけた。

「はい」

いそいで両手をつかえる作法だけは忘れない美代だ。

「早く良縁を求めて、親どもを安心させることだな」

「いいえ、美代は一生かたづかぬつもりでございます」

うつむいたままはっきりといいきって、ほおを赤らめている。

「なぜかな」

「美代は、あの、一度お手討ちにあいましたからだでございます」

一度死んだのだから、このからだはそれを助けてくれた人のものだと、ほんとうはいいたかったが、どういっしょうけんめいになっても、そこまでは口に出せなかった。からだじゅうが燃えあがるような気持ちである。

「その遠慮には及ばぬことだ。大名であっても無理は無理、まあ、当分様子を見るのもよかろうけど」

捨三郎はあとのたたりを恐れていると取ったのである。ちらっと不憫そうな目をしたが、

「要吉、まいれ。下駄をはいてみよう」

気をかえるように、廊下へ出て、くつぬぎの上の庭下駄へ足をかけた。

はいと答えて、要吉があとを追う。

捨三郎は枝折り戸をあけて、静かに出ていく。

「おとうさん、申し上げてくだされればよかったのに――」

美代はうらめしそうにいって、ひざの上でたもとを折りはじめる。そういうところは、もうすっかりだだっ子の姿になっている。

「バカをいいなさい。油屋さんがおわらいなさるではないか」

伊丹屋は軽くたしなめながら、伝次のほうを見て、

「困ったものです。命のご恩人ではございますし、あのおかたさまが、あまりおりっぱなものですから、――それはまあ、こんなおやじでも、男らしいおかただと、心をひかれますでな」

と、世なれた苦笑にまぎらせるのである。

9

「おや、殿さまは」

そこへ佐平がなんとなくそわそわともどってきて、座敷を見まわした。手に手紙のようなものを持っている。

「いま要吉をつれて、ふらりと庭へ出なすった

が、どうかしたかね、親分」
伝次が答えながら、じろりと佐平の手もとを見る。
「なあに、小稲から小名木川さまあてにこの手紙がとどいたんだが、そのとどき方が、少し気になるんでね」
「と、いいなさると――」
「中間ふうの若い男が、玄関でこれを取り次ぎに出た小坊主さんにわたして、返事はいらないといって、すぐ帰っていったというんだ」
「なるほど――」
芸者が中間を使いによこすというのも変だし、手紙をよこすくらいだから、小稲はきょうの法事へは出られないのだろう。それにしては、返事はいらないという使いの口上も妙にかどだつようだ。
「どうも、家からよこした手紙ではないようだな。親分はあの子にいつ会いなすった」
油屋伝次はさすがに勘が鋭い。
「おといたずねたっきりだが、――おれもこの手紙は、ここへくるつもりで一度家を出て、途中でなにかあってこれを書いた、そんな気がする」
姪のことだけに、佐平はじっと上書きの文字をにらみながら暗い顔つきだった。
「おじさま、気になります。早く小名木川さまをさがしてくださいませ」
美代がせきたてるようにいった。
そのころ、捨三郎は要吉をつれて、裏の墓地へはいり、まだ真新しい小品の墓標の前に立っていた。樹木にかこまれた墓地は、しいんと薄日があかるく、へい一重の俗界にはない閑寂さがただよっている。
「要吉、きょうは姉の初七日だな」
捨三郎は軽く小品の墓に合掌してから、要吉のほうを向いた。
「はい」
なにをいいだされるのかと、要吉はからだを

堅くしている。
「日のたつのは早いものだ。時というものは、人間の喜びも悲しみも、どんどん消していってくれる。そして、人間はだれでもしまいには死んで、時に消されてしまうものだ。ここに並んでいるたくさんの墓は、みんなその時という大きな力に消されてしまった人たちのしるしなのだ」
　要吉は小名木川さまがそうするから、自分も黙ってあたりの墓を見まわした。
「すぐれた人間は、時に消されない足跡を残す。男というものは、かえらぬことをいつまでもくよくよと悲しんでいるものではない。要吉も、きょうの初七日がすんだら、伊東玄朴先生のところへ行きなさい。初一念どおり、天下の名医となって、時に消されない足跡をのこすことだ。だれよりも小品がきっとよろこんでくれる。わかるな」
「はい」
　捨三郎の口から姉の名が出ると、要吉は急に涙がわきあがってきた。

10

「あす、下谷へ行きなさい」
　捨三郎は念を押すようにいった。
「はい」
　涙を見せては恥ずかしいと思ったので、要吉は握りこぶしで、いそいで目をこすった。
「おまえはもうこのあいだ、通夜の日に玄朴先生と会っているのだから、人の手を借りず、ひとりで行けばいいのだ。伊丹屋へちゃんとあいさつをして、その足でまっすぐ下谷へ行くがいい。男は、自分のことは自分でするものだ。ひとりで行けるだろうな」
「行けます、ひとりで」
「いっしょうけんめいに勉強して、師に負けない名医になれよ」
「はい。きっとなります」

「わしはあすの朝、たぶん国もとへ旅立つことになるだろう。当分おまえにも会えないだろうが、どこにいても、要吉のことは心にかけているぞ。ひとりで寂しいと思ってはならぬ。ひとりだから怠けてもいいと思い、ゆだんしてはならぬ。いつもわしがそばに見ていると考えて、修業するがいい。わかるな」

「はい」

要吉は歯をくいしばった。それでも涙がぼろぼろとこぼれる。悲しいのではない。ねえさんのお墓の前で、小名木川さまがこんなにやさしく励ましてくれる。

——聞いてくれるか、ねえちゃん。

そう思って涙が出るのだ。

「油屋のおじさんも、あす行くんですか」

ふっと別の心配がおこってきた。殿さまには敵が多いし、お美代さまや小稲ねえさんもまだ鬼にねらわれているのではあるまいか。

「うむ。油屋はいっしょにつれていく。ひとりではわしも不自由だし、あの男もたいくつするだろうからな」

「お美代さまや小稲ねえさんは、だいじょうぶなんでしょうか」

「心配あるまい。鬼どのもまもなく帰国が迫っている」

墓地の道を、佐平が小走りに近づいてくるのが見えた。

「こちらでございましたか。小稲からただいま、手紙をとどけてよこしましたんで」

「手紙——」

捨三郎はまゆをよせながら、すぐに封を切った。文面は簡単で、

「あたしはいま、小名木川のおしもやしきの、仏間にきています。そのわけは、お目にかかって、くわしく申し上げます。大内どのが、お家のためにぜひ捨さんに会っておねがいがあると申していますから、お寺の帰りにすぐこっちへまわってください。こんなわけで、きょう小品

ちゃんのお墓まいりができないのは心のこりですが、みなさまによろしくおつたえください」

小稲より、捨さまいるとしてある。

「これを持ってきた者は――」

「若い中間だそうですが、返事はいらないといって、すぐ帰ったそうでござんす」

「これを見なさい」

捨三郎は手紙を佐平にわたした。

11

新高橋ぎわの小名木川の下屋敷では、その夜表門を八文字にひらき、玄関へ高張りぢょうちんを出して、ぎょうぎょうしく捨三郎のくるのを待っていた。捨三郎からわざわざ書状がとどいて、今夜正五つ（八時）にまいるから、丁重に迎えるようにという返事があったからである。

――なにか計略があるな。

自分が策の多い男だから、右源太はすぐ胸へぴんときた。

丁重に迎えろとは、表門から行くという文意なのだろう。むろん、けさの小稲の呼び出し状を、そのままにうけとるようなおだやかな相手ではないから、表門から堂々と乗りこんで、小稲を取りもどしてみせるぞという挑戦なのだ。

あるいは表門から行くぞといっておいて、こっちの虚をつき、こっそり裏の小名木川からへいを乗り越えてくる手を考えているかもしれぬ。

どっちからでもいい。敵のねらうのは仏間の小稲なのだから、きてくれさえすれば、こっちには万全の手くばりがあるのだ。

――今夜こそのがさぬ。

右源太はひそかにほくそえむ。

りっぱなおとりがあるのだから、敵は必ずくる。表からくれば座敷へ通し、裏からくれば仏間へ近づいたところを、有無をいわさずおっ取りかこんで切れと命じてある。

このあいだの根岸の例でも、いざとなると藩士では遠慮があって、どうもうまくいかぬ。そのために、ここの長屋へ、用人梶原弥兵衛に集めさせた腕ききの浪人どもが十数人養ってある。これが今夜の決死隊で、敵に初太刀をつけた者と、首をあげた者は五十石ずつで召しかかえよう、一太刀でも敵のからだに刃がふれた者には、十両ずつの賞金を出そうと、それぞれほうびがつけてあるのだ。

五十石や十両などは安いものである。

「直之助を切れ。まだ見つからんか。あれを捜し出して切った者には、三百石の加増をつかわし、供奉行に取り立ててつかわすぞ」

あれ以来、主君斉信は、毎日狂気のようになってわめきたてているのだ。そのために、ここしばらくは、女あさりさえ忘れて、朝から晩まで酒に鬱憤をまぎらせているというふうだ。犬ころ投げに庭先へ投げ飛ばされたのが、骨身にこたえてくやしいのだろう。

「さようにおあせりにならずとも、殿のご鬱憤は右源太が必ず晴らしてお目にかけます」

「それはいつのことだ」

「早ければ七日のうち、おそくともご帰国まえにかたづけます」

「右源太、武士の約束だぞ」

「きっと承知いたしました」

右源太は主君にそう誓っている。

主君の意をむかえるためにばかりでなく、大きな野心のある右源太としても、小名木川は目の上のこぶなのだ。なんとかこれをかたづけてしまわなくては、安心して国入りができないのだ。

——なあに、多少小才がきくといっても、たかがバカ殿育ち、今夜こそ生きては帰れまい。

そして、是が非でも生かしては帰さぬ覚悟で、正五つを待っている右源太だった。

12

右源太は五つ（八時）少しまえに、屋敷うちの手くばりを、念のために一巡してみた。

この下屋敷の裏はすぐ小名木川に接していて、板べいをめぐらし、邸内へ船着き場が引きこんであるが、これは水門口がおりているかぎり、船の出入りはできない。

そのうえ、ここから邸内へ忍びこもうとするには、船を岸の石かげへつけ、へいを乗りこえなければならないのだから、だれかひとりへいの上へのぼって、船を見張っていさえすれば、絶対に屋敷へは近づけないのだ。

しかし、西隣はいずれも他家の下屋敷とへい一重になっているから、敵が屋敷内へ忍びこむとすれば、この裏手よりほかにない。ここには浪人剣客の大将格牧野一角が五人の腕ききをしたがえて待機し、藩士足軽など二十人ばかりが、用人梶原弥兵衛の采配で、水も漏らさず見張りにあたっていた。

「別に変わったことはないか」

船着き場の船番小屋を本部にしている弥兵衛を呼んで聞くと、

「今のところ変わりはありません」

と、弥兵衛は緊張した面持ちで答えた。

直之助家出の責任を問われている弥兵衛だから、今夜失敗すると、右源太の反感を買って、どんな苛酷な主命になるかもしれないのだ。緊張せざるをえないのである。

「お重役、からめ手は不肖牧野一角が必ず引きうけます。安心していただきたい」

腕もたつが浪人ずれがしている一角は、口のほうもなかなか如才がない。

「やがて時刻だ。くれぐれもたのみおく」

右源太は鷹揚に一同を激励して、表へまわった。

ここは開いた表門を中心にして、刺客は副将格の岩佐金助以下五人、采配は高輪下屋敷の用

人北崎九兵衛があずかり、人数はすべて植え込みへ伏せて、屋敷のかどまで数人の物見が出してあるほどの警戒ぶりだ。

屋内の采配は、右源太が自分で取り、ここの刺客は仏間を中心に伏せてある。

右源太は最後に、一方入り口の牢格子のとびらをあけさせ、仏間へはいってみた。けさ呼び出し状を書かせて立ってから、はじめて小稲の顔を見るのだ。

入り口のふすまをあけて、小者が差し出すちょうちんを取って、かざしてみると、仏壇の前にきちんとすわっていた小稲が、激しい目を向けてきた。

「窮屈なめにあわせて、すまんな」

「どういたしまして――」

小稲の返事は案外おちついていた。

「もうしばらくのしんぼうだ。小名木川さまさえ約束どおりまいってくれれば、必ず礼を厚うして、深川へ送りとどける。とんだ迷惑だろうが、まあ悪縁だと思って、もう半刻ほどしんぼうしてくれ。けっしておまえのからだをどうしようというのではないのだからな」

「てまえがってで、ひきょうで、ずうずうしくて、良心なんて小指の先ほども持たないおかたのおっしゃることですから、ほんとうにしておきましょうよ」

それをまるで、嘲笑しているような冷たい顔であびせかける小稲だ。

13

「まあ、そうふてくされるな」

右源太はなんといわれても歯牙にもかけず、

「しかし、さすがは深川の小稲だ。さぞ逆上して、狂人のように騒ぎたてはせぬかと心配したが、そうおちついていられるのは感心なものだ。それとも、いまにきっと小名木川さまが助けてくれる、そう考えて、安心しているのかね」

と、皮肉な微笑をうかべる。

「右源太さん、このお仏壇にはどなたのお位牌があるかご存じなんですか」

小稲が静かに聞く。

「さあ、知らんな」

右源太はそらっとぼけるというつごうのいい武器をよく使う。

「そうでござんしょうねえ。ここがどんな場所か知っていれば、座敷牢なんかにはできないはずです。この仏間はね、あるけだもののような殿さまに手ごめにされて、その身を恥じた菊乃さまという貞女が、自害なすったのを、その菊乃さまをご寵愛あそばしたりっぱな殿ごが、不憫におぼしめされて、百日のあいだ引きこもって供養あそばされた、世にも美しい霊場なんです。そんな話を聞けば、女ならだれだって、そのりっぱな殿ごにほれたくなる。女が心からほれた男なら、たとえ自分は菊乃さまのように殺されても、男にはあぶない思いはさせたくない。あたしはさっきから、菊乃さんの魂といっしょに、どうかあの人がこんなあぶない場所へ近寄らないようにといっしょうけんめいいのっているんです。わかりましたか、右源太さん。あたしは狂人のようにわめきも騒ぎもしない、心静かに天命を待つ気でいるんですから、二度とからかいにはこないでください。小稲はもうあなたのようなひきょうな男と口はききたくござんせん」

ぴしゃりといいきって、小稲はそっぽを向いてしまう。男にとって、これ以上の侮辱はあるまい。

「りっぱな覚悟だ。よろしい、まもなくあの人がここへくるだろうから、わしからよくおまえの感心な心がけを伝えておいてやろう」

あくまで冷笑している右源太だが、そういえば小稲は昼も夜も食膳には手をつけず、白湯だけ飲んでさげたと聞いているし、その激しさがなんとなくこづら憎い。

「よろしい、よろしい。おまえが干ぼしになっ

てまで供養してくれると聞かせてやったら、あの人もさぞよろこんで息を引き取ることだろうて」

わざとそんな残酷なことを口にしてみたが、小稲は底意地の悪い顔をして、もう見向こうともしなかった。

「大内どの――」

入り口の廊下から、だれか呼ぶ者がある。

「だれだ」

「北崎九兵衛でござる」

「どうしたな。獲物でもかかったか」

表門の九兵衛が自分からたいせつな持ち場を離れるとすれば、それよりほかにない。

「はい、ご来客でございます」

「来客――。だれだ」

「北町奉行職遠山左衛門尉さまのお越しにござります。いかが計らいましょう」

九兵衛の声はうわずっているようだ。

女たち

1

「なにかのまちがいではないのか。来意を聞いてみたのか」

右源太はまゆをひそめた。こんな主のいない下屋敷へ、町奉行職ともある多用の顕官が、ふいの来訪というのは解せない。

「はい。それが、直之助さまのご招待があったので、まいられたのだそうでございます」

「なにッ」

やったな、と右源太は思った。

北町奉行遠山左衛門尉景元は、若いころ家出をして江戸のちまたを金さんで鳴らして歩いたことのある放蕩児だ。からだにそのころのほりものがあるくらいで、よく下情に通じ、悪党からは恐れられているかわりに、江戸市民から話

のわかる親玉といわれ、非常に親しまれている人物である。

直之助はせっぱ詰まって、その人にすがったにちがいない。そういえば、松平家の出入り与力は、北の川村町之進だった。

「よし、わしが出てみる」

公儀の奉行職ともある重い役目の高官が、たかが一藩のこんな私事に軽く動きだすようでは、評判ほどの人物ではあるまい。

だいいち、藩内のことは藩で始末するのが定法で、大名は若年寄りの支配下だから、町奉行職のさしずは支配違いだ。相手の出ようによっては、遠山左衛門尉をみごと一本やりこめて、明石藩の大内右源太の名を天下に知らせてやろう。ふっとそんな野心にかりたてられて、右源太は玄関へいそいだのである。

来てみると、玄関先の庭は供の与力同心のちょうちんでぎょうぎょうしくうずまり、かごは玄関に横づけになって、羽織はかま、略装の景元はすでに式台におり立って待っていた。五十年配の渋い顔だちで、きっすいの江戸っ子だけに、どこかあか抜けがしている。

そばに顔見知りの与力、川村町之進が片ひざついて控えていた。

「お待たせつかまつり、失礼いたしました。てまえが明石藩当下屋敷をあずかります大内右源太にござります」

丁重にあいさつをして、さて、なにしにきたといいたげに、相手の顔を見あげる右源太だ。

「明石侯の近習頭（きんじゅうがしら）の大内右源太だな」

景元が念を押す。

「さようでございます」

「こよいは当屋敷の直之助どのから、夜桜にはまだちと早いがという誘いをうけ、かように出向いてまいったのだが――」

「おことばではございますが、直之助さまは当節不在がちで、今夜も屋敷にはおりません。なにかのおまちがいではございませんでしょう

か」

「さきほどの用人もそう申していた。しかし、それは困る。たとえ私ごととはいえ、町奉行職がまちがえて他家を訪問したでは、江戸市民のものわらいにされるでな。――それに、誘いの口上はこれなる川村町之進からたしかにうけておるのだ。いまは不在でも、直之助どのは必ずまもなくもどられると思うが」

ともかくもいちおう屋敷へ案内しろ、という気持ちらしい。

2

「さあ、それが陽気のせいとでも申しましょうか。近来多少ご逆上ぎみで、とかくお気まぐれが多うございますから、てまえどもにはなんとも計らいかねます」

右源太はあくまで、玄関払いを食わす算段だ。町奉行が狂人のことばにつられて出てきて、玄関先からのこのこ追いかえされたと知れれば、それこそ天下のものわらいだ。あすはさっそくお役ご免を願わなくてはなるまいと、内心すこぶる痛快である。

「うむ、そのご逆上ぎみで思い出したが、ついでにちとそのほうの耳に入れておきたいことがある」

「どのようなことでございましょう」

「ここで申してもかまわぬかな」

苦しまぎれの口実だろうと思ったので、

「おうかがいつかまつります」

と、右源太は澄まして答える。

「そちは国者だな」

景元の顔に皮肉な微笑がうかんだ。

「おおせのとおりにござります」

「控えよ、右源太」

次の間からしかるようにいって、すっと玄関へ出てきたのは、真新しい羽織はかまの直之助であった。

あっと右源太は目をみはり、そうだったのか

とはじめて気がついた。直之助は奉行の行列の中にまぎれて、さっきから屋敷へはいりこんでいたにちがいない。そして、奉行を利用して、仏間の小稲を連れ出そうというのだろう。ゆだんはできないと、ひそかに目を光らす。

「これは国者のいたって礼儀知らず、失礼いたした。まずお通りくだされたい」

客に対して直之助は丁重に会釈している。

「いや、うかつということはだれにもあること、しばらくおじゃまいたしましょうか」

景元は軽くわらって客間へ通ろうとしたが、玄関にすわったまま見送ろうとする右源太を、ふと振りかえり、

「いっしょにきなさい。ぜひそちに尋ねたいこともある」

と、声をかけた。

奉行はともかくとして、直之助がここへあらわれたからは、無事に帰せないし、小稲のほうの用心もいっそう厳重にしなければならない。なにをするにもほんのしばらくからだの自由がほしかったが、客に呼ばれたのでは、ことわるわけにいかない。

――よし、臨機応変、機会はいつでもつかめる。

度胸をすえて客間へついていくと、もとよりふいのことだから、権門の客を招いたという用意は座敷になにもなく、さすがに見かねて用人九兵衛が取り出した座ぶとんへ、景元と直之助はゆったり向かいあってすわった。

景元には与力の川村町之進がしたがい、直之助側には右源太と九兵衛がつきそうという形で、その実しかたがないから、しぶしぶ下座についているのだ。

「わざわざのお招きゆえ、景元遠慮なく参邸しました」

たぶん初対面で、しかも直之助のほうから急援を求めての今夜のしばいと思われるが、さすがに苦労人らしく、景元はしじゅうにこにこと

如才がない。

3

「わしは松平直之助です。見知りおいてください」

直之助はあらためて頭をさげた。

「またの名を、小名木川無宿、捨三郎と申されるそうですな」

景元がにこりとわらう。

「ほう、小名木川無宿ということまで――」

「江戸の町奉行職です。たくさん忠実な目と耳を持っていますでな。無宿も、また楽しいかなですか」

「遠山どのも、若いころ経験があるとうかがっていますが」

「あります。恥を申せば、わしのはほんとうの放蕩無頼、若いうちというものは、なにをやってもたのしい。直之助どのとは、ちと違うようだが」

「いや、楽しいことは、わしも楽しいようです。世の中は広い、それを見ただけでも、一生の得をしたような気がします」

「そう、世の中は広い。しかし、また狭いともいえますな。どこへ行っても知己がある。旅の恥はかき捨てなどと思っていると、とんだところで揚げ足を取られる。このあいだも、こんなことがありました。役目で、筋違橋のあたりを通ると、路傍で三弦をひいている中ばあさんがいる。なにげなく見ると、その昔新吉原で鳴らした某という花魁のなれの果てだ。遠山の金さんでごろごろしていたころ、景元はその某にかわいがられましてな。みついでいつづけをさせてもらったことがある。自慢にもならないことが、若いころは自慢でな、しかし、その中ばあさんが、ひと目で某とわかったのだから、ほれたという景元の気持ちにうそはなかったようです。感慨無量でしたな」

「先方でも、すぐわかりましたか」

「わかったそうです。もっとも、こちらは馬上でしたが、思わず目が合ったとたん、某はあわてて下を向いていました。なかなかしおらしい」
「それで――」
「つまり、昔の旅の恥のかき捨てですな。捨てておいては、いよいよ恥になる。あとから人をやって、あらためて一生囲うことにしました。わしよりたしか一つ上ですから、当年五十二歳ですかな。なかなかおつなばあさんぶりです」
景元はおもしろそうに笑った。
「いいお話をうかがった」
人のあたたかさが、しんみりと胸にしみて、なんとなく目がうるんでくる直之助だ。
「あなたの人生の旅は、これからまだ長い。自愛されて、ゆっくりとお歩きになることです。広い世の中には、必ず知己はあるものです。友あり、遠方よりきたる、また楽しからずやと、聖人さまがはっきりと教えていますからな」
わが子にさとしているような、景元の父にも似たロぶりだ。
「ご教訓ありがとう」
「そうそう、――右源太」
ふっと景元が右源太のほうへ呼びかけた。
来たな、仏間へなぞをかけようというのだろう。おれは国者だから、そんななぞなど解いてやる義理はないと、右源太は黙って顔をあげる。

4

「旅の話で思い出したが、明石侯にもお国入りの時機が近づいたな」
景元はのんびりとそんなことをいいだす。
「はあ」
「江戸の外のことは、よけいな心配ということになろうが、なにか尾州家から明石侯に申し入れがあったように聞いている。そのほうの折り合いは、円満についているのかな」
ああ、そのことかと、右源太は皮肉な微笑をうかべ、

「くわしいことは存じませんが、別に話し合いはしていないのではないかと思います」
と、こともなげに答えた。
「ほうっておいてもよいのかな」
「老臣どもの意見では、たとえこちらから話し合いに出ましても、尾州家ではお取りあげになるまいと、あきらめているようでございます」
わびを入れたくらいでは、尾張領通行禁止のゆるしは出ない。わかりきっていることなのだ。
「あきらめてすむことではないように思われるが――」
「お奉行さまに、なにかよきご分別がございましたら、天下のため、教えていただきたく存じますが」
なんと出るかと、ためしにかけてみる右源太だ。
「わしに分別がなければ、明石侯には帰国なさらぬ心組みでいられるのかな」
「さようなことはございますまい。主君、名誉にかけても、お国入りだけはいたさなくてはなりますまい」
どうだ、そんな才覚があるかといわぬばかりに、恐れげもなく景元を見すえていると、
「さようか。そのほうたち家来の者に、それだけの覚悟があれば、他人の分別などはいるまい。明石侯にはたのもしい家来をお持ちで、しあわせである」
と、いくぶん皮肉まじりに、けっしてことばじりはつかませぬ景元だ。
若い直之助がそれに乗って、なにか意見をはかぬか、へたなことをいいだしたらかみついてやろうと待ってみたが、これはじろりと右源太の不遜なつらがまえへ一瞥をくれただけで、取りあおうとはしない。
「お奉行さまのおほめにあずかりまして、家来ども一同、面目にござります」
右源太はバカっていねいにおじぎをした。
「直之助どの、こよいはくつろいだ一席をすご

させていただき、景元よろこばしく存ずる。これにておいとまつかまつりましょう」

景元が静かに一礼する。

「これはこれは、なんのおもてなしもなくて――」

もてなしにもなんにも、招いた客に対して茶一つさえ出していない主だ。

それにしても、こんなことであっさり帰るはずはない。ここでなにか一策ありそうだと、右源太は隣の九兵衛へそれとなく目くばせして、じっとふたりの出ようを待つ。

5

しかし、なにか策がありそうだと見た右源太の予想は、みごとにはずれていた。

景元はそのまま立って、すっと玄関へ出ていく。見送って出た直之助が、

「せっかくの来駕に、なんの風流もなかったゆえ、せめてそこまでなりとかごを見送らせていただこう」

と、ぞうりをはいた。

「それでは景元も少し歩きましょうかな。春のおぼろを語りながら行くのも、また一興でござろう」

はきものを呼んで、やがて景元は直之助と肩をならべて歩きだす。供の与力同心のちょうちんが、前と後ろにしたがい、六尺はからかごをかついでいちばんうしろからつづく。

――なんのことだ。

右源太はしだいに門の外のほうへ消えていくちょうちんのあかりを見送りながら、一瞬ぽかんとしてしまった。

景元がきて、帰るまで、その間小一時間足らず、ついに仏間ということばも、小稲という名も、ふたりの口から出なかった。いったい、直之助は、なんのためにこんな人騒がせをやったのか。こうなると、無意味に踊らせられた遠山左衛門尉こそいいつらの皮ということになる。

「九兵衛、二、三人にあとをつけさせてみろ」
「はい」
北崎九兵衛はあたふたと表門のほうへ駆けだしていった。
——はてな。
ふっと、右源太は気がついた。自分が客間にくぎづけにされている間に、だれかが仏間の座敷牢を破っているかもしれない。
が、また考えてみると、仏間の入り口には数人の刺客が伏せてある。廊下からその目をくぐって座敷牢へ近づくのは不可能だし、外まわりには五寸角の牢格子が厳重に組んであるのだ。のこぎりやまさかりを使ったとしても、そう簡単には破れるものではないし、だいいち物音をたてないで仕事は絶対にできない。
「どうもわからん」
とにかく、右源太は、念のために手燭を用意させて、仏間へいそいでみた。
「別に変わったことはなかったろうな」
見張りの浪人剣客にただしてみると、
「別状ありません」
と、いかにも自信にみちた返事だ。
うなずいた右源太は、かぎをわたして牢のとびらをあけさせ、供の者から手燭をとって、仏間のふすまをあけた。
「あっ」
たしかに仏壇の前にすわっていたはずの、小稲の姿がない。しまったと思いながら、廊下の障子をあけてみたが、子どもではあるまいし、まさかそんなところにかくれているはずはなく、牢格子も無事だ。
——逃げるとすれば床下か天井。
むろん、小稲にそんな力があるとは思えないから、外から何者かが忍びこんで助け出したのだ。
「そうか、油屋伝次という男がいた」
右源太はそれを思い出して、じっと苦いものをかみしめた。

6

「要職多忙の遠山どのに、かような迷惑を煩わし、きょうのご厚誼のほど、直之助心から感謝のほかありません」

小名木川の北の小路を、新大橋のほうへ肩をならべて歩きながら、直之助はあらためて景元に礼をのべていた。

けさ小稲の手紙を見て、暴力を用いずに小稲を救い出すには、これより手段はないと、とっさに思案はきまったが、はたして景元が動いてくれるかどうか、それが問題であった。

といって、この招かざる客は、できるだけ大物でないと、右源太を幻惑することはできない。かねて遠山左衛門尉は苦労人であると聞いていたので、誓願寺からすぐ大根河岸の佐平に案内させて、北の与力山村町之進を訪問した。

町之進は、出入り屋敷の事件ではあり、かつは直之助の誠意にうごかされて、

「よろしゅうございます。お奉行さまがなんといわれますか、ひとはだぬいでみましょう」

と、こころよく協力してくれた結果が、今夜のふいの下屋敷訪問というしばいになったのだ。

「多忙は、人の命に代えられませんからな」

景元は微笑しながら、

「人の命と申せば、お国もとでは多くの百姓の命が危機にさらされているとか、ご承知かな」

と、思いがけないことをいいだす。

思いがけないとは、相手が江戸を支配する町奉行だから、直之助がそう感じただけのことで、奉行職は毎朝評定所へ一度出仕する、天下の話題はたいていそこからはいるのだ。

「その儀について、直之助は明朝江戸を立つことにしています」

「なるほど――」

しばらく考えるようにして歩いてから、

「ひと足さきに国入りをされる、けっこうです

な。あなたにはそれだけの徳が備わっておられるようだ。一藩のことは一藩でおさめる、それに越したことはありません」

と、景元は幾度かうなずいた。

「及ばずながら、できるだけはやってみたいと思っています」

「世の中は、ときとしてたよりなく見えていて、正しいことには必ず味方があるものです、徳孤ならずですな。しかし、正しいものには、また必ず敵が多い。いわゆるけむったいほうの人間のほうが全部の八分から九分、人間というものはわがままなものです。じゅうぶんご自愛なさらんといけません」

「ご教示、身にしみます」

今夜この人に会ってよかったと、直之助はじいんと勇気がわいてくる気持ちだった。この人が今夜自分を理解してくれたということは、今後評定所が自分のすることを見ていてくれるということになるのだ。たとえ、どこで倒れても、もうむだ死ににはならないのである。

「景元の家出は放蕩からでした。あなたの小名木川無宿は、不満からではないかと、正直に申せば心配していましたが、もう時代が違ってきたのですな。もっとも、大名が遊んで暮らせる悠長な時代はすぎた。それだけ、世の中がせちがらくなったとでもいうのか」

景元は冗談のようにいって、からからと笑うのである。

7

そのころ——。

天井裏から油屋伝次に救い出された小稲は、新高橋のたもとに待っていた屋根船にのせられて、船は大川へゆっくりとこぎ出していた。

あかりの暗い船房の中に、伝次とふたりきりの小稲は、今はなんとなく伝次がこわい、助けられたというひけめが、身にできてしまったからだ。

仏間のすみの天井裏に、かすかな物音がして、ちらっと龕燈の灯が自分に向けられたときは、さすがにぎょっとしたが、

「おれだ、油屋だ」

上から小声でささやいた伝次は、たちまち音もなく仏間へおりてきた。

「捨だんなが迎えにきている。ちっとばかし荒仕事だが、音をたてねえように、早いとこ天井裏へぬけるんだ。おれの肩を踏み台にするがいい」

その肩を台にして天井裏へぬけると、伝次はいったいなにを台にしたのか、もうするりとあとからのぼってきて、天井板をもとどおりになおしていた。

ときどき龕燈の灯で見当をつけながら、伝次に手をひかれて、内玄関わきの小べやの押し入れへおり、ふすまをあけて、そこに待っていた伯父佐平の顔を見るまでは、まったく無我夢中で、からだじゅうにじっとり冷や汗をかいていた。

「どうだね、外は」

「心配ねえ、今のうちだ」

そこからは佐平の案内で、窓から庭へぬけ出すと、表玄関前のほうにいくつとなくちょうちんの灯があかるく、しかも案外ひっそりとしているのが、妙に異様な感じだった。

植え込みから植え込みづたいに、へいの下へ出た。その内側にも、外側にも、何人か味方の見張りがいたようである。

伝次が先へへいをのりこえ、小稲は伯父の肩をかりてへいへのぼり、外で待っている伝次の肩を踏み台にして、往来へおりた。

そこから新高橋まで小一町ばかり、三、四人の岡っ引きふうの男が、黙々といっしょに送ってきてくれた。そして、この船房へ身をひそめるなり、船はすぐ岸放れをしたのである。

時間にすればものの四半刻もたっていないのに、ほっとする小稲は、全身にひどい疲れをお

ぼえ、息がはずんでしようがなかった。しばらくは口をきく気力さえない。

あとから乗りこんだ伝次は、いつの間にか例のだんなふうに羽織まで着こんですわり、澄ましこんでタバコをすっている。

そのがっしりとした不敵なつら構えを見ているうちに、小稲はなんとなく乱れている自分の衣紋やひざ前が気になりだしたのだ。

こうして助け出してもらったのはありがたいけれど、この男は自分のからだに執念を持っている。いま飛びかかられたら、とても防ぎきれそうもない、と気がつくと、極度の疲労にとがりきっている神経だから、不安でたまらなくなってくる。

「だんな、うちの人はどこに待っていてくれるんです」

礼をいうまえに、ついそんな挑戦的なことばが口に出てしまった。

8

「殿さまは、お屋敷さ」

不服そうな小稲の顔を見て、伝次はにやりとわらった。

「もったいなくも、あねごはいまそのうちの人の頭の上を、おくめんもなくまたいできたんだ」

「あら」

「殿さまばかりじゃねえ、そのお座敷にゃ天下のお奉行さま、遠山左衛門尉さまがお乗りこみになって、右源太の野郎を引きつけ、よもやま話をなすっていた。その間におれが梁上の君子ってやつになって、天井からあねごをつれ出す、つまり、あねごがひょっと大内にいろけを出したばかりに、金さん奉行までご出役あそばしたんだから、深川の小稲あねごもたいした器量になったもんさ」

「じゃ、じゃ、あの玄関先のたくさんのちょう

ちんは――」
「知れたことよ、ふだんは八丁堀のだんなで、江戸の町をひとにらみにして歩く与力同心が、お奉行さまのお供できて、屋敷じゅうを固めていたんだ。というのは表向きで、今夜ばかりはぬすっとの油屋伝次のおてつだいさ。おかげで、小名木川のだんなを切ろうと裏表に伏せてあったごろんぼ浪人どもは、手も足も出なかった。なんにしても、今夜はあねごひとりのために、天下の大しばいだった」
小稲はただ目をみはるばかりだ。
「あの人が、あの人があたしのため――」
「うちの人がといったっていいぜ。いまさらしらじらしく他人さまづらをしなくったっていいやな。殿さまはね、なるべく人は切りたくない。といって、ぐずぐずしていればおおかみのような大内だから、あねごのからだにどんないたずらをしないともかぎらねえと、ひどく心配なすっていたようだ」
だいじょうぶだったんだろうな、それを心配しているように、伝次はじっと小稲の顔色をにらむようにする。
「あんなけだものに、指一本だってさわらせやしない。あたしはっきりといってやりました。ここはあんたたちが殺した菊乃さまのお仏壇の前だ、あたしはあんたたちの人でなしをけいべつする。もう口はきかないから、二度とからかいにきてくれるなって。あたしは死ぬつもりだった。菊乃さまの前で、菊乃さまとおなじようにあの人のことを思いつめて。あたしはいっさいけだもののお膳には箸をつけなかった。だまされて、あんな手紙は書いたけれど、あそこが座敷牢とわかってからは、どうかこんなあぶない屋敷へは近づいてくれないようにと、あたしは命にかけて、そればかりお仏壇に念じていたんです」
そういう小稲の青いほおへすうっと涙が糸をひいているが、それは感情に走っている涙では

なく、深い愛情から静かにあふれてくる覚悟の涙、そんなふうに見える美しい顔つきだった。

「小稲、おまえがほんとうに殿さまにほれて、だんなのほかに男はねえ、命も、世の中のどんな宝もいらねえっていうんなら、おれがひとついいことを教えてやろうか」

伝次がわざと冷たく切り出すのである。

9

「あたし、ほれてるだの、思ってるだのって、そんないいかげんなものじゃないんです。命をかけているんです。どうすればいいのか、教えてください、だんな」

小稲はみえもてらいもなく、率直だった。

「そうか、じらすわけじゃねえが、もう一つ、殿さまはいまだに死んだ菊乃さんの髪の毛をはだ身につけていなさるようだ。女は菊乃さんひとりときめているんだろう」

「まあ」

それほどまでにと、小稲は目をみはったが、聞いてみればありそうなことで、別にふしぎはない。そんな人がらだからこそ、女冥利に血の道をあげているのだが、

「じゃ、とても及ばぬ恋なのかしら」

と、ついため息が出る。

「そうわかったら、あきらめるかね、あねご」

「いまさら、あきらめるなんて――」

「けど、菊乃さんの髪の毛を持っている間は、殿さまはどんな女にも、はだはふれねえ気なんだろう」

「あたし、おそばにおいてもらうだけでもいいんだけど――」

「なあんだ、いくじがねえんだな」

伝次は冷笑するようにいって、

「おれの考えとは、だいぶ違うようだ」

と、皮肉な顔をする。

「お願い――。だから、教えてってたのんでいるんじゃありませんか」

泣きだしたいような小稲である。

「おれは殿さまに、一生坊主のまねはしてもらいたくねえ。だいいち、あの若さで、女なしでいられるなんて、不具じゃあるめえし、しまいにゃからだにさわってくる。気持ちだって、妙にかどが出てきて、へたをすりゃ気ちがいか、軽くても変人にはなるな。だんながそんなになって、人からまゆをひそめられるのは、おれは見ちゃいられねえ。おれが女なら、きっとだんなをくどき落として、菊乃さんの髪の毛を高野山へでもおさめさせてしまわあ」

「できるかしら、あたしにそれが」

「ただおいろけだけじゃだめだぜ。だんなはちっとばかり、ほかの男とは違うんだ。観音さまになってみねえ。慈悲があって、けだかくって、しかもおいろけがある」

伝次はふっとお方さまの臈たけた姿を焼きつくように思い出し、こいつは小稲には少し無理かなと思った。

小稲はやるせなげに、じっとうなだれている。

「つまり、その、なんだな、むずかしいことはぬきにして、おっかさんのような気持ちでだんなのことばかり考えてやってだな、おいろけのほうはあねごの生地でいいや、あんまりしつっこくしねえで、かゆいところへ手のとどくようにめんどうをみてやってみねえ、それなら、あねご、できるだろう」

「つい、あたし、しつっこくなるんだもの」

「押しつけちゃいけねえ、だんなのほうから手が出したくなるように、ふんわりと持ちかけるんだ」

なんだ、とんだいろごと指南になりやがったと、伝次は自分のおせっかいに気がついて、思わず苦笑が出る。

10

その夜、美代と要吉は、小稲の身を心配して、

いつまでも佐平のたよりを待っていた。
その佐平が子分のひとりを使いによこして、
「小稲ねえさんはいま無事に助け出されて、深川の家へ帰りました。くわしいことは明朝、佐平がうかがって申し上げるそうでござんす」
と、知らせてよこしたのは、やがて四つ（十時）に近いころだった。
「小名木川さまがついていられるのだから、たぶんなんとかなるとは思っていたが、とにかくこれでわたしも安心しました」
それを自分で娘のへやへ取り次いできた伊丹屋宗兵衛は、ほっとしたように一服つけるのである。
「よかったわ、ほんとうに。——ねえ、要ちゃん」
美代はいそいそと茶器を取り出す。このへやは、美代の好みで、お局ふうに日常のものはなんでもひととおり取りそろえてあった。
「要ちゃんとも、話し合っていたんです。若さまは考え深いおかただし、油屋さんもついているんですから、いなか侍などに負けるはずはないって。どんなふうに小稲さんを助け出したか、早くうかがいたいわ」
「そうだな、美代のときと違って、こんどは敵のほうから呼び出し状がかかっている。念には念を入れて、手くばりがあったろうと思うのだが」
「使いの者は、なんにもいっていなかったんですか」
「うむ。いずれ佐平がうかがいましてといってな。ひどく急いでいたようだ」
父と娘がうきうきと話しているのに、要吉はじっとうなだれたまま、話の仲間入りをしようとしない。まだ死んだ姉のことを思い出しているのだろうか、無理もないと、宗兵衛は不憫になって、
「どうした、要ちゃん。お茶がはいったよ。なにを考えこんでいるんだね」

と、菓子ざらをすすめながら、話しかけた。
「だんな、おれ困っちまったんです」
要吉がほんとうに困ったような顔をあげる。
「あら、なにをそんなに困っているの。話してごらんなさいよ。ちゃんと約束をしたでしょ、これからはあたしが要ちゃんのねえさんになってあげるんだから、なんでも相談してくれなければいけないって」
美代が横から引き取って、まっすぐ要吉のほうへ向きなおった。
「うむ。それが殿さまのことだから、困るんだ」
「直之助さまのことね。捨三郎さまがなにかおっしゃったんですか」
なんとなく胸がときめいてくる美代だ。
「おれ、あしたひとりで下谷の玄朴先生のところへ行けって、いいつけられたんです。きっと名医にならなくっちゃいけないって、きょうねえちゃんのお墓の前で、殿さまにいいつけられました」
要吉の顔がまっかになって、ひざの上でしっかりと握りこぶしをかためている。
「それは要ちゃんのまえからの望みだったんでしょ。いやになったの、玄朴先生のところへ行くのが」
美代は姉の気持ちになって、思わずきびしい目をする。

11

「違うんです」
要吉は強くかむりをふった。
「では、ひとりで玄朴先生のところへ行くのが恥ずかしいの」
それなら自分が送っていってやってもいいと思う美代だ。
要吉はまたかむりをふった。
そういうふたりの姿を、宗兵衛はほほえましくながめていた。要吉は漁師町に育って、こと

ばづかいも行儀もまだ粗野なところはあるが、頭も鋭く、なかなか気象者のようだから、いまに美代のいい相談相手になってくれるだろうと、たのもしいのである。

「殿さまは、だれにもいうなっていったけど、おれ心配だから、話しちまいます。お嬢さんもだんなも、ほかの者には黙っていてくれるね」

「人にいっていけないことは、だれにもいいません。若さまがなんとおっしゃったのです」

「あすの朝、国もとへ立つというんだ。油屋のおじさんとふたりっきりで」

「まあ」

美代は思わず目をみはって、父親と顔を見あわす。

「おれ、考えちまったんだ。殿さまが江戸にいなくなって、お嬢さんや小稲ねえさんはだいじょうぶかなあって。殿さまは、鬼もまもなく国入りをするから、そんな心配はいらないっていうけど、お嬢さんはどう思う」

「さあ――」

美代はうなだれてしまった。自分の身があぶないなどと考えるまえに、小名木川さまがいなくなったあとの江戸がどんなにあじけないものか、なによりもいきなりそれが胸へこたえたのである。

「それに、おいら、殿さまのことも心配になるんだ。お供が油屋のおじさんひとりじゃ心細いや。悪人はおおぜいだからね。おれ、子どもでそんなに役にたたないけど、玄朴先生のところへ行くのはあとまわしにしたいんです。そっと殿さまのあとからお供して、もし道中でなにかあったら、使い走りぐらいできます。黙ってついていってみようと思うんだけど、いけないかなあ」

実は、もし殿さまに万一のことがあったら、自分も切り死にをしよう、今はねえちゃんもこの世にいないし、殿さまがいてくれない世界になんか、生きていたってつまらない、そこまで

いちずに思い詰めている要吉だった。
「おとうさん、美代も要ちゃんといっしょに、若さまのあとを追います。行かせてくださいませ」
美代は自分の行く道を、要吉に教えられたような気がして、突然宗兵衛の前へ両手をつかえた。
「しかし、おまえ、長い旅を、女の身で――」
「いいえ、美代は一度高輪でお手討ちにあったからだですもの。わがままをいって、おとうさんには申しわけございませんけれど、あのとき死んだとあきらめて、若さまのお役にたててください。お願いいたします」
涙ぐんでさえいる恋娘の必死の顔を見て、宗兵衛は重苦しく腕を組んでしまった。

旅すがた

1

翌朝――。
小名木川の下屋敷で目をさました大内右源太は、昨夜の失敗を思い出して、さすがに苦い気持ちだった。
せっかく万全のわなを張っておきながら、これほどみごとに裏をかかれたことも珍しい。しかも、直之助のあとを追わせた尾行の者まで、「町奉行(まちぶぎょう)は新大橋の近くでかごを呼びましたが、捨三郎はどこで消えたか、もうそのときには姿がなかったようです」
と、これもうまくまかれて、手ぶらで帰ってきたのである。
――次に打つ手は。
主君帰国までに、もう半月あまりしかないし、

それまでになんとかして直之助を倒すか、それができなければ、せめて美代だけでも取りもどして帰国の供の中に加えるか、二つに一つ、どっちかを実現できる段どりがつかないかぎり、いかに鉄面皮な右源太でも、ちょいと斉信の前へは出にくいのだ。

むろん、自分の才覚がなければ、行列は尾張領が通れない。それだけでも明石藩は自分を大きく買う価値はあるのだが、右源太としては、早ければ七日の間、おそくともご帰国までに、きっと小名木川をかたづけてみせますと、主君に広言を吐いたてまえがある。

——やむをえなければ、強引に伊丹屋を急襲させるまでだが。

しかし、これは郊外の寮と違って、江戸のまんなかだ。たとえうまくいっても、あとへ必ず災いが残りそうだ。しかも、大内右源太という存在が、ともかくも江戸の町奉行の目にとまった今となっては、あまりへたなまねはできない。

「大内どの、ただいまご注進だと申して、深川の万七がきましたが」

廊下に立って、じっと思いふけっているところへ、弥兵衛が取り次いできた。

「庭へまわしてくれ」

万七には、ずっと小稲の家と伊丹屋を見張らせてあるが、いま右源太がいちばんほしいのは、捨三郎についての報告だ。まさか、こんな早朝から、どっちの家へも立ちまわるはずはあるまいから、このご注進はあまり期待できない。

「だんな、おはようございます。えらいことになりやしたぜ」

万七は庭先へまわってくるなり、得意そうな目を輝かした。

「なにをかぎつけてきたんだ」

「小稲がけさ早く、ひとりで旅に出やした」

「ふうむ」

ゆうべのけさだから、これはちょいと意外だ。

「どこへ出かけたんだ」

「そいつはわかりやせんが、品川のほうへ向かったのはたしかでさ」
「品川へな」
「変なことには、伊丹屋のお美代も要吉をつれて、旅じたくで、けさ品川のほうへ向かった。こっちへはおやじの宗兵衛と、大根河岸の佐平がこっそり見送りについていったと、子分のやつが知らせてきたんでさ。どう思いやすね、だんな」
「ふうむ」
右源太の目が異様に光りだす。

2

捨三郎を取りまく女がふたりまで旅に出る、品川へ向かったといえば東海道だ。
こっちの手がとどかないように、捨三郎がいふくめて旅へ出したのか、それとも捨三郎が旅へ出ると知って、ふたりの女があとを追うのか。
——あとを追うほうだろうな。
右源太はとっさにそう断定した。
おそらく、捨三郎の目ざすのは明石だろう。目的はなにかわからぬが、こっちが国入りをするひと足まえに国もとへ着いて、なにか一仕事しようというのだ。
国もとはいま一味の仕置き家老内藤次郎右衛門に、いっさい取りしきらせているが、無能なようでも城代家老がいるし、郊外には直之助の舎弟大学が、これも若隠居させられている。
いまこそ沈黙を守っているが、それを取り巻く不平組が家来のうちにも相当いるのだ。領内の百姓どもには不穏な形勢があるというし、これを扇動して、不平組を結束し、大学なり、名門の城代家老なりを表に立て、こっちの勢力をたたきつぶす。まさかあまくだりの当主はどうするわけにもいくまいが、根こそぎ地盤を切りくずされてしまったあとへ乗りこんだのでは、いかに右源太でもちょいと手の出しようがなく

なる。

——捨三郎という男の考えそうなことだ。

そう気がつくと、右源太は一刻も猶予ができなくなってきた。

どんな手段を取ってでも、絶対に捨三郎を明石へ入れてはならぬ。

「万七、ふたりの女にはひもがつけてあるだろうな」

「そこに如才はございません。どう遠く行っても、今夜は神奈川か程ガ谷泊まり、あとからすぐ使いをやるから、そのつもりでどこまでもつけろと、いいつけてありやす」

「よし、あとからわしも行く。必ず捨三郎がおなじ道を歩いているにちがいないから、おまえはそれを見つけ出して、あとをつけろ」

「かしこまりやした。あっしもね、どうもそんなことじゃねえかと勘ぐったんで、いそいで飛んできたんでさ」

「いそげ、うまくやれよ」

「へい」

万七はおじぎをして、足早に庭を出ていった。

——なあに、道中は長い。

そこへ気がつくと、右源太はやっとおちつきを取りもどした。しかも、問題の女がふたりまでついていくとすれば、こんどはどんな細工でもできる。ただ、自分が直接追えないのが、一抹の不安といえば不安だが、しかし、この道中双六、上がりの明石はまだこっちの地盤だ。今から次郎右衛門に密使を飛ばしておけば、万一途中でしくじっても、そこでじゅうぶん仕上げができるはずだ。

「まず、こんどはこっちのものだ」

右源太はついふてぶてしくなって、にやりとしながら、用人のほうへ手をたたく。

ちょうどそのころ、かいがいしい旅姿の小稲は、ひとりで高輪海岸へかかっていた。

3

まだ五つ（八時）で、朝日は青い海一面にからりと明るかったが、波をわたってくる春風が膚にひんやりと感じられた。

が、高輪通りはもう、品川へ潮干狩りに行く子どもづれの一団や、御殿山へ花見に押しかける連中たちとで、うきうきとにぎやかな人通りが絶えず、その中にまじって、きょうが江戸を振り出しの旅人たちの、一様に真新しいわらじの足どりも軽いようだった。

——あたしの恋路の旅。

小稲は何度かそんなことを考えながら、身がひきしまる思いである。

油屋伝次は、あす八つまでに高輪の大木戸で待っているがいい。捨だんなが通ったら、黙ってあとからついてきて、箱根を越えるまではけっして声をかけちゃいけねえ、箱根を越してからなら、まさか女にここからひとりで帰れとはいわねえだろうからな、と教えてくれた。

油屋が味方なのだから、心じょうぶには心じょうぶだけれど、それでももしここから帰れといわれるようなことがあったら、女の意地で、とても生きては帰れない旅である。

「あたりめえよ。女と生まれて、だんなのような男にきらわれるくらいなら、死んじまったほうがいいじゃねえか」

伝次はそういって勇気づけてくれた。

その伝次は、ついこのあいだまで、あんなに自分のからだに執念を持っていたのに、ゆうべはふたりっきりの船の中で、そんないやらしいけぶりさえ見せなかった。まさかあけすけに口にすることでもないので、黙ってはいたが、きっとあの人といっしょにいるうちに、すっかり性根が変わってきたのかもしれない。

「にいさんはまた、どうしてそうまで捨さんに打ちこんじまったんです」

それとなく聞いてみると、

「打ちこむってこともねえが、殿さまはまだ若いからな、おれが親友になっていてやらねえと、あぶなっかしくっていけねえ」

と、わらっていた。

「親友ってのは、お友だちってことでしょう」

「まあ、そうだ。おれがいいだしたんじゃねえ。殿さまが浜町のお方さまに、つまり捨だんなにはおふくろさまにあたる先代のご後室さまにも、そこのご用人さまにも、そういって引きあわせてくれたんだ。そこらにざらにころがっている親友とは、ちょいとわけが違うのさ」

「じゃ、あの人は今まで浜町の中屋敷にかくれていたんですか」

「おっと、そこまではまだいえねえ。親友の道にそむくんでね」

「あたしも早くあの人の親友にしてもらいたいわ」

「だからよ、観音さまになりゃ、いいんだっていってるじゃねえか」

あたしになれるかしらと、小稲はゆうべからそのことも考えとおしてきた。

——おや、要ちゃんじゃないかしら。

大木戸が近くなってから、小稲は思わず目をみはった。

4

よしず張りの茶店の前へ立って、しきりにこっちを見まわしていた要吉が、向こうもおやというように目をすえたようだったが、急にうさぎのように駆けだしてきた。

「小稲ねえさん——」

前へきて立ち止まって、こっちの旅姿をびっくりしたように見あげている。

その要吉もわらじをはいて、右の肩から斜めに小さなふろしき包みをしょった旅姿だ。

「おや、どこへ行くの、要ちゃん」

はじめは、自分を見おくりにきてくれたのかしら、どうしてけさ立つことがわかったろうと、

ちょいとふしぎだった小稲が、あらためてびっくりした顔になる。

「ごめんなさい、ねえさん」

要吉は顔をまっかにして、急にぺこりとおじぎをした。

「おれ、あんまり急いだんで、小稲ねえさんに相談する暇もなかったんだ。きのうお墓まいりのとき、小名木川さまがおれだけに、そっと、けさ旅へ出る、おまえは下谷へ行って勉強しろって、ねえちゃんのお墓の前でいいつけられたんだ。おれ、ずいぶん考えたんだけど、どうしても殿さまのお供がしたいんで、ゆうべお美代さんに相談してみたんだ。すると、お美代ねえさんも、あたしもいっしょに行くっていうもんだから、けさは早かったし、深川へまわっている暇がなかったんです。黙ってきちまって、すみません」

心から申しわけなさそうな要吉である。

「まあ、じゃ、お美代さんもいっしょなの」

「うむ。伊丹屋のだんなと、大根河岸の親分に送られてきて、あそこの茶店にさっきから殿さまを待っているんだ」

そういえば、自分も伯父に別れを告げてくる暇がなくて、置き手紙をことづけてきた小稲なのだ。

なるほど、要吉からあの人が明石へ行くと知れれば、やっぱり江戸にじっとしてはいられないお美代だろう。

——どこまで行っても恋がたき。

小稲はぼうぜんともし、そうならそうでなお負けてはいられないと、胸がもやもやしかけたが、すぐにはっと気がついた。

——観音さまの心にならなくては。

むりに押しつけるのではなくて、あの人の心の動くのを待つ。もしお美代のほうへ動いたとすれば、それはお美代がむりにあの人を奪ったのではなくて、自分の心がけが至らなかったということになるのではなかろうか。

恋がたき呼ばわりするなら、それはお美代ではなくて、むしろあの人をいまだにしっかりとつかんでいる髪の毛の主の菊乃さまということになる。どっちが早くあの人に菊乃さまを忘れさせるか、それはお美代と自分との競争ではなくて、おたがいにつくすべきをつくしながら、あの人の心に待つ、それよりほかに道はないのではなかろうか。

そう考えているうちに、小稲の胸はすうっとおちついてきた。

「小稲ねえさんは、どこへ行くの」

顔色を見ながら、要吉がおずおずと聞く。

5

「あたしもねえ、ゆうべわざわざ油屋さんが知らせてくれたもんですから、明石へお供するのよ。あたしは、要ちゃんも知ってのとおり、伊丹屋さんから小名木川さまへっていうお手まわり金をあずかっているでしょう」

小稲はうまい口実を思いつきながら、それでも少しおもはゆい。

「ああ、そうか。うれしいな。じゃ、みんなでいっしょに行けるんだね」

要吉としては、ひとりでも道づれの多くなるほうが心じょうぶらしい。

「とにかく、みんなにお目にかかりましょう」

小稲は要吉をうながして、大木戸のそばの掛け茶屋へはいっていった。

「お美代さま、小稲ねえさんもいっしょに行ってくれるんだって」

先へ駆けこんだ要吉がそう触れこむと、みんなの目がいっせいにこっちを向いた。

いちばんこわいのはお美代の目だと、旅すがたもういういしいそのほうへ目を向けると、

「まあ、小稲さんも――」

さすがにびっくりしたように目をみはったが、そのぱっちりとした目に少しも敵意らしいかげはなく、

「よかったわ、わたし――。おとうさん、小稲さんもお供をなさるんですって」

と、子どもらしくさっそく父親に告げる。

それはこの思いがけない道づれに力を得て、そらごらんなさい、小稲さんだって行くんですもの、そんなに心配しなくてもだいじょうぶですと、父親をなぐさめているような顔でもあった。

「そうか、小稲さんもねえ」

宗兵衛はおだやかに微笑してみせたが、胸に重い心痛のあるのは、どうにもかくしきれないようである。

「みなさん、おはようございます」

小稲は一同にできるだけ明るく頭をさげたが、しかし、それぞれの人の心のうちが一度に思われて、やっぱりお美代ほどには単純な気持ちになれなかった。

「どうしたんだ、お稲」

いちばんびっくりしているのは、伯父の佐平のようである。これはお美代とのさや当てになるのをよく知っているだけに、よけい複雑な気持ちらしい。

「きょうのことを、おまえ、だれから聞いたんだね」

「ゆうべ、油屋さんが教えてくれたんです、あんまり急なもんだから、おじさんのところへ相談に行く暇もなくて、置き手紙はしてきましたけれど、かんにんしてくださいまし」

「まあ、小稲さん、おかけ」

伊丹屋はあいた床几をすすめて、

「娘は要ちゃんから話を聞いて、それもゆうべのことだ、足もとから鳥が立つように、なんでも小名木川さまのお供がしたいといいだしたようなわけだが、どうなんだろうね、いったい。殿さまはお供を許してくださるんだろうか。こっちでひとりぎめにきめてかかって、女の足弱のこと、かえってご迷惑をなさるんじゃないだろうかね」

と、それとなく思いとまらせてもらいたいといいたげな口ぶりだ。

6

「だんな、ちょっと待ってくださいまし。そのご返事をするまえに、お美代さんとふたりきりで、しばらく話してみたいんですけれど」

小稲はなによりもまずお美代の胸の中を聞いてみなければ、うっかり返事はできないと思った。

「わたしに遠慮はいらない、ゆっくり話してみておくれ」

むろん、宗兵衛に異存のあるはずはない。

「お美代さん、ちょっと――」

お美代をうながして、小稲は掛け茶屋の横手へともない、海のふちへ行って立った。引き潮どきにはまだ間があるらしく、足もとの石崖へ波がよせては洗っている。

「お美代さん、正直に打ち明けてくださいね。いってみれば、お美代さんも、あたしも、小名木川さまが好きだからこそ、あとが追いたいんでしょう」

「ええ」

お美代は足もとへ目を伏せながら、はっきりとうなずいた。

「それなら、あたしといっしょではじゃまになる。ひとりで行きたい、ほんとうはそう考えているんではないかしら」

「いいえ」

いそいでかぶりを振って、こんどはまっすぐこっちを見つめながら、

「美代は小名木川さまを思っています。けれど、若さまが美代を好きになってくださるかどうかはわかりません。それは、好きになっていただけたら、どんなにうれしいかしらとは思いますけれど、もし若さまがどなたでも、たとえば小稲さんが好きだとおおせられるのでしたら、それはそれでよろしいのです。生意気のようです

けれど、美代はどなたのじゃまもしませんし、ただ自分だけの気持ちで若さまにご恩がえしがしたいと思っています」

少しも悪びれずにこれだけのことがいえる、このひとは生まれながらに観音さまの心を持ってきているのかしらと、小稲はうらやましくなってしまった。

「ほんとうはあたしもその気持ちなんです。正直にいって、これぱかりは押しつけたってどうにもなりはしない、あの人の心しだいですものね」

「小名木川さまのお好きなのは、なくなられた菊乃さまだけですわ」

ちらっと寂しい微笑をもらすお美代だ。

思いはおなじだから、その微笑がじいんと小稲の胸へしみて、もうそのことではなにもいうことはないと思った。

「それで、こんどの旅なんですけれどね、いまもだんなが心配なさるように、小名木川さまにとっては、きっと迷惑なことだと思うんです」

「ですから、わたし、要ちゃんにもそういっておいたんです。いまここで小名木川さまの前へ出れば、きっとしかられる。当分かくれてあとを追いましょうって。小稲さんはどうお考えになりますの」

おなじ観音様の心にはなっても、こうまで頭が違うものかしら、とてもかなわないと、小稲は黙って美代の顔をながめてしまった。

7

「あたしたちの真心が、あの人にどんな形になってとおるか――」

小稲はふっとはかないような気もして、はるかな青い海へつぶやいてみた。

――今っから、なんでえ。いくじがないぜ、あねご。命もいらねえはずだったじゃねえか。

油屋伝次の皮肉な顔が、まぶたをかすめる。

「小稲さん、美代は一度川崎のお大師さまへつ

れていかれたことがありますけれど、その先へ行くのはこんどがはじめてなのです。どうぞ、妹だと思って、力になってやってくださいませ」

お美代があらためて頭をさげた。

「実は、あたしもそうなんです。でも、女の一念ですからね、おたがいに力になりあって、行けるところまで行ってみましょうよ。だんなにはありのままいっておきましょうね」

「そうしてくださいませ。父には、家を出た日が命日だとあきらめてもらうように、たのんでありますの」

ちょっと申しわけなさそうな顔だが、お美代はそんなさばさばとしたことがいえるむじゃきな強さを持っているのである。

連れだって、茶店の横手を出ようとすると、

「小稲さん――」

はっとしたように、お美代が小稲の腕を押えた。

だんだん人通りがにぎやかになってくる往来を、どこの師匠の連中の花見か、十三、四人の男女がわらいたわむれて通るのを追い越すように、旅すがたの捨三郎がわき見ひとつせず、ゆうゆうと品川のほうへ通りすぎていく。ひと足あとから、振り分け荷物を肩にした油屋伝次が、これはいかにも旅なれているといったきりっとした足ごしらえで、すたすたとついていくのだ。

ふたりともまったくこっちへは気がつかなかったようだ。

「ねえ、わたしたちもいそがなくては――」

お美代はかっと興奮して、息をはずませているようである。

「だいじょうぶよ。どうせ今夜は程ガ谷泊まりなんですから」

そして、そこへ行けば伝次が、宿屋の前へ自分の笠を目じるしに出しておいてくれる約束になっているから、小稲は別にあわてることもな

いのである。

茶店の前へくると、

「小稲ねえさん、ほら、今あそこへ――」

と、要吉がそこに立っていて、これも目をぎらぎらさせながら、大木戸のほうを指さしてみせた。

「知っているのよ。心配しなくてもだいじょうぶ」

小稲はわらってみせて、この人たちはまだ子どもなんだから、道中はあたしがよっぽどしっかりしていなければと、ふっとそんな責任を感じてきた。

「おとうさま、では、美代はすぐまいります。小稲さんといっしょなのですから、どうぞなにも心配なさらないでくださいませ」

お美代はもう気もそぞろらしく、いきなり、父親の床几の前へ行って、別れのあいさつをのべ始めるのだ。

8

「それじゃ、おまえ、ほんとうに――」

宗兵衛はあえぐようにいって、世にも悲しげな目をしばたたいていた。今の今まで、なんとか思いとまらせる手はないか、いや、ひょっと小名木川さまが引きとめてくれるのではないかと、そんなそらだのみをしていたのだろう。

「おじさん、行ってまいります。ごめんどうでも、おついでがあったら、ときどき深川の家を見てやってくださいまし」

小稲もできることなら、いまさらくだくだと親たちの嘆きを慰めるような気やすめを口にするのはこっちがつらいので、あっさり佐平にあいさつをした。

「そうか。どうしても行くのか」

姪は世なれているとはいっても、長い道中のことだし、若い娘と子どもきりの旅、世の中にどんなに悪党が多いものか、稼業がら知りすぎ

るほど知っている佐平は、思わず隣の伊丹屋と顔を見あわさずにはいられなかった。

「小稲さん、だいじょうぶなんだろうかね。小名木川さまは、こんどのお供をご存じなのかえ」

「いいえ、だんな、箱根を越えてからふいにお目どおりをして、いやでもお供をさせていただこうという計略なんです」

「そんな乱暴な、——もし、そのときになって、殿さまがいけないとおっしゃったら」

「おとうさま、もうなんにもおっしゃらないで——。わがままをいってすみませんけれど、ゆうべからのお約束なんですもの、美代はないものと思って、行かせてくださいませ」

きっぱりといって、おじぎをしながら、美代はあとじさりをする。もう行きますといわぬばかりだ。

「そうか。そうだったな。旅立ちに愚痴は、縁起でもなかった。気をつけて。いいかえ、からだに気をつけて、おそ立ち早泊まり、けっして無理な夜道などしちゃいけない」

われにもなく立ち上がった宗兵衛は、

「はい、わかっています」

と、半分は表へ気をひかれて歩きだす娘の肩をかかえるように店を出ながら、

「いいかえ、なにかあったら、どこからでもすぐ早飛脚をおくれよ。おとっつぁんが自分で迎えに行くなり、人をたのむなり、きっと捨ててはおかないんだから」

と、かんでふくめるようにいい聞かせている。

「おとっつぁんも、おとっつぁんも、おからだをたいせつにしてね」

とうとう美代は泣き声になって、いそいでそで口に目をあてたと思うと、

「行ってまいります。要ちゃん、いそぎましょうね」

と、急にしゃっきりとなって、品川のほうばかり気にして表に立っていた要吉に声をかける

なり、さっさと歩きだした。
「お美代、——お美代」
よろめくようにふた足、み足、宗兵衛は娘のあとを追おうとしたが、浮き立つような人通りに気がついて思いとまったか、ぼうぜんとそこへ立ちつくす。

9

「だんな、それではごきげんよう」
小稲が、娘のほうへばかり気をとられている宗兵衛のうしろからあいさつをすると、
「ああ、小稲さん、たのみます。なにもかも、ただよろしくおたのみします」
娘を思う親心で、宗兵衛はすがらんばかりに、何度も頭をさげた。
「だんな、及ばずながら、あたしのできることだけはきっといたします」
安心なすってくださいといっては、いいすぎになるので、小稲はきっぱりとひきうけて、
「おじさん、ではごきげんよう」
と、佐平のほうへおじぎをした。
「行くのかえ。ようく気をつけてな」
佐平はことばすくなに、老いの目をしばたたいている。
「ごめんくださいまし」
ふたりにもう一度会釈をして、小稲はお美代と要吉のあとを追った。
その三人の姿が、花見の人通りのかげに見えなくなるまで立ちつくしていた宗兵衛と佐平は、どっちも相手に顔を見せないようにして、そっと涙をふいた。
「帰ろうかね、親分」
「出かけましょう。——茶代を払ってきやすから、ちょいとお待ちなすって」
佐平はいそいで茶店へはいっていった。さっきから奥の座敷で休んでいた若党ふうの若い男が、いまわらじをはいているところだった。
——はてな。

そこは稼業がら、旅はまだ振り出しだというのに、こんなところでわらじをぬいで休む、なんだか妙なやつだと、それとなく見ているうちに、若党はしたくができて、ずんずん品川のほうへ歩いていってしまった。

「どうしたね、親分」

表でぽかんと人通りをながめていた宗兵衛が、佐平のそぶりに気がついて聞いた。

「いや、なんでもありやせん」

話してみたところで、いたずらに心配させるばかりだからと、佐平は苦笑いにまぎらせ、

「若い娘の心なんてものは、いちずなもんでござんすね。ただ好きだから追っていく、まるで日高川の清姫でさ」

と、ばつをあわせておいた。

「おかしなもんで、御殿山の花を見て帰る気にもなれないねえ」

伊丹屋はとぼとぼと、札の辻のほうへ歩きだす。

高輪通りはしばらくの間、というよりきょうは一日じゅう、いよいよ雑踏するばかりだ。

それから半刻（一時間）ほどたって、深編み笠をかぶった大内右源太が、旅すがたの梶原弥兵衛、北崎九兵衛とつれだって、すっと大木戸のそばの掛け茶屋へはいった。

「やあ、だんな、お待ち申しておりやした」

床几からひょいと立って出迎えたのは、これも旅すがたの深川の万七である。

右源太は笠をとって若党にわたし、海が見晴らせる座敷の奥へ、すっと上がっていった。

あとから、三人、四人と、旅装束の浪人どもが茶店へ集まってくる。

10

「万七、報告を聞こう」

右源太は弥兵衛と九兵衛を左右にひかえさせて、万七を前へ呼んだ。

「へえ、万事こっちの見こみどおりでござんし

た。いちばんはじめにこの茶店へついたのは、お美代と要吉で、伊丹屋と佐平が送ってきたそうで、小稲はあとからひとりでやってきた。話の様子じゃ、どっちも相談ができていて落ちあったわけではなく、偶然にぶつかったふうだったといいやす」

「うむ」

すると、捨三郎のほうから女たちを旅へさそい出したのではなさそうだと、右源太にはすぐ読める。

「あっしは金杉橋のあたりで、捨三郎と油屋伝次に追いつきやした。ふたりはここに女たちが待っているとは気がつかなかったふうで、どんどん通りすぎてしまいました。まもなく、お美代と小稲が伊丹屋と佐平に別れをつげて、要吉をつれ、捨三郎のあとを追いやした。かれこれ半刻（一時間）ばかりまえでござんす」

「どっちにもひもはつけてあるんだろうな」

「そこに如才はござんせん」

「昼飯は川崎あたり、今夜は程ガ谷泊まりだろう」

女たちが自分のほうから捨三郎を追いかけたのだとすれば、どの辺で名のって出るつもりか、へたをすればそこから追いかえされるおそれがあるから、おそらく箱根を越してからだろう。こっちはなるべくそのまえにふたりをとりこにしてしまう必要がある。

「ご苦労だった。万七、道中はこのご用人ふたりが采配をとることになっているから、おまえはこのふたりのさしずにしたがって、子分どもを働かせてくれ」

「かしこまりやした」

「今夜は両方の泊まる旅籠をたしかに見とどけておいて、宿はずれまで味方を迎えに出ていてくれ。あとの策はそこで渡すことにする」

「へえ」

「わかったら、おまえはひと足さきに出発して、中間で、敵と味方との連絡をとってもらうこと

にしよう。すぐ出かけてくれ」
「へえ。じゃ、ご用人さま、ひと足さきに突っ走りやす。ごめんなすって」
万七はふたりのほうへ頭をさげて、わらじをはくといそいで茶店を出ていった。
「両人、女たちのほうはなるべく今夜のうちに始末してしまったほうがいいようだな」
右源太は声をひそめて、ふたりにいいつける。
「おそらく、今夜は捨三郎と女たちは別々の宿へつく。そこがつけめだ。どんな策に出るかは、万七の報告をうけとってから、よくふたりで相談するがよい。場合によっては、小稲のほうは捨三郎のおとりに使ってもよいが、美代だけは必ず無事に江戸へ送ってくれ。その護送にはふたりのうちひとりがあたることだ。浪人どもだけに任せておいては、なにをするかわからんからな」
そんな注意を与えながら、右源太は自分がいっしょに行って采配がとれないのが、心もとなくもあり、残念でたまらなくもあった。

道中笠

1

その日、捨三郎は程ガ谷の桔梗屋という宿へ、旅の第一のわらじをぬいだ。江戸から八里半、まだ日のある夕がたで少し無理をすればじゅうぶん戸塚まで足がのばせるのだが、
「長い旅は、はじめっから無理は禁物でさ。きょうはほんの足ならしということにして、ここ泊まりにしやしょう」
と、油屋伝次がすすめたのだ。
けさ、元柳橋の例の船宿から立った捨三郎は、浜町の中屋敷の玄関まで、別れのあいさつに立ちよった。あの夜以来はじめての訪問である。

「富右衛門、しばらく国もとへ行ってまいる。お方さまがお目ざめになられたら、そのほうからよろしく申し上げておいてくれ」

あわてて出てきた富右衛門老人に、捨三郎が気軽にあいさつをすると、

「お国もとへな。明石へまいられるのでございますな」

と、老人は目を丸くしていた。

「うむ、明石へ行ってくる」

「ちと遠すぎますな。あまりだしぬけで、なんと仰せられますか、しばらくお待ちを願います」

「いや、朝が早い。わざわざお方さまのお目をさますには及ばぬ」

「でもござりましょうが、あとでおしかりをうけましても、年寄りが迷惑つかまつります」

老人はずんずん奥へはいってしまった。

——とっつぁん、きょうはふきげんらしいぞ。

少し離れてひざまずいている伝次には、そう見えた。いくらおやじがふきげんでも、この旅を思いとまるようなだんなじゃなし、しようがねえからってんで、なにがしか餞別を包んで出てくるんだろうと思っていると、柔らかい衣ずれの音がして、すらりとついたての前へ立ったのは、玉野ひとりをしたがえた、被布姿のお方さまだった。

——わっ、観音さまだ。

伝次はどきっとして、まさかけさはお目にかかれないだろうと、ひそかに失望していたところだけに、からだじゅうがかっと熱くなってしまった。朝の光の中で見るお方さまは、いよいよ朦たけて、伝次には全身から紫色の後光がさしているようにも見える。

「これはこれは、早朝おさわがせして、恐れ入ります」

捨三郎がていねいに頭をさげる。

「直どのは、明石へまいられるそうですね」

「はい。ちと思いたったこともございますの

で」
「むりに引きとめても、今はむだでしょうから、とめはいたしませぬ。一日も早く、無事に江戸へもどってくれますように――」
「はい」
「このあいだの、根岸のこともうかがっております。あまり元気にまかせませぬよう、松がいつもここで胸を痛めておりますことを、お忘れになってはいけませぬ」
それはしみじみと胸へしみとおるような、慈悲ぶかい観音さまの声音で、伝次はまるで自分が声をかけられているように、ありがたくてたまらなかった。

2

「じゅうぶん自重いたしますから、どうぞご安心くださいますよう」
捨三郎はおとなしく答えていた。
「若さま、お方さまからのご餞別でございます」
富右衛門老人がふくさ包みをのせた盆をささげて出てきて、捨三郎に告げた。
「せっかくのお志ゆえ、直之助ありがたくいただいてまいります」
「これ、親友、親友――」
老人が伝次を呼んだ。
「あっしでござんすか」
「うむ、これは親友にあずけておこう。受けとりなさい」
「へえ」
うれしいことをいってくれるおやじだと、おじぎをしながら前へ進んで、重いふくさを押しいただき、
「たしかにおあずかりいたしやす」
と、伝次はお方さまのほうへ、ていねいに頭をさげた。なにかいってくれるとありがてえんだがなあ、と思ったとたん、
「供はそなたひとりですか」

と、妙なるお声音だ。

「へえ、あっしひとりでござんす。この親友めがお供いたしますかぎり、だんなにはきっと自重いたさせやすから、どうぞご安心願います」

伝次は半分夢ごこちで、そんな口をきいていた。

「たのみおきます」

お方さまはほのかに微笑される。

――そうれみねえ、たのみおきますとおいでなすった。しっかりしろよ、伝次、観音さまじきじきのおいいつけだぞ。

中屋敷をおいとまして町へ出てからも、伝次はお方さまの声が耳を離れず、世にも気品高いほのかな微笑がまぶたに焼きついて、しばらくはまるで紫の雲の上を歩いているような気持ちだった。

しかし、高輪通りへ出たころには、それはそれとして、どこかに小稲観音が待っているはずだから、伝次はもういつもの人一倍働く目と耳とを鋭くとぎ澄ましていた。そして、大木戸のそばの掛け茶屋に、旅じたくの要吉がいるのをまず見つけ、おやと思って捨て目を使ってみると、小稲のほかにお美代観音まで旅じたくでかくれているのを見てしまった。

だんなはと見ると、これはまったく気がつかなかったようで、さっさと通りすぎている。

――さあ、わからねえことになった。

だれが要吉とお美代に、きょうの旅立ちのことを教えたのだろう。いわば恋がたきの小稲が、いくら観音さまの心になったからといって、わざわざだんなの旅立ちを知らせるはずはない。

その詮議はまああとまわしとして、要吉とお美代はどこへ行く気なのか、あの様子では、どうもだんなのあとを追う気のように思える。

小稲にお供をすすめたのは、小稲なら道中で少しぐらいなにかあっても、それを切りぬけていける度胸と経験があると思ったからで、それがお嬢さま育ちのお美代がいっしょでは、そう

はいかない。必ず足手まといとなること、うけあいなのだ。

3

——いっそ、今のうちにだんなにうちあけて、なんとか始末をつけておいたほうがいいんじゃねえかな。

油屋伝次はみんな自分の責任のような気がして、一日じゅう迷いぬいてしまった。

むろん、捨三郎に相談すれば、女たちは、いや要吉も、即座に追い帰されるにちがいない。それではせっかく命がけで出てきた小稲がかわいそうだし、命がけといえばお美代観音だってその気があればこそ、ああしてあとを追ってきたので、その心根を思えばどっちへひいきをするということもできない伝次なのだ。

ただ心配なのは、道中で事がおこった場合、なにかにつけていちばん困るのはお美代自身じゃないかと、それが気苦労にもなり、まさか捨ててておけないから、負担にもなってくる。

現に、今夜の泊まりを程ガ谷ときめて、早めにだんなの足を引きとめたのも、女たちの足を考えに入れてのことで、いったい今ごろ女たちはどの辺を歩いているのか、できればここから自分だけちょいと引きかえしてみたいくらいである。

「お早いお着きさまで、——毎度ありがとうございます」

店の土間へはいると、番頭や女中が飛んできて、口々に出迎えた。

育ちが育ちだから、捨だんなはまことに鷹揚なものである。黙って上がりかまちへ腰かけて、わらじの足を投げ出して待っている。しかたなく親友はたちまち下郎に早変わりをして、だんなのわらじを脱がせてやらなければならない。

——しようがねえや。お方さまにたのまれちまったんだからな。

伝次は番頭まかせにはせず、よろこんで捨三郎の足もとへうずくまるのである。
「油屋――」
わらじのひもをとかせながら、捨三郎が呼んだ。
「なんです、だんな」
「おまえはあがらずに、すぐ女たちを見てやるがよい」
「えっ、なんですって」
伝次はびっくりして、捨三郎を見上げた。
「知っていたんですかえ、だんな」
「うむ。しかし、女たちにはまだ知らぬことにしておけ。宿も別のほうがいい」
「へえ」
「たぶん、ひもがついていると思うが、これも気がつかぬふりがよい」
「ひも――ひもがねえ」
「ひもがついていれば、あとからおおかみがつながってくるな」
捨三郎はわらいながら、すすぎがすんだので、すっと上へあがった。
「番頭さん、いちばん上座敷をたのみますよ。わたしはちょいと用を足してくるから」
伝次は番頭にたのんでおいて、いそいで店を出た。
入れちがいに、三十がらみのりっぱな侍が、若党ひとり、中間ふたりをしたがえて、土間へはいってくるのに出会った。たしか六郷の渡しで、一つ船だった主従である。

4

――さあ、わからねえ。
表へ出た伝次は小首をかしげてしまった。
自分の目についたくらいだから、女たちの旅姿が捨三郎の目についていたとしても、それはそうふしぎがるにはあたらないが、それを今まで黙ってついてこさせたのは、いっしょに明石までつれていく気なのだろうか。

それなら一つ宿へついたほうが、かえってめんどうがなくてよさそうなものだのに、知らん顔をして別のところへ泊まらせるという。

いったい、なにを考えているのだろう。

もう一つは、ひもがついているかもしれないから、気をつけろということだ。桔梗屋を出るとき、それとなく気をつけてみたが、別にそれらしいやつの姿は目につかなかった。これは大内右源太というやつの心をくんでみての、だんなのあてずっぽうなのか、それともなにかたしかな根をつかんでいてのことなのか。

――伝次、しっかりしろよ。てめえこのごろ少し、お方さまの夢ばかりありがたがりすぎて、焼きがまわったんじゃねえのか。

われながら、伝次は、妙に顔が赤くなってくる。

伝次が小稲たち三人の姿を見かけたのは、程ガ谷の宿を出はずれて、十町もあともどりした並み木道だった。

旅なれない女たちは、もうぐったりとして、ひどく足が重そうだ。元気なのは要吉ひとりで、目ざとくこっちを見つけ、

「油屋のおじさあん」

と、手をあげながら、うれしそうに駆けだしてくる。

――ちくしょう、たしかにひもがついてやがる。

伝次は要吉のほうへ手をふりながらどきりとした。まだ日没まえのあかるい夕がただから、街道には遠く近く幾組みかの旅人が、きょうの泊まりをいそいでいるが、女たちの十間ばかりうしろからぶらぶら歩いてくるのは、三度笠をかぶったやくざふうのやつで、要吉が油屋のおじさんと呼んで駆けだしたのを見ると、連れでも待つように、ふっと立ち止まってうしろをふりかえっている。

やくざはたいてい足の早いものだ。女たちと歩調がいっしょになるはずはない。が、それは

それとして、
「どうした、要ちゃん」
油屋伝次はけぶりにも出さず、もうなつかしそうに要吉の手をとっていた。
「おじさん、殿さまはどうしたんです」
「もう宿へ着いたよ、おじさんはそっとぬけ出して、心配だから、要ちゃんたちを見にきてやったんだ」
「油屋のおじさん、ごきげんよう」
女たちも急にしゃっきりとなって、現金なものである、お美代はうれしそうに、そんなあいさつをするのである。
「お嬢さん、正直にいうと、おじさんはあんまりごきげんがよくねえ」
伝次はわざと気むずかしい顔をしてみせる。
「あら、どうしてでございましょう。美代が黙って、若さまのおあとをお慕いしてきたからなのですか」
お美代はむじゃきに小首をかしげている。

5

浪人組をひきいた梶原弥兵衛と北崎九兵衛が、どっちも重い気持ちで、おなじ程ガ谷の宿はずれの並み木道へかかったのは、もうたそがれどきであった。
「だんな、いいお休みどころを見つけておきやした」
道ばたの、もう店をしまったよしず張りの掛け茶屋を占領して、三人の子分たちと待ちかねていた深川の万七が、すぐに飛び出してきて、ふたりを迎えた。
「両方の泊まった先は、わかったのか」
弥兵衛が聞く。
「わかりやした。小名木川が油屋と泊まったのは桔梗屋という旅籠で、小稲たちはそのすぐ筋向かいの玉屋という家でござんす」
「ほかになにか変わったことはないか」
「別にありやせんが、子分たちの話だと、油屋

は一度小名木川を桔梗屋へ送りこんでおいて、自分だけこっそり宿を飛び出し、小稲たちを迎えにきて、玉屋のほうへ泊まらせたということでござんす」

「ふうむ」

どうするというように、弥兵衛は北崎の顔を見た。

「両方へ見張りはつけてあるだろうな」

北崎が聞く。

「いいえ、今夜はもうだいじょうぶだと思ったんで、みんなでここでだんながたをお待ちしていやしたんで」

「それはゆだんだ。万一そんなことはなかろうとは思うが、もし宿をかえないものでもない。すぐ見張りをつけなさい」

「なるほどねえ。――由、おまえ飛んでくんな。ひとりでいいや、宿屋は両方筋向かいなんだから。あとからかわりをやってやる」

「へえ」

由造はおじぎをして、すぐ宿場のほうへ駆けだした。

「弥兵衛、宿へついてごたごたするより、ここでいちおうてはずをきめておこうではないか」

「そうだな」

「牧野うじと岩佐うじに立ち会っていただこう」

「承知しました。――諸君は思いおもいに休憩しながら、外を見張っていてくれ。如才もあるまいが、あまり目だってはいかんぞ。往来の者に怪しまれるからな」

大将格の牧野一角が浪人どもにいいつけて、四人はもう薄ぐらくなった掛け茶屋の中へはいった。

――まるで山賊だな。

小心な梶原弥兵衛は、ますます気が重くなる。しかし、こんどの旅は、小名木川さまを討つか、お美代をつれてかえるか、どっちか一つを果たさなければ、九兵衛も自分も首がつながらない

のである。
しかも、お美代をつかまえるのは今夜がいい、策はおまえたちでたてろと、高輪を出るとき、右源太からくれぐれも念を押されている。
——はたして、そんなうまい策があるだろうか。
弥兵衛は自分になんの策もたたず、他力本願だけに寒々としたものを感じるのだ。

6

「どうだな、ご両所、こんどはどの道あんたがたに腕をふるってもらわなければならんのだ。今夜のうちに、なんとか美代をつれもどすくふうはないか遠慮なく意見をのべてみてくれ」
老巧な九兵衛は、まず牧野と岩佐をおだててかかる。どっちも江戸では相当名の売れたごろつき剣客で、他流試合に乗りこめば、たいていの道場ではわらじ銭を出して試合を敬遠する。それだけに腕もたつが、弁舌もなかなかさわやかだ。
「北崎さんのいわれるくふうというのは、美代を目だたないように盗み出すことですか、それとも、堂々とぶつかって取り押えろということですか。どっちです」
鼻っぱしの強い岩佐金助が、得意の理屈をかつぎ出す。
「どっちでもよろしいと思う。要は、なるべく美代を今夜じゅうに手に入れるにある」
「では、堂々とぶつかってもいいのですな」
「なにかくふうがあるのかね」
「いや、くふうなどという、そんなめんどうなものはいらんと思いますがねえ」
金助はひどく自信満々である。
「というと、手だては——」
「美代はまだ正式に明石家から暇をとっていないそうですな」
「うむ」
「それならなお仕事がしやすい。北崎さんが上

使として、今夜美代の泊まっている玉屋へ乗りこむ。君公の上意で迎えにきたといえば、美代はいやだとはいえない立場だ。たとえいやだといっても、上意ならこっちに生殺与奪の権がある。なわにかけてもかごへのせてしまえばいい」

そう簡単にいけばなにも問題はないのだ。しかし、相手は他人がおおぜい泊まりあわせている宿屋にいるのだ。

「もしじゃまがはいったらどうするな。へたをすると、玉屋だけではなく、程ガ谷の駅じゅうの騒動になりはせんかな」

「なってもかまわんでしょう。こっちに正当な理由があるのですからな。しかし、実際は駅じゅうの騒動にならんうちに、さっさと事を運ぶ。つまり、あっという間に美代をかつぎ出してかごにのせ、駅じゅうの騒動になるころには、もう風のごとく程ガ谷の駅を去っている、そういかなくては成功しませんな」

「筋向かいの桔梗屋に、小名木川さまがお泊まりになっているのを、勘定に入れてあるかな」

弥兵衛がわきから注意した。

「むろん入れてあります。それこそこっちの望むところだ。玉屋の騒動を聞きつければ、捨三郎はきっと飛び出してくる。こっちはあらかじめ表へ刺客を伏せておいて、いきなりたたっ切ってしまう。一度にかたづいてしまうじゃありませんか」

「そううまくいってくれればなあ」

さすがの九兵衛も、思わず弥兵衛と顔を見あわせてしまった。

「こんなことは、そう逡巡していたら際限がありませんぞ。どうせ兵は詭道なりですからな。断じて行なうところに勝機があるんだ」

金助は主張してやまない。

7

「なるほど、貴公のいうことは正しい」

金助より世なれている牧野一角が、用人たち

の顔を読んで、おもむろに口を入れた。
「しかし、事が人の集まっている宿駅のまんなかだけに、もし失敗した場合、二番手のきかなくなる恐れがありはせんかな。どうだ、おなじ貴公の策でも、これをあすの朝実行してみるんだ」
「ふうむ。あすの朝やるのと、今夜やるのと、どういう得失が生じるんだね」
金助はわからなそうな顔をする。
「おれの考えでは、敵はたぶんあすは小田原泊まりになる。次の箱根越えは、朝からでないと、一日では越えられないからな。すると、程ガ谷から小田原までは十二里あまりの旅だ。明け六つに程ガ谷を立っても、小田原へ着くのは夜になる。まずあすは六つ（六時）立ちだろう」
「なるほど――」
「程ガ谷を出るとすぐ、権太坂へかかる。それを越すと、武州から相州へはいり、また信濃坂を越えることになるんだ。小名木川と女組はむろん別々に立つ。小名木川が先で、女組がこれを追うという形になるんだ」
「まずそうだろうな。女組は、うっかり小名木川に顔を見られると、江戸へ追いかえされる恐れがあるからな」
「そこがこっちのつけ目だ。ひと組みは信濃坂に陣取っていて、小名木川がきたらこれに不意討ちをかける。ひと組みは権太坂に待ち伏せして、美代がきたら、北崎さんに例の上意を持ち出してもらい、有無をいわせずかごへのせてしまうんだ。これなら、朝が早いから、まだそう通行人もなかろうし、きっとうまくいくと思うがどうだ」
「まいった。たしかにそのほうがおもしろい。それにきめよう」
金助がまっさきに賛成する。
「いかがでしょうな、ご両所。これなら、かりにどっちが失敗しても、二番手がきくでしょう」

「どうだな、弥兵衛。まず上策とわしは思うが」
九兵衛もどうやら心が動いたようだ。
「それで、小名木川さまのほうは、どっちが受けもつな」
九兵衛が女組の采配をふるうとすれば、弥兵衛はいやでも捨三郎組をうけもたなくてはならない。小名木川さまは、頭といい腕といい、ひととおりの人物ではないうえに、弥兵衛は長くその人のそばに仕えていた弱みがある。失敗する可能性はこっちが多いだけに、なんとなく不安だ。
「小名木川にはわしがあたろう」
金助はこともなげにいった。おなじ成功するならこのほうがはでだし、こっちは切りっぱなしで逃げてしまえばいいのだ。女組のほうが仕事はやさしいが、そのかわりかごを江戸までまもっていく責任があるからうるさい。
「よかろう。しからば、一番手は岩佐金助にゆずろう。しっかりやれよ」
年上の牧野一角は、別にてがら争いをしようとはしなかった。

8

小稲たちを桔梗屋の筋向かいの玉屋へ案内して、その玄関先から宿場の入り口まで取ってかえし、梶原北崎以下十人ばかりの浪人組が、深川の万七たちを先に立てて程ガ谷へ着いたのを見とどけてから、油屋伝次が桔梗屋へ引きかえしたのは、やがてもう宵の口であった。
捨三郎はまだはかまもとらず、おとなしく待っていてくれる。そういう点は殿さま育ちだから、ひどく行儀がいい。いや、ひとりではなんにもできないのかもしれない。
「おどろいたなあ。ひとっぷろあびて、先に女でもからかいながら、一杯やっていなさりゃいいのに」
「ひとりではつまらぬ」
「そうやってぼつねんと、仏さまのようにすわ

ってたいくつしてるよりましだろうにな」
「いや、考えることはたくさんある」
「とかなんとかおおせあそばして、ほんとうはひとりじゃなんにもできねえんじゃないんですかえ」
「それもあるな」
鷹揚にわらっているのが、伝次にたまらなくうれしいところでもある。
「だから、だんな、世話をやきたがって、わざわざあとを追いかけてきている腰元どもがふたりまで、うろうろとため息ばかりついているんだ。どっちかひとり、好きなほうを呼びよせやしょうか。どっちにしやすね」
ちょいと気をひいてみる伝次だ。
「親友が世話をやいてくれるから、その心配はいらん」
「だんな、ついでだから聞いておくんですがね、お美代観音と小稲観音と、ほんとうのところどっちが好きですね」
とうとう伝次もそこへすわりこんでしまった。こいつは一度ぜひ聞いておく必要があるからである。
「ふたりは親友が呼び出してきたのか」
「冗談じゃねえ。もっとも、小稲観音はあっしが誘い出したんですがね、お美代観音のほうは、要坊の口からこんどの旅のことを聞いて、家を出た日を命日と思ってくれとまで覚悟をして親に別れ、おあとを慕ってきたというんでさ」
「要吉はなぜ下谷へ行かなかったのかな」
「それが、要坊にもまた一理屈ある。ひとりではなんにもできねえ殿さまだから、せめてこんどの旅がすむまで使い走りぐらいの役にたちてえ、名医になるのは、それからでもおそくはなかろうと、つまりその要坊の覚悟を聞いて、お美代観音はかっと清姫になっちまったんですね。もっとも、あの娘はむじゃきでほがらかだから、蛇にはならない。きらわれたとわかれば、日高川の岸で立ち止まって、涙をこぼしな

がら笑って、手をふって見送るほうでしょうね」

話しながら、伝次は変な気がしてきた。どっちも泣かせたくないような気がしてくるのである。

「小稲のほうは知ってのとおり、きのう小名木川の座敷牢の仏壇の前で、ちゃんと死ぬ決心がついているんだから、文句なしだ。そこで、どっちかひとり江戸へ帰すんなら今のうちがいい、だんなはどっちを帰しやすね」

9

「小稲も美代も、もうしばらくほうっておくがよい」

捨三郎の返事は意外だった。

「すると、どっちにするか、まだだんなは迷っているんですかえ」

こりゃ脈がありそうだと、伝次がちょいと意気ごみそうになると、

「迷っているのではない。帰すときはみんないっしょに江戸へ帰す。月がかわるまで、箱根で湯治でもさせておくがよい」

と、おだやかにわらっているのだ。

「なあんだ、そのつもりだったのか」

今ふたりを江戸へ帰すと、右源太がまたどんな小細工をするかもしれない。どうせ出てきたものなら、月がかわって鬼どのの国入りが始まるまで、湯治でもさせておいたほうが無事だという捨三郎の腹なのだろう。

「けどねえ、だんな、あっしは心配しているんだ。坊主じゃあるめえし、いい若い者があんまり女のはだを近づけねえでいると、しまいにゃ常軌ってやつが狂って、変人になっちまうんだ。鬼どののようになっても困るが、あっしはだんなに偏屈な人間にゃなってもらいたくねえ。まさか、だんなは、女ぎらいってわけじゃねえんでしょう」

「ありがとう。心配するな、わしもけっしてか

たわ者ではない」
「それを聞いて安心だが、そこでその、お身のまわりの世話ってやつは、どっちにさせやすかね。小稲にするか、お美代坊にするか、正直んところ、どっちにしやす」
そこまでいくと、親友の心配も少しおせっかいに類してくるようだ。
「それは明石から帰ってきてのことだ。こんどの仕事は、相当命がけということになるのだろうからな。どうだ、ひものほうはついている様子はなかったか」
「ちがいねえ、そのことだ。どうして、たいへんなひもがついてやがったが、だんなはいったい、どうしてひもがついているのがわかりやしたね」
「いや、けさ金杉橋あたりで、ちらっと旅姿の万七を見かけたので、さてはわしの旅立ちが、もう右源太の耳にはいったなと気がついた。もっとも、小稲観音や美代観音の耳にさえはいるくらいだから、右源太鬼の地獄耳にはいらぬことはあるまい、とは考えていた」
捨三郎は平気でわらっている。
「で、どうしやす。敵は深川の万七と、子分みたいなうじむしが三四、こいつが物見の役でさ。現に、今もひとりここの家の前にうろうろしていやす。そのあとから、梶原弥兵衛、北崎九兵衛、ふたりの用人が十人ばかり浪人組をつれて、さっき程ガ谷へ着きやした。ゆだんはできねえと思うんですがね」
「そうか。こっちは心配はないが、観音さまたちがねらわれると、少しやっかいだな」
「いっそ、みんなここへ呼んできちまいましょうかねえ」
「まあ待て。考えてみよう。親友、わしは少し空腹になったぞ」
「いけねえ。とにかく、だんな、着物を着がえやしょう」
あわてて立ち上がる伝次だ。

10

翌朝、油屋伝次がわらじをはいて、わざと裏口から桔梗屋を出してもらったのは、六つ半（七時）を少しまわったころで、その前後が旅立ちの客のいちばん多い時分であった。

なに食わぬ顔をして、路地からふらりと表へまわってみると、はたしてやくざふうの怪しいやつがひとり、桔梗屋の板べいの前に人待ち顔をして、ぽかんと立っている。

「おはよう」

うしろからぽんと肩をたたいてやると、飛びあがらんばかりにぎょっと振りかえって、

「だ、だれだ、おまえは」

と、険しい顔をした。

「おれは福の神だ」

その顔へ伝次はにやりとわらってみせる。

「うそをつけ。おまえは油屋伝次じゃねえか、ちゃんと知ってるぞ」

じりじりとあとじさりをしながら、いざといえば長わき差しを引き抜きそうな身構えだ。

「そりゃそうだろう。江戸からわざわざあとをつけてきてくれたんだからな」

「おれに、な、なんの用があるんだ」

「冗談いいっこなしさ。おれたちに用のあるのは、おまえのほうのくせに。まあ、そうとんがりなさんな。どうだ、深川の兄い、おれは福の神になって、おまえに小判で五枚、金五両さずけてやろうと思うんだがな」

「からかうねえ、こんちくしょう」

「おまえをからかったってしようがねえや。そら、小判で五枚、このとおりだ」

伝次はふところから金を取り出してみせて、

「どうだ、おまえこれを持って、まっすぐここから江戸へ帰る気はねえか」

と、相談を持ちかけた。

「江戸へ帰れだと――」

「そうよ。おれはやつらの様子を聞かせろだと

か、こっちの味方になれだとか、そんなやぼはいわねえ。おまえたちにはまたおまえたちの仁義ってものがあるだろうからな。けど、いまてつだっている仕事が、いい仕事か悪い仕事か、そいつが区別のつかねえ兄いでもなかろう。今のうちに悪い仲間をぬけて、江戸へ帰る気があるんなら、その餞別なり祝儀なりに、この五両をおまえにやろうてんだ」

「こんちくしょう、おれを金で丸めこもうってんだな」

「なるほど、ものは考えようだな。いやならむりにとはいわねえが、おれのほうじゃ改心しろ、悪いことから足を洗えのつもりだ。足を洗うのはいやか」

「そうよなあ、改心するかしねえか、そいつはおれにもわからねえが、黙って五両くれるんなら、このまま江戸へ帰ってやってもいいな」

ふてくされてはいるが、目の前の五両はほしいらしい。

「おもしろい、黙ってくれてやるから、黙ってうけとんな」

こういう連中は、そのふてくされたところを、うまく意気をあわせていくにかぎる。伝次がわらいながら、金の手をさし出すと、

「そうか。じゃ、ほんとうに黙ってうけとるぜ。途中に待ち伏せがあるなんて、おれは口が腐ったっていいっこねえんだからな」

その野郎はふてぶてしく五両うけとって、ぷいと江戸のほうへ歩きだした。

11

——待ち伏せか。それでも義理だけは知ってるから感心だ。

伝次は腹の中でくすりとわらった。

たぶんそんなことだろうとは、捨だんなも予想していたし、自分も考えていた。

「どんなことをするか、女たちにはなにもいわずに、きょうはひと足さきを歩かせてみろ」

そういうだんなのおおせつけなのである。

敵の総勢は十五人がひとり減って十四人、そんなものにびくびくしていたのでは、こんどの旅はひと足も歩けない。しかも、人通りの多い天下の東海道で、まっ昼間なにができるものかというのが、だんなの考えなのだろう。

——観音さまにしたって、少しはびっくりするようなことがあって、腰をぬかしたほうが、お供をあきらめることになるだろう。無慈悲なようだが、そのほうがこっちも始末がいいんだ。

伝次はそう考えたから、そのまま筋向かいの玉屋へはいっていった。

「ゆうべ泊まった娘ふたり、少年ひとりの三人づれは、もうしたくができたろうか。油屋が迎えに来たと、ちょいと声をかけてもらいたい」

番頭にたのんで呼んでもらうと、もうすっかりしたくをして待っていたとみえ、三人つながってすぐに玄関へ出てきた。

「おじさん、おはよう」

要吉はあいかわらず元気だ。

「ほんとうはあんまり早いほうじゃない。さあ、てっとり早く、わらじをはいた、はいた」

「じゃ、あしたっからわらじをはいて玄関で待っていようか」

「それより、要ちゃん、わらじをはいたままで寝ていたほうが早いでしょ」

お美代はなんの屈託もなさそうに、そんな冗談を口にしてわらっている。

「おじさん、殿さまはもう先へ行ったの」

往来へ出てから、要吉が小声で聞いた。

「それがね、きょうは殿さまのほうがひと足あとになりそうなんだ」

「じゃ、おれたちは追いつかれやしないかねえ」

「そこはおじさんがうまくやるから、まあ、なるべくさっさと歩くんだな、これからだと、中食は四里歩いて藤沢、泊まりはそれからまた四

里歩いて大磯、どこで休んでもいいから、休むときは往来から姿を見せないようにしてな、いいかね」

伝次は女たちにも聞こえるように、要吉にいって聞かせながら歩く。

「ねえさんたちは足がおそいんだもの」

「長い旅だ、あんまり無理をしちゃいけねえ。旅は二日めから三日めあたりがいちばんつらいんだ。それを通りこすと、だんだん楽になってくる。殿さまだって旅なれないから、そいつはおなじことよ」

「足に豆ができたんじゃないかな、殿さまは」

「底豆やわらじ食いはこれからさ、それからなあ、要ちゃん、もし途中でなにかあったら、そのときはもうしようがない、すぐあともどりして、おじさんに知らせなけりゃいけないよ」

「きっと、そうします」

「じゃ、おれはこの辺から、引っかえすから気をつけて行きなよ」

きょうも朝から、からりと晴れた旅びよりだった。

12

程ガ谷から権太坂をのぼりきって、少し下ったところに、十坪ほどの境内を持ったなにかの破れ堂がある。その堂のぬれ縁に腰かけて、深川の万七はさっきからもうタバコもすいあきてしまった。

北崎九兵衛組がここへ陣取ったのは、明け六つのころからで、仕事はすぐ始まるだろうと予想されたのが、やがて二時間ほどもたつのに、敵は、いっこうに姿を見せない。

堂の裏に待機している連中も、すっかり待ちくたびれて、朝が早いから、みんな居眠りでも始めたのだろう、ひっそりと話し声ひとつしなくなった。

時刻からいえば、もう五つ（八時）すぎ、峠の通行はようやくにぎやかになってきたが、山

全体は森閑と若葉があかるく、小鳥の声がのどかである。

「ちくしょう、眠けがさしてしようがねえ」

万七は大きなあくびを一つして、思いきり伸びをやった。

「おそいようだな。万七」

九兵衛もたまりかねたとみえて、気むずかしい顔をしながら、裏からのっそりまわってきた。

「へえ、ばかにゆっくりでござんすね」

「まさか、見のがしてしまったのではなかろうな」

「ご冗談で——。峠には虎吉が見張っていやすし、旅籠の前にゃ由造がつけてあるんでさ。見のがしっこはありやせんがね、足でも痛めて、一日逗留ってことにでもなったんじゃねえかな」

「うむ。そんなことがないともいえんな。もうしばらく待ってみて、まだ見えんようなら、峠の虎吉を一度程ガ谷へ走らせてみてはどうか」

「そうでござんすねえ。——おや」

その虎吉が、いそいでこっちへ駆けこんできたのである。

「兄貴、やってきたぜ」

「きたか。小名木川だろうな」

捨三郎なら、こっちはかくれて見のがさなくてはならないから、万七ははっと立ちあがる。

「それが、金魚のほうなんだ。こいつははでだから、遠くから見てもすぐ目につく。おかしいな、どっかに小名木川がいやあしねえかと思って、前後をよく見たんだが、どうもそれらしい姿は見えねえ」

「そいつはおかしいじゃねえか」

万七はちょいと考えるようにしたが、

「わかった。歩きつけねえ小名木川は、やっぱり足を痛めたんだ。そっちはきょう一日程ガ谷へ逗留ときまったんで、女たちのほうだけひと足さきへゆっくりと小田原へやる、油屋が考え

出したことにちがいねえ。どうです、だんな」
と、したり顔をする。
「なるほど、そうかもしれぬな」
それならなお好都合だ。ぜひそうあってほしい九兵衛である。
「やっつけやしょう、だんな。見のがす手はねえ」
万七も安心して力みだす。

13

女組はやっと権太坂をのぼりきって、きょうはあとから小名木川さまがついてきてくれると思うと、追いつかれては困るけど、なんとなく安心なような、うきうきと下り坂へかかった。
「小稲さん、旅はきょうあすがいちばんつらいっていうけれど、歩きだすと、案外歩けるもんですね」
美代が安心したようにいう。
「そうねえ。あたしもけさ起きたときは、なんだか足がぎごちなくて、これはたいへんだと心配したけど、このぶんならだいじょうぶそうだわ」
心はおなじ小稲だった。
が、たった一日の旅だったけれど、お美代はどんなときにもけっして暗い顔はしない。ほんとうにりっぱだと感心するにつけても、あたしはよっぽどしっかりしなくてはと、しみじみ反省させられるのであった。
「まだ宿を立ってきたばかりだもの、今から足が重くなったんじゃ、話にならないやね」
ひと足さきを歩いている要吉が、くるりと振りかえってわらった。
「要ちゃんはほんとうに元気ねえ」
「おれは毎日てんびん棒をかついで、歩きまわった腕まえだもの」
「足に腕まえってことはないでしょ、足まえとおっしゃいな」

お美代がいい相手にして、すぐ揚げ足をとる。
「足まえってのもなんだか少しおかしいようねえ」
小稲がわらいだす。
「おかしいとも。足のまえなら向こう脛さ。お嬢さんは向こう脛で歩いてるのかえ」
無事に行けば、そんな冗談口が疲れるまでつづいて、ときどきは通りすがりの者がびっくりして振りかえるほど、にぎやかなわらい声さえ出るのだが、
「待てッ」
なにかの社の前あたりへかかると、ふいにその境内から浪人らしいやつがふたり出てきて、三人の行く手へ立ちふさがった。
あっと要吉は、すばやく小稲のうしろへかくれる。恐れからではなく、いざとなったらすぐご注進に駆けださなくてはならないからだ。そういうことには、よく頭のまわる要吉なのである。
「なにか、ご用でござんすか」
小稲は小稲で、自分がいちばんの姉だから、お美代と要吉をかばうようにして、つとひと足まえへ出た。
「用があるから呼び止めたんだ。手間はとらせん。ちょっと境内まできてくれ」
ああいけない、と早くも破れ堂のかげに深川の万七の姿を見つけて、小稲はどきりとした。
「ついお見それいたしましたけれど、どなたさまでござんしたろう」
わざといぶかしげな顔をしてみせると、
「そんなことは、いっしょにくればわかる。おとなしくしたほうが、おまえたちのためだぞ」
と、浪人どもは頭からおどかしてかかる。
「おお、こわい顔——。まさか、朝っぱらから山賊というのも変ですし」
つい憎まれ口が出てしまう小稲だ。

14

「無礼なことをいうな。われわれは山賊ではない。話があるから、こっちへこいというのだ」

ひとりがいきなり小稲の腕をつかんでくる。

「おかしなかたですねえ。見も知らない人が、名まえも名のらずに、通行人をつかまえて、話がある、こっちへこいなんて、そんな乱暴なことがありますか。あんまり変なまねをすると、大きな声を出しますよ」

旅の者がもうふたり、三人、道をふさがれて立ちだしたから、小稲は気が強い。それに、少しでも長くここでがんばっていれば、そのうちに捨三郎が追いついてきてくれるあてもあるのだ。

「めんどうだ。おい、ひっぱりこめ」

「よしきた」

すなおにいうことをきかないと見た浪人者たちは、いよいよ最後の手段に出て、左右から小稲にかかってきた。どんなたくらみがあるのか、お美代にはだれも手を出さない。

「なにをするんですよう。女だと思って、バカにすると承知しないから」

小稲は力いっぱいとられた腕を振り切ろうとしたが、男の力にはかなわない、ずるずると境内のほうへひっぱりこまれながら、

「助けてください。人殺しいッ」

と、こっちもいよいよ最後の手段に出た。

「こらッ、黙らんか」

「だれが黙るもんか。——人殺しいッ」

浪人者たちは狼狽して、ひとりがあわててうしろから組みつき、小稲の口を手でおさえた。

お美代はどうしていいかわからない。要吉の姿が見えないから、きっといまに油屋伝次をつれてきてくれるだろうが、それまで、うまくまにあってくれるだろうか。

おろおろと小稲のあとについて境内へはいりながら、そうだ、あたしもどなってやろうと、

やっと気がついたとき、
「美代――」
堂の裏からつかつかと出てきたのは、高輪の下屋敷の用人北崎九兵衛だった。
「あっ」
「上意だぞ、美代。殿さまの仰せつけによって、そのほうを迎えにまいったのだ。おとなしくこのかごにのりなさい。手むかいすると、召しとってもつれてまいるぞ」
ちゃんと道中かごまで用意して、あとには浪人者が三人、やくざふうのやつがふたりまで、いまにも手取りにしようと目を光らせている。
「北崎さま、そのおことばはおうけできませぬ。美代はもうお屋敷からおいとまを願って、伊丹屋の者にかえったのでございます」
「黙らっしゃい。松平家ではまだそのほうにいとまをやったおぼえはない。屋敷を立ちのいたのは、そのほうの自ままのふるまい、強情をはると身のためになりませぬぞ」
「いいえ、それは違います。もしおいとまのないものでございましたら、美代は殿さまおそば近く仕えます奥女中、どうして女乗り物を持って迎えにこないのです。松平家では奥女中を道中かごにのせて運ぶ例でございましょうか」
お美代はきっぱりと、九兵衛の痛いところを突いて出た。

15

「黙んなさい。主家を無断で逃亡したふらち者、上意である。取り押えよ」
北崎九兵衛は渋面を作って、うしろの浪人組へいいつけた。境内の前の街道筋へはしだいに人がたまって、みんななにごとだろうとこっちを見ている。これ以上お美代に口をきかせては不利だと、九兵衛は気がついたのだ。
「上意でござるぞ」
「美代どの、上意――」
おもしろ半分の浪人者がふたり、口々にわめ

いて、ばらばらとお美代の左右から飛びかかった。

「なにをなさるのです。無礼な」

お美代は飛びのこうとしたが、たちまち両方から手を逆にとられて、うしろへまわされ、さすがにはしたなく大声もたてられず、今はただくちびるをかむばかりだ。

「早いとこ、たのみますぜ」

万七がかごのたれをあげて待っている。

小稲はふたりの浪人者に押えられて、髪をふり乱しながら、すでに破れ堂の裏の林へつれこまれようとしているところだ。

つかつかと捨三郎が境内へはいってきた。浪人者たちの荒仕事を、なるべく人に見せないようにと、往来のほうへ背を向けて立っている北崎用人のうしろから、

「九兵衛、なにをいたしおる」

と、しかるように声をかけた。

「あっ」

きょっとふりかえって、九兵衛の顔はみるみる青ざめたが、かねてそのときの返事は用意してある。

「上意により、美代儀を召しつれもどります」

もっとふてぶてしくいう腹だったが、思わずそこへひざまずいて、どうにも顔があげられないのは、おのれの良心にとがめるからである。

「上意とは右源太の知恵か」

「いいえ、ご当主さまじきじきの――」

「偽りを申せ。そのほうがつれているのは、素浪人とならず者ばかりではないか」

九兵衛はぐっと詰まって、返すことばがない。

「過日高輪の下屋敷で、あれほど申しきけたに、そのほうはよほどおろかな生まれとみえるな。玉野は女のことゆえ、いたし方もないが、分別盛りの男一匹、悪につかなければおのれひとりの口さえすごせぬのか。あわれなやつだ」

むちより骨身にこたえることばである。九兵

衛はぴたりと大地へ両手をついてしまった。
「浪人ども、乱暴はやめい」
お美代を押えているふたりも、小稲を裏へ運びこもうとしているふたりも、あっけにとられた形で、まの悪い顔を見あわせる。
「そういう貴公も、素浪人だろう」
ぬっと捨三郎の前へ出て、昂然と憎まれ口をたたいたのは牧野一角だ。
「下司根性の目にはそう見えるか」
「よろしい。下司浪人が相手をしよう。剣には、大名、浪人の区別はないからな。わしのは少し荒っぽいから、そのつもりでいてくれ」
「あほうという者につける薬はないとみえる」
「うぬッ」
一角は憤然と抜刀した。

16

——なあに、たかが殿さま剣術。
江戸の道場荒らしで自信のある一角は、いきなり大上段にふりかぶった。大名もくそもあるもんか、上段にふりかぶって相手が小さく見えるようなら、もうこっちのものだという腹がある。
が、無言ですらりと抜きあわせた捨三郎の青眼は、生死を超越しているからおおらかで、おのずと品格がそなわり、淡々たるうちに寸毫の乗ずるすきもない。
——形だけはなかなかやるなあ。
わざに自信のある一角は、それでもまだたかをくくっていた。どうせいいように甘やかされてけいこをしてきたひととおりの修業だろうから、待っていればすぐ破綻がくる。いまにみろ、あぶら汗を流して、肩へ大きく息がはずんでくるのがおちだと見ていた。
しかし、その予想は、腹の足りないこっちのひとりよがりだったようである。
捨三郎の剣は、いつまでたっても冷静水のごとく澄んで、少しもくずれようとしない。しか

も、その高慢ちきな顔が、下郎なにをぐずぐずしているかと、あざけっているようにさえ見えてくる。

こしゃくな、と一角はじりじりしてきて、

「えい」

強引に一歩踏み出しながら、敵の構えを押しくずそうとした。顔面が火のように充血して、鬼のような形相になっている。

捨三郎はそんな誘いに乗ろうとしない。微動もしないその剣先が、逆にぐいと大きくこっちの目先へのしかかってくるように見えたので、一角はわれにもなくすっと踏み出した足を一歩もとへ引いている。

――くそッ、くそッ。

心にあせりの出てきた一角は、

「おうッ」

またしても満身の力をかりたてて、ひと足押して出る。が、結果はおなじことで、捨三郎の剣には磐石の底力があり、これ以上むりにしかけていけば、どう変化するかわからない気魄の鋭さを感じさせられる。

はじめて一角はぎょっとして、いつの間にか額にあぶら汗をうかべているのは、自分のほうであることに気がついた。

このすさまじい気力と気力の一騎討ちに、浪人組は女たちを取り押えている手を忘れ、女たちもあっとそこへくぎづけにされて、見た目には大きい一角の必殺剣に、ただはらはらと恐怖の目をみはっているばかりだ。

「とうッ」

そばから見ていると、まるで吸いつけられるように一角が地をけって切りこんでいった。

「えい」

同時に、捨三郎が無謀とも見える疾風の突きを入れたから、わずかに一角は身をかわし、双方が激しく飛びちがえる形に見えたが、そのほんの一瞬、捨三郎の二の太刀が右片手なぎに、さっと横へ払いあげていたらしく、捨三郎はみ

ごとに飛びぬけて、くるりと立ち直ったが、
「わあッ」
一角は左の腕をひじのあたりから失い、そのままどっと前へ突んのめっていく。

17

のめっていった一角は、急には起きあがれずにあえいでいるし、捨三郎はまだ刀を構えたまま、相手の出ようをじっと見まもっている。だれも息をのんだまま、声ひとつたてられず、一瞬しらじらしいぶきみな沈黙が、しいんと明るい日ざしにさらされていた。
「だんな――」
その沈黙をかきのけるように、そっと往来の人だかりの中から捨三郎の前へ飛び出したのは、油屋伝次である。
目ばかりぎらぎらさせて、ただならぬ形相をしているのは、いまのきわどい勝負に肝を冷やしたからばかりではなく、あとにまだ浪人組は四人まで残っている、こいつらが一度にかかってくるようなら、こんどこそ道中差しを引きぬいて、ひとあばれしなくちゃならないと、気がたっているからだ。
あとについて走りだした要吉は、途中ではっと立ち止まった。
小稲と美代が思わず駆けよろうとして、捨三郎にしかられるのを恐れてか、どっちからともなく立ち止まって、顔を見あわせているからだ。
「油屋、あれたちをつれて、ひと足さきへまいれ」
捨三郎が構えを解きながら、小稲たちのほうを目でさした。
「へえ」
それはそれに越したことはないが、伝次はあとが心配だ。
「だんなは、――だんなは」
「わしはよい。早くせよ」

「へえ」
そうか、獲物が目の前にぶらさがっていては、どうおおかみどもの気がかわるかもしれない。気合いをはずそうというんだな、と気がついたから、
「さあ、行くんだ」
伝次はとっさにきつい目をして女たちを招いた。
それと見た女たは、捨三郎のほうへ無言で会釈をして、小走りに境内を出ていく。
「要坊、おいで」
ぽかんと立っている要吉をうながして、伝次があとを追う。
浪人どもは、どうする、と相談をかけるように九兵衛のほうを見たが、その肝心の九兵衛はひざまずいたまま、ひっそりと面を伏せたきりなので、すっかり闘志が抜けてしまったようだ。
捨三郎ははじめから残る浪人どもへは目もくれず、懐紙を出して刀をぬぐい、静かに鞘へおさめた。
「九兵衛」
凛とした声で用人を呼ぶ。
「はい」
九兵衛の返事は小さい。
「社前を無益な血でけがした。けが人の手当をして、あとをよきに計らえ」
「はっ」
用人がそこへ両手をつくのを見て、社のほうへ行儀よく一礼してから、すっと往来へ去っていく。
「やっぱり育ちだなあ」
浪人のひとりが、思わず後ろ姿を見送りながらつぶやいていた。

第二の襲撃

1

信濃坂の林の中に待機して、こっちも時刻のおくれたのにだれきっていた岩佐金助組も、ふいに深川の万七が駆けこんできて、いま牧野一角が小名木川に左腕を切りおとされたの報に、なにっと色を失って総立ちになった。

「いったい、ほかの連中はなにをしていたんだ。手出しもしないで、その間じゅうぽかんと立って見ていたのか」

金助が憤慨したように聞く。

「それがね、なんていいますかねえ、はじめのうち、牧野先生のほうがばかに景気がよくって、ひとり舞台のように見えたもんだから、みんなうっかり安心して見ているうちに、ぽろりと左腕を落とされちまったんで、どうしようもなかったんでさ」

「よし、諸君、用意したまえ。牧野のとむらい合戦だ。そろそろやってくるだろうから、有無をいわせずたたき切ってしまうんだ」

策より鼻っぱしひとつで押しきるほうの金助は、柄頭をたたいてわめきたてた。

「万七、北崎どのはどうしていたな」

梶原弥兵衛はなによりそれが気になる。

「北崎のだんなは、こういっちゃなんですが、あんまりぱっとしやせんでしたね。そりゃ理屈をいわしちゃ、小名木川にかないっこはねえ。なんったって相手は若殿さまだからな、どうしても位負けがしまさ」

「だから、理屈はいらん。いきなりたたっ切ってしまうほうがいいんだ」

金助がわきから、むぞうさにいってのける。

それがそう簡単にいけば問題はないのだ。うまくいかなかったから、現に牧野組は失敗をしているので、時刻からいっても、通行人

の多い今となっては、襲撃に不利ではなかろうか、

「岩佐うじ、自重してもらわんと困るぞ。牧野先生が再起できないとなると、こんどのことの成否は、貴公ひとりの双肩にかかってきたのだ。もう人通りが多くはなっているし、ともかく権太坂には味方がまだ四人も残っているのだ。むしろ、これと合体して、もう一度夜襲の策を練ってみてはどうかな」

弥兵衛は猪突の金助をおだてあげるようにして、注意してみた。

「むろん、それはそのときの状況によりますな。こんなことは断じて行なって、一瞬に事を決するにかぎる。一つには機をつかむことだ。まあ、拙者にまかせておいていただきたい」

しかし、幸か不幸か、さすがの金助も、そのときは機会をつかみそこねてしまった。

というのは、まず小稲と美代をつれた油屋伝次があらわれ、

「こいつはあとまわしだ」

と、見のがしているうちに、権太坂で一度食いとめられた旅人が、ぞろぞろとつづき、そのあとから捨三郎がゆっくりと歩いてきた。

「機会だ」

すっと立とうとした金助のそでをつかんだ者がある。弥兵衛だ。

見ると、なるほど捨三郎の三、四間あとから、若党ひとり、中間ふたりをつれたりっぱな武士がつづいている。

2

前後に町人だけなら、こっちが抜刀で飛び出していけば、たいて逃げ散ってしまうから、じゃまにはならない。

が、相手が武士では、面目として必ずいちおうは理由をただす。それをも有無をいわせず切ってしまうならともかく、いかにむてっぽうな金助といえども、捨三郎をぜひ切らなければな

らないという正当な理由は、こっちにないことをよく承知しているから、さすがにちょっとためらわざるをえなかった。

その間に捨三郎も、あとにつづく侍主従も、さっさと通りすぎてしまったのである。

「運のいいやつだ」

金助は仲間をふりかえって、しかたなさそうに苦笑した。そして、思い出したように、

「万七、とにかくあとをつけさせろ」

と、自分が一軍の総大将になったと思うと、ゆだんなくそんな知恵まで働きだすから、われながらよくしたものだと思う。

「へえ。——粂、突っ走れ」

「合点だ」

粂三がかさがさと、くまざさをわけて飛び出していく。

「さて、こうなると第二の手段だが、梶原さん、なにかいい策がありますか」

「そうだな。まもなく北崎組もくる時分だから、そのうえで相談することにしてはどうかな」

どうして九兵衛が失敗したか、それをよく聞いてからでないと、弥兵衛はなんの思案もたたない。

しかし、ほどなくこっちへ合流してきたのは、浪人組の四人だけで、九兵衛は手負いの一角をかごにのせ、虎吉をつれて、程ガ谷の宿へ医者をさがしに引きかえしたという。

「あとからすぐ追いつくから、ひと足さきへ行ってくれということだ」

合流組の報告に、それもそうだったと一同はうなずいて、信濃坂を出発したが、実はそれっきり九兵衛はふたたび一行に追いついてはこなかったのである。

その夜の捨三郎の泊まりは、予定どおり大磯の宿だった。予定と少し違ったのは、今夜は女たちもいっしょに一つ旅籠へついたことである。

そのことについて、捨三郎はまだひとことも

意見らしいことは口にせず、食膳も共にして、きげんはけっして悪くないようなので、女たちも要吉もほっとして、このぶんなら明石までお供ができるのではないかと、ひそかにそんな希望を持ってきたようだ。

——そうはいかねえ。あすはみんな泣きべそをかかされるんだ。

それを知っているのは、油屋伝次だけだ。そのときになって、どういう処置をとってやったものか、考えると、伝次は気が重い。

もう一つ、伝次が気になったのは、きょう権太坂で待っていた敵は、北崎用人以下浪人組が五人、あとの五人と梶原弥兵衛の姿が見えなかった。

——いったい、あいつらは、どこでなにをたくらんでいるのか。

姿を見せないだけに、ゆだんができない。

3

「小稲も美代も、少しは旅なれたかな」

食後の茶を喫しながら、捨三郎は微笑しながら、女たちに声をかけた。

「はい」

美代は小稲に遠慮して、にっこりしただけだったが、

「おかげで、このぶんなら、あたしたち、箱根だって、大井川だって、平気で越せそうです」

と、小稲はすかさずことばじりへからみついていく。

「その箱根峠にはおおかみが出るし、大井川にはたちの悪いかっぱがいるって話だ」

油屋伝次がわざとおどかすようなことをいう。

「おおかみは捨さんに退治してもらうから安心だし、かっぱのほうは油屋のだんなに話をつけてもらうことにしましょうよ」

「それがね、おおかみもかっぱも、若い女のおしりばかりねらうんだって話だ。だんなにそんなおしりの番をさせるのは、おまえさんたち少しばかり失礼だと思わないかね」
「油屋のおじさんは、案外下品なんですね」
美代がかわいい顔をしてにらむ。
「あれえ、下品だからおしりの番をさせてもいいっていうんかね」
「いいえ。そんなことは、黙って番をしてくださるもんですわ」
「やれやれ、それこそほんとうに男をしりに敷くってやつだ」
伝次はおおげさにあきれた顔をしてみせる。
「でもねえ、だんな、どっかの殿さまのように、ねらってばかりいるより、まだ敷かれているほうがお上品だと思いませんか」
小稲が変なとりなし方をする。
「すると、あの大きな兼次に敷かれている深川の万七は、親友よりお上品ということになるのかな」
捨三郎が仲間へ加わってきた。美代がうれしそうに顔を輝かす。
「そんなこと、捨さんが口にすることじゃございません」
小稲がたしなめるのを、伝次が引きとって、
「そのとおりだ。だんなはあんまり女のおしりをねらわなすぎる。おしりの話をする資格はありやせんね」
と、一本きめつけた。
「これこれ、子どもの前でおしりの話は慎みなさい」
「なあに、要坊はいまに天下の名医になるんだ。女のおしりなんかにいちいち目をまわしていた日にゃ、やぶにだってなれやしねえ」
「ああ、そうか。おしりも医者のうちだったねえ、おじさん」
実は困ったような顔をしていた要吉の目が、いきいきと光りだす。

「死んだねえさんのからだは、かわいそうで、おれ、とても見ていられなかった」
一日として忘れられないからこそ、うっかり出たことばだろうが、一同は思わずはっと胸をつかれて、顔を見あわせる。
「ごめんください。こちらに小名木川さまというおかたがおいでになりますか」
廊下でむぞうさな女中の声がした。

4

「なにか用かね」
油屋伝次がすぐ立っていって、廊下のふすまをあけた。
「あの、いま玄関へ浪人さんらしいお侍がふたりできて、これを小名木川さまにわたしてくれ、返事はいらないといって帰りました」
女中が封書をわたしながらいう。
「ふうむ」
どうしやす、というように伝次は捨三郎のほうをふりかえる。
「ご苦労であった」
捨三郎が声をかけたので、女中はおじぎをして、ふすまをしめて去った。
「やつらからでござんすね」
伝次は封書を取り次ぎながら、憎々しげにつぶやく。
女たちも、心配そうに目をみはって、たのしかった食後のひとときは、たちまち青ざめてきた。みんながおしゃべりをやめると、この辺は海が近いから、波の音が重々しく耳につく。
捨三郎が無言で封をとくと、中は左封じである。これが果たし状の作法だ。
「一筆啓上仕候、今日程ガ谷の宿はずれ、権太坂において、貴下のために手を負わされ候牧野一角儀は、拙者どもと義を結んだる間がらにこれあり、さすれば事の善悪にかかわらず、一同黙視相なりがたく、ここにあらためて貴下に果たし状を相つけ申し候。

場所は当宿のはずれにある大千畳の頂上、時刻は今夜五つ（八時）。万一、時刻までにお出向きこれなき節は、貴下をおくびょう武士と見なして、今日以後わらいものにつかまつるべく、当方は署名人三人なることを、念のため申し上げ置き候。

恐惶敬白

野州浪人　岩佐　金助
南部浪人　沼田大五郎
和州浪人　水木丑之助」

あて名は小名木川捨三郎殿としてある。

「一同は、またあすが早いから、さがってやすみなさい」

捨三郎は果たし状を伝次にわたしながら、ふと気がついたように、女たちにいった。

「その手紙、なにが書いてあるんです、捨さん」

小稲がすわりなおって、詰問するようにいう。

「心配しなくともよい」

「いいえ、心配だから教えてください」

「なあに、けさのおおかみ浪人どもが、だんなに大千畳の頂上へ出てこいという呼び出し状なんだ。たいしたことはありゃしねえ。観音さまたちは、だんなのいうとおり、もうさがって寝たほうがいい」

油屋伝次は事もなげにいってのける。

「そうはいきません」

とはきっぱりいってみたものの、女の身ではどうしようもない問題なのだ。

「お美代さん、どうしよう」

「美代はたとえかなわぬまでも、その大千畳とかへ、若さまのお供をいたします」

これはまた思いきったことをいいだす娘である。

5

「そんなだだをこねちゃいけねえな」

伝次はあきれて美代のきまじめな顔をながめ

てしまった。それでなくてさえおおかみどもがなんとかうまく手に入れて、斉信の恩賞にあずかろうとよだれを流している天下の逸品だ。そんなまねをするのは、まるでかもがねぎをしょって、自分から飛びこんでいくのと変わりがない。

「とにかく、おまえさんたちはあっしといっしょにきてもらおうかね、ちっとばかり話があるんだ」

「ここで聞いちゃいけないんですか」

小稲まで血相をかえて、そんなむちゃをいいだす。

「おまえさんたちはみんなで、あっしに果たし状をつきつけているような顔つきだね」

伝次は苦笑いをしながら立ち上がった。

女たちはまたしても、どうしようかというように顔を見あわせたが、けっきょく大番頭役の伝次のさしずにしたがうほかはない。

「捨さん、黙って行ってしまってはいやですよ、ようござんすか」

小稲が念を押すようにいって美代と要吉をうながし、ぞろぞろと伝次につれられて、少し離れた自分たちのへやへ引き取った。

「ご用ってなんでございます、おじさん」

すわるなり、美代が伝次の前へぴたりと両手をついた。へたなことをいえば、いいえ、美代はどうしても若さまのお供をいたしますと、強情を張りたそうな顔つきだ。

「おまえさんたちは、いつでもここを立てるように、ちゃんとしたくをしておいてもらいてえ」

伝次もきびしい顔をして、ずばりといいきった。

「ああ、ここをすぐ立っちまうんですか。敵をおいてけぼりにして」

さすがに小稲は察しが早い。

「なろうことなら、おれはそうしてえと思う。あんなごろんぼ剣客なんか相手にしてもしよう

がねえ」
「そうですとも。そりゃあの人は強いんだから、ちっとも心配はありませんけれど、今はたいせつなからだなんですからね。そこは親友さんから、ようく意見をしていただかなくちゃ」
わが意を得たりというように、ひざを乗り出してくる小稲である。
これがひとのことなら、果たし状をつけられて逃げ出したなんていえば、いやだねえ、そんないくじなしと、まっさきにまゆをひそめる小稲だろうに、現金なもんだと伝次はおかしかったが、それをからかっている暇はこっちにもない。
「だんなのほうはおれが引きうける。おまえさんたちは、今もいうとおり、いつでも立てるしたくをしてくれ。おれが知らせにくるまでは、けっしてここを動いちゃいけねえ。かってなまねをして、もし行きちがいになると、かまわず置いていくからね。はっきり断わっておくよ」
「はい」
三人がおとなしくうなずくのを見て、伝次はそそくさと女たちの座敷を出た。こっちはいちおうこれで簡単に納得させたが、問題なのは案外大きな意地のかたまりを持っている捨三郎のほうなのである。

6

もとの座敷へ帰ってみると、女中がいま膳をさげたところで、捨三郎はあいかわらず行儀よく、ひとりでぽつねんとすわっていた。
なにを考えているのか、いや、なにも考えていないような、のんびりとした顔に見える。
「たいくつそうですね、だんな」
ついひやかしてみたくなる伝次だ。
「あんまりたいくつでもない」
捨三郎は正直にうけて、にっこりする。その微笑がまた春風駘蕩といった感じで、悪くいえばまったく殿さまづらだ。
「で、一件のほうはどうしやすね」

「おまえのくるのを待っていたんだ。すぐに出かけようかな」

あれえ。すると、おれと同じ考えだ、と思ったとたん、根があまのじゃくにできている伝次だから、妙にそれがいくじなく見えて、

「やっぱり、しりに帆をかけやすかね」

と、われにもなく憎まれ口が飛び出していた。

「いや、向こうの宿へ行ってみよう」

「なんですって――」

「なんとか話をつけておいてやらぬと、女たちが安心できまい。ちょうどいいおりだ」

なるほど、たしかにそれはそうである。おおかみどもをいつまでもそのままにしておいては、安心して女たちを箱根へおいていけない。

が、こっちから逆襲に出て、はたしてうまく話がつくだろうか。いざ刀を抜くとなると、向こうはまだおおかみ浪人だけでも九人から残っている。こっちは根っきり葉っきり、例によってふたりっきりだ。

「度胸がいいねえ、だんなは」

「ほめられるほどでもないようだな」

「別にほめているんじゃねえが、だいいち、向こうの泊まってる宿がわかってるんですかえ」

「聞けばわかるだろう」

「そりゃまあ、一軒一軒宿屋を聞いて歩きゃわかりますがね、その役はどうせあっしなんでしょう」

「そんなめんどうなことをせんでも、表にひもが待っているだろう」

「なあるほど。――そんなことまで考えていたんじゃ、あんまりたいくつはしやせんね」

なんとなく不安な気はするが、しかし考えてみると、大千畳などという山の上へつれていかれて、どこから不意討ちをかけられるかわからないより、九人が十人でもずらりとがん首を並べている座敷のほうが、まだ始末がよさそうだ。しかも、狭い座敷ではおおぜい一度に働けないという、敵にとっては不利がある。

「じゃ、ひとつ奮発をして、やっつけるとしやしょうか」
「うむ。女たちにはかって に外へ出ないように、よく申しつけてあるだろうな」
「そいつはちゃんといいつけてありやす。けど、うるさいから、黙ってそっと出かけやしょう」
「それでよい」
捨三郎はすっと立って、床の間の大小を取りあげた。

7

まだ日がくれたばかりの宵である。
散歩にでも出るように、宿の下駄を突っかけて、ふらりと表へ出た捨三郎と油屋伝次は、はたして少し離れた暗いへいのあたりへ、ひっそりと立っているやくざふうの男を見かけた。
気のつかないふりをして、往来のまんなかを通りすぎようとしながら、伝次はくるりとそっちを向いて寄っていき、
「こんばんは――」
と、声をかけた。
ぎくりとしたように、その男は棒立ちになり、黙って長わき差しの柄に手をかける。
「どこかで見た顔だと思ったら、たしか兄いは深川っ子だったね」
「それがどうしたっていうんだ」
「なあにね、小名木川のだんなが、毎晩ご苦労だから、兄いに一両もつかわせっておっしゃるんだ。受けてくれるかね」
「それで――」
「もし兄いが黙ってこのまま江戸へ帰るんなら、一両を五両にしよう。そのかわり、深川へことづけがある」
「どんなことづけだね」
「深川に兼次っていうばあ芸者がいるだろう。その兼次に、よろしくとひとこといってくれりゃいいんだ」
「たったそれだけでいいのか」

「そういや兼次の若い亭主の万七兄いは、今夜どこへ泊まっているんだね」
「教えてやるから一両出しな」
「一両のほうでいいのか」
こいつは一筋なわでいかねえな、とは思ったが、男が一度口に出したんだからしようがない。
「そらよ、一両」
小判を一枚出して渡してやると、
「たしかに受けとったぜ。おたずねの万七兄いは、今夜深川の滝田屋のねえさんの家へ泊まっていやすでござんす。——あばよ」
にやりと小バカにしたようにわらったと思うと、さっさと化粧坂のほうへ歩きさる。
「してやられたな、親友」
捨三郎がおかしそうにわらいだす。
「どうせ畳の上じゃ往生のできねえ野郎でさ。死に金にくれといてやりやしょう」
たぶんそうだろうと見ていたので、伝次もしかたなく苦笑する。
「失礼でございますが——」
ふっと通りかかった若党ふうの男が、伝次の前へきて、りちぎに小腰をかがめた。見ると、ゆうべ程ガ谷で一つ宿につき、きょうもおなじ宿についているらしい主従四人旅のうちの、なかなかしゃっきりとした若党である。
「ご用ですかえ」
「通りすがりに小耳にはいりましたから、お声をかけましたので、深川の万七でしたら、この先の藤屋という旅籠に、十一人ほどで泊まっています。もしよけいなことでしたら、お聞き流し願います」
「こりゃどうも、ごていねいなごあいさつで——」
伝次が会釈をしている間に、若党はおじぎをして宿の玄関のほうへ去っていく。

8

その夜、藤屋へ陣取った浪人組は九人、正面

に金方の梶原弥兵衛をすえて、まだ五つには間がある、今夜は出陣の宴だからというので、みんないつまでもにぎやかに杯を放さなかった。如才なく酒席を取りもっているのは、深川の万七である。

「どうだろう、小名木川は今夜出てくるだろうか」

話題は自然それになって、さっきから甲論乙駁、たしかに出てくるというほうは、この案をたてた岩佐金助は別として、権太坂組だった四人で、いや、逃げだすほうがりこうだと主張するのは信濃坂組だった四人だからおもしろい。

「いや、たとえこっちの署名人は三人でも、ほかにまだ何人かいるぐらいのことはわかっているだろう。小名木川のほうは、油屋伝次というやつを入れても、たったふたりだ。まして、女づれだし、だれが考えたって逃げだすのが当然だ。火を見るよりあきらかじゃないか。旅の恥はかきずてという、つごうのいいたとえもあるくらいだからな」

「それは貴公らの常識論だ。貴公らは権太坂の一騎打ちを知らんからそんなことをいうので、小名木川というやつはそんな見識のない男じゃない。腕に自信はあるし、こわいもの知らずの育ちだから、わらいものにするなどといってやれば、おこってきっと出てくる。まあ、そこが岩佐うじのつけめだろうな」

当の岩佐はどっちでもいいのだ。小名木川が大千畳へ出かけるようなら、そっちでやっつけるし、逃げだすようならなおさいわい、どうせ女たちもいっしょだろうから、途中で待ち伏せして捨三郎を切り、女たちを略奪してやる。今夜こそどっちへころんでも、成功疑いなしと、内心大いに得意で、見張りの粂三の知らせを待っている。

表面はおちついているように見せかけながら、なんとなく不安なのは弥兵衛であった。

北崎九兵衛、由造、虎吉の三人が、いまだに

追いついてこない。由造と虎吉はどうせ吹けば飛ぶようなやくざだから、どうなってもしかたがないが、九兵衛はこんどの道中入費の半分をあずかっている。どうしても追いついてもらわなくては困るのだ。

そう思うにつけても、しきりに逆な予感がしてくる。権太坂でひどく小名木川さまにしかられ、一言もなかったというし、ふところに相当の金がある。こんないやな仕事に命をかけるより、武士さえすてれば、その金で一生の計がたたぬことはない。

——金は魔物だからな。気が変わったのかもしれぬて。

できれば自分もそのほうを取りたくなっている弥兵衛だ。

今夜の岩佐金助の計画は、非常にうまくいきそうだが、しかし悪事というものは、どこで蹉跌するかわからない。小名木川さまが尋常一様の若殿でないだけに、弥兵衛は妙に恐ろしいのだ。口にしている酒が、少しもうまくない。ともすれば、浪人どもの気炎さえ耳にはいらなかった。

「だんな、だんながた、妙なことになりましたぜ」

ふいに見張りの粂三が飛びこんできながら、大声でいった。

9

「どうした、粂」

深川の万七が意気ごむように聞いた。

「小名木川が出かけやしたんで——」

「なにッ、出かけた。もうそんな時刻か」

浪人組がいっせいに杯をおいて、さっと緊張する。

「それがね、おかしなことに、こっちのほうへ歩いてくるんでさ」

「反対じゃないか。さては、窮余の一策、江戸へ引き返す気かな」

ひとりがおどけて、そんな放言をしたとき、それに答えるように、

「こちらでございます」

という女中の声がして、さらりと廊下の障子があいた。

杯盤狼藉の端近へひと足はいって、すっと立った貴公子は、意外にも話題の主、捨三郎だった。浪人組にとっては、まったく思いもかけない逆襲である。大あぐらのやつ、片はだぬぎのやつ、立てひざのやつ、いずれも行儀のよくない連中が、そのままのかっこうで、ぎょっとしたように、目ばかり光らせている。

——ちくしょう、しゃくにさわるくらいいい男だな。

十万石の格式がおのずと身についている捨三郎だから、相手が行儀が悪いと、よけい目だつ。鶏群の一鶴ともいいたいそのおっとりとした立ち姿に、深川の万七はなんとなく舌打ちをした。

「せっかくの酒宴中、じゃまをする。一同、許せよ」

だれも返事ができない。

「さいぜん、わしに果たし状を届けてきた野州浪人岩佐金助、南部浪人沼田大五郎、和州浪人水木丑之助、三人の者はこのなかにいるであろうな」

「われわれだ」

それがどうしたというように、弥兵衛の隣にいた岩佐金助が、肩をそびやかしてすわりなおった。つづいて並んでいたふたりが、負けずにすわりなおしたが、三人めの水木丑之助はいそいで肩を入れている。

この三人はいずれも信濃坂組で、一度権太坂で捨三郎の颯爽ぶりを目撃している四人は、

——やっぱり段が違うな。

と、味方の醜態が妙にうらさびしい。

「そのほうどもか。わしが権太坂において牧野一角なる浪人を無礼討ちにいたしたのは、それだけの子細があってのことだが、それを申して

も、そのほうどもの耳にははいるまい」
「むろん、はいりませんな。今となってつべこべ申しわけはひきょうでござるからな」
なんとかして、相手をけいべつしてやりたい金助だ。
「そうであろうな。そのほうどもは義によって悪人大内右源太の走狗に雇われている哀れな者たちだ。果たし合いをうけてつかわすから、ゆるりとしたくをして、表へ出なさい。ただし、場所は当方できめる。よいな」
「場所などはどこでもよろしい。貴公の死にどこちのいいところへまいろう」
「そして、そのほうどもの切られどこちのいいところへな」
捨三郎はにっとわらってみせる。

10

「そのほうどもは、やはり義によって三名の者の後見に立ちあうであろうな」
捨三郎は涼しい目に、多少揶揄の微笑をうかべて、一同を見わたした。
「むろん――」
ひとりが大あぐらのまま、昂然と答えた。
「それがよい。またあとから、かような果たし状をもらってはわしもいちいちめんどうだ。――それでは表で待っているから、ゆっくり湯づけなどたべて、出てきなさい」
いうだけのことをいうと、こにくらしいほどあっさりと、捨三郎は座敷を出ていく。
ついに正面の弥兵衛には一言もことばをかけず、目さえくれなかった。もっとも、弥兵衛ははじめから下を向いたきりで、顔はあげられなかったが、この黙殺は叱責のむちより骨身にこたえる。
――もう人間とはおぼしめしていないのだろう。犬、たしかに犬だな、わしは。
飼い主の手をかもうとしている犬、われながらあさましいと思った。

「やるなあ、なかなか」
浪人組のなかから、だれかがいった。
「なあに、われわれを家来とまちがえているのさ。真剣勝負になっても、これ、ほんとうに切ってはならんぞといいさえすれば、つるの一声がきくと考えているんだろう」
「首が飛んでから、ふらち者、手討ちじゃとおっしゃるロかな」
いい気になってロがほぐれてくると、もう杯へ手を出しているやつがある。
「諸君、飯にしよう。——万七、女中を呼べ」
さすがに岩佐金助が苦い顔をして、しかりつけるようにいいつけていた。
外は十五日に近いおぼろ月夜である。
捨三郎は伝次が宿から借りて持ち出してきた縁台に腰かけて、一同の出てくるのを待っていた。番頭が気をきかせて茶を運んできてくれる。
——九人にふたり、だいじょうぶかな。
伝次はまたしてもそれがしきりに気になりだしたが、だんながあんなふうに堂々と啖呵をきってしまったからには、いまさらどうしようもない。運を天にまかせろと、腹をきめていた。
「油屋——」
「なんです」
「敵は二派にわかれるかもしれんな」
捨三郎がふっとそんなことをいいだす。
「それがどうしたんです」
「二派にわかれるようだったら、おまえは先まわりをして、女たちのほうを見てやってくれ」
なるほど、それはそうにちがいないとは思ったが、
「ほっときましょう。そんな心配をしていた日にゃきりがありやせん」
と、伝次は突っぱねた。
こっちが負けいくさになるようなら、どうせ女たちはただではすまないんだ。いまは放せねえと考えたからである。

「そうか」
捨三郎もそれっきりなんにもいわなかった。
やがて、浪人どもが、どかどかと玄関へ出てきたようである。

11

「みんなそろったか」
土間で金助のわめく声が聞こえた。
「そろった。もういいぞ」
「出発――」
金助が先頭で、ぞろぞろと玄関を出てくる。
みんなわらじがけで、中にはもう勇ましくたすきはち巻きのやつもある。
捨三郎は静かに床几を離れた。
「貴公の死にごこちのいい場所はどこだ」
すでに殺気だっている金助である。
「待たせてすまなかったな」
たしなめるように、先方のすべきあいさつをのべてやって、捨三郎がにっこりとわらう。
「なにを――」
相手はただ歯をむき出すことしか知らないようだ。
「ついてきなさい」
捨三郎は先に立って、藤屋の横の道を、海岸のほうへ歩きだした。
「浜べか。広くてよかろう」
「ころんでも痛くないしな」
多勢をたのんで、あいかわらず冗談口の絶えないおおかみどもだ。
――九匹そろってやがる。残ったのは用人と、万七と、ひも野郎だ。
油屋伝次は目ざとく数を読んで、万七が出てこないのはおかしいと思った。おせっかい野郎だから、自分は刀をふりまわさないまでも、世話役気どりで、こんなときはまっさきに飛び出してきたがるやつなのだ。
――さては、あとで女たちをねらう気かな。
ちょいと不安になったが、もうどうしようも

ない。こっちのほうだって、乗るかそるかのどたん場だ。

小一町も行くと、道は松林へはいって、向こうに夜の海が見えてきた。この辺は海が荒いから、ひと足ごとにざっざっという波の音が耳に強くなってくる。

松林を抜けると、砂浜がおぼろ月に白々とひらけてきた。潮風がしっとりと重い。

「この辺でよかろう。——油屋、おまえはさがっておれ」

捨三郎は海を背にして立って、伝次にいった。

「あっしの心配なんかいりませんや」

伝次はおこったように答えた。いくら海を背にしたって、川ばたとは違うから、敵が後ろへまわろうと思えば、いくらもまわられる。そのうしろを伝次はひきうける気なのだ。

「けがをいたすなよ」

捨三郎もしいて去れとはいわず、下げ緒をとって、たすきにした。

「はち巻きはいいんですかえ」

「いらぬ」

捨三郎は下駄をぬいでたびはだしになった。

そういうふたりを、九人は半円を描いて取りまきながら、これもめいめいしたくにいそがしかった。もうだれもむだ口はたたかなかった。

「なんだ、果たし合いは三人じゃねえのか」

伝次が聞こえよがしに皮肉った。

金助がそっぽを向いただけで、それにさえ答えようとする者はない。

12

「だれかくるようだぞ」

浪人組のひとりが、松林のほうを見ながらいった。

「なるほど。何者だろうな」

みんないっせいにそっちを振りかえる。

いま通ってきた松林の中を、ちょうちんが二つ三つ、こっちへ急いで近づいてくるようだ。

上がりふじの定紋が目につく。
近づいてきたのを見ると、四十年配のりっぱな侍で、士分の者四、五人と六尺棒を持った足軽中間数人をしたがえていた。
「拙者は小田原藩大磯奉行中津安十郎と申す者だが、おてまえらはそこでなにをしていられるのか」
大磯は小田原藩大久保加賀守の領分で、問屋場のあるところだ。藩の役人に尋問されたのでは、黙殺するわけにもいかぬ。
「拙者は野州浪人岩佐金助と申す。あれなる小名木川捨三郎という仁が、本日程ガ谷権太坂において、わが党の牧野一角を切ったるにより、義によって今夜当地を借り、果たし状をつけました。ご見分願いたい」
金助があっさりいってのける。
「義によって果たし合いとあれば、見分もいたすが、相手はひとり、おてまえらは九人のように見うけるが」
ひとりに九人では、義の果たし合いにはならぬ。
「いや、果たし合いをいたすのは、拙者と、この沼田大五郎、水木丑之助との三人で、ほかの六人は後見でござる」
「しかし、見うけるところ、後見のかたがたもたすきはち巻きのようでござるな」
「諸君、後見の者はみんなたすきはち巻きをとれ。なにをあわてているんだ」
金助がてれかくしに大声でしかりつけた。
なんだ、つまらないと、張り合いぬけがしたように、六人の者はもそもそとたすきはち巻きをはずしだした。
「ひとりに三人、むろん義によっての果たし合いでござるから、おてまえらもひとりずつの勝負でござろうな」
中津奉行がまた念を押した。
「申すまでもないこと、第一番はかくいう岩佐金助、二番は沼田大五郎、三番手は水木丑之助

の順でござる」
昂然と答えたのは、金助にはひとりでもじゅうぶん自信があるからである。
「しばらく待たっしゃい」
中津は静かに捨三郎の前へ出て、いんぎんに小腰をかがめた。
「小名木川さまでございますな」
捨三郎は知っているなと思い、うしろのほうに控えている士分の者のうちにさっきの若党の主人がまじっていて、じっとこっちを見ているのを見のがさなかった。
「さよう。小名木川の住人松平捨三郎である」
「てまえは小田原藩中津安十郎と申し、当地の支配をあずかります。ただいまの浪人衆の申し分、お聞き取りのうえ、ご承知なされましょうや」
「念の入ったあつかい、過分——それにて見分いたされよ」
感謝をこめた鷹揚なあいさつだ。
さまあ見やがれ、もうこっちのものだと、伝次は急にうれしくなる。

13

「それでは、あれにて見分いたします。——後見の一同は拙者についてさがりなさい」
中津は浪人組にさしずして、すっとうしろへさがった。
捨三郎はもう海を背景にする必要もないから右手へ、金助は左へ、その金助のうしろへ四、五間ばかり離れて、大五郎と丑之助が立つ。
伝次もおなじように、少し離れて捨三郎のうしろへ立った。
「行くぞ」
金助がさっと抜刀する。
「まいれ」
捨三郎が抜きあわせた。
双方青眼である。二条の白刃が黒い海を背景にして、おぼろ月夜に白々とした殺気をただよ

わせる。しいんと鳴りをしずめた人々の耳へ、磯をうつ荒波の音がざあっと重くのしかかってきた。

——多少やるな。

金助は相手の品のいい構えを見て、ちょいと感心はしたが、絶対に自分の勝ちを信じているから、恐怖は少しも感じない。

「えい」

剣先を軽く浮動させながら、じりじりと踏み出してみる。

相手は無言で、微動もしない。こっちが踏み出せば、それだけ相手のきっさきが近くなり、ぐいと目先へ迫るのを感じたから、ずっとひと足ひく。

——こしゃくな。

と思った。全身にまわっている酒気が、しだいに頭へのぼってくるようで、がんがんと遠くで耳鳴りがしだした。

いつまでたっても、相手は動かない、のんびりと構えているようにも見えるが、それでいて乗じるすきはなく、こっちが息を抜こうとすると、ぐいと敏感につけこんできそうなけはいだ。つまり、完全に出ばなを押えられているのだと気がつくと、

——くそッ。

と、腹がたってきた。

いちかばちか、一度体当たりに出て、相手の構えをくずしてみないことには、いつまでたっても際限がない。そう気がついたとたん、酒が心を大胆にしているから、

「とうッ」

砂をけって、がむしゃらに切りこんでいた。

さっとはずされて、飛びちがって、くるりと立ちなおりながら、

「えい、——おう」

再度むてっぽうに切りこんだ。まるで狂人のような激しい太刀さばきである。

それも軽くかわされて、春風のようにまたし

てもひらりと飛びちがう。
「うぬッ、――おうッ」
振りかえりざま三度めの太刀を大きくふりかぶって、火のような追いうちに出たが、敵はそれより早く敏捷に立ちなおっていて、こんどはよけもかわしもせず、ぬっと立っているかに見えたから、
――しめたッ。
まっ二つと思ったとき、その敵のからだがすっと沈んで、
「えい」
相打ちとも見える疾風の右片手なぎだった。

14

「わあッ」
勝負は間一髪できまったのだ。三度めの追いうちに、金助の息の狂いを感じた捨三郎は、とっさに片ひざ突きになり、胴へ捨て身の一刀を浴びせたのである。
そのまま飛びぬけて、くるりと振りかえったときには、金助のからだが大きくのけぞりながら、砂の上へどっとぶっ倒れていくところだった。
捨三郎の位置は、ちょうど控えのふたりに背を向けていることになる。
と見た沼田大五郎が、やにわに立ちあがるなり、
「えい、とうッ」
まっ二つとばかり、うしろから拝みうちに、からだごと殺到した。
「あっ、だんなッ」
こっちで見ていた伝次が、まっさおになって思わず絶叫する。
その目が、捨三郎のさっと身を沈めながら、うしろざまに一刀を横なぎにするのを見た。
「わあッ」
大五郎は高股を深く切りあげられて、どすんとしりもちをつく。

すっと立ち上がった捨三郎は、髻を切られて乱髪になっていたくらいだから、それはまったく紙一重の遅速だったにちがいない。

「まいれ」

捨三郎は倒れたやつには目もくれず、さっそうと三人めの男、水木丑之助の前へ立った。その声音に少しも息のはずんだところのないのは、しじゅう冷静な進退をとって、心に一点のあせりや恐怖がないせいだろう。

「ま、まいった。まいりました」

丑之助はへなへなとそこへすわって、砂の上へ両手をついた。

「戦ってみねばわからぬではないか」

「いや、わかっております。とても拙者などの遠く及ぶところではございません。――おみごとなお手なみでございますなあ」

ぬけぬけと顔だけあげて、もうそんな追従を口にしている。

「そのほうどもはどうか」

捨三郎は後見の六人のほうを向いて聞いた。

六人の者どもも、いっしょにかかるならともかく、ひとりひとりではちょいと勇気が出ないらしく、みんな顔を見あわせている。

そのころ――。

もうすっかり旅じたくをして、伝次の声がかかるのを待っている小稲たちの座敷へ、宿の女中があわただしく顔を出して、

「なんですか、おつれさまの小名木川さまが、大磯の浜でおけがをなすったとかで、いま玄関へ油屋からだという使いの人がきていますけれど――」

と、意外なことを知らせてきた。

「あら、ふたりはいつ宿を出たんです」

小稲たちはそれからして、思いがけないことである。

「おふたりさまはさきほど、宿の下駄をはいてぶらりとお出かけになりましたですが」

「どうして、そのときすぐ知らせていただけな

かったのでございます」
美代が不平そうに女中の顔をにらんだ。

15

「おれ、行ってみてくる」
女たちがぐずぐずしている間に、要吉はひとりでさっさと座敷を飛び出していった。
「小稲ねえさん、わたしたちも早く行きましょう」
美代は気もそぞろのようである。
「けれど、浜でけがをしたって、少し変じゃないかしら」
小稲はふっと気がついた。果たし合いの場所は大千畳のはずだし、五つ（八時）という時刻にもまだ早い。
「いいえ、若さまはきっと、途中で浪人どもに出会って、浜へつれていかれたにちがいありません」
「そうねえ」
そんなことがないともいえない。が、捨三郎がけがをしたから、すぐこいという油屋のことづけがほんとうなら、伝次もまたけがをしているはずである。ふたりを倒した浪人者は、当然美代をねらうはずだから、伝次のことづけは、すぐ来いではなくて、すぐ隠れろのほうがほんとうなのではないかしら。
「あたしはどうも解せないんだけれど」
「なにがです」
「けがをしたから、すぐ来てくれなんて、ふたりともそんな使いをよこす人がらかしら」
「もしうそだったら、こんなうれしいことはありませんわ。ですから、迷っているより、美代は行ってみてきます」
あなたがいやなら、あたしひとりでもといいたげに美代に立ち上がられてみると、
「そうだわね。じゃ、行ってみましょう」
と、小稲も心配には心配なのだから、もうじっとしていられなくなってきた。

そわそわと玄関へ出てくると、さっきの女中がそこに立っていて、
「あの、店の番頭もいま、弟さんといっしょに出かけましたから」
と、教えてくれる。
「ありがとう。すみませんけれど、ぞうりを貸してくださいな」
女中にぞうりを出してもらって、道を聞き、表へ駆けだしてみると、小稲は急に胸がわくわくしてきた。
——もし大けがだったらどうしよう。いいえ、ことによると、もうまにあわないのではないかしら。
そんなバカな。つるかめ、つるかめと、あわてて肩を払いながら、
「いそごう、お美代さん」
負けずに走っている美代の手をとって、着物のすそがじゃまになるのがもどかしい。
教えられた横道を半分ほどくると、やがて海が近いらしく、道は雑木林へはいった。はっ、はっと、息が肩ではずんでくる。それは美代もおなじことで、顔をまっかにしながら歯をくいしばっているようだ。
「あっ」
小稲はふいにうしろからだれかに飛びつかれ、あやうく前へのめりそうになったが、その肩を強い力で逆に引きもどされ、
「な、なにをするんです」
金切り声をあげて棒立ちになったとたん、男の腕がすばやくのどへからみつき、もうじんわりとしめつけてきた。

16

「ねえさん——」
悲しげな美代の声が耳について、目はちらっと、美代も悪党にうしろから手で口をふさがれ、必死にもがいているのを見たが、小稲は自分がもう気が遠くなりそうで、その耳が、

「小稲、じたばた騒ぐと、このまんま絞め殺すぞ」

という深川の万七の声をたしかに聞いた。

――くやしい。やっぱりだまされたんだ。

とはやっと気がついたが、ぐったり全身から力のぬけたからだが、ずるずると林の中へひきずりこまれていくのを、今はどうするすべもない。

――いやだ、死んだってこんなやつに。

そして、いずれはおなじ運命の美代の痛ましい姿が、花火のように頭の中で燃えたとき、

「御用だ、万七」

「あっ」

のろわしい男の力がのどから放れ、小稲はたわいもなく道ばたへくずれ倒れながら、そこへ両手を突いていた。

「うぬッ。――ちくしょう」

その目の前で、万七のからだと、御用と叫んでおどりかかった男とのからだが、火のようにぶつかりあい、猛然とつむじをまきおこしながらもみあっていたが、やがてどっちからともなくからだが離れると、ぱっと万七は林の中へ身をひるがえした。

「侍てッ。――御用だ」

すかさず猟犬のようにがさがさとあとを追ったのは、おなじ宿に泊まりあわせている若党のようだった。

見ると、もうひとりの悪党は街道のほうへ逃げ出し、それを追っていくのはふたりだ。少し離れた道ばたに、美代ががっくりとこれも両手をついている。

「お美代さん、だいじょうぶかえ」

とっさに気力を取りかえした小稲は、ふらふらと美代のほうへ立っていった。

「ええ、だいじょうぶ。小稲ねえさんは」

手を取ってやると、すがるように立ち上がって、おたがいに髷の根が落ち、せつない息が肩で激しくはずんでいる。顔を見あわせたまま、

しばらくことばも出ない。
「ねえさあん――」
ふと海のほうから要吉が呼びながら、いっさんにこっちへ走ってくる。あとについているのは、油屋伝次と宿の番頭だった。
「どうしたんだ、おまえさんたちは」
伝次は女たちの様子を見るなり、世にも苦い顔をした。
「すみません。つい万七に、万七のやつに、だまされちまったんです」
小稲はいさぎよく頭をさげるよりしようがない。
「だから、おれがあんなに念を押しておいたのになあ」
「油屋のおじさま、若さまは、若さまのおけがは――」
「だんなはうじむしなどを相手に、けがなんかするまぬけとは、人間が違うんだ」
「まあ、よかった。美代はただそれが心配で、心配で――」
にっこりしながら、そのほおへ正直に大粒の涙があふれだすのだから、伝次もついあとの小言が出なくなる。

国もと

1

松平隠岐守斉信は、予定のとおり四月一日に江戸を立ち、木曽街道へ向かって帰国の途についた。
「右源太、まさか尾張領へかかってから、殿が立ち往生をあそばすようなことはあるまいな」
立つまえに塚越主計が右源太に念を押すと、
「断じてそんな失敗はしません。そのかわり、めでたく国入りをして、来年無事に出府した節は、ぜひ舅婿の杯をしていただきたいものですな」

と、そんなずぶといことをいっていた。
「まあ、考えておこう。しかし、国もとには小名木川さまが先まわりをしている。百姓どもを扇動して、どんなまねをするか、これもゆだんはできぬ」
塚越としては、こっちもひどく気になる。尾張領の通行といい、小名木川さまの策動といい、この二つさえうまくかたづけてくれれば、娘ぐらいくれてやってもしかたがあるまい。どうかすると、そんな弱気にさえこのごろはなってくる塚越だった。
「なあに、やっかい殿のほうは、飛んで火に入るなんとやらというたとえもあります」
「ぜひ、そうあってほしいものだ」
「拙者を信用していただきましょう」
右源太はいっこう動じた色は見せなかった。
しかし、せっかく差し向けた浪人組は、たった二回の襲撃で、手もなく総くずれになっている。大磯から逃げ帰った深川の万七の報告によると、第二日めはことにだらしがなかったようだ。
手負いは権太坂の牧野一角を入れて三人、まず北崎九兵衛が逃亡し、つづいて大磯では梶原弥兵衛が逃亡した。金方ふたりに金を持って逃げられては、残る七人の浪人どももかってに解散するよりほか手はなかったろう。
万七がつれていった三人の子分たちも、由造と虎吉は逃亡、粂三はもう一息で美代を手に入れるところまでこぎつけて、これは旅の主従の中間ふたりにつかまり、大磯の問屋場へ突き出されてしまった。
この旅の主従四人は、なにかいわくがありそうだが、万七の話だけでは、右源太にも今のところはっきり正体がつかめない。
――けっきょく、おれが自分でぶつからなくては、ほかの者の手には負えないかもしれんな。
むろん、国もとの仕置き家老内藤次郎右衛門

へは、すぐに密使を飛ばして、小名木川と見たら必ず取り押えるか、手にあまったら切れと、主君の名で厳重にいってやってはあるが、相手が相手だけに、あまりたのみにはできそうもない。

ただ一つ、たのしみはある。それは、美代と小稲が、あくまでも捨三郎のあとを追って、明石まで行っているらしいことだ。こんどこそ自分の地盤での戦いなのだから、こっちが国もとへはいりさえすれば、捨三郎を葬って、女ふたりを手に入れるぐらいは、そうむずかしいことではあるまい。

問題は、日数から見て捨三郎はすでに明石へつく時分だし、こっちが国もとへはいるこれから半月ほどの間に、はたしてどんなまねをするかということだ。

2

その日、捨三郎は油屋伝次をつれて、兵庫の升屋という旅籠についた。兵庫から垂水へ二里半、垂水はすでに明石領である。

「だんな、あすはいよいよお国入りですね」

ひとふろあびて、夕餉の膳につきながら、伝次はおきまり一本のちょうしを取りあげ、さすがに緊張した面持ちだ。

「きてみれば、早いものだな」

捨三郎はにっこりわらって、杯を取りあげる。

「あいかわらずのんきなことをいいなさる。早いの、おそいのといったところで、こっちは毎日歩いているんですからね。日数がたてば唐天竺へだって行き着きまさ。さて、行きついてめでたしめでたしなら文句はないが、だんなのはそうはいかねえんですからね」

大磯で浪人組をやっつけてからこっち、右源太もそこまでは手がまわりかねたとみえて、至極無事平穏な旅だった。

それだけに、策の多い男だから、国もとのほうへはきびしい檄を飛ばしていることだろう

し、あしたからはちょっとのゆだんもできないような気がする。だいいち、だんなは国もとへのりこんで、どんな仕事をしようというのか、それも聞いていない伝次なのだ。

「で、いったい明石へのりこんだとなると、どんな手順になるんです」

「それは城代家老平松外記に会ってみてからのことだ」

「そのご城代さんてのは、だんなの味方なんですね」

「そう見てもよかろう。なかなか良識のあるおやじだからな」

「なるほど、良識ってやつがねえ。すると、敵はまずだんなをその良識さんに会わせたくねえ用心をしているな」

「そんなこともあるだろう」

「おちついていちゃいけませんや。ことによると、ほうぼうへ関所ぐらいこしらえているかもしれねえな。勘進帳安宅の関っていういい手本がありますからね」

「しかし、富樫左衛門尉のような関守はおらんかもしれんな」

「だんな、こうしやしょう」

しばいばなしどころじゃないというように、伝次は杯をおいてのり出した。

「明石まではここからたった五里だ。あした一日、だんなはここで骨休めをしてもらって、あっしがひとっ走り城下の様子をさぐってきやしょう。しばいなら、いくら縛られたって、楽屋へはいればなわを解いてくれるからいいが、あの右源太の野郎の息がかかっている悪党関守じゃ、そうはいきやせんからね」

「それより、油屋、女たちはどうしたであろうな」

捨三郎が微笑しながら、取ってつけたようにいいだす。

「と、いいやすと――」

「三人とも箱根におとなしくしているかな」

「さあねえ」
実は、そのこともしじゅう気になっている伝次なのだ。

3

大磯で事件のあった翌朝は、小田原まで四里、昼から箱根へかかって、その日は湯元の福住へ泊まった。
その夜、捨三郎は小稲、美代、要吉の三人をならべ、
「わしのこんどの旅は、けっして物見遊山のためではないのだから、男一生の仕事のじゃまをしてはならぬ。おまえたちは月がかわるまでここで遊んでいて、月がかわったら江戸からだれか迎えの者を呼び、いっしょに帰るようにしなさい」
と、さとしてきかせた。
昨夜の失敗があるから、三人ともそれでもいっしょについていくとは、いいかねたのだろう。
「あたしだって、物見遊山の旅だと思っちゃいませんけれど、それならしかたがありません、ねえ、お美代さん」
小稲が案外おとなしく納得したので、
「美代は小稲さんしだいですわ」
と、これもいつもの強情は張らなかった。
けっきょく、三人は湯元へ残ることに話がきまって、翌朝捨三郎と伝次は箱根を越えたが、そのあんまりおとなしすぎたのが、どうも気になるのである。
もっとも、伝次には別に腹があって、ついてくるならこい、旅の苦労に負けるような女じゃ、だんなの観音さまにはなれねえと考えていた。が、こっちは男ふたりで、かまわず歩いてきたのだから、すぐあとを追ったにしても、だんだん道が遠くなるのだろう、ここへくるまで、ついに一度も、三人のかげさえ見かけなかった。
「強情な女どもだからな」
「どこかのだんなとおんなじでね」

とはいったものの、だんなもふたりにひとりじゃ困るだろうと、伝次は思わず苦笑が出る。
「油屋、わしのほうは心配ないから、おまえ一両日、ここで待ってみてはどうだ。美代は明石領へはいるとあぶない」
「むだだと思いやすねえ。あぶないのを承知で、ここまで追ってきたとすりゃ、あっしのいうことなんか耳に入れる観音さまじゃない。とめてとまらぬなんとやらの道ってことがありまさ」
「要吉に、旅立ちのことをあかしたのが、一生のあやまりだったかもしれぬ」
そういわれてみると、小稲に意地をつけたのは自分なのだ。伝次もちょいと返事に困る。
「ごめんくださいませ」
女中が声をかけて、ふすまをあけ、
「こちらさまは、小名木川さまでございますね」
と、両手をついて聞く。
「そうだよ、ねえさん」
「あちらにお泊まりになっています江戸のお侍さまで、池田小助さまとおっしゃるおかたが、お食事がおすみになりましたら、ちょいとおじゃまさせていただきたいと、申しておりますが――」
「はあてね」
伝次はじっと捨三郎の顔を見た。

4

「あのお侍じゃないでしょうかねえ、だんな」
女中をさげてから、伝次がいったのは、程ガ谷以来の主従四人、箱根を越えたときには若党と中間ひとりを帰したとみえて、主従ふたりになっていたが、途中別れたかと思うと、またどこかでぶつかる、たぶんそれではないかと考えたのだ。
「そうかもしれないな」
「いったい、正体は何者でしょう」

「さあ」
捨三郎は別に気にもかけていないような返事だった。
食後あらためて女中を迎えにやると、すぐにたずねてきた江戸の池田小助とは、はたしてその侍であった。
「夜中、おじゃまつかまつります」
折りめ正しい羽織はかまをつけて、丁重に両手をついたところを見ると、ちゃんとこっちの身分を知っているらしい。
「旅先のこと、手をあげられよ。大磯のおりには、過分のあつかい、ありがとう」
捨三郎がていねいに会釈をする。
はてなと、伝次はひそかに目をみはった。
「そのごあいさつでは恐れ入ります。失礼することにいたしまして――」
池田は両手をひざになおし、
「もうお気づきのこととは存じますが、てまえは北づきの与力池田小助と申します。きょうまでわざとごあいさつをひかえましたのは、なるべくおじゃまにならぬようにと、左衛門尉さまから特に申しつけられておりましたからで、あるいはさぞ胡乱とお思いになったことでございましょう」
と、さすがに如才のない話しぶりである。
なあんだ、遠山の金さんの隠し目付だったのかと、伝次ははじめてわかって、急に胸があたたかくなる。大磯で小田原の役人がふいにのりこんでくれたのも、この八丁堀の気転だったのだろう。
「長の間、ご苦労であった」
「あなたさまにも、箱根からこっちは至極平穏で、けっこうでございましたが、これからが本舞台でございますな。残念ながら、ご領内へはいりますと、江戸奉行のにらみも薄くなります。へたをしますと、隠密あつかいになりまして、かえってご迷惑と存じますので、かようにごあいさつに出ました」

「いろいろありがとう。遠山どののご厚意、捨三郎が心から感謝していたと、つたえていただきたい」
「かしこまりました。あなたさまには、くれぐれもご自愛くださいますように」
「そのほうの親切も、必ず忘れぬぞ」
「恐れ入りましてございます」
池田は捨三郎に行儀よくおじぎをしてから、
「親友さん、しっかりたのみます」
伝次のほうへ、にっこりわらってみせて、思わずへえと頭をさげているうちに、すっと立っていってしまった。
「だんな、八丁堀は、やっぱりどこかあかぬけがしていやすねえ」
あとで伝次はすっかり感心してしまった。

5

「そうだ。だんな、いっそ女たちのことを、あの八丁堀さんにたのんでおいたら、どんなもんでしょうね」
いいことを思いついたというように、伝次が目を輝かせた。
「いや、あらためてたのまなくても、池田はよく承知しているようだ」
捨三郎はひとりでのみこんでいるような顔をしている。
「へえ、そうですかねえ。どうしてそんなことがわかりやす」
「池田は箱根を越えて、たしか三島の次の泊まりで会ったときから、供の者がひとりになっていた。それからはずっと主従ふたりだ。そのときから、わしは女たちがついてきているなと見ていた」
「なんだ。じゃ、だんなは、はじめからあれを八丁堀さんだと、にらんでいたんですかえ」
「うむ、大磯のときから、そうではないかと心にとめている」
「なるほどねえ」

それをいっしょに歩いている親友にさえ、今まで黙っている。侍なんてものは、いや、大名なんてものは口が堅いもんだなと、伝次はいまさらのようにあきれる。もっとも、大名がうっかり口をきくと、そのロひとつで人を殺すようになる。

「楽じゃありませんね、殿様なんて稼業も」

「なんのことだ、それは」

「なあに、こっちのことですがね、あっしは大名の家へ生まれてこなくてよかった」

「それはそうだな。わしも小名木川無宿になってから、よくそう思う」

「つまり、町人のほうが気が楽だっていうんですかえ」

「そのようだな」

「ご冗談でしょう。そりゃだんなのような金主のついているにわか町人のいうことで、町人はみんなかせがなくちゃ、一日だって生きちゃいけねえんですぜ」

油屋はついへそ曲がりがいってみたくなる。

「男と生まれて、自分の口ぐらいすごせぬ者はなかろう」

「じゃ、だんなはどうやってかせぎやす」

「親友はどうやってかせいでいるな」

これはちょいと痛い逆襲だった。

「案外小意地がわるいね、だんなは」

伝次は苦笑するよりしようがない。

「今からそうあいそをつかされては困るな。わしは一生おまえにかせいでもらって暮らそうと考えているのだ」

「なんですって――」

「わしはいい親友を持って、しあわせだと思っている」

皮肉かな、それなら承知できねえと、伝次がさぐるような目をしたが、そうでもないらしい。

「そりゃ、養ってくれっていうんなら、まさか飢え死にもさせねえが、――じゃ、だんなはもう一生大名はやめるんですかえ」

「うむ。大名はもうとっくにやめさせられている」
「けど、こんど国もとへ行って、どうしてももう一度殿さまになってくれと、たってたのまれたらどうしやす」

6

話が妙なところへそれていったが、伝次は意地でも、ここで捨三郎のほんとうの腹を聞いておきたい気がするのだ。
「わしに殿さまになってくれなどとは、だれもいわぬよ」
「そうともかぎらねえ。だんなが殿さまになりゃ、ちょいと名君ってやつになりそうだからね」
「わしは名君より、油屋の居候のほうがいい」
「ほんとうかね、だんな」
「さいわい国もとの始末が無事についてくれさえすればな」
「ちげえねえ」
うれしくなりかけて、とたんにまた気がもめてくる伝次だ。
「だから、だんな、女たちのほうが心配ないとすりゃ、あっしはやっぱりあしたひとっ走り城下の様子をさぐってくることにしやしょう」
「いや、それには及ぶまい。臨機応変のほうがよかろう」
「あいかわらず強情ですね、だんなも」
「そういうわけではないが、さぐらなくても厳重な手くばりのあるのはわかっている。たとえどんな手くばりがあっても、会うべき人間には敵にも味方にも会わなくては、用が足りぬのだ」
「なるほどねえ」
そういわれてみればそうにちがいない。忍んでいって忍んで帰ったのでは足りない用だとすれば、堂々と乗りこむより手はない。
「どうもあっしにはまだよくわからないが、じ

や、だんなのいうとおり、いちかばちか、やってつけてみることにしやしょう」

伝次もとうとうかぶとをぬいでしまった。

翌日は明石まで五里の旅だから、そう早立ちの必要はなく、五つ（八時）すぎに兵庫を立った。

「だんな、八丁堀さんに声をかけていかなくちゃ、義理が悪かありませんか」

宿を立つとき、伝次はそう注意したが、

「義理は昨夜すんでいる。先方にはまた先方の考えがあることだろうから、じゃまをせぬほうがよい」

と、捨三郎がいうので、わざと声はかけなかった。

街道は須磨から海にそい、この辺は沖に淡路島をながめて白砂青松、古くから天下に知られた絶景の地だ。塩屋が国ざかいで、摂津から播磨の明石郡へはいる。

捨三郎と伝次は、いよいよ明石領へはいった。

まもなく垂水の宿で、垂水は北に山が迫り、そのふもとの道を海にそって、やがて有名な舞子の浜へつづくのである。

「昔から一口に須磨明石っていうが、なるほどいいけしきですね、だんな」

「東海道の海より、潮の色が濃いようだな」

「だんなもはじめてのお国入りですかえ」

「うむ。わしは江戸っ子だからな」

「おっしゃったぜ。だんなのはべらんめえでなくて、いらせられましょうのほうの江戸っ子さ、あんまり自慢にならねえ」

「しかし、東男にはちがいあるまい」

「こいつはおっしゃるとおりだ。おっといけねえ。いよいよ勧進帳とおいでなすった」

宿へかかろうとして、関門こそないが、一軒の家の前へ、六尺棒を持った足軽がふたりずつ道の左右に立って、どうやら通行人を見張っているようだ。

7

「しばらくお待ちなさい」

はたして、その前へかかると、うさんくさそうにこっちを見ていた足軽たちが、目くばせをしあいながら、六尺棒を横にとって、ばらばらと道をふさいだ。

捨三郎は黙って立ち止まった。

右手の、本業は漁師で、内職に休み茶屋をやっているといった構えの店を占領して、その土間に土分の者がふたり、床几に陣取り、奥にもまだ数人待機しているようだ。

「あなたがたは、どこから来て、どこへまいる者か、姓名をうかがいたい」

足軽のひとりがにらみつけるようにしてきく。が、身なりから見ても、年ごろ、人品からいっても、ひと目でそれらしいとわかるのだろう。みんなひどく緊張した顔つきで、さてこうして面とぶつかってみると、なんとなく当惑している様子でもある。

「そのほうどもは明石藩の者か」

捨三郎はあいかわらずおちつきはらっている。

「さよう」

「ここは関所のようにも思えるが、そのほうどもはだれのいいつけで、なんのためにかようなまねをしているのかな」

あべこべに捨三郎が尋問する。

足軽にまかせてはおけないと見たのだろう、土間の床几のふたりのうち、三十がらみとも見える不敵なつら構えをしたほうが、つかつかと出てきた。

「拙者はこの新番所をあずかる杉田兵之進というものでござる。当新番所は江戸表ご当主さまのおいいつけにより、あるおかたのくるのをお待ちしています。尊公のご姓名をうけたまわりたい」

察するに、分別のある上士では、相手が相手

だけに、どうしても位負けがする。身分の低い者のうちから、なるべく無法者を抜擢して、有無をいわせずからめ取るなり、切るなりさせようという国もと家老の腹なのだろう。兵之進というやつは、そんなふうに見えるどこか粗野でずぶとそうな男だ。

「あるおかたとは、だれのことか」

「江戸小名木川の下屋敷を、ご当主にそむいて自ままに家出された直之助どののことです」

「直之助がまいったら、どうせよといいつけられているのかね」

「ただちに城内へご案内せよと申しつかっています」

「それは監禁という意味か」

兵之進は返事をしない。

「監禁は困ると申したら、どうなるのかな」

「まず尊公のご姓名をうけたまわりたい」

昂然とやりかえしてきた。

「そのほうは、腕は相当にたちそうだが、頭はあまり働かぬようだな」

「なにッ」

さっと兵之進が顔色をかえる。

「名のらなくとも、そのほうどもにはわしがだれだか、もうわかっているであろう。監禁は困るが、わしは平松外記と内藤次郎右衛門に用があってまいったのだ。とにかく、城内へ案内しなさい」

捨三郎はおだやかにいい聞かせる。

8

「お供いたしましょう」

杉田兵之進はあくまでも位負けしないように力んでいるといったかっこうで、

「おい、みんな集まれ」

と、家のほうへ大声に呼んだ。

裏庭に待機していた七、八人の若侍が、いずれも伊賀ばかま、わらじがけのものものしいいでたちで、ぞろぞろと出てきた。あとから足軽

が十人ばかりつづく。みんななんとなく興奮した面持ちだ。

「われわれはこれから、小名木川さまを城内までご案内する。石上と田中は前衛、わかったな」

「はっ」

「紺野、貴公にはるすをたのむ」

「承知した」

前衛は石上と田中が足軽四人をつれて部署につき、後衛は杉田以下士分が三人、足軽四人、残りの人数はまだ関所をかためる気らしい。

——ちくしょう、女たちをねらう気だな。捨三郎だけが目的の関所なら、もう残る必要はないはずである。おそらく、それも江戸の右源太からのさしずにちがいないと思うと、伝次はいまさらのように大内の執念深さに舌をまきたくなる。

「しからば、ご案内つかまつります」

杉田がバカていねいにおじぎをして、捨三郎が軽くうなずくのをみると、

「出発——」

と、号令をかけた。

——山ざるめ、とんだいい気になってやがる。

捨三郎とならんで歩きながら、伝次はちゃんちゃらおかしかった。いまに見ろと思うのである。

が、よく考えてみると、城下へ近くなればなるほど、敵の人数はだんだんふえてくる一方だ。現に、さっき足軽がひとり、城内へ注進のために走っているのである。はたして、いまに見ろなどというあてが、先にあるものやらないものやら、だんなはいったいどう考えているのだろう。成算があるのかなと、はなはだたよりなくもなってくる。

「いいけしきですねえ、だんな」

「うむ、舞子浜へかかったようだな」

捨三郎は至極おっとりとしている。じろりと横目をつかってみると、ほんとうに目を細めて

海のほうをながめているのだから、まったくいい度胸だ。

こうして、ものものしい行列はしだいに明石へ近くなっていく。

そのころ、明石の城下には、思いがけない騒動が突発していた。

突発とはいっても、心あるものはかねてこういう最悪の事態がおこりはせぬかと、すでに何度も重役に進言していたことで、——まえまえから、領内の百姓一統から、ことしの年貢は平年どおり、不時の御用金、このたび殿さまお国入りについての頭割り金等は免除してくれと、再三嘆願書が出ていた。

それを、無能な重役どもは、殿さまご入国のうえにて、追ってさたするから、それまで穏便に待つようにと、子どもだましのようなことをいって、頭から押えてきた。

9

領主斉信の日ごろの行状をよく知っている百姓側にすれば、領主の入国を待っていたからといって、嘆願の筋がすなおに入れられるとは考えられない。むしろ、前年の例から見れば弾圧される可能性のほうが多い。

実際、このままでいけば、百姓は食に困って総倒れになるほかはないのだ。このうえは逃散か、領主を替えてもらうか、二つに一つだ。

「いっそ、領主さまが入国するまえに、江戸へ強訴してみてはどうだろう」

「それなら、だれかれというより、みんなで江戸へ押しかけてはどんなものだろう」

破れかぶれで、そんなことさえいいだした者があるので、領内の大庄屋八人がひそかに集まり、いろいろ相談のうえ、江戸幕府へ強訴という、あまり例のない強硬手段をとることに話がきまった。

四月三日を期して、午の刻までに、領内百八カ村から五人ずつ代表者が、城の西、明石川の西岸に集合する。

十日分の食糧を持ち、各自いつでも竹槍にできる竹は用意するが、合い図があるまでけっして竹槍にはしないこと。

組頭のいいつけは堅くまもって、必ず一致の行動をとること。くれぐれも自ままの乱暴は慎むこと。

こうして勢ぞろいができたら、大庄屋八人のうち、四人が上ノ橋から城内へかかり、もう一度重役に会って、まえの嘆願を交渉する。

万一嘆願がいれられなかった場合は、五百四十の代表百姓が即時江戸へ発足する。

この場合、たとえ城内から多少の妨害はあっても、こっちはなるべく相手にならず、隊伍を組んで、衆の力で強引に押し通ること。

その他不時のことは、いちいち大庄屋八人にはかり、いっさいそのさしずにまつこと。

こういう申し合わせができて、四月三日の当日は、明石川の西岸へ朝早くから各村の代表百姓がぞくぞくと集まりはじめ、一揆はいよいよ行動を起こした。

しかも、代表は一村五人ときめてあったが、これは事が破れれば決死の覚悟で江戸へ立つのだから、その壮行に気勢をそえるのと、見送りのため、村の者が五人、十人といっしょについてくる。昼近くなると二千に余る百姓どもが集まり、まだどんどん人数はふえてくる一方だ。これが竹ぼらを吹きたて吹き鳴らして、城内を威嚇するのである。

色を失ったのは、城内の侍たちであった。

ことに、仕置き家老内藤次郎右衛門は、江戸表からのさしずで捨三郎の潜入という問題があるから、あらかじめ城代家老平松外記以下、有力な重臣どもにはそれぞれ閉門謹慎を仰せわたしてある。こうなると、ひとりで采配をふるわなくてはならないから、ただまごついて興奮す

るばかりだ。
「ご門はみんな厳重にかためてあるだろうな」
「はい、かためてあります」
「いったい、百姓どもはなんと申しておるのだ」
「その儀は、まだわかりません。当方は足軽頭長木市郎兵衛どのが、上ノ橋をかためて、百姓どものあいさつを待っておりますから、いずれなんとか報告があることと思います」
相手になっているのは、大目付尾崎才兵衛である。

10

「ご家老、いまのうちに城内の女こどもをお城へ移しておいてはどうでしょう」
ご用べやに詰めているひとりが、次郎右衛門に進言した。城内の屋敷町は外堀をめぐらし、王子御門、櫓屋御門、大手御門、細工御門、大蔵御門の五ところしか出入り口はないが、そのどれが破れても一揆は屋敷内へなだれこむだろうし、五ところへ手わけして敵をふせぐより、いまのうちに中堀をめぐらせて、二ところしか出入り口のない城中へ避難させておいたほうが安全ではないかというのである。
「いや、今のところはまだだいじょうぶでしょう」
ちょうど打ち合わせにきていた郡奉行のひとりがいった。
「てまえはさっき、上ノ橋まで出向いて、一揆の様子を見てきましたが、かれらの持っているのは、竹の棒だけで、竹槍ではありません。これは乱暴はしないという申し合わせでもあるのではないかと思われます。そのうちにだれか代表者が出てきますから、避難はそれらの話を聞いてからでもおそくはないと思います」
「いったい、やつらはどんな話を持ってくるつもりなのだ」
次郎右衛門が食ってかかるように、郡奉行に

詰問する。
「先日来の嘆願を、もう一度やろうというのでしょう」
「それは殿のご帰国まで相待つように、たびたび申し聞かせてある。なんでいまさら一揆などおこす必要があるのだ。いくら嘆願をくりかえされても、殿ご入国まで待てとわしには返事をするよりほかないではないか」
「そうなると、百姓どもはきっとあばれだすつもりでしょうな。竹の棒は、先さえ切ればいつでも竹槍になる。いまのうちに鉄砲組に用意を命じておき、もしあばれだすようなら、機先を制して、こっちから激しく撃ちかけてみせるんですな。二、三十丁もいっせいに撃ちだせば、烏合の百姓どもですから、こっちの決意に驚いて、たいてい解散するでしょう」
そんな乱暴なことをいいだす者もある。
「いや、鉄砲はいけません。かえって百姓どもを死にものぐるいにさせます」
あわてて反対したのは郡奉行だ。
「いくら百姓どもが死にものぐるいになっても、鉄砲にはかなうまい」
「しかし、百姓どもは二千人からの人数ですぞ。まだどれだけ集まってくるかわからぬ。群衆の力というものはこわいものですからな」
「では、貴公は百姓どものなすにまかせろと、いわっしゃるのか」
「なすにまかせるのではなくて、なんとかうまくさとして引き取らせるのです」
「その、なんとかうまくさとすことができなかった場合はどうするのだ」
小田原評議はいつまでたってもらちがあきそうもない。
まだ一揆のほうからはなんのあいさつもなく、竹ぼらの威嚇にいよいよ城内の人心が冷静をかきかけてきたおりもおり、垂水の番所から、捨三郎あらわるの急報が飛んできたのだ。

11

——時も時、やっかいなことになったな。

次郎右衛門はまゆをひそめてみたが、注進の様子では、捨三郎はおとなしく杉田組に取りかこまれ、別に抵抗するようなふうもなく城下へ向かっているという。このまま事なく城内へつれこんでしまえば、こっちのものだが、城下町へかかってから、ふいにあばれだすようなことでもあると、めんどうになる。

「才兵衛——」

次郎右衛門は大目付尾崎才兵衛を呼んで、別室へつれていった。

「どうやら、小名木川さまがうまく網にかかったそうだ」

「そうのようでございますな」

才兵衛もなんとなくおちつかない顔だ。

「兵之進が厳重に取りかこんでいるそうだし、目下のところはおとなしく城下へ向かっているそうだが、万一ということがある。おぬし、人数を用意して、城下はずれまで、それとなく迎えに出てくれ」

「そういたしましょう。それまで一揆のほうが動かずにいてくれればいいのですがな」

一揆が城下町へなだれこんで、混乱におちいると、いきおい外堀の諸門をしめなければならなくなるから、捨三郎を城内へつれこむことが困難になる。いや、へたをすると百姓どもにこっちが取りかこまれて、自分たちの命があぶなくなるのだ。つまり、この出迎えの役は、決死隊ということになる。

「もし一揆がなだれこんだ場合はやむをえない。非常の措置をとってくれ」

「切れとおっしゃるのですな」

「うむ、やむをえまい。相当腕がたつそうだから、途中でなにをたくらむかしれぬ。その場合も同断ということにしておこう」

「承知しました」

「あいにく、こういう場合で、小名木川さまのためにこれ以上こっちで手くばりをしておくというわけにはいかないのだから、おぬしの才覚ひとつでしっかりたのむ。要は、絶対に取り逃がしてはならんということだ。いいな」

「かしこまりました」

才兵衛は覚悟をきめたような顔をして、立っていった。

――いっそ、なんでもいいから切ってしまえと、いいつけておいたほうがよかったかな。

あとで、そんな不安さえ感じる次郎右衛門だ。

あいかわらず百姓どもの竹ぼらが、ぶきみに鳴りひびいている。

ご用べやへ帰って、座につくまもなく、取り次ぎの若侍が百姓どもの注進を持ってきた。

ただいま、一揆のうちから大庄屋四人が合い図をして上ノ橋をわたり、長木どのが応対に出ますと、かねて嘆願しておきました三ヵ条、ぜひお取りあげ願いたい儀につき、恐縮ながら城代家老平松外記さまにここまでお運びくださいますよう、お取り次ぎ願いますと申してまいったそうでございます」

つまり、ほかの者では信用ができない、平松外記と交渉したいと、百姓どもから申し出てきたのだ。

12

「当方を呼びつけるとは、けしからん百姓どもだ。その掛け合いに出た四人の大庄屋とはだれとだれだ」

相家老の日置十太夫が、取り次ぎの若侍をにらみつける。若侍は覚えの紙を出して、

「大蔵谷の広瀬六左衛門、林村の伊藤久兵衛、大久保町の安藤宗右衛門、鴨谷村の中垣治右衛門の四人だと申すことです」

と、読みあげる。

「閉門中のご城代を、どうするというわけにはいかぬ。内藤どの、どうでござろうな。四人の

者をいっそ城内へ呼びよせて、よくさとしてみては――」

「おそらくまいるまい。たとえまいったとしても、さとしたぐらいで納得するかどうか」

次郎右衛門は気のり薄である。

「納得いたさなければ、四人の者を人質にして、百姓どもを解散させる手もありはせぬかな」

十太夫がしたり顔にひざをすすめる。

「それがあるから、百姓どものほうでも当方を呼び出しているのだろう。しかし、いちおうは総代百姓にまかり出るよう、返事をさせるのも手だな」

「肝心なことは、百姓どもの嘆願をどう措置するかということでございましょう」

用人須原又兵衛が横から注意をうながすようにいった。

「むろん、嘆願の筋は、殿のご入国まで返事はできぬ。しかし、百姓どももそれでは納得すまい。ぎりぎりのところ、ご帰国中の殿に急使を立てるということにして、総代だけを城下町へ残す。そこまでこぎつければ上乗のほうだ。まず押し問答のほうをできるだけのばし、その間に総登城をふれ、籠城の用意をする。一番手は外堀でくいとめるとして、最悪の場合は屋敷町の家族を本丸へ避難させる。そのつもりでおのおの部署につき、さっそく総登城をふれなさい」

次郎右衛門はようやく仕置き家老らしい分別を取りもどしてきたようだ。

まもなく、総登城の太鼓がものものしく鳴りだした。

その間に城内の使者は上ノ橋の長木市郎兵衛のもとへ走り、対岸に待機している総代四人を橋の半ばまで呼び出し、長木から、

「城代家老平松外記どのは閉門中ゆえここへはまいれぬ。嘆願の儀があれば、仕置き家老内藤次郎右衛門どのが会うそうだから、総代の者にお城へまかり出るように、と申すことである」

と、申しわたした。

総代四人はかねて打ち合わせていたものとみえ、大蔵谷の広瀬六左衛門から、

「わたくしどもは平松外記さま以外のおかたには、なにも申し上げたくございません。百姓どもも一同のたっての懇望でございますから、まげて外記さまにお目にかかれますよう、お取り計らい願います」

と、再度申し入れてきた。

総登城の太鼓と、それに刺激されていっそう吹きたてる竹ぼらのものものしさの中を、使者の騎馬があわただしく城内へ引きかえしていく。

かがり火

1

城がたと総代百姓との押し問答は、数回くりかえされ、城がたでは城内へまかり出るようにと、あくまで突っ張り、百姓側では平松外記のほかは信用できぬと、がんとしてうけつけない。最後に、百姓側から、

「どうしても平松さまにお目にかかるようお取り計らいくださらぬとあらば、ご城内の重役がたに誠意がないものと見て、てまえどもはこのまま江戸へ発足いたし、大公儀へ嘆願の筋を訴え出ることにいたします。刻限は暮れ六つと切りますから、さようご承知くださいますよう」

と、強硬な提案があったのは、八つ半(三時)すぎであった。

その間に、城がたではいっさい籠城の準備をおえ、屋敷町の家族を本丸へ避難させるばかりになったが、一方一揆側も、領内百八カ村のほか、新しく明石領に加えられた美嚢郡四十五カ村からも代表百姓が参加してきて、総勢三千を越える数に達してきた。一揆の気勢はあがるばかりである。

城下町のほうへは、あらかじめ一揆側総代か

ら会所をとおして、たとえ城下を通行するような場合があっても、けっして乱暴狼藉等はさせないからと、ちゃんと申し入れがあった。町方としても、苛酷な運上、頭割り金をとられていることは百姓とおなじである。したがって、みんな一揆のほうへ同情しているが、これだけ殺気だっている人数が、万一暴動化すると、どんなことになるかしれない。ことに、日が暮れるとあぶないと見て、人心は戦々恐々として、少しもおちつかなかった。

次郎右衛門の密命をおびた大目付尾崎才兵衛は、死士五人をえらんで、大蔵谷で杉田組の一行と出あったが、ここまでくる道々も、明石川へいそぐ一揆百姓の一団に、幾組みとなく行きあう。それがみんな城内の侍と見て、反感のこもった目を光らせていくのだ。これはうっかりしたまねはできない。へたに刀など抜こうものなら、捨三郎を切るまえに、自分たちのほうが百姓たちになぐり殺されてしまいそうだと、なんとなく恐々たるものがある。

大蔵谷から城下町までは、ずっと人家つづきになっている。

捨三郎も通行人たちの話で、一揆が突発していたことはすでにわかっていた。

――ひと足おそかったようだ。

という感が深い。

ただ、さいわいなことには、一揆はまだ明石川の西岸に待機中の形で、混乱にはおちいっていないようである。暴動化しないまえに現場へかけつけさえすれば、必ず方策があるにちがいないのだ。

そう思うから、自然と足が早くなる。

城下町へはいるころから、一揆の吹きたてる竹ぼらがしだいに耳に近くなってきた。京口門をはいって騒然たる町筋をしばらく行くと、先頭の足軽は右折して、大手門のほうへいそごうとした。

「待て――」

捨三郎は立ち止まって、後衛の杉田を振りかえり、
「兵之進、上ノ橋へ案内せ」
と、静かに命じた。

2

兵之進としても、前後に絶えず一揆百姓の一団が目を光らせていく街道筋では、めったに刀は抜きさきれない。大手門をくぐってしまえばもうこっちの勢力範囲だから、なるべく早く城内へ誘いこんでしまいたかった。
「上ノ橋へ、なにしにおいでなされますな」
「少し思う子細がある。案内しなさい」
「それはいちおう次郎右衛門にご対面のうえでのことに願います。かような険悪な事態のおりから、自ままなおふるまいは、われわれどもが迷惑いたします」
兵之進は肩をそびやかして、抗議する。
「かような険悪な事態にいたしたのはだれの責任か。迷惑しているのは、無能なそのほうどもではなくて、百姓のほうだ。黙ってついてきなさい」
「しばらく――」
だいじな場合だと見て、才兵衛が進み出た。
「てまえは大目付を仰せつかる尾崎才兵衛でござりますが、ここはともかく、兵之進の申すとおり、いちおうご城内へおはいり願わしゅう存じます。百姓どもは殺気だっておりますから、まちがいなどあってはなりません」
「そのほうを見かけたのは、大蔵谷のあたりであったな」
ことばはおだやかながら、なぜそのときすぐあいさつをしなかったかという詰問の語気がふくまれている。
「恐れ入ります。次郎右衛門申しつけにて、陰ながら警護につきましてございます」
才兵衛は如才なくいいぬけた。
「ご苦労である。どういう意味の警護か知らぬ

が、大目付ともあろう要職が、この騒動をよそに、徒党の走狗をつとめる。国もとの家来どもは、よほど暇で困っているとみえるな」

痛い一言だ。が、才兵衛は屈しない。

「暇ではございませんが、役目がらこの騒動につけこんで、万一百姓どもを扇動する不心得者がありましては一大事ゆえ、かように部署についております」

「こざかしいことを申す。だれが扇動しなくとも、一揆はすでに起こっている。一つまちがうと、家名の興廃にかかわるだけではなく、罪なき多くの人々の生命にかかわる一大事だぞ。黙ってついてきなさい」

捨三郎はもうさっさと歩きだした。

さっきからまわりを取りまいて、うさんくさそうにこっちをにらんでいた百姓の一団が、それにつれて歩きだしたので、才兵衛も兵之進も、これ以上捨三郎をさえぎることができない。まるで一揆百姓に取りまかれるようにして、街道筋を姫路門のほうへ押し流されていった。

表通りの店屋はみんな大戸をおろして、その軒下へ近所の者が立ちながら、一揆の通行を不安そうに見送っている。油屋伝次がつと行列を離れて、その一軒のほうへ走っていった。

まもなく追いついてきて、

「だんな、上ノ橋はわかりやしたよ」

と、ささやく。送りおおかみどもに変なところへ連れこまれない用心のために、自分で道をたしかめてきたのだろう。

3

姫路門を出ると、まもなく右折する道がある。一揆百姓たちは街道筋をまっすぐ行って明石橋をわたり、川の西岸へ出て一揆に合流するが、捨三郎は、その右折する道へはいって上ノ橋の東詰めへ出なければならない。

道は少し行くと左手が大竹やぶになり、この竹やぶは崖を作って、その下を明石川が流れて

いる。右手は城の外堀だから、ほとんど人通りはない。

——この辺があぶねえ。

捨三郎の左側を、わざと半歩あとからついて、背後をまもるように歩いている伝次は、そう直感して全神経をうしろへとがらせた。

前に四人、うしろへは尾崎組の五人が加わったから十一人、やるならこの辺が絶好の場所なのだ。

事実、肩をならべている尾崎と杉田とは、たびたび顔を見あわせていた。が、ここは川一つへだてた対岸のたむろしているところで、その数はすでに三千を越え、すさまじい竹ぼらに和してときどきわあっという海鳴りのような関の声さえ地をゆるがし、大竹やぶを圧して足もとからとどろきわいてくる。

その怨嗟の声のおびただしい大津波は、殺気以上のものをふくんで、いまにも爆発しそうに聞こえる。刺客の一行は、いや、才兵衛、兵之進のふたりさえ、ともすればそっちへ気をとられがちで、なんとなく意気が一致しない。ぐずぐずしているうちに、王子門を右に見て、道はしだいに下りになり、大竹やぶに沿ってついに上ノ橋の東詰めへ出てしまった。

ここには足軽十五、六人と、士分数人をひきいて、足軽頭長木市郎兵衛が、橋向こうの一揆の本営と相対立していた。

一揆が暴動化すれば、ここの人数はすぐ王子門へ引きあげることになっているが、うっかりその時機を誤ると、一同は門内へ達するまでに、暴民にまきこまれ、ここで討ち死にしなければならない。しかも、その可能性のほうが濃厚なのだから、どの顔を見ても、みんな目を引きつらせていた。

「市郎兵衛——」

捨三郎は顔見知りの長木を見かけると、つかつかとその床几のほうへ進んでいった。

「おお、これはこれは若殿さま」

五十年配の市郎兵衛は、さすがにおちついたなかにもびっくりしたように床几を立ち、まず折りめ正しく両手をひざがしらまでさげた。

「久々であるな」

「はい。若殿さまにも、いつもごきげんうるわしく、恐悦至極に存じます」

実はごきげんうるわしくないのをよく知っているから、市郎兵衛の目は急にうるんでくる。

――なあんだ、国もとだってこんなにいい家来がいるじゃねえか。

伝次はその様子を見て、とてもうれしい気がした。

「余事はさておき、百姓どものいいぶんはどうあるのか」

「失礼でございますが、陣中ゆえ、まずまずこれへ」

長木はいそいで自分の床几を懐紙で払い、捨三郎をかけさせて、その前にひざまずく。

4

百姓の申しぶんは、嘆願の儀について、城代家老平松外記に交渉したいといい、城がたでは、外記は閉門中だから出られぬと答えた。

再度一揆側から、どうしても外記に会わせてくれ、それがならぬというなら、このまま各村の総代百姓が江戸へ出て、大公儀へ強訴する、暮れ六つまでになにぶんのご返事を願いたいと申し入れ、城がたでは、即時に総登城を行ない、どうやら一揆側の要求を一蹴する腹らしいと、市郎兵衛は委細を捨三郎に説明した。

「さようか」

捨三郎はちょっと思案していたが、

「市郎兵衛、総代百姓を橋の上まで呼び出してみてくれ」

と、腹がきまったようにいいつけた。

「はい」

市郎兵衛がすぐに立ち上がるのを見て、

「長木――」
尾崎才兵衛がしかるように、わきから呼びとめた。
が、老巧な市郎兵衛は聞こえぬふりをして、橋ぎわまで進み、橋向こうへ手をふってみせてから、ゆっくり橋へかかる。足軽ふたりが組頭の供をしていった。
向こうからも手を振って合い図をかえし、四人の総代が進んできて、橋の上で出会った。ふたことみこと話しあっていた長木が、きちんとこっちを向いて右手をあげてから、ていねいに小腰をかがめた。
捨三郎にお越し願いますという合い図なのだろう。
その間に、総代四人は一揆のほうへ向いて、大きく両手をふってみせていた。
捨三郎が伝次をつれて橋へかかろうとすると、才兵衛と兵之進が例の手兵をつれて、あとにつづこうとする。
「たわけめ。百姓どもに誤解されたら、なんとする気か。控えておれ」
捨三郎は一喝して、橋へ進んだ。
ちょうど中央の総代たちの前へ達するころ、一揆の竹ぼらと騒音もぴたりとやんだ。あらしが一時にやんだようにぶきみな静けさの中に、総代百姓四人はこっちの身分を知らされたのだろう、橋の上へ土下座をして、捨三郎を迎えた。
「四人の者、遠慮なく顔をあげなさい」
捨三郎が前へ立って静かに声をかけた。
「はい」
四人はおそるおそる顔をあげた。いずれも数日来の労苦にやつれのめだつ顔である。
「わしは江戸の松平直之助である。ただいま国もとへ到着したばかりで、城内のことはまだわからぬが、そのほうどもの希望どおり、必ず外記に対面できるよう尽力いたすであろう。もうしばらく穏便にこのまま待ってくれるよう、百姓どもによく申しつたえておいてくれ」

「はっ、ありがたきおことばでございます」
「そのほうどもも、このたびは苦労いたすな、察するぞ」
「は、はい」
四人が四人とも、はっと胸がつまったようにことばもなく、ひっそりとそこへうなだれて、思わず目がしらを熱くしたようである。

5

日はすでに傾いて、橋板に人の影が長かった。
捨三郎が市郎兵衛らをしたがえ、もとの橋詰めへもどると、才兵衛も兵之進も目を光らせながら、取り逃がしてはたいへんだというように、たちまち取りまいてきた。
「才兵衛、外記の屋敷へまいる。案内せよ」
「それはなりません。平松外記どのは閉門中でござります」
才兵衛は言下にびしゃりとはねつけた。こんどこそはというつら構えである。
「そちは大目付であったな」
「さようでございます」
「閉門中の心得を申してみよ。病気の節はなんとある」
「医師をまねく必要のあるときは、夜は苦しからずとあります」
「火事のときは――」
「屋敷あやうければ、立ちのいて、そのおもむき支配へ届け出ればよろしい。自火はいうまでもなく、近所の火事にても、屋敷をふせぐ儀はさしつかえないとされております」
「それみよ。今は明石一藩が瀕死の場合に迫っている。外記が出なければ、この一揆はおさまらぬのだ、屋敷をふせぐのではなくて、城をふせぎ、城内町方の多くの人命を救わなくてはならぬ非常の時だ。ただちに案内しなさい」
捨三郎はさとすようにいってきかせる。
「一存にはなりかねますゆえ、城内へうかがわせてみます」

苦しまぎれの才兵衛だ。
「城内のだれにうかがうのか」
「内藤次郎右衛門どのが仕置き家老をおおせつけられています」
「仕置き家老が外記を閉門させたのか」
さすがに返事ができない。
わからねえ唐変木だな。たたっ切っちまえばいいのにと、伝次はむかむかしてくる。それをあおるように、またしても一揆の竹ぼらと鬨の声が、しだいに高くなってきた。
「才兵衛、武士はいさぎよくするものだぞ。百姓をかように命がけにさせたのは、だれの責任なのか。その百姓どもはたって外記に訴えたいと申している。外記でなければ信用できぬと申しているのだ。わかるか。あとで責任を問われたら、腹を切る、一藩のために、領内数万の百姓のために、その覚悟があってこそ、まことの武士ではないか。これでもまだ、そちはわしを外記の屋敷へ案内できぬというか」
「恐れ入りました。ご案内つかまつります」
小腰をかがめた才兵衛の顔はまっさおだった。
「納得してくれたか」
「はっ。年がいもなく、赤面のほかございません」
やっと腹を切る覚悟がついたらしい。
「いや、だれにも思いちがいはある。要は、心をあわせて、一刻も早く騒動をおさめることだ。尽力をたのむぞ」
あとのことばは、一同にいってきかせたのだ。

6

捨三郎は才兵衛の案内で、王子門から城内へはいった。
黙ってつづく護衛組のなかには、今の一幕を見ていて、殺意を捨てた者と、才兵衛の変心に不服の者、すなわち依然殺意をすてない者と、二派できたようである。捨三郎のすぐあとに

つづく兵之進は、むろん殺意をすてないほうの旗頭のようだ。

王子門には万一に備えて、武装した士が三十人ばかりたむろし、いずれも緊張している顔つきだが、だれにもひと目でわかる旅装の貴公子を見かけると、はっとしたように威儀を正してこっちを見送っていた。

外記の屋敷は、中堀にそって東へ進み、太鼓門にいちばん近い西堀端町のかどにある。

一揆の竹ぼらにせめたてられている屋敷町は、なんとなく人の出入りがあわただしく、本丸への避難をいまかいまかと待ちかねているふうだ。

捨三郎は歩きながら、鳥取の新太郎少将の逸事を思い出していた。

ゆえあって家老伊木長門が閉門中、少将の江戸参勤の日がきた。長門は家来を呼んで、供ぞろえをこしらえておくように命じ、自分も月代をそらせ、主人は気が狂ったのではないかと、家来は心配した。

少将のかごが門前へかかるとき、長門はひとりだけ門を出て、後ろの門をしめさせた。行列の士はみな顔を見あわせていたが、少将はかごの中からこれを見て、

「長門、――長門」

と、呼んだ。長門はかごわきへすすみ、

「天気もよろしく、恐悦に存じます。おるすの儀は、いつものごとく年寄りども談合のうえ相つとめますゆえ、少しもお気づかいなさいませんように」

と、あいさつをした。

「なにぶんたのみおく」

少将はきげんよくかごをすすめ、長門はすぐに供ぞろえして、城下はずれまで主君を見おくった。

あとで家来の者が、まだご免もないのに、押してご前にまかり出たのはどういう気持ちか、それをとがめない主君の心も不審だし、あのと

き許すくらいなら、むしろまえにご免のさたをなされたほうがよろしくはありませんかと、少将にたずねると、

「国の家老たるものは、いかに主人のいいつけでも、国主が他国へ行くのをよそに、平気で閉門しているような心がけでは、なんの役にもたたぬ。もし長門がまかり出なかった節は、そのままにはしておかぬ覚悟であった」

と、答えたという。

捨三郎は、平松外記にもそうあってほしいと思う。いや、そのくらいの良識はきっとあるおやじだと信じている。

正直にいって、当節は主人がけっして名君とはいえないのだから、家来にだけそれを望むのは無理だが、外記にそのくらいの見識があってくれないと、この一揆はとうていおさめきれないのである。

7

「開門いたさせましょうか」

外記の門前へくると、尾崎才兵衛はそういって小腰をかがめた。

「いや、くぐりからでよい」

「門番、——門番」

才兵衛は門番を呼んで、江戸から小名木川の直之助さまがお着きなされたから、ご家老にお知らせするようにといいつけ、身をひらいて、捨三郎をくぐりへ招じた。

まず捨三郎が伝次をしたがえて中へはいり、才兵衛がそれにつづき、兵之進はどうしたものか、ちょっと迷ったようだが、一同につづけと目くばせして、ぞろぞろとあとにしたがった。

門内は玄関まできれいに掃き清められ、ひっそりとして、ごたついているようなけはいは少しも感じられない。

玄関先へ進んでみると、門番の先ぶれが通じ

たとみえ、もうちゃんと外記がただひとり式台におり立って、出迎えていた。五十の坂を三つ四つ越した思慮分別重厚な人がらで、月代をあたり、裃をつけ、式台のわきへ寄せて真新しいぞうりまでそろえてあるのは、城内から迎えがあればいつでも登城できるように用意していたものだろう。さすがに心にくいまでのたしなみである。

「外記、壮健でなによりだな」

捨三郎は目を輝かせて、つかつかと前へ寄った。

「若さまにもご健勝の体で、なによりでございます」

心から微笑して迎える外記だ。

「ご当地へはただいまお着きのようにうけたまわりましたが」

「うむ。いま着いて、上ノ橋へまわり、百姓どもに会ってきた」

「それはそれは、よくお気づかれました」

「百姓どもは、ぜひ外記に会って嘆願の筋があると申しておる。出向いてくれるであろうな」

「承知いたしました。いちおう家老どもと協議のうえ、さっそく取り計らうことにいたします」

「登城するか」

「いえ、次郎右衛門と十太夫を呼びよせましょう」

「さようか。わしから申しつけよう」

捨三郎はそこにひざまずいている才兵衛のほうを向き、

「才兵衛、いま聞いたとおりだ。次郎右衛門と十太夫にまかり出るよう、急げと特に申しつけよ」

と、いいつけた。

「はっ」

才兵衛の顔に決死の色がうかんで、立とうとすると、

「待て、才兵衛」

外記が静かに呼びとめた。
「はい」
「両人ともふいの騒動に、多少うろたえたことを申すかもしれぬ。その節は、非常の場合である。本末を転倒せぬように、そのほうからよく注意してつかわせ」
外記の口から、閉門中ということばは、まだひとことも出ない。

8

そのころ——。
城中では、刻々に暮れ六つが迫っているが、いまだに一揆に対する処置ははっきりとまとまりがついていなかった。
閉門中の外記を呼び出して、百姓どもの慰撫をたのむということは、いまさら面目上むろんできない。
もう一度こっちから使者を立てて、他の重役と折衝するように説得してみてはという説も出たが、では自分からその使者に立とうという自信のある者はなかった。だれにも成算がないからである。
が、暮れ六つをすぎれば、一揆は強訴のため江戸へ出発と、ちゃんと通告してきている。そんなまねをされては家名がたたなくなるから、どこかで一揆を食いとめるか、追い散らすか、そうなってはとうてい百姓どもと一戦はまぬがれない。
「今のうちに家族の者を郭内へ避難させ、鉄砲の用意をしておかぬと、取りかえしのつかないことになりますぞ」
躍起になって、それを主張する者さえあった。いまもって家老たちになんの対策もたたないとすれば、けっきょくそうなるよりほかはないので、城中もしだいに殺気だち、
「いったい、御用べやはなにをしているんだ」
「こんなときには、やっぱりご城代でないと、収拾がつかんのかな」

と、そんな陰口さえ口にする者が出てきた。

御用べやでは、相家老日置十太夫と用人須原又兵衛が、暗い顔をして、次郎右衛門の最後の決断を待っていた。

そこへ、尾崎才兵衛がむっつりともどってきたのである。

「おお、もどったか」

次郎右衛門は一瞬、もうかたづいたかというように、目を輝かせる。

「ただいま、小名木川の直之助さま、平松外記どののお屋敷へはいられまして――」

「なにッ」

三人一様に愕然とするのを、才兵衛は知らん顔をして冷静につづける。

「直之助さまのお仰せには、一揆の儀について談合したい、火急ご家老さまがたに外記邸まで出向くようにとのことでござります」

「黙れ、才兵衛。外記どのは閉門中だぞ。そのほうがついていて、なぜ小名木川さまにさような自ままなまねをさせたのか」

案の定、十太夫が頭からかみついてきた。

「おことばではございますが、この一揆は、外記どのが出なくては、収拾の道がつきません。小名木川さまには、ただちに上ノ橋へ向かわれ、総代百姓にお会いなされて、さようご思慮あそばされましたようです。てまえとしましても、ほかにご密命はおびておりますが、公平に見まして、当面の急はこの騒動を処置するにあると悟り、おしかりは覚悟のうえで、かよう使者に立ちましてございます」

「で、われらがまいらぬと申したら、小名木川さまはなんとなさるつもりかな」

次郎右衛門にはなにか思うところがあるらしく、案外おだやかに聞きかえした。

9

「ともかくも、本末を転倒せぬよう、至急まいるようにと、外記どのは申しておりました」

才兵衛はおちついて答えた。

「たわけたことを申せ。本末を転倒しているのはそっちだ。小名木川さまはご隠居の身、外記どのは閉門中、われらのほうから呼び出しをうける理由はないではないか」

十太夫はまだそんなことにこだわっている。

「しかし、たとえお出向きにならなくとも、小名木川さまは外記どのをつれて、一揆慰撫にお乗り出しあそばす覚悟でございましょう。閉門はご当主さま当座の御意で、明石松平の家名と、城代家老の職責はお代々のもの、一藩が興廃にかかわる非常の場合には、のちのおとがめはおとがめといたし、身を投げうってご奉公するのが、家老たるものの心がけかと存じます」

腹を切ると度胸がきまったとたん、物の本末が自分にも正しく目にうつってくる、人の見識というものは、魂のおきどころひとつできまるものだと、才兵衛はわれながらしみじみと感じさせられた。

「十太夫、まいってみることにしよう。あのかたがたにかって百姓どもと事をきめられてしまっても、あとでわれわれが困るばかりだでな」

次郎右衛門はあっさりとそういって立ちあがった。実は、どうしても外記の力をかりなければ、一揆は無事におさまりそうもない、といって、こっちから相談を持ちかけていくのは面目上困るし、内心いいきっかけはないかとひそかに待っていた次郎右衛門なのだ。

捨三郎と外記とは、玄関前に床几をすえて待っていた。おそらく、閉門中だから座敷は使わぬという心ぐみなのだろう。

——さすがに憎いことをやる。

次郎右衛門にはやっぱりけむったい存在である。しかも、だらしのない刺客どもが、少し離れて、麗々しく目ばかりぎょろつかせているのだ。

「お招きによりまして、内藤次郎右衛門、日置十太夫、さっそくまかり出ましてございます」

丁重に小腰はかがめたが、義理にも、ようこそご帰国なさいましたとはいえない江戸のやっかい殿だから、わざとそのあいさつは省略する。

「おお、まいったか。ご苦労である。――外記、ただちに出向くといたそう」

協議も相談もなにもない、捨三郎はすっと立ち上がった。

「お供つかまつります」

外記もすぐあとにつづく。

「才兵衛、案内をたのむぞ」

捨三郎のまなざしはあたたかい。

「はッ」

会釈をして先に立ちながら、なるほどこのかたは傑物だ。ふしぎな力を持っていると、才兵衛はもうすっかり心服させられている。

才兵衛が先頭に立ち、つづいて捨三郎が外記と肩をならべ、そのあとを腰ぎんちゃくの伝次、あとから次郎右衛門と十太夫、例の護衛の一団がまたしてもそれにつづく。

10

城方からいよいよ平松外記が乗り出したことは、三千の百姓どもにたちまち知れわたり、総代百姓の合い図で、明石川の西岸は水を打ったようにしいんとなった。

すでに日は落ちて、西の空に夕焼け雲が赤い。からすが幾羽となく浜方から山のほうへ鳴きながら頭の上を飛んでいく。

上ノ橋の中央で、城方は外記と捨三郎が並んで床几にかけ、その後ろへ次郎右衛門と十太夫が立ち会い人という格で掛ける。総代百姓は大蔵谷の広瀬六左衛門以下四人、例によって橋の上へ並んですわった。

「領主さまへ嘆願のおもむき、平松外記これにて聞こう」

外記がまず静かに声をかける。

「恐れ入りましてございます。百姓ども一同になりかわりまして、大蔵谷の広瀬六左衛門から

申し上げます」

六左衛門が慎んで顔をあげた。

「このたび百姓どもかように騒動いたし、お城下を騒がせましたことは、まことに恐れ入った儀にございますが、ご承知のとおり、この両三年、領内の年貢三割増しが相つづき、昨年も一昨年も、本年かぎりということばがありましたゆえ、百姓ども困難はつかまつりましたが、これもご領主さまへご奉公と心得、曲がりなりにもお納めつかまつりましてございます。すると、またこのほど、本年にかぎり三割増しを仰せ出され、そのうえ不時のご用金、このたびは殿さまお国入りについての頭割り金まで申しつけられる始末、かようにては総百姓とてもその日のくらしがたたず、ついには餓死か、逃散か、まことに難渋つかまつりますので、一同相談のうえ、ぜひ本年からは年貢平年どおり、不時のご用金、頭割り金等は、いっさいお取りやめを願いたく、各村々の総代百姓うちつれまして、かくのとおりご嘆願にまかり出ましてございます。お聞きとどけくだされればまことにありがたきしあわせに存じ奉ります」

六左衛門は年配も五十を越した篤実な人望家で、能弁というほうではなく、訥々と申しのべるのであった。

「そのほうどもの申しぶん、よく相わかった。年貢三割増し、不時の用金、またこのたびの頭割り金等は、領主さまにおかせられても、重々無理はご承知あられるが、お内所窮乏のため、余儀なく仰せ出されたのである。しかし、百姓ども餓死のほかないまでに難渋するとあっては、申さば百姓あっての領主、必ず領主さまも嘆願のおもむき、ただちにお許しに相なることと思う。及ばずながら外記も尽力いたすであろうから、安心するがよい」

「ありがたきおことばにございます」

「ついては、なにを申すにも領主さまはご帰国の道中にあって、ただいまはるす、さっそく急

使をもっておうかがいいたさねば、家老どもの一存にはいかぬことだ。日数にして七日はかかろうか。それまでかように百姓どもが大勢城下に集まっておっては人心がおちつかぬ。かつは公儀に知れても穏やかでないから、総代百姓のみ数人、城下にとどまってご返事を待つようにしてもらいたいが、この儀はどうあろうな」

相談するように、外記が提案した。

11

代表者だけ残して、一揆を解散してくれというのである。外記は嘆願の筋はかならずとおしてやると誓ってはくれたが、ただそれだけで、命がけで集まっている百姓たちが納得するかどうか。

「さあ、その儀は――」

と、六左衛門は同席の三人と顔を見合わせてしまった。

「こういたしてはどうか――」

捨三郎がわきから口を添えた。

「ただ口約束だけでは、百姓どももたよりなく思うであろう。嘆願のおもむきは必ず貫徹させるしるしとして、城方より人質を出す。人質は一藩の責任者たる平松外記、内藤次郎右衛門、日置十太夫、三家老の嫡子たること。望みとあればこの直之助も人質になろう。どうだな、外記」

「てまえはけっこうかと存じます。――どうだ、今の人質にて、そのほうたちから百姓どもを納得させてくれぬか。これが一揆ということになると、事が納まっても、公儀のてまえ、城方からも、一揆側からも責任者を出さなくてはならん。いま百姓どもが解散してくれれば、一揆にならずにすむのだ。そのほうどももよく熟考してみてくれぬか」

一揆の責任者は磔（はりつけ）という前例になっている。そうさせまいとする外記の苦衷と、みずから人質になろうという捨三郎の一言は、深く総代四

人の胸をうったらしい。
「ご理解のほど、よく相わかりましてございます。なにぶん一存にもなりかねますゆえ、ただいまのおことばをよく百姓どもに申し聞かせ、相談のうえ、後刻あらためてご返事つかまつりたく存じますが、いかがでございましょうか」
「その儀はさしつかえない。われらはひとまず城へ引き取って返事を待つであろうから、百姓どもにはよく事をわけて納得させてくれ」
「かしこまりましてございます」
これで第一次の会見は終わった。
内心おだやかでないのは、無断で嫡子を人質ときめられた次郎右衛門と十太夫である。百姓どもは日ごろ自分たちの専横をよく知っているから、うっかりするとせがれどもがどんなめにあわされるかしれない恐れさえあるのだ。
「両人、登城のうえ、評定を開く。至急諸役の者を集めておくように」
橋詰めへ引きかえすと、外記が内藤、日置にいいつけた。
「おことばではございますが、かりにも閉門中のご城代が、登城はいかがなものでございましょうか」
ここだというように、十太夫が抗議する。
「さしつかえない。両人では采配が振れぬゆえ、わしが登城するのだ。閉門の責めはあとのことでよい」
外記は軽く一蹴する。
「百姓どもに人質までつかわして、万一殿さまにご異存のあった節はなんとなされますな」
かわって次郎右衛門が突っかかってきた。
「ご異存のなきまで、ご理解申し上げるのが、家老どもの責任ではないか」
さすがに外記だなと、捨三郎は感心せざるをえない。

12

一揆側からは、殺気だっている百姓どもを説

得するのに手間がかかるとみえて、容易に返事がこなかった。そんなうまいことをいって、まただまされるのではないかという不安が、多分にあるからだろう。

領主不在の家老たちとしては、いちおうこういう形でおさまりをつけていくのが、一揆の常識なのだ、というようなことは、よほどものなれた百姓でないとすぐには理解できない無学の者のほうが多いのである。

日が暮れて、竹ぼらの音はもうやんでいたが、そのかわり明石川の西岸には、あっちにもこっちにもおびただしいかがり火がたかれ、そのあたりの空も、川面もまっかに焼けて、竹ぼらとはまた違うものものしさが、城下の人々をいっそうぶきみにさせていた。

その夕がた——。

小稲、美代、要吉の三人づれは、捨三郎に半日おくれて、明石領へはいり、垂水の宿へかかっていた。

道々、明石の城下へはけさから一揆が押しよせていると聞いていたが、ここまできてみると、今夜は明石の城下へはいるのはあぶない、だいいち、旅の者を泊める旅籠がないから、みんな垂水泊まりにしているということで、宿じゅうがごったがえしていた。

「どうしようねえ、お美代さん」

小稲はまず美代に相談してみた。

「若さまはどうなすったかしら」

「それは自分の家のことですもの、捨さんはこんなところにぐずぐずしちゃいないでしょうよ」

「では、美代はお城下へまいります。なにか若さまのご様子もわかるでしょうし」

かげながらお供をする、そしてなにかあったらすぐ駆けつける、それが目的で江戸を立ってきたのだから、美代はあくまでも一本気だった。

むろん、心はおなじ小稲で、美代や要吉がいっしょだから、なにもかもいっしょの行動をと

ってはいるが、自分ひとりなら、もうとっくに捨三郎の前へ出て、しかられようと追われようと、けっしてそばは離れないだけの度胸は持っている小稲なのだ。

「要ちゃんも、このままお城下へ行きたい組なんだろうな」

小稲がわらいながら聞いた。

「行くとも。おれ考えているんだ。もうここまできちまえば、いくら殿さまだって、江戸へ帰れとはいわないだろうと思うんだ」

元気よく要吉が答える。

「じゃ、みんなで行ってみることにしましょう。泊めてくれる家、一軒ぐらいはあるかもしれない」

もう三人ともすっかり旅なれているし、これから行けば途中で日が暮れるにきまってはいるが、捨三郎の領地へはいったのだと思うと、まるで自分の家へでもきたような気安さが自然にわいて、少しもこわいとは思えなかった。

「なんだか自分の領地へきたような気持ちがするから、いい気なものね」

小稲はうきうきと、そんな正直なことを口にしてわらったりした。

13

垂水の宿を出はずれるとまもなく、六尺棒を持った足軽ふたり、つかつかと三人のほうへ出てきながら、

「しばらくお待ちください」

と、呼び止めた。

「なんかご用ですか」

こんなときはきっと小稲が前へ出て、美代はその背中にかくれるようにする。

「てまえどもは小名木川さまのお申しつけにより出張っている者ですが、あなたがたはもしや、江戸の小稲さんがたではありませんかな」

「小名木川さまって、捨さんのことでござんすか」

小稲はびっくりしながら、ついそんな念の押し方をする。

「はあ、江戸の直之助さまでございます」

小腰をかがめるようにして、足軽は至極丁重である。

「捨さんがどうかしたんですか」

「はあ。きょうたしか八つ（二時）すぎに、お城代さまのお屋敷へつかれまして、あいにくきょうは城下の明石川の西へ、領内の百姓どもがたくさん集まっております。これがいつ一揆になって城内へなだれこむかわからぬ状態でございまして、ゆだんがなりません。小名木川さまが申しますには、はっきりまいるとはいえぬが、ことによると江戸から女たちがわしのあとを追ってくるかもしれぬ、なにも知らず城下へはいって、まごつくようではあぶないから、念のために迎えに出ていてみてくれと、かようにおおせつけられて、お待ちしている者でございます」

「やっぱり、知っていなすったのかしら」

小稲は相談するように美代のほうを向いた。自分たちが明石へくるだろうとわかっているのは、捨三郎か油屋伝次のほかにはいないはずだから、捨三郎でなければこんな迎えをよこすはずはない。が、箱根からこっちは、その捨三郎にさえかくれて、一度も会わずにあとを追ってきている三人なのだ。

「若さまはご聡明なおかたなのですもの、ちゃんとわたくしたちの心の中を見抜いておいでなさるのですわ」

美代は少しも疑わないようである。

「たぶんそうなんでしょうね」

小稲もにっこりして、

「お城下はきょう、旅籠屋さんがみんな休んでいるって、ほんとうなんですか」

と、足軽に聞いてみた。

「はあ、なにぶんいつ百姓どもがあばれだすかわかりませんのでな」

「捨さんはあたしたちの泊まるところ、見つけ

ておいてくれたのかしら」
そんないい気なことをいいだす小稲だ。
「すると、あなたがたは小名木川さまがおおせになった江戸の小稲さんと美代どのなのでございますな」
足軽があらためて聞く。
「そうなんです」
「では、ご城代さまお屋敷まで、てまえどもがご案内いたします」
足軽ふたりはおじぎをして、先に立って歩きだした。

14

舞子浜へかかるころ、海は蒼茫と暮れだして、新月のほのかな光が、白い道にただよいだした。
道は、東は垂水で、西は林崎で通行が止まっているらしく、まったく人通りはない。舞子をすぎると、大蔵谷まではほとんど人家もとびとびにしかない寂しい夜道である。
「迎えに出てもらって、やっぱりよかったわねえ、お美代さん」
責任の重い小稲は、何度もそれを口にしたほど、安心しきっていた。
そして、大蔵谷が近くになるころから、行く手の西の空のひとところが、赤く焼けているのが見えだし、それがひと足ごとに大きく、はっきりとしてくるのだ。時刻にして、もうかれこれ五つ（八時）をすぎたところである。
「火事かしら、あれ」
火事だとすれば、ちょうど城下あたりのように思えるので、小稲は心配になって聞いてみると、
「いや、火事の火とは違うようですな。一揆の百姓どもがかがり火でもたいているのでしょう」
足軽たちはそう答えたが、しかし気にはなるらしく、そわそわと自然に足が早くなる。
そのころ——。

一揆側はやっと解散を納得し、総代百姓から城方へ返事があったので、城方では約束どおり誓約書にそえて、三家老の嫡子を人質として百姓側へわたした。一門の直之助を人質にとることは、さすがに一揆側のほうでも遠慮したようである。

城内から早馬が二騎、事のしだいの注進と、百姓側へ正式の回答おうかがいのため、帰国の道中にある領主斉信のもとへ、使者が飛んだ。

隠居の身だから、登城は遠慮した捨三郎は、外記の屋敷の玄関先で委細の報告を聞き、人質三人のかごを上ノ橋まで見送っていった。

人質は外記の嫡子小太郎十六歳、次郎右衛門嫡子信之助十八歳、十太夫嫡子勇吉十五歳の三人で、いずれも礼装をして、さすがに武士の子だから臆した顔色をしている者はひとりもなかった。

橋詰めまでは城内の侍たちが十数人見送ってきたが、そこでかごはあらためて出迎えた総代百姓四人の手に引きわたされる。

捨三郎はかごのとびらをあけさせて、ひとりひとりに、

「ご苦労である。健康にじゅうぶん気をつけて、お家のための大役、どうか無事に果たしてくれたのみおくぞ」

と、いちいち会釈してまわった。

「総代ども――」

「はい」

「たいせつな人質である。まちがいのないよう、くれぐれも注意してくれよ」

「はい。おことばまでもございませぬ。わたくしどももみな人の親、必ず粗略にはいたしませぬゆえ、なにとぞご安心くださいますように」

六左衛門が代表して答え、三丁のかごはやがて橋へかかった。

それと見て、まっかなかがり火が真昼のように明るい対岸から、かちどきにも似た百姓どもの興奮の声が、わあっと津波のようにまきおこ

った。

15

「これからどちらへおいでになられますか」

人質のかごが橋を渡りきってしまうのを待って、尾崎才兵衛が心配そうに捨三郎に声をかけた。城へはいっては危険な人だし、いちばん安心のできる外記の屋敷は、閉門中だから人をとめるわけにはいかないだろう。そうかといって、めったな家へは行けもしないし、来られるほうでも困る身分なのだ。

「心配いたすな。長寿院へまいろう」

長寿院は松平家の菩提所で、ここの寺内に舎弟大学がへや住みのまま預けられている。

大学はことし十六歳で、斉信側の重臣どもの意見では、やがて出家をすすめる気でいるのだろう。こういう立場の一門は、なにひとつ自まは許されないのだから、家臣の次男より哀れということになる。

「それがおよろしいかと存じます。ご案内つかまつりましょう」

才兵衛は慎んで前へ立った。

「持ち場がございますので、てまえはお供できません。なにとぞ、じゅうぶんお気をつけられますように――」

長木がそういって、心から会釈をしていた。

「ありがとう」

捨三郎は足軽頭の厚意に、親しい微笑をもって答えながら、才兵衛につづく。

送りおおかみの杉田兵之進が、例の組下をつれて、まだ執念深く護衛について離れようとしなかった。

「箱根のおおかみってやつはね、だんな、仲間が殺されると、みんなで取りあいのけんかをやりながら、その骨まで食ってしまうんですぜ。あさましいのなんのって、まったく話になりませんや」

伝次があてつけがましい悪態をつく。

「われわれは人間に生まれてよかったな」
「と、だれだって思うでしょう」
「うむ」
「それがまた甘い人間のあさはかさでさ。人間てやつは、なまじ知恵があるだけに、ほんとうは箱根のおおかみなんかより、数倍すごいんですぜ。一つ欲に目がくらむと、親子主従の見さかいさえなくなるんだからなあ。明石ってところは、そのすごい人間の本場かもしれやせんね」
伝次の悪口はだんだんろこつになってくるようだ。
道は大竹やぶにそってのぼりきり、対岸にまで一揆のかがり火が天をこがしているから、竹やぶも、道も、左手の堀も赤々と明るい。むろん、人通りはまったくなかった。
「あっ」
前を行く才兵衛がぴたりと足を止めた。
その竹やぶの中から、十数人の黒装束がふいに立って、ばらばらと一行の行く手を断ちきったのである。
——ちくしょう、出やがった。
うしろのおおかみどもがあぶないと見たから、伝次はとっさにひと足さがって捨三郎の背後をかばいながら、道中差しの柄に手をかける。
「そのほうは何者か」
前で才兵衛が捨三郎を背にかばうようにして、これも死ぬ気でじっと覆面黒装束の敵をにらみすえる。

16

「ご当主さまおおせつけにより、小名木川さまをお迎えにまいりました」
組頭ともみえる黒装束が、会釈もせずに昂然といい放った。人間は顔をかくせば、どんなにでもずぶとくなれるものとみえる。
もっとも、顔をかくしてずぶとくなるような人間はそう恐れるに足りないが、この組頭がひきいる一団は鉄砲組とみえて、前に三人折り敷

き、うしろのふたりは立ち撃ちの構えをとった一組みが、三組十五人、それぞれの位置へたちまちものものしい陣を敷いている。これらの足軽どもは、高島秋帆流の砲術を訓練されているのだろう。

「才兵衛――」

「はい」

「さがっていなさい」

「申しわけございません」

十五組みの鉄砲を向けられたのでは、たとえ才兵衛がどう身を犠牲にしても、捨三郎を救うことはできない。うっかりこんな寂しい道順をとったのではなく、屋敷町を抜けては敵が多いと考えたからのことだが、それがかえってこんな申しわけのない結果になってしまったのだ。

「心配いたすな」

捨三郎はいたわるようにいって前へ出た。

「この丁重な出迎えは、次郎右衛門のいいつけか」

「ご当主さまのお申しつけと、うけたまわっております」

「かぶり物をかぶっていけといいつけたのは、次郎右衛門であろう。ご当主斉信どのは乱暴な人ではあるが、前将軍の子だ。顔をかくして、わしを出迎えろなどという卑屈なことはいいつけまい。次郎右衛門は頭が狂ったとみえるな」

「お刀をおわたし願います」

「罪人あつかいだな。どこへつれていこうというのか」

「おかごが用意してございます」

「それもいえぬか。まあ、よい。しかし、鉄砲を打ってはならんぞ。川の向こうには死にもの狂いの百姓どもがいる。自分たちが狙撃されたと誤解すると、人質を殺して、屋敷町へ乱入する。罪もないそのほうどもの多くの家族が虐殺されるぞ。わかるか」

「お刀をおわたし願います」

「やむをえぬ。武士の作法を知らぬおまえたち

に降参するのではない。多くの人命にはかえられぬから、刀をつかわそう」

「あっ、逃げた」

後ろのほうからびっくりして叫んだときには、ふいに油屋伝次が脱兎のごとく、もう大竹やぶの中へ駆けこんでいた。

「撃てッ、撃てッ、逃がすな」

組頭が狼狽して鉄砲組へ命令する。

「たわけめ、発砲すると、それまでだぞ。撃ってはならん」

凜然として捨三郎が叱咤する。

「追えッ。逃がすな」

兵之進が叫びながら、まっ先に抜刀して、伝次のあとを追い、その組の一団がばらばらと大やぶへ飛びこんで行く。

活路

1

さすがに鉄砲組は発砲できなかった。

伝次は兵之進らに追われて、大竹やぶの崖を一気に川っぷちのほうへ駆けおりて姿を消したが、まもなくどぶうんという水の音がにぶく耳についたのは、明石川へ飛びこんだのだろう。

「お刀をおわたし願います」

丘では組頭が指揮をして、鉄砲組に捨三郎と才兵衛のまわりをぐるりと囲ませ、もう一度強制した。

捨三郎は、争ってもむだだし、しいて刀を抜けば、こんどこそ血迷って発砲もしかねないので、黙って両刀を取り、進み出た組下の黒装束にわたした。

才兵衛がそれにならおうとすると、

「貴殿へのおさしずはうけておらぬ。屋敷へ引き取って、なにぶんのさたをお待ちなさい」
と、組頭がいった。
「才兵衛、ご苦労であった」
捨三郎がいたわるように声をかける。
「なんのお役にもたちませいで、赤面のほかございません」
「いや、一揆はまだおさまってはおらぬ。命をそまつにしてくれるなよ」
「は、はい」
思わず目がうるんでくる才兵衛だ。
六尺が乗り物をかついできて、捨三郎の前へすえた。
「これへ乗るのか」
「お召し願います」
組頭がとびらをあけて答えた。
捨三郎がかごの前へ寄ると、才兵衛がつと進んで、その足もとへかがみ、黙ってわらじのひもをといた。このわらじは、城下へ着かれたまま、まだ一度もといていない。夕食さえ忘れて、一藩のために奔走されているのだと、才兵衛はいまさらのように指がふるえてくる。
「ぞうさをかけた」
わらじがとけると、捨三郎は礼をいってかごへのった。
組頭がとびらをしめて、それに錠をおろす。
徒党の者のあまりにも卑劣なやり方に、才兵衛の忿懣は頂点に達してきた。が、ここではじっとその忿懣をかみ殺しているほかはない。
「まいれ」
組頭の命令でかごはあがり、黒装束の一団はそれを取りまくようにして、城下町のほうへ進んでいく。
——どこへお連れ申す気か。お命だけはぜひつなぎとめなければならない。
じっと才兵衛が見送っていると、
「尾崎どの、お供いたしましょう」
ふたりだけあとへ残った黒装束の鉄砲足軽

が、きのどくそうにいった。
「うむ」
才兵衛は、かごとは反対に、王子門のほうへつれていかれるのである。
兵之進らの組は、まだ川べりを走りまわって伝次の行くえをさがしているらしく、ときどき、あっちだ、こっちだというような声が、大竹やぶの下のほうから聞こえていた。

2

解散ときまった一揆の百姓どもは、それぞれ世話人のさしずで混雑をしないように、一組みずつ順々に引き揚げることになった。
まず人質三人をあずかる大蔵谷の六左衛門が、ほかの総代百姓とともに三丁のかごをまもり、城下町を西へ通りぬけた。どんなことで城方の不心得者がかごを取りかえしにこないともいえないから、かごの前後は大蔵谷の百姓と、そっちへ道順がおなじ代表百姓たちが、ゆだんなく警固につく。
そして、あとからあとからと、そっちへ帰る組が、隊を作って、まるで人の流れのように、それにつづいた。
小稲たちの一行は、やがて城下へはいろうとする長べいのあたりで、その百姓どもの行列と行きあった。百姓どもはまだ殺気だっているし、道にあふれるようなおびただしい人数なので、その流れにさからって進むことはちょいと困難だ。だいいち、事情がわからないから、ぶきみでもある。足軽たちはへいのほうへ道をよけて、百姓どもの流れをやりすごすことにした。
「なんといっても、平松外記さまでなければ話がわからない」
「いったい、領主さまは、ほんとにおれたちのいうことを聞いてくれるのかね」
「だいじょうぶだとも、そのために人質ってものがあるんじゃないか」
おもいおもいに高声で話しながら行く百姓ど

もの口から、そんなことばの切れ端が断片的に、小稲たちの耳へもはいってくる。

「小名木川さまってかたは、よっぽどできた若殿さまのようだな」

「そうだって話だ。ほんとうは領主さまになるおかたなんで、あのかたさえ殿さまになっていてくださりゃ、おれたちもこんな苦労はしないですんだろう」

そんなことを耳にしたときは、小稲は思わず美代と顔を見あわせて、目を輝かせてしまった。

「ねえさん、万七がいる」

要吉がふいに小稲のたもとをひっぱって、小声で教えた。

「えっ、どこにさ」

「はじめは百姓どもの中にまじっていくのかと、小稲はそっちをさがしたが、そうではなかった。

いつの間に、どこからきたのか、別の足軽が五、六人うしろへ寄ってきていて、その中に深川の万七が道中姿でまじりながら、半分は百姓どものほうを、半分はこっちへ気をくばっているふうである。

小稲ははっとした。

万七がこの城下へきているようでは、出迎えの足軽も、はたしてだれがよこしたのか疑わしい。むろん、万七は右源太のいいつけできているのだろうから、仕置き家老とぐるで、やがて帰国する斉信のために、美代を奪いにきた、そう見るのがほんとうではあるまいか。

と、気がついて、よく考えてみれば、捨三郎なら、こっちの知らぬ足軽などを出迎えによこすとすれば、きっと油屋伝次をつけてよこすくらいの、やさしい心づかいは持っている人だった。

3

「お美代さん」

小稲はならんで立っている美代の手を、しっ

かりと握りしめた。前は一揆の流れ、うしろはへい、かみてもしもても足軽にふさがれているから、逃げ道がない。

「どうしましょうねえ」

美代も左右を見まわして、思案にあまっているようである。

と見た万七が、するすると小稲のそばへ寄ってきて、

「騒ぐと、命がないぜ」

顔を往来のほうへ向けたまま、左の手でたもとをつかみ、そのそでのかげへかくすように、右手の匕首をぴたりとわき腹へ突きつけた。

足軽たちにとっては、小稲より美代のほうがたいせつだから、それとなく美代の右側をふさいで、ゆだんなくあたりへ気をくばっている。

もうどうしようもないと、女たちが思わず顔を見あわせたとき、

「助けてくれえ、おじさんたち」

前にしゃがんでいた要吉が、ぱっと往来の百姓の流れの中へ、大声をあげながら飛びこんでいった。

「あッ、野郎」

万七がぎょうてんしたように、要吉のえりがみをつかまえ止めようとしたが、まにあわない。

しかも、その拍子に、小稲のたもとをつかんでいた手が放れ、匕首の右手がちょっとるすになった。しめたと思った小稲が、要吉に教えられて、

「助けてくださいッ、人殺しい」

美代の手を引きながら、これも百姓たちのほうへすがっていった。

「どうした、ねえさんたち」

「なんだ、なんだ」

それでなくてさえ目だつ旅の女たちがふたり、そのまわりに憎い城方の足軽が数人かたまっているのを、みんな変な目で見て通っていたところだから、そこだけ一団の百姓たちが、要吉たち三人をのみこむようにかこんで、ぴたり

と足をとめた。
「あの男は悪い人さらいだ。ねえちゃんたちをお城へさらっていくんだ」
「なにをぬかしやがる。そんな餓鬼のいうことを本気にすると、とんだことになるぞ」
万七は躍起になってわめきかえしたが、それがかえっていけなかった。ことばの中に、なんとなく城方をかさにきる語気があったのと、まだうっかり右手に匕首の抜き身を持っている。
「野郎、匕首を持っているぞ。気をつけろ」
「城方のまわし者だ」
「やっつけろ、やっつけろ」
わあっというと、百姓どもが手に手に持っていた青竹をふりかぶって、万七ばかりではない、足軽たちのほうへまで殺到しだした。
「おのれ、なにをする」
まっさおになった足軽が、恐怖のあまり夢中になっていっせいに抜刀したから、なお騒ぎだ。
「たたっ殺せ。城方が出たぞ」
「刀を抜いたぞ。伏勢だ」
わあっ、わあっと、たちまちすさまじい乱闘のうずがまきだした。

4

急を聞いて、総代百姓が現場へ駆けつけたときには、足軽どもはみんなそこへたたき伏せられ、百姓側にも数人の軽傷者はあったが、さいわい死者は出ずにすんだ。
ずるかったのは万七で、こいついけないと見ると、すぐへいの下へ逃げて、頭をかかえてころがってしまったので、百姓どもが目のかたきにしているのは足軽のほうだから、これはほんの三つ四つ青竹がからだへ当たっただけである。
ともかくも、一揆側はまだ引きあげの途中だから、たたき伏せられた足軽七人は、総代百姓ひとりがついて、百姓に大手門まで運ばせ、そこに詰めている城方の藩士に引きわたされた。

「事情はいずれよく取り調べましてから、あらためてごあいさつ申し上げますが、このかたがたは長べいのあたりで、旅の若い女ふたりと、男の子ひとりをつかまえていましたところ、男の子が、人さらいだ、助けてくれ、と救いを求めましたところから、百姓との間に争いがおこり、こういう始末になりました。その旅の女どもと子どもの三人は、大蔵谷の広瀬六左衛門方へひとまずおあずかりいたします」

これがそのときの総代百姓の口上である。

「さようか。当方でも足軽どもを取り調べたうえ、追って六左衛門方へなにぶんのさたをいたすであろうから、その女どもふたりと子どもの三人は、取り逃がさぬように、あずかっておいてくれ」

藩士はそう申しわたして、手負い足軽を収容した。

こうして、小稲、美代、要吉の三人は、ひとまず大蔵谷の大名主六左衛門の屋敷へ引き取られることになったが、この屋敷はまた一揆落着まで、城方の人質三人をあずかり、総代百姓四人が詰めるのだから、それを警固する百姓が三十人ばかり交替で寝泊まりする。つまり、こんどの一揆の総本部なのだ。

六左衛門は目のまわるようにいそがしいからだだが、その間をさいて、四つ（十時）に近いころ、小稲たちがあてがわれている奥の離れの隠居所へ顔を出した。いちおう事情を聞いておかないと、城方からそのことについて、掛け合いがあったとき返事に困るからだ。

「あなたがたは江戸の人のようだが、どういうわけで当地へおいでになったのです」

あいさつがすむと、六左衛門はそうそうに切り出した。

「名主さまは、殿さまご一門の小名木川さまをご存じでございましょうか」

小稲はまず聞いてみた。

「江戸の小名木川にご隠居中の直之助さまでご

ざいますな」
「はい」
「その小名木川さまでしたら、さきほども一揆のことについて、たいそうお世話をいただいております」
「わたしども三人は、小名木川さまの召し使い同様の者たちでございます」
まさか、小稲も、ここでは捨さん呼ばわりもできかねるので、至極おとなしくこんどの事情のあらましを打ちあけた。

5

「よくわかりました。つまり、あなたがたは、若さまのお身を心配して、かげながらお供申しあげてきたというわけでございますな」
六左衛門は考え深い目をする。
「ええ、捨さん、いいえ、若さまにすれば、足手まといでかえってご迷惑だったかもしれないんですけれど――」
むしろ、捨三郎の身をまもるというより、そばを離れたくないからあとを追ってきた、そのほうがほんとうなのだから、小稲はなんとなく老人の目がまぶしい。
「でも、ねえさん、わたくしたちきっとなにか、若さまのお役にたつときがあると思います。ただご迷惑なだけでなくて」
美代はむじゃきに、まだそう思いこんでいるようである。
「正直に申して、美代どのにはまだご当主さまの執念がかかっている」
ものなれた老人には、ふたりの女たちの胸の中が、手にとるようにわかるのだ。
「いいえ、美代はご当主さまはきらいでございます」
「佞臣(ねいしん)というものは、いつも、どうかして殿さまのお気に入ろうと、人のすきをねらっているものです。今夜の足軽たちは、たぶんその佞臣の手先とみてさしつかえございますまい。わた

しどももそのつもりで、なんとか話のつくまであなたがたをかくまいはしますが、お城のほうでも、あなたがたがここにいることは、もうわかっております。どんな手を打ってくるかわかりませんから、じゅうぶん気をつけなければいけません」

「お取りこみのさいちゅう、ご迷惑をおかけして申しわけございません」

小稲はあらためて両手をついた。

「いや、おたがいにとんだ災難とでもいいましょうか、乗りかかった船のたとえです、こんなさいちゅうで、おもてなしはできませんが、どうか気を楽にしていただきます」

「あの、若さまにはいつごろ会わせていただけましょうか」

美代がまたそんなひとりがてんなことをいいだす。

「さあ、いずれ小名木川さまのお耳には入れるようにいたしますが、若さまからなんとご返事がありますか」

六左衛門がわらいながら答える。

迷惑は迷惑ながら、この恋娘のいちずさには、妙に憎めないところがあるのだ。

「大だんなさま、こちらでございますかね」

老人が立とうとしていると、ふと庭先から呼ぶ者があった。

「熊吉か。なにか用かな」

障子をあけて縁へ出ると、下男が立っていて、

「なんだかしらねえが、いま門のところへびっしょり頭からぬれた男がひとり来てね、さっき上ノ橋の上で、小名木川さまの供をしていて、大だんなさまにお目にかかった者だ。油屋伝次という名で、小名木川さまのお身にまちがいがおこった、ぜひ大だんなにお願いしたいことがあるから、ちょっとのあいだ会わせてくれろと、いっしょうけんめいたのんでいます。どうしますべ」

と、困ったような顔をしている。

6

「あなたがたは、小名木川さまのお供の、油屋伝次という人を知っていなさるかね」

六左衛門は念のために、女たちのほうへ聞いた。

「よく知っています。捨さんにまちがいがあったって、どうしたんだろうね、お美代さん」

「心配になります。名主さま、油屋のおじさんをここへ呼んでくださいませ」

小稲も美代もさっと顔色をかえて、人見知りをしない美代は、もしいけないといえば、自分で飛び出していきそうなかっこうだ。

「では、熊吉、ともかくもその人をここへ案内してごらん」

「へえ」

下男の熊吉は、いそいで引きかえしていった。

まもなく、熊吉に案内されてきた伝次は、なるほど頭からぬれそぼちたかっこうで、そこに思いがけない女たちと、要吉がいるのを見ると、びっくりしたような顔をした。

「なんだ、おまえさんたち、いつこんなところへきていたんだ」

「おじさん、殿さまに、殿さまにまちがいがあったって、どうしたの」

要吉が縁側へ飛び出してくる。

「まあ、待ってくんな」

伝次はそれを手でおさえるようにして、

「名主さま、てまえはさっき上ノ橋で、小名木川さまのお供をしていた油屋伝次という者でござんすが、お気づきだったでござんしょうか」

と、六左衛門のほうへ向いて、ひざのところまで両手をさげた。

「そういえば、たしかにおぼえています。若さまにおまちがいがあったとは、どうなすったんです」

「申しわけござんせん。とんだことになりやした。というのは、人質を上ノ橋まで見送って、小

名木川さまは長寿院へおはいりになる考えだったんだ。実は、昼間から悪家老のまわし者がずっとお供についている。そんなことにびくともするだんなじゃありやせんが、あの大竹やぶのところまでくると、こんどはいきなり黒装束の鉄砲組が取りかこみやがった。鉄砲などうっかり撃ってみろ、せっかくおさまりかけている一揆が大騒動になって、たくさんの人の命にかかわるぞと、小名木川さまはバカ者どもをおしかりになり、とうとう自分から刀を敵にわたして、とりこになったようです。あっしまでつかまっちゃしようがねえ、そう考えたんで、あっしは思いきって大竹やぶへ逃げこみ、明石川へ飛びこんでしまいやしたが、こんなわけで、殿さまはとうとう敵の手につかまってしまいやした」

「まあ、どうしよう」

「いったい、若さまは、どこへ、どこへつれていかれたのでございます、おじさん」

小稲と美代が、じっとしていられなくなったように、これも縁側へにじり出てきた。

「面目ねえが、いまんとこ、そいつがおれにもわからねえ」

伝次は血走った目をして、じっとくちびるをかみしめる。

7

「困ったことになりましたな」

六左衛門も暗い顔をして、

「それで、てまえにたのみといいますのは」

と、あらためて伝次のほうを向いた。

「そのことなんでござんすが、国もとの張本人は内藤の野郎とわかっているんでさ。ひょっとすると、小名木川さまに一服盛るかもしれやせん。あっしはそれがなにより心配なんです。さいわい名主さまのところには内藤のせがれが人質になっている。名主さまから城方へ、小名木川さまがそっちへ行っているようだが、これは一揆にとってたいせつなおかただから、まちが

いのないようにしておいてくれと、一本それとなくくぎをさしておいてもらいたいと思うんですが、どんなもんでござんしょうねえ」

伝次としては、捨三郎が生きていてくれさえすれば、たとえどんな厳重なところへ監禁されていても、なんとか助け出すくふうはつく。一服盛られてしまうのが、いちばんこわいのだ。それをふせぐには、とりあえず人質を枷につかうほかはないと、うまいことを考えたつもりだったのである。

「さあ、それはどんなもんでしょうな」

六左衛門は当惑したような面持ちだ。

「だめでござんすかねえ、だんな」

「がっかりさせるのは、わしもつらいが、たいせつな人質をそのほうの枷につかうのは、少し見当違いのようです。正直に申せば、小名木川さまのことはお城の中のいざこざ、てまえどもがいまロを出す筋合いのものではないと思います」

「そうですかねえ」

伝次はがっかりしてしまった。

「しかし、ことによると、内藤さまのほうから、このかたがたのことについて、なにかお掛け合いがあるかもしれません。そういえば、まだその話はしませんでしたな」

六左衛門は小稲たちの今夜の始末をひととおり話して、

「そんなわけですから、もし城方から、このかたがたを引き渡すようにというような掛け合いでもあれば、その節は小名木川さまのお名まえを出して、また返事のしようもあるかと思います。ともかく、これは早く平松外記さまのお耳に入れなければいけません。あのおかたなら、きっとよい分別もございましょう」

と、すすめてくれた。

「ありがとうござんす。実は、あっしもご城代さまがたよりなんで。では、これからすぐ行ってみやす」

「油屋のにいさん、あたしたちはどうしよう」
小稲がすがりつくような目をした。
「どうしようって、おまえさんたちはここを動いちゃいけねえ。——名主さま、この人たちのことは、なにぶんともお願いいたしやす」
「それは心配しないでもいい、きっとあずかります」
「あねごも、お美代坊も、よくいっとくぜ。変なまねをすると、かえって取りかえしのつかないことになる。小名木川のだんなは、この伝次が命にかけてもきっと救い出してみせるんだから、おまえさんたちは、あっしの返事を待っていればいいんだ。わかったな」
いそがしい伝次は、そういいおいて、もうすっくと立ち上がる。

8

翌日、城内から、女たちの件について、杉田兵之進が使者として、広瀬六左衛門の屋敷へ乗りこんできた。
「昨夜、城内の足軽七人が、百姓どもに乱暴された件は、ああいう騒動のさいちゅうのことではあり、さいわい双方に死人も出なかったことだから、不問に付することにする。しかし、当家にあずけてある女たちのうち、伊丹屋の娘美代は、江戸上屋敷に腰元奉公中の者で、このほど無断で屋敷を出奔いたした者だ。すでに江戸表から、国もとへ立ちまわるようなこともあらば、取り押えておくようにという通達があったので、昨夜の足軽どもが城内へ護送する途中であったのだ。かようなしだいであるから、ほかの者はかまわぬが、美代だけは引き取ってくるようにと、かように申しつけられているにより、美代は当方へお引きわたし願いたい」
つまり、百姓どもの乱暴は不問に付すかわりに、美代は引きわたせというのである。むろん、この口上は、仕置き家老内藤次郎右衛門から出ているものにちがいない。

「杉田さまは、美代どのがどうしてお屋敷を出奔されたか、お聞きおよびでございましょうか」
六佐衛門はおだやかに聞きかえしてみた。
「なにか殿の御意にさからってのことだと聞いている」
「では、お聞きおよびなのでございますな」
もう一度念を押しておいて、
「殿さまお邸内のことは、てまえども百姓のとやかく口をはさむことではございませんが、この件には小名木川にご隠居中のご一門の直之助さまが深い関係をお持ちあそばしています。小名木川さまはまた、昨日百姓どもの嘆願について、お立ち会いくださいましたてまえどもにとりましてはたいせつなおかた、美代どののことにつきましては、小名木川さまのお口ぞえをいただきませんことには、てまえども一存ではなんともいたしかねます。お取り計らい願えますでしょうか」
「小名木川さまはご隠居の身であるぞ。そのほうはご領主さまのおことばより、小名木川さまへの義理のほうが重いと申すのか」
「いいえ、重い軽いを申すのではございません。道理、不道理を申し上げるのでございます。早い話が、たとえご領主さまのおおせつけでも、不道理があれば昨日のように、百姓どもはつい死に身になるものでございます」
けっきょく、とらの威をかりる兵之進は、老巧な六左衛門の敵ではなかった。
「よろしい。そのおもむき、たちかえってご家老のお耳に入れることにしよう」
いつもならこれがおどしにきくが、ちゃんと人質をとって、強い立場にある今の六左衛門には、なんの役にもたたない。
「さようにお願いいたします。念のためにお耳に入れておきますが、小名木川さまは心の正しいおかたとして、百姓どもからひどく慕われております。このたびの件のお立ち会い人ではございますし、事の落着にはぜひなくてはおさま

らぬおかたさま、なにとぞまちがいのないようにお願い申し上げます」

逆に一本痛いくぎをさされて、杉田は帰っていった。

9

その後、美代引きわたしの件については、城内からなんのさたもなく七日たった。おそらく、次郎右衛門の考えでは、すでに斉信の帰国が近い。美代が六左衛門の屋敷にいるとわかっていれば、いま無理な小細工を弄するより、ご帰国を待ってさしずを仰いだほうが得策だと考えているのだろう。

一方、油屋伝次もあれっきり、女たちの前へは一度も顔を見せなかった。ということは、いまだに捨三郎の行くえがわからず、必死になってさがしまわっているのにちがいないのだ。

「どうしたんでしょうねえ、油屋のおじさんは」

美代は毎日それをいい暮らしながら、なにか思い詰めているらしく、食もあまりすすまなかった。

「わたくしたち、こんなふうに手をつかねていて、いいのでしょうか」

「だって、お美代さん、どうしようにも、道さえよくわからない土地なんだもの、油屋のおじさんのたよりを待つほかはないじゃありませんか」

思いはおなじ小稲だから、ただため息をつくほかはなかった。うっかり出歩きなどすれば、それこそどこに城方の足軽が目を光らせているかわからないのである。

「お命はだいじょうぶでしょうか、若さまの」

「それはだいじょうぶですとも。名主さまがいっていたでしょう。いくら悪家老でも、そうたやすくお主さまは殺せるものではない。ご領主さまがお城へはいるまでは、お命の心配はなかろうって」

「でも、その鬼殿さまのご帰国も、あと四、五

日ですわ」
そういわれればたしかにそれにちがいない。
「美代はこの二、三日、いやな夢ばかり見るのです」
「だめよ、お美代さん、しっかりしていなくちゃ。油屋のおじさんは、こんなことといっちゃなんだけど、ただの男とは違うんです。その人が血眼になって働いていてくれるんですもの、もうしばらくまかせておいてみましょうよ」
小稲はそういって、かたく軽はずみはとめておいた。
その日はまた、一揆嘆願の急使が、順当にいけば領主の返事を持って城へ帰着する日なので、六左衛門の屋敷も朝から人の出入りが多く、ごったがえしていた。
夕がたになって、美代の姿が見えない。外へ出るといっても、離れのまわりの庭を散歩するぐらいのもので、百姓たちのいる表のほうへは出ないことにしているのだ。
その内庭のほうをひとまわりしてみたが、どこにもいないので、もとの縁側へ引きかえしてくると、庭木戸のほうから、ふらりと要吉がはいってきた。
「要ちゃん、お美代さんを知らないかえ」
小稲の顔色がかわっているので、
「おれ、困っちまったんだ」
と、要吉は急におどおどと当惑した面持ちだ。

10

「なにが困ったのさ、要ちゃん」
「お美代ねえさんは、どうしても内藤家老のところへ行って、殿さまのことをたのんでくるというんだ」
「なんですって」
小稲は愕然としてしまった。
「おれ、それはだめだといって、ずいぶんとめたんだ。小稲ねえさんに相談してくれなくちゃいやだと、何度もいったんだ。けど、お美代ね

えさんは、小稲ねえさんに話せばきっととめられるからって、とても強情なんだ」

いまにも涙をこぼしそうな要吉である。

「それで、とうとうひとりで行ってしまったの、内藤のところへ」

小稲はかっと胸へ火をつけられたような気持ちだ。

「うむ。いつまでぐずぐずしていては、小名木川さまのお命があぶない。こんなときお身がわりになろうと思うから、お供をしてきたんだ。自分のからだですむことなら、内藤家老に会って、若さまのお命だけは助けてくれるように、たのんでみるというんだ」

「お美代さんのバカ。そんなことをしたって、はじめからお命をねらっているんだもの、内藤が捨さんを助けてくれるもんか。そのうえ、自分のからだまでとりこになって、鬼殿さまの檻の中へ投げこまれるだけの話じゃないか。なんて世間知らずなひとなんだろう。困っちまったねえ」

「おれもそういったんだ。また座敷牢へ入れられて、鬼がかえってくれば、きっとお供物にされちまう。なんにもなりゃしないって、おれ、ほんとに泣いてとめたんだ。けど、お美代ねえさんはいうんだ。それは覚悟のうえだ。このことは、ずいぶん考えたうえなんだから、どうかとめないでくれ。いくら悪人でも、命をかけた真心が人に通じないはずはない。お美代ねえさんはきっと内藤家老にたのんでみるっていうんだ。それでも、それでもだめなら――」

要吉の目から、がまんしていた涙が、ついにあふれてくる。

「だめなら、どうするっていうの。早くお話しなさいってば」

「お美代ねえさん悲しいことをいうんだ。名主さんがいうとおり、殿さまは鬼が帰ってくるまではだいじょうぶかもしれない。こわいのは、鬼と、大内右源太だ。だから、だから、鬼に会

って、若さまの命請いをするっていうんだ」
「そんな、乱暴な、みすみす手ごめにあうのはわかりきっているのに――」
「手ごめなんかにはあわない。どうしても鬼がいうことをきいてくれないで、そんなまねをしようとしたら、目の前でりっぱに死んでみせる。一度品川の下屋敷で、お手討ちにあうからだだったんだから、こんどは若さまのために死ぬんだ、なんでもない、たとえ自分が死んでも、若さまにも、要ちゃんにも、小稲ねえさんがついていてくれるから、あたしは思いのこすことはなんにもないって――」
「おいで、要ちゃん、お美代さんばかり殺せるもんか。いっしょに内藤の屋敷へ行ってみよう」
小稲は血相をかえて、いきなり要吉の手をとった。

11

夕がたになっても、城内からはなんのさたもない。そのために、六左衛門の屋敷に集まっている代表百姓たちは、城方に裏切られたのではないかと、しだいに殺気だち、各村から様子を聞きに駆けつける者も、いよいよ多くなったようだ。
小稲は名主さまには申しわけないと思ったが、そういうごったがえしている屋敷の裏口から、黙ってそっと脱け出した。
「小稲ねえさんも、内藤ってやつのとこへ行く気なの」
街道へ出てから、要吉が聞いた。
「いいえ、あたしたちはともかく、平松外記さまのお屋敷をたずねてみましょう」
美代が身を殺してまで捨三郎の命請いをしたいと、いちずになっている気持ちはよくわかる。しかし、世間の裏というものをよく知っている小稲には、たとえ美代がいくら女の真心をたたきつけても、鬼殿さまや内藤家老たちのようなてまえがってな人間には通じそうもない。それ

が通じるくらいなら、捨さんほどの人がなにもこんなに苦労はしないですむ。なによりもまず、いじらしい美代をむだ死にさせてはならないと考えたのだ。

「ご城代さまは閉門中だっていうけれど、会ってくれるかなあ」

「だめだったら、じかに内藤にぶつかってみるよりしようがないわ」

そのときは自分が美代の身がわりになる。もしいうことを聞いてくれなければ、内藤家老と刺しちがえて死ぬ気だから、小稲の語気はつい強くなる。

「ただねえ、要ちゃん、あたしたちはことによると、よけいなことをしているのかもしれません。あとで油屋のおじさんにしかられるかもしれない。だから、要ちゃんは、よそながらあたしたちのすることを見ておいて、どんなことがあっても、一度名主さまの家へ帰り、そこで油屋のおじさんを待つことにするのよ。わかったわね」

「じゃ、小稲ねえさんもとりこになるの」

「たぶん、そうなるかもしれないわ。もし、内藤の屋敷へ行かなくちゃならないようならね」

「おれ、おれ、つまらないや」

要吉はべそをかいたような声になる。

「要ちゃんは男なんだから、しっかりしなくちゃだめ。せめて、あんたひとり残って、油屋のおじさんにあたしたちのいるところを話してくれなかったら、万一のとき、だれがあたしたちを助けにきてくれるの」

気を強くしてしかるようにいった小稲は、あっと目をみはった。

「要ちゃん、杉田がくる。ずっど離れているのよ」

ちょうどこのあいだの長べいのあたりで、泊まりをいそぐ旅人たちとすれちがいながら、杉田兵之進が足軽数人をつれ、肩を怒らせてこっちへくるのを見かけたのだ。

このあいだの掛け合いか、それとも一揆のほうの返事か、いずれにせよ六左衛門の屋敷へ向かっていることだけはまちがいあるまい。

12

杉田兵之進はじろりと小稲の顔を見て、そのまま通りすぎた。足軽たちも、城下町には見なれない江戸の女だから、みんな横目をつかっていく。

——どうしてあたしを無事に見のがしたのかしら。

このあいだのことがあるから、むろんつかまるものと腹をきめて、つかまればどうせ行くところは内藤の屋敷だ、辰巳芸者の意地を見せつけてやろうと、わざと顔をさらしていた小稲だ。いささか拍子抜けがして、ぽかんと見送っていると、

「小稲じゃねえか」

ぽんとうしろから肩をたたく者がある。

「あっ、万七——」

「そんなにびっくりしなくたっていいや、おれは今、杉田さんについて、おまえに会いに行くところだったのよ」

きょうの万七は、いきなりかみつこうともせず、にやにやわらっている。

「あたしになんか用なんですか」

「用はおまえのほうにありそうだな。おまえ、お美代のことを心配して出てきたんじゃねえのか」

「じゃ、お美代さんはやっぱり——」

「そのとおりだ。無事に内藤さまのお屋敷へ着いているから安心しねえ」

すっかり悦に入っている顔つきだ。

「また座敷牢かえ。そこがいちばん無事ですからね」

「そんなことはしねえ。自分からおへやさまになろうって者を、むりに座敷牢へ入れることはないやね」

「それで、それで、内藤さまは捨さんを助けてくれるんですか」
「実はそのことなんだ。まあ、歩きながら話そうや」
万七は誘うように、ぶらぶらと城下町のほうへ歩きだす。
たとえだまされるにしても、捨三郎の話になったからには、おとなしく万七と肩をならべて歩くほかはない小稲だ。
「いったい、捨さんはどこへ押しこめられているんです」
「気になるだろうな、いちばんそいつが」
「あたりまえじゃありませんか。命がけでほれてるんだもの」
わざとやんぱちにのろけながら、じいんと胸が熱くなってくる。旅へ出てからは、一度も口に出してのろけることさえできなかったのだ。
「どうだ、小稲ねえさん、ひと目会わしてやろうか、捨さんに」
「そんなこと本気にすると、かぜをひくから、まあ、遠慮しときましょうよ」
「うそじゃねえ、こっちも本気だ。そのかわり、魚心あれば水心ってやつよ」
「兼次ねえさんに横っつらをひっぱたかれないように気をつけるんですね」
「いくら長い手だって、江戸からはとどかねえや。なんなら、捨さんをおまえの見ている前で、逃がしてやってもいいんだぜ。これでもまだ本気にできねえかね」
妙なからみ方をしてくる万七なのだ。

13

「じゃ、捨さんのいるところへつれてってください」
監禁されている場所さえわかれば、助け出すくふうはなんとでもつくと、小稲はとっさに腹をきめた。
「いいとも。そのかわり、水心のほうは承知だ

ろうな」
「それはそっちの出ようしだい、あの人が無事に助かってからのご相談にしましょうよ」
「よかろう。魚心を見せねえうちに、水心をねだるなあ、こっちが無理だ」
万七はわらいながら、京口御門から城下町へはいった。まっすぐ行けば本通りだが、そこを左へ曲がれば浜方へ出る。万七は浜方のほうへ道をとった。
やがてたそがれに近い時刻だ。相手は悪党のことだから、どこへつれていかれるかけっしてゆだんはできないが、たとえどこへつれこまれても、要吉があとをつけていてくれると思うと、なんとなく心じょうぶである。
「杉田さんは名主さまのところへ、なにしに行ったんです」
小稲は思い出して、聞いてみた。
「きょうが百姓どもと約束の日だが、殿さまからまだ返事がこねえ。人質にまちがいでもあることだから、一、二日待ってくれっていうことわりの使者さ」
「そんなこと、お百姓さんたちが承知するかしら」
「するにもしねえにも、返事のこねえものはしかたないやね。そのうちに殿さまはお国入りなさる。万事はまあ、それからのことだろうな」
万七はたかをくくっているようなことをいう。その口ぶらは、また内藤家老の腹のうちでもあるのだろう。
一揆のほうは女の力ではどうにもならないことだが、鬼殿さまが帰国するまえに、なんとか捨三郎だけは助け出さなくてはならない。
「こっちへきてくんな」
まもなく、右手は大きな寺の土べい、左手は柵をめぐらして、ご座船の囲い場になっている道へ出て、万七はその囲い場のある広場のほうへ小稲をさそいこんだ。
浜の裏川にそったお船蔵のわきに船具でも入

れておくところだろう、大きな土蔵造りの納屋がある。石段を三段ばかりあがって、万七は戸をあけて中へはいり、中の者となにかふたことみこと話していたようだが、すぐにこっちへ顔を出して、

「はいってもいいぜ」

と、小稲にいった。

中にどんな人間が待っているかしらないが、もう度胸をすえている小稲だ。それに、なるほどここなら捨三郎を監禁しておいても、ちょっと人にはわからない場所だ。万七のいうこともまんざらうそでもなさそうなので、ひと足うす暗い土間へはいり、あっと目をみはった。

覆面黒装束の鉄砲足軽が五人、いずれも鉄砲を身近において床几に休んでいて、それらがいっせいに小稲のほうへぶきみな目を向けたからである。

14

「じゃ、皆さん、しばらくの間お見のがしを願いやす」

万七は覆面足軽たちに、もっともらしく頭をさげ、五人は無言でうなずいた。

「ねえさん、お許しが出た。さあ、会ってきなせえ。あのかたはこの上だ」

納屋の一方に天井が一間四方ほどぽかりと口をあけていて、そこへ普通のはしごがかけてある。万七はその屋根裏を指さすのだ。

小稲はこのあいだ油屋から、捨三郎を取りまいたのは覆面黒装束の足軽組だと聞いているから、もう疑う余地はない。

「すみません」

だれにともなく会釈をして、そこへ下駄をぬぎ、一気にはしごをのぼっていった。

正面に、天井裏を半分に仕切ったほどの牢格子が見える。飛びつくように走りより、

「捨さん――」
小稲は牢格子にすがりつきながら、かっと胸の中へあらしのうずが吹きこんだ気持ちである。
横からさす窓あかりの中に、月代もひげものびた捨三郎が、荒むしろの上へ端然とすわらされて、
「おお、小稲か」
びっくりしたように、にっと笑顔になった。
「こんな、こんなところへ、――ちくしょう」
かりそめにも若殿ともあろう人を、荒むしろの上へすわらせておくとはなにごとだろうと、小稲はあまりのことに、くやしいのと、いたわしいのとで、どっと涙があふれ出てきた。
「どうして、ここがわかったね」
捨三郎は静かに格子のそばへ立ってくる。
「くやしい、捨さん」
牢格子の中へ手をさしこんで、恋しい人の手を求めながら、小稲は身もだえせずにいられなかった。
「まあ、おちつきなさい」
その手をやさしく握ってくれながら、捨三郎はなだめるようにいう。
「でも、生きていてよかった。あたしはうれしい。捨さん、あたしは、あたしは、たとえこの身を殺したって、きっとあんただけは助けますからね。しっかりしていてくださいよ」
なつかしい手を握りしめ、そこにある男の体温を全身で感じながら、間に厚い格子のあるのがもどかしい。
「わしのことは心配ないが、小稲はだれにここへつれてこられたのだね」
「深川の万七です。万七はあたしに、魚心の水心さえあれば、きっと捨さんをここから出してみせるっていっているんです」
「あぶないな。それはうそだ。ああいう悪党にだまされてはいけない」
「だれが、だれがあんなやつにだまされるもん

ですか。あたしはきっとこの牢を破ってみせる」
「女の力では無理だ。小稲、おり口を見てきてごらん。もうはしごがはずされているかもしれない」
「なんですって――」
はっとおり口へ走りよった小稲は、
「あっ」
ぼうぜんとそこへ棒立ちになってしまった。いつの間にか、はしごがはずされているのである。

15

下から万七が見あげて、いかにも得意そうにやにやしている。
ひきょう者と、小稲は口まで出かかったが、いわばそれは承知のうえでひっかかってきたのだし、捨三郎に会わせてやるのことばにはうそがなかった。とっさに思いかえして、
「深川のにいさん、うちの人に会わせてくれて、どうもありがとう。にいさんはやっぱり、男の中の男でござんした」
と、こっちもにっこりわらってやった。
「思いがかなって、うれしそうだな、小稲」
「おかげさまで、今夜は水いらず」
「天井裏のねずみの祝言か。まあ、ゆっくりたのしみねえ」
「床下のどぶねずみよりましですわ。たんとおうらやみなさいまし」
「ちゅう、ちゅう」
あくまで小バカにしようとする万七だ。
「小稲――」
牢格子の中から捨三郎が呼んだ。
「どうしよう、捨さん」
走りよって、どこかに助かるくふうはないかと、小稲は気もそぞろにあたりを見まわす。それでなくてさえうす暗い納屋の屋根裏へ、すでにたそがれの色がせまっている。夜になったらまっくらで、なにも見えなくなるだろう。

「要吉や美代はどうした」
捨三郎が心配そうに聞く。
「ああ、要ちゃんはあたしがここへつれこまれたのを見ていてくれたはずなんです。きっと油屋に相談してくれるでしょうから、あたしたち、すぐ助かるにちがいないんです」
小稲はそれを思い出して、急に自分の胸があかるくなったような気持ちだった。
「伝次はこの地にはおらぬ」
「なんですって――」
「あれはわしがあるところへ使いに出してある」
「じゃ、油屋のにいさんは、捨さんがここにいることを、もう知ってるんですか」
「うむ、知っている」
「なら、どうして、どうして早く助けてくれなかったんです」
「そう簡単にもまいるまい」
捨三郎は苦笑して、
「それに、わしは当分ここにいるのがいちばん安全でもあるのだ」
と、つけ足した。
「そんな、のんきなことをいって、じゃ、油屋が使いから帰ってくれば、きっと助かるんですか」
「うむ、活路はある」
「もし、もしそのまえに鬼殿さまが帰国してしまったら、どうなるんです」
「そこが下世話にいう千番に一番のかねあいかな。しかし、わしは油屋を信頼している」
鷹揚にわらっている捨三郎だ。
やっぱりあたしたちはよけいなことをしたのかしらと、小稲はぼんやり男の顔を見つめながら、
「あっ、たいへんなことになってしまった」
と、内藤の屋敷へ自分からいけにえになりに行った美代のことを思い出したのである。

白砂青松

1

その日、帰国の途中にある領主斉信から、当然返事をもって帰着すべき一揆解決の使者は、夜になっても、ついに到着しなかった。

「殿には、けっきょくご入国のうえでのことと、腹をおきめなされたのではないかな」

深夜まで御用べやに詰めて、主君からの返事を待っている日置十太夫は、さすがに不安そうに次郎右衛門にいった。

「今夜使者がもどらぬようでは、たぶんそのお心であろう。大内の進言にちがいないな。あれは肝ったまの太い男だ」

次郎右衛門は苦笑する。

「どうやら、百姓どもの嘆願は握りつぶしということになりそうだな」

「そういうことになるだろう」

「人質はどうなるのだ。百姓どもが承知すまい」

「いや、こっちにも小名木川さまと美代という人質があるから、殿のご入国までは心配はない」

現に夕がた、杉田兵之進を六左衛門の屋敷へ使者に立て、領主から返事がとどかぬので、いましばらくそのまま穏便に待ってくれるようにと、申し入れ、

「そのかわり、当方でも、小名木川さまと腰元美代儀は、たいせつにあずかりおく」

と、枷をかけさせておいた。

なんといっても、捨三郎と美代と、小稲までこっちのとりこにできたのは、次郎右衛門としては望外の幸運だった。たとえ領主が帰国しても、これで一揆の処置に対する失策は帳消しにされてあまりがあるだろうし、六左衛門も当分は思いきったまねができまい。

「ぐずぐずしているうちに、右源太が帰ってくれば、人質のほうはまたうまく取りもどすくふ

うもあるだろう」

「しかし、人質はおまえたちがかってに出したのだから、そこまで責任は持てぬと出ないとはかぎらぬぞ。右源太はそういう冷酷なところもある男なのだ」

「そのときはそのときで、またこっちにも思案がある。わしに任せておきなさい」

次郎右衛門はなにか自信があるようだ。

おなじ夜、閉門中の外記も、いつでも登城ができるしたくをととのえて、深夜まで城からの迎えを待っていた。

が、その迎えはついにこない。ということは、領主からの返事がとどかないということなのだ。

——殿は一揆を弾圧する腹でいられる。

外記にはそれがはっきりと読みとれるだけに、こっちもいよいよ最後の腹をきめなければならないときがきたと思った。

右源太という策士がついているせいもあるが、当主にはまったく反省というものがない。斉信という人は、いわゆる性格破綻者なのだ。

こんどの一揆は、とうてい権力では押えきれぬものなのだ。むりに押えようとすれば、一藩が百姓を相手に武器をとらなければならないのだ。勝っても負けても、多くの人の血を無益に流したうえ、家名が断絶するのである。

——わしの死ぬときがきた。

外記はそれを痛感するのだ。

2

領主からの返事の使者は、翌日になっても、その翌日になっても、ついに到着する様子もなかった。いよいよ百姓側の嘆願は握りつぶしときまったに等しい。

大蔵谷の六左衛門の屋敷へも、しだいに人の出入りが激しくなった。とうてい穏便にすまないことは、だれにもわかりきっているが、騒動はふたたび一揆となって爆発するか、江戸へ強

訴となるか、明石領は日に日にぶきみな空気が濃厚になってくる。

そのころ——。

木曽街道の尾張領では、番頭役深見新左衛門が領分境に新関を設け、士分足軽二十数名をしたがえて、明石の行列が通過するのを待ちかまえていた。

尾張公が暴君松平斉信の通行を断然禁止して、これを明石藩に通達させたのは、すでに一年まえのことであって、天下周知のことである。その後、明石藩からは、これに関してなんのあいさつもない。

しかし、明石藩としては、海路でもとらないかぎり、尾張領を通らなければ、どうしても国入りができないのだ。

「強情無類の暴君のことだから、おそらく頭などは下げまい。まず船だろうな」

尾張藩でも、世間でも、海路へ逃げるだろうというのが、おおかたの見るところであった。

それを明石藩では、天下の意表をついて、こんどの帰国に堂々と木曽街道をとったのである。

「たとえ矢の根にかけても、絶対に通しては相ならん」

激怒した尾張公は、みずから軍勢を催して、出陣せんばかりのいきおいであった。

「たかが十万石の明石藩を相手に、太守さまみずからのご出陣は、尾張にあまり人がないようで、世間のおもわくもいかがと存じます。この関守のお役目、不肖深見新左衛門におまかせ願います」

「さようか。そのほうにまかせるであろう。人数は必要なだけつれてまいれ」

「鉄砲組足軽一隊、士分の者数名、お貸し渡し願います」

「それだけでよいか」

「じゅうぶんでございます」

「さようか。必ず天下のものわらいになっては

あいならんぞ」
「かしこまりましてございます」
堅く誓って、この国境まで出張してきた深見であった。
そして、きょうあたりは明石藩の行列が国境にかかるという日は、朝から木戸ぎわにすえた床几に腰をかけ、鉄砲隊にじゅうぶん用意をさせて、時のくるのを待っていた。
すると、四つ（十時）すぎと思われるころ、
「深見さま、怪しい一団がまいります」
木の上から物見をしていた足軽が叫んだ。
「どんな一団か」
「騎馬が一騎、それを取りまく人数十数人は、いずれも徒で、こちらに疾走してまいります」
すわと一同はひしめき立った。

3

「一同、わしが合い図をするまでは、絶対に発砲してはあいならんぞ。わかったな」
深見新左衛門は組下の鉄砲足軽にかたく申しきかせておいて、ただひとり往来のまんなかへ出た。
近づいてきたのを見ると、一騎を取りまいて走ってくる一団は、なるほど変わった風体である。一様にはんてんも引きにわき差し一本を帯した十数人が馬上の主を守り、そのあとから中間小者とも見える一団が、いずれも各自の主人の刀がいれてあるらしい皮袋をかついで、群れてくる。
馬上の主はと見ると、これは金紋うった陣笠をいただく、若いりっぱな貴公子だ。しかも、金紋は葵の紋である。いうまでもなく松平隠岐守斉信の微行の姿に相違ない。
「しばらく待たっしゃい」
近づくのを待って、深見は大手をひろげながら呼び止めた。
騎馬は数間先でぴたりと止まり、それっという顔色で例の異装の家来どもがひしひしと馬前

をかためる。中からひとり、ばらばらと走り出て、深見の前へ立ったのは大内右源太だ。
「なんでおとどめなさるな」
「ご承知でもござろうが、この木戸より先は尾張領にあいなっておる。拙者は尾州藩にて番頭役をつとめる深見新左衛門、君命により、子細あって当所に新関を設け、ある貴人の通行を差し止めるために、出張している者でござる。ご迷惑ながら、ご姓名をうけたまわりたい」
明石とひとことでも出たら、絶対にここは通さぬ覚悟の深見だ。
「お役目ご苦労に存ずる。あれなるはご連枝松平長七郎君、てまえは近習役をつとめる大内右源太と申す。子細あって、このたび江戸より京へのぼるもの、願わくば無事に道をひらかれたい」
右源太はぬけぬけといってのける。
「たしかに松平長七郎さまでござるな。明石の藩主松平斉信侯ではござるまいな」
「たしかに松平長七郎君に相違ござらぬ」
「お供のかたがたははなはだ異装にお見うけするが」
「深い子細はありません。主人長七郎君は無位無官、世を忍ぶご身分でござる。申さば主人の好みとでもいいましょうか」
「世を忍ぶご主人の好みとすれば、深い詮索はいらぬこと、――お静かにお通りください」
深見はにっこりわらって、道をひらいた。
異装の斉信主従は、無事に尾張領を通過した。他の供まわりや大名道具は、あとからちりぢりになって主人を追ったのである。
深見は名古屋へ帰って、
「松平長七郎君と名のる世をしのぶ異装の一団は通りましたが、明石侯の帰国の行列はついに見かけませんでした」
と、主君にくわしく子細を報告した。
「さようか。通らぬものはいたし方ないな。ご苦労であった」

尾張公も深くはとがめず、ほどたってから、深見はほかの理由で加増された。

世間はだまされた尾張をわらわずに、だました明石を、そんな肩身のせまい思いをするのも心がらだとわらい、さすがに尾張にはいい家来があると感心した。

4

小稲は捨三郎の監禁されているお船蔵の二階へ、牢格子を一重へだてて押しこめられてから、きょうですでに五日になる。くわしくいえば、やがて五日めがあけようとする深夜である。

一晩じゅう月があるころだから、牢の中は夜でも月の反射でほのあかるい。捨三郎は荒むしろの上へごろりとひじまくらをしたまま、ぐっすりと寝入っているようだ。小稲ももらったむしろになれて、おなじようにひじまくらをしながら、うつらうつらとしている。

「死ぬのも、生きるのも、捨さんといっしょなら」

このごろはなにもかも格子一重の捨三郎にまかせきって、むしろ美代たちとまくらをならべてふとんの中で旅寝の夢をかさねていたときより、ずっと満ち足りた気持ちになっているときがあるから、われながらふしぎである。

ここの食事は、朝と晩の二回で、覆面の鉄砲足軽が握り飯と香のものを木ざらにのせて運んでくれた。その覆面の理由を、

「あれはほんとうの牢番ではないから、顔をつつんでいないとわしの前へ出られないのだ。人間にはだれにも良心というものがあるからな」

と、捨三郎が説明してくれた。

そういえば、ここへあがってくる覆面どもは、けっして口をきかないが、物腰はなんとなく行儀がよくていねいだった。小稲にいやらしい目顔ひとつしたものはない。

捨三郎はしじゅう物静かに、むしろの上に端座していた。疲れると、ゆっくり牢の中を歩き

まわって、またすわる。

「すわっているのも修業のひとつだ。なるべくゆったりとした気持ちで、運を天にまかせておく。それでないとからだが疲れる」

捨三郎はそんなことをいって、絶えず小稲をいたわり励ましてくれる。

「これで、このじゃまっけな格子さえなければ、あたしは一生ここにいたっていいんだけど」

小稲はそんな冗談口をきいたが、その実、もう牢格子など少しもじゃまにはしていなかった。

人間は困難にぶつかったとき、いちばんその本性が出る。捨三郎はこんな絶望の牢の中の荒むしろの上にすわらせられていても、不断の勇気と良識を失わないりっぱな男だった。その男の愛情にみちた目が、心が、からだが、すぐそこにあって、いつも自分を不憫だと思っていてくれる。それを小稲は、ひしひしとはだに感じるのだ。

「あたしねえ、あんたにほれて、ほんとうによかったと思うわ。どうせ、あたしのようなつまらない女は、とてもあんたのおかみさんにはなれそうもないけれど、あたしのような女が、よくあんたにほれたと思って、ほれた自分がなんだかうれしいんです」

「いや、小稲はけっしてつまらない女ではない。りっぱな小稲観音だ。ただ、その一本気が、ときどきかっとなって、むてっぽうになるのはあぶないね」

要するに、肉体にはつらい牢獄の生活だが、心は夫婦になったような、小稲にとってはたのしいふたりきりの、この四、五日だったのである。

5

その後、深川の万七は一度もからかいにこない。油屋伝次もまた、どこへ行っているのか、いっこうに姿を見せない。どっちも違った意味

で、小稲には気がかりだった。
気がかりといえば、要吉はどうしているだろう。いや、それより心配なのは、内藤の屋敷にとりこになっている美代のことだった。
「美代は領主が帰国するまでは心配あるまい」
捨三郎もそういい、小稲もそうだとは思っているが、その鬼殿さまが帰ってくるのは、いよいよきょうあすのうちではないだろうか。
このままでいて、もし鬼領主や大内が帰ってきたとなると、それこそ心配なのは捨三郎のほうだ。
「捨さん、あんたもし油屋が帰ってこなかったら、どうするつもり。やっぱり運を天にまかせちまうんですか」
ゆうべはあんまり心配になったから聞いてみた。
「そのときはまた考えがある」
「考えれば、きっとここから出られるあてがあるんですか」
「ないことはない。すくなくとも小稲だけは出られるようにしてつかわす」
「なにいってるんですよう。あたしは自分が死んだって、あんたをここから助けたいから心配してるんじゃありませんか。だれがひとりでなんか、ここを出たいもんですか」
「しかし、小稲も美代も、とんだまきぞえをくわして、きのどくだな」
「しようがないじゃありませんか、好きで苦労してるんですもの」
またそんな話になって、心配のほうはとうとううやむやになってしまったが、こうしてひとりでうつらうつらしていると、その心配が悪夢にまではいってくるものか、格子一重に寝ている捨三郎の丸いからだの上へ、覆面のくせ者が白刃を擬してのしかかるのをありありと見て、ぎょっと目がさめた。
——夢だったのかしら。
じっとりと冷や汗をかきながら、はね起きて、

格子の中へ目をさだめると、たしかにそのあたりへ物のかげが動いている。
「あっ」
思わず目が、南の窓へ行く。そこはしじゅうあけ放しておく鉄格子のはまったあかりとりの高窓で、外はすぐ裏川だ。黒い影は上からぶらさがって、そこにうごめいている。と見ている間に、
「だんな、——だんな」
ひょいと鉄格子に飛びつきながら、その影が小さな声で呼んだ。油屋伝次の声だ。
「油屋か——」
ぐっすり寝こんでいるとばかり思った捨三郎が、むくりと起きあがって、静かに窓のそばへ寄っていく。
「ただいま帰りやした。えらいことになりやしたぜ」
「まあ、おちつけ」
「ところが、おちつけねえ。細引き一本が命の綱で、こっちは宙ぶらりんのかめの子ときていやすからね」
伝次のいつもの軽口を耳にしながら、ああやっときてくれたと、小稲は思わず涙がこぼれてきた。

6

「だんな、いそぎやすからてっとり早く話しやすぜ」
伝次はひとりで意気ごみながら、なにかうれしそうだ。
「うむ。要点だけでよい」
「鬼の行列は今夜兵庫泊まりで、あすの朝国入りをしやす。鬼が百姓の嘆願を握りつぶしているのは、耳にはいっていやすか」
「やはりそうか。そうであろうな。ここは鬼界ガ島だから、外のことはなにもわからぬ」
「なるほどね、鬼界ガ島で小稲とままごとをして遊んでいたってわけですね。そいつはいいや」

そんなことまで、もうちゃんと知っている伝次だ。

「美代はどうしているか、わかっているか」

「わかっていやすよ。あの娘は内藤の屋敷の座敷牢で、おとなしく鬼の帰りを待っていやす。命にかけてだんなの命請いをする覚悟でね。さっきこの目で、ちゃんと見てきたんだからまちがいありやせん」

それならどうして、いっそ助け出してきてくれなかったんですと、小稲はよっぽど聞いてやりたかったが、窓までは少し遠いから、声を出して下の黒鬼に気づかれる恐れがある。

「外記はどうしている」

「それなんだ、だんな。今夜、大内右源太が、ひと足さきに城へはいりやした。つまり、百姓どもが鬼領主を途中で取りまいてはたいへんだ、あす城から手勢をひきいて迎えに出ようっていうんでしょう」

「ありそうなことだな」

危機はいよいよ迫ったのだ。小稲はひしと牢格子にしがみついて、聞き耳を立てながら、胸がどきどきする。

「あっしがその知らせを持って、ご城代さまのところへ行くと、そうか、こっちにもその用意はあるから、心配いたすな、これこれだと、策ってやつをさずけてくれやしたがね、あっしはさすがに良識さんだと思って、すっかり感心してしまいやした」

「感心さんのほうはあとでよい。その策というのは――」

「意地が悪いねえ、だんなは、少しぐらい感心させてくれたっていいじゃありませんか」

「感心はあとでひとりでできる」

「そいつがどういうもんか、だんなの前でねえと、感心してもおもしろくねえ。――はい、こいつが牢のかぎだ。大阪でこしらえさせてきたんだ。忘れねえうちに渡しときます。剃刀が一丁はいっていやすからね、月代とひげをあたっ

といてくださいよ。無精ったらしいのは、みっともねえ。あす五つ（八時）までにはきっと迎えにきやすからね」

「ご苦労だった。しかし、まだ外記の策というのを聞いていないようだな」

「ああ、そうそう。あっしはこれからまだ忙しいからだなんだから、てっとり早く話しときやすぜ。これから長寿院の大学さまのところへ行って、それから――」

だあん。

突然下から銃声がおこって、あっというと、伝次はまっさかさまに窓から姿を消し、まもなくどぶんという水音が鈍く耳についた。

7

「どうしよう、捨さん」

牢格子の外につかまっていた小稲が、まっさおになって、思わず声をあげた。

「しっ。――静かにそこへすわっていなさい」

捨三郎は荒むしろの上へかえってすわりながら、じっと外へ耳をすました。

「なにごとだ、どうした」

「ご一同、起きろ、くせ者らしいぞ」

階下ではいっせいに起きだし、何かがばらばらと川べりへ飛び出していく。

が、銃声はそれ一発きりだった。おそらく、川へ沈んだ伝次の姿は、それっきり浮きあがらないのだろう。しきりに川べりをさがしているらしい声がする。

同時に、二階へは当然はしごがかかり、覆面の足軽が三人ちょうちんを持ったのが先頭で押しあがってきた。いずれも無言で、ふたりは捨三郎と小稲にめいめい、ぴたりと銃口を向け、ちょうちんを持ったのが牢の戸をあけて、南の窓へ飛びついていった。鉄格子を念入りに調べている。

なにごともないとわかると、こんどは捨三郎のほうへ進み、

「ただいま、くせ者が忍びよりましたようでございますな」
と、さぐるようにちょうちんをさしつけた。
「うむ。さるかもしれんな。人間の忍びよれる場所ではない」
捨三郎はにこりともしないで答える。
「なにか、投げこんだ物はございませんか」
「心配いたすな。わしは松平直之助だ。この牢が出たければ、ちゃんと出口から出る」
おだやかなうちにも、凛然と答えられてみると、さすがに足軽にはそれ以上疑いきれない。
「失礼いたしました」
三人はそのまま階下へおりて、はしごをはずしてしまった。
「ねえ、捨さん、油屋はだいじょうぶかしら」
「たぶん、心配あるまい。あれはこういうことにはなれている男だ」
そのことより、捨三郎は外記がとった策というのが気になる。百姓どもはむろん一揆を覚悟するだろうし、こんどは二度めだから、城方の出ようによっては、あすはどうしても血を見なければおさまらないことになるのだ。
「油屋が大坂でこしらえてきたってかぎ、あてずっぽうでも役にたつんですか」
小稲の心配も、それからそれへと限りがない。
「あてずっぽうではない。わしが蠟でちゃんと型をとってわたしたのだから、だいじょうぶだ」
「右源太が帰ってきて、お美代さんのほうは心配ないでしょうか」
「今夜はそこまで手がまわるまい」
「あすは鬼が帰ってくるんだもの、今のうちになんとか、ここが脱け出せないかしら」
たとえ牢の鍵はあいても、はしごがなくては、飛びおりるよりしようがない。とても飛びおりられるような高さではないのだ。
際限のない心配をしているうちに、やがてほんのりと東の空がしらんできた。

8

ついにその朝はきた。

納屋蔵の当番足軽は五人で、毎朝五つ（八時）に交替するが、その朝は城からあわただしく伝騎が飛びこんできて、交替のないことを知らせた。

「百姓どもがな、昨夜から垂水の宿へぞくぞくと集まっているんだ。国境をふさいで、嘆願をいれてくれなければ、殿様のご入国を妨害しようというんだろう。そのために鉄砲組は国境へ急行しなければならん。百姓どもを追い散らすためにな」

だから、けさは交替がないのだと、伝騎は説明した。

「えらいことになったな。お城下はだいじょうぶかな」

当番足軽はみんな家に妻子があるから、人ごとではない。

「いまのところ、まだこっちへは向かっていないようだが、いずれはなだれこむことになるだろう。大きな声ではいえぬが、領分の百姓どもに鉄砲を向ける。あんまり自慢にはならん、この当番のほうが、まだましだて」

「殿さまも、大内どのも、気が強すぎるからな」

「いや、強いんではなくて、これなんじゃろ」

伝騎は頭の上で人さし指をまわしてみせながら苦笑して、引きかえしていった。

「しようがないな。きのどくなのは、百姓どもの竹槍にかかる人質だ」

「人質だけではすまんだろ。竹槍はいずれ城下へもなだれこむ」

覆面の当番足軽は、暗い顔を見合わせていたが、やがてひとりが二階へはしごをかけ、ひとりが朝の食膳を持って上へあがっていった。

はしごをあがりきって二足三足、ひょいと牢格子の中を見て、おやと気がついた。捨三郎の姿が見えぬ。

あっと思ったときには、もうおそい。牢を抜け出して、上がり口の反対側に待っていた捨三郎が、おどりこむなり当て身をくれ、すばやくそやつの帯刀をとって腰にさしながら、

「小稲、あわててけがをいたすなよ」

声をかけるだけのゆとりを失わず、ゆうゆうとはしごをおりていく。

——やっぱり、あたしの捨さんだわ。

月代もひげも、自分の手であたってやったのだ。その生まれかわったような颯爽たる捨三郎の姿を見ると、小稲はうれしくて、涙がにじみ出てくる。

がらがらっと、膳が床に落ちた音に、下の四人の覆面足軽たちはすわと鉄砲を取りあげたが、ゆうゆうとはしごを降りてくる捨三郎を見ると、銃口は向けても、あっけにとられて、さすがに撃とうとするものはひとりもない。心では、みんなこの人のほうが正しいことを知っているからだ。

「百姓どもの血を流してはならぬ。城へ案内しなさい。わしの命がほしければ、一揆をおさめてから必ずつかわす。血迷ってはならんぞ」

おだやかなうちにも、凛然たる気魄を持っている捨三郎だ。

「はい」

ひとりが構えている鉄砲をおろすと、あとの三人もそれにならって、思わず頭がさがってしまった。

9

がらりと納屋蔵の板戸が外からあいた。

「あっ、だんな——」

あけたのは油屋伝次で、覆面足軽が一様に頭をさげているのを見ると、おどりこむように捨三郎の前へ出た。

「おお、油屋、無事であったか」

「へえ、今から五段めの定九郎になっちゃいられやせん。だんなはまた早いとこ、このだんな

がたをくどいちまったようでござんすね」
伝次はちらっと神妙な足軽たちのほうを目でさして、にやりとする。
「右源太はもう城を出発したようか」
なによりもそれが気になる捨三郎だ。
「おっと、あっしはどうもおしゃべりでいけねえ。大内はまだ城でござんす。だんな、ご舎弟さまをご案内しやした」
「なに」
見ると、その声に白皙長身の美少年が、すっと戸口へきて立った。長寿院へ隠居させられている異母弟松平大学である。
「大学どのか」
捨三郎はつかつかと前へ進んで、声をかけた。何年めの対面か、あまりりっぱになったので、ただ目をみはるばかりだ。
「兄上、城へお供いたします」
美少年はにっこり目に親しみをこめながら、時と場所をちゃんと心得ているようにうなが す。
「そうであった。一同つづけ」
大学と並んで納屋蔵を出ると、前の広場に外記派の決死隊が十数人、いずれも武装して待ちうけていた。その先頭は尾崎才兵衛と長木市郎兵衛である。
「そのほうどもも、われら兄弟に供をしてくれるか」
「はい、ご奉公つかまつります」
いちばん年がしらの市郎兵衛が、一同にかわって答えた。
「過分である。礼をいうぞ」
捨三郎が会釈をすると、一同の顔にさっと感動の色があらわれて、
「もったいのうございます」
と、声をふるわしたのも市郎兵衛だった。
「それでは、これから城へまいる。一同、あとにつづけ」
断固として指揮をとった捨三郎は、大学と肩

をならべて颯爽と先頭に立った。
「このさしずは外記がしたのか、大学どの」
「そうです。外記は深夜、単身六左衛門の屋敷へはいり、垂水へ向かったそうです。死ぬ覚悟でしょう」
「明石をまもるか、身を捨てるか、いずれはわれらも同じ運命だ」
「兄上、わしはだいじょうぶだと思います。ふだんは眠っていても、いざとなると重代の正義派が、きっと立ちあがります。ただ口火さえ切ってやればいいのです」
美少年はそんな不敵なことをいってわらっている。これはものになりそうだと、捨三郎はたのしかった。
なんとなく騒然たる城下町を突っ切って、大手門へかかると、ここは城下の足軽がもう厳重にかためて、堅く門をしめきっていた。
「ごめん」
それと見た足軽頭長木市郎兵衛が、ばらばらと門のほうへ駆けぬける。

10

「ご一門直之助さま、大学さまおふたかた、お城へまかり通る。そうそう開門さっしゃい」
門前へ出て警戒している足軽たちの前へ行って、市郎兵衛はしかりつけるようにいった。
足軽たちはこの一行が大手へかかったときから、どうするというように、おたがいに当惑の顔を見あわせていたが、組頭に一喝されては、どうしようもない。
はっと答えて、ひとりがくぐりから門内へ駆けこみ、他の者が両側へ道をひらく間に、大手門はぎいと、八文字にひらいた。
「ご苦労である」
捨三郎は足軽たちに声をかけて、すっと通りぬけた。ここから先は、中堀の太鼓御門のところまで、ずっと藩士が住んでいる屋敷町である。
「親友、——親友」

捨三郎が振りかえって、油屋を呼んだ。いつもはすぐうしろから離れない伝次だが、きょうは小稲をひとりでほうっておくわけにもいかないので、列のいちばん後ろにさがっているのだ。

「ご用ですかえ、だんな」

伝次はすぐ走ってきた。

「内藤の屋敷へまいって、美代をうけ取ってきてくれ」

「盗み出すんですかえ」

ほかに手のない伝次だ。

「いや、長木に相談してみよ」

「兄上、わしが名代をつとめましょうか」

大学がそばから買って出た。

「そうか。では、なにぶんたのむ。女どもはひとまず外記の屋敷へあずけておいてくれ」

「承知しました」

大学は長木市郎兵衛と伝次のほかに、鉄砲組足軽ふたりをつれて別れていった。

城では総登城を行なっているから、屋敷町はなんとなく森閑とした感じで、あらしのまえのしずけさ、そんなぶきみな空気がただよっている。

つじつじをかためている足軽たちが、みんな一様にびっくりした目でこっちをながめていたが、だれも道をさえぎろうとする者はなかった。

やがて中堀端通りへ出て、太鼓御門へかかろうとしたとき、ちょうどその門が中から、待ってでもいたように左右にひらき、馬上の大内右源太を先頭に、国ざかいへ領主の帰国を出迎えに向かう鉄砲組足軽の一隊が乗り出してきた。

と見た捨三郎は、つかつかと橋詰めへ進んで、

「右源太、いずれへまいる」

と、道をさえぎりながら一喝した。

「おお――」

橋の中央で、ぎょっと馬をとめながら、意外な目をみはる右源太だ。

すわと、決死隊の一行は捨三郎のうしろへ横隊の陣をしき、さしずさえあれば即座に切って

出る身構えをとった。
「不心得者が、またよけいなおせっかいをしたようですな」
じろりと右源太は不敵なつら構えで、決死隊の人数をにらみつける。
「無礼者、馬をおりよ」
「おりませぬ。拙者はこれよりご当主さまのお国入りを出迎えに向かう者、あなたこそ道をおひらきなさい」

11

「通すことはならん。そのほうは領内の百姓に鉄砲を向ける気か」
捨三郎は詰問するようにいった。
「領主に反抗する者は、やむをえないでしょう」
冷然といいかえす右源太だ。
「苛酷な非政にたえず、嘆願がいれられなければ当主に反抗も辞さずとしているのは、領内の百姓残らずの覚悟だ。鉄砲などで解決がつくと思っているのか」
「つくかつかぬか、やってみなければわからんでしょう」
「たわけ者め、平気でさような暴言を口にする、そのほうごとき冷酷な狂人がついているから、斉信どのがいよいよ暗愚になるのだ。成敗してつかわすから、馬をおりよ」
この男だけは切るほかはないと、捨三郎は意を決したのだ。
「一騎討ちですか。迷惑ですな」
「臆したか、右源太」
「いや、一騎討ちだと、いやでもあなたを切らなければならん。迷惑ですからな」
一騎討ちに誘いこんで、衆人の前で小名木川を切る、おのれの実力を見せておくにもいい機会だと、右源太には右源太の腹があった。
「狂人に切られるようなわしではない。迷惑など考えるには及ばぬ」
「よろしい。しからば、やりますかな」

右源太はひらりと馬からおりて、
「杉田、――杉田」
と、門のほうへ呼んだ。
杉田兵之進が走りよってくる。馬の手綱をわたすと、
「火ぶたを切りましょうか」
と、小声でいった。
「機会をつかんだらやれ」
右源太がすばやく答える。
その間に広い堀の道までさがった捨三郎は、
「心配せずに、ずっとさがっていなさい」
と、味方にいいつけた。
「ちとお軽はずみではございませんか。たいせつなおからだです」
尾崎才兵衛がおこったような顔をしていう。
「いや、わしが自分で成敗せぬと、城方の動揺がおさまらぬ」
そういいながら、捨三郎の帯しているのは、さっき足軽から奪ってきたものだ。念のために抜いてみると、わざ物とまではいかぬが、なまくらでもなさそうだ。
「狂人のひとりやふたりは、これでまにあうだろう」
にっこりして、味方の位置を見ると、大手門を背にずっと半円を作った人がきのうしろから、小稲の目がやきつくようにひしとこっちを見すえていた。
「才兵衛、よいからさがっておれ」
捨三郎は抜刀をさげたまま、右源太を迎えるように、二、三歩横のほうへ進んだ。たすきもはち巻きもしない、着流しのままである。
伊賀ばかま、わらじがけ、じゅうぶん身じたくをしている右源太は、つかつかと橋をわたりきって、
「遠慮はしませんぞ。狂人ですからな」
と、あくまで驕慢な冷笑をうかべた。

12

「まいれ」
「とうッ」
まったく常識をはずれた右源太のふいの抜き討ちだった。真剣勝負だから、まいれと、一刀を取りなおした以上、どんな激しい抜き討ちをかけられても、ひきょうとはいえないかもしれぬ。
が、こっちから見ていると、捨三郎のまいれには、右源太の抜刀するのを待ってやろうという態度が見え、右源太はわざとゆっくり悪態をついているように見せかけておいて、敵の意表に出た。たしかにずるいやり方である。
見ていた者は、やられたかと、思わず色を失ったが、捨三郎はあやうく、ひらりと六尺ばかり飛びさがって、空を切らせた。
「とうッ」
そこを、飛びさがった捨三郎に立ち直るすきをあたえず、右源太は強引な追い討ちに出た。
こんどは捨三郎もかわすひまがなく、がっと引っ払って前へ飛びぬける一手だ。
両者の位置がかわって、右源太は大手門のほうへ、捨三郎は横のほうへ背が向く。
二度の強襲に失敗した右源太は、さすがに息をととのえなければならないから、はじめてぴたりと青眼に構えをつけて、うけ身にまわった。憎いやつだが、恐るべき腕まえを持っている。
捨三郎はあせらずに、時のくるのを待つほかはない。
その冷静水のごとき進退を見て、なるほど殿さま芸にしてはできる、ゆだんは禁物だと、右源太も緊張せずにはいられなかった。
双方対峙したまま、こうなるとめったに動けぬ。
「あっ」
見ていたほどの者が一瞬、愕然と血の気を失って、声さえ出なかった。

敵方から、つかつかと橋の半ばまで出てきた杉田兵之進が、ゆうゆうと銃をかまえ、立ち撃ちの姿勢で、捨三郎の背をねらったのである。

「あぶない、捨さん」

金切り声をあげて前の者をかきのけ、いっさんにそっちへ走りだした小稲は、同時に西中堀町側から、脛もあらわにすそを乱して、必死に駆けだした娘を見た。美代だ。そっちのほうが捨三郎にずっと近い。

「あっ、お美代さん」

思わず声が出たのと、

だあん。

銃声を聞いたのといっしょだった。そして小稲の目は、やっと捨三郎の背へ走りついた美代が、あっと、のけぞりながら、まるでたたきつけられるようにあおむけにひっくりかえるのを見た。

「ちくしょう――」

小稲は歯ぎしりをしながら走る。

だあん！

また一発。しかし、それは味方の足軽が撃ったらしく、橋の上の兵之進が銃をとりおとしながら、大きくのけぞっていく。

と見る間に、すぐ目の前になった捨三郎が、

「えいッ」

まなじりをさいて、右源太のほうへさっと一刀ふりかぶった。

13

背後でおこったことだから、捨三郎には見えなかったが、大きなちょうのようにひらひらと飛びこんできた美代が、銃声といっしょにもろくも地におちたのが目にうつった瞬間、右源太はたしかにはっとなった。

そのほんのわずかな呼吸の狂いへ、鳴りをしずめていた捨三郎の飛燕の太刀が、まるで吸いつけられるようにきらめき走ったのである。

しまったと、右源太は狼狽しながらも、とっ

さに払いのけたつもりだったが、
「わあッ」
突然目の中で白光が炸裂したのを感じたきりで、ふっと意識が絶えてしまった。
右肩を一太刀でしたたか切りさげられた右源太が、あおむけに大きくのけぞるのを見とどけた捨三郎は、くるりと振りかえって、二、三歩のところに倒れている美代のほうへ飛びつくように片ひざついた。
「美代――」
弾丸は右わきを貫いているようである。致命傷だ。
「美代、しっかりいたせ」
刀をおいた捨三郎は、その右手を美代のうなじへ入れ、左手で傷口を押えるようにして、ぐいと抱きおこした。
「美代、美代――」
強くゆすりながら、抱きしめてやると、美代は命の最後のまたたきほどの意識を取りもどしたように、うっとりと目をひらき、激しく上からのぞきこんでいる捨三郎の目をわずかに感じたらしい。にっと血の気のうせたくちびるへ微笑がうかび、
「美代は、お、み、が、わり」
声にはならぬあえぎで、それが捨三郎にはっきり聞きとれたから、
「かたじけないぞ、美代」
耳へロをよせて呼びますように、せめてもたったひとこと冥府の形見にと、魂をこめて吹きこんでやると、うなずいて、右手がはかない恋をつかもうとでもしたのか、すがるように少し動きかけたが、がっくりとそのまま息が絶えてしまった。
「南無観世音大菩薩、せめてこの美しきおとめを、安らかに引きとらせたまえ」
捨三郎の目へ泉のごとく涙があふれてきた。
「お美代さん、かわりたかった、あたしが」
小稲がわっと地の上へ泣き伏していく。

のぞきこんでいた伝次がくすんと鼻を鳴らし、大学と市郎兵衛がそっと指で涙を押えた。
朝の太陽がみなぎるようにあかるく、城方も、味方も、一瞬しいんと鳴りをしずめている。
「伝次――」
捨三郎が美代のからだをたいせつそうに抱いて、すっくと立ち上がった。
「へい」
「あずける。静かに外記の屋敷へつれてまいれ」
「承知しやした」
しっかりと抱きとる伝次だ。
「小稲、命をそまつにしてはならんぞ」
ここにも死にたがっている女のあるのを、捨三郎ははっきりと感じたのである。

14

その朝――。
強引な斉信は、定刻に供ぞろえをして、兵庫の宿を立った。
領内に不穏の空気のあるのは承知しているが、そのために右源太が昨夜先行し、けさ鉄砲組を総動員して、国ざかいまで出迎えにくることになっている。
「一揆を起こした者は、磔の刑に処せられるのが定法です。まして、殿はご連枝の出、ご入国の妨害をするような不心得者は撃ち殺しましょう。たかが烏合の衆の百姓ども、こっちが断然たる処置に出て、何人かの死傷者を出せば、たちまち散ってしまいましょう」
右源太はたかをくくっているようであった。
それに、斉信には城へはいるたのしみが二つある。捨三郎と美代が、内藤次郎右衛門の計らいで、ふたりとも監禁してあることだ。
捨三郎はなわつきのまま引き出し、どうしても前非を悔いなければ、手討ちにしてやる。美代はこんどこそ納得させて、わがものにする。
強情なやつほど、手のうらをかえすようになるものだ。

お冬がはじめそうだったことを思い出すと、斉信はかごにゆられながら、胸がうずくような微笑を禁じえなかった。

そのかごが、やがて領内へはいったと思うころ、ぴたりと止まってしまった。止まる場所でないから、六尺どもは一つところでゆっくり足ぶみをしている。

「申し上げます」

まもなく側用人平田作十郎が、ただならぬ血相をしてかごわきへひざまずいた。

「作十郎、いかがいたした」

「百姓どもが数千人、道いっぱいに土下座して、お道筋をさえぎっています」

「なにッ」

「先頭は平松外記どのが、大蔵谷の広瀬六左衛門をしたがえてすわり、なにとぞ過日の嘆願三カ条、お聞きとどけくださいますようにと、懇願いたしております」

「ならんと申せ。予はまだ帰国の途中じゃ。返事は城へ帰って追ってさたしてつかわす」

「おことばではございますが、お聞きとどけなきうちは、道をひらかぬ覚悟のようにござります」

作十郎は額にあぶら汗をうかべている。

「かごを止めよ。馬をひけ」

領主の入国を道に要して阻止する。不届きなやつらだと、わがままな斉信の激怒は一時に爆発したようだ。馬のひづめにかけて、けちらしても押し通る気なのだろう。

作十郎は、止めてもだめだ、自分の目であのおびただしい百姓どもの土下座を見るほうがいいと思ったので、すぐに乗馬をひかせた。

斉信は馬に乗って、その高さから前方を見て、はじめておどろいたようである。

そこは垂水の宿へはいろうとする宿はずれで、右手は急蛭、左手は海、その狭い一本の帯のような街道いっぱいに、びっしりと決死の百姓どもが青竹を伏せて土下座している。

その先頭に、白装束麻上下の外記が、六左衛門をしたがえて、大地へ両手をついているのだ。

15

一度馬にまたがったからには、意地でもいまさらおりるわけにはいかぬ。

「作十郎、つづけ」

斉信は角をいれて、癇癖の歯をくいしばりながら、外記の前まで馬をすすめた。

馬は目の前のおびただしい人の土下座を見て、そこでぴたりと止まってしまった。

「外記、無礼であろうぞ。道をひらけ」

斉信は蒼白になって、馬上からしかりつけた。

「ご無礼の段は後刻、いくえにもおわびつかまつります。殿、過日来急使をもっておうかがいつかまつりましたこのたび百姓どもの嘆願のおもむき、なにとぞお聞きとどけくださいますよう、総代百姓広瀬六左衛門ともども、外記からもかくのとおり懇願つかまつります」

外記は必死に言上して、あらためて大地へ両手をついた。こうまでして、もしこの嘆願がいれられなければ、外記はここでむろん腹を切る覚悟だ。あるいは、腹を切るまえに、主君の手討ちのほうが先かもしれぬ。それでもよい。手向かいはせぬつもりだから、外記ははじめから両刀をはずして、前へおいている。

「黙れッ。そのほうは重き城代家老の身をもって、百姓どもを扇動いたし、あくまで予にたてをつく所存か」

「これはおことばとも思えませぬ。このたびの百姓どもの嘆願は、領内百五十カ村の総百姓が死ぬか生きるかの大事のせとぎわに立っての思案、これを許す許さぬはまたご当家にとりましても興廃にかかわる重大事ゆえ、重き役目をおせつかる外記が、かように土下座いたしているのでございます。せつにご配慮願わしゅう存じます」

「ならん。領主の入国を途中で阻止いたし、脅

迫がましき手段をもって嘆願とはなにごと。返事は追って帰城のうえ、さたしてつかわす。百姓どもによく申し聞かせて、道をあけさせろ」

「はばかりながら、嘆願の儀はすでに事理明白のことにて、許すとただ一言ご決断くだされば、百姓どもがなんで道をふさぎましょうや。領内総百姓が死を決しての今日の仕儀、なにとぞご寛容のうえ、ご決断願わしゅう存じます」

「うぬッ、主君に対して、あくまでさしずがましきことを申す。重ねて申してみよ、そのぶんにはすておかぬぞ」

手討ちにもせまじき激怒の語気に、近くの百姓どもはいつしか土下座の顔をあげてしまい、その顔にいずれも憤然たる色をろこつにしてきた。

「外記どの、ちとことばがすぎましょう。この場にてのご決断は、百姓どもに脅迫されて、いかにもそれを恐れたからのようにもとれ、殿の面目にもかかわること、ひとまずここは道をひらいて、ご帰城のうえ、追ってのさたといたすほうが順当かと存ずる。いかがでしょうな」

作十郎がそばから、とりなすように口を入れた。

「黙らっしゃい。武士の面目とは、日ごろ道を道と心得て、身を慎める者の上にあること、おそばに仕えるそのほうどもが道さえ心得ておれば、とっくにご決断のこともあって、今ここで面目をうんぬんするごとき事態にはたちいたるまい。そのほうどもは、この数日、いったいなにをしておったのか」

外記は一言のもとにしかりつける。

16

「殿、百姓どものせつなる嘆願、なにとぞお家のためにも、ご決断願わしゅう存じます」

外記はあらためて馬上の斉信を見あげた。

「くどい。あくまで予を脅迫する気か。手討ちにいたすぞ」

「お手討ちは覚悟のうえのこと、せつに、せつにご決断を――」
「いうな、ふらち者」
斉信は馬上で、さっと佩刀を抜いた。が、そこからでは土下座の外記にとどかない。いらだって馬から飛びおりようと腰をうかせたとたん、
だあん！
突如、急蹉の松の木のあたりから、つるべ撃ちに銃声がおこり、肩口から胸へ一発、したたか弾丸をうちこまれた斉信は、
「あっ」
と、のけぞりながら、たまらず馬から大地へころげ落ちた。
おどろいた乗馬は、ひひんとさお立ちになり、ふいのできごとにさすがの百姓どもも、わあっと前のほうから次々に総立ちになる。
外記はとっさに立って、狂うおそれのある乗馬のくつわへ飛びついていった。
「どうッ、――どうッ」
一方、六左衛門はすっくと立って、百姓どものほうへ大手をひろげ、
「しずまれ、皆の衆、――しずまれ、しずまれ」
と、声をかぎりに叫びたてる。
あとにつづいていた総代三人も、これにならって声をあわせた。
「作十郎、殿は――」
しっかりと馬の口を押えつけた外記が、悲壮な面持ちで聞く。
「残念ながら――」
斉信を抱きおこしていた作十郎が、蒼白な顔をして答える。
「なに、重傷とな。そうそうにおかごへお移し申せ」
途上凶手に倒れたとなると、家名が断絶するのだ。重態のまま城へ運ばねばならぬ。
「あそこだ。下手人はあの松の木の上だ」
「つかまえろ、ふらちなやつ。――ひきずりお

ろせ」

駆けつけてきた行列の士が、高い急崖の中腹からのびている松の木を指さしながら、口々にののしりはするが、とても普通の人間にはのぼることのできぬ場所だ。

下手人は松の枝間から、ひげだらけの顔を出して、藩士たちにかごのほうへ運ばれていく斉信の死骸を、じいっと焼けつくような目で見送っている。百姓のかっこうではなく、たしかに猟師といった身ごしらえだった。

そのころ——。

城内では、ご用べやへ押し通った捨三郎が、内藤次郎右衛門と目置十太夫を相手に、激論を戦わしていた。

「それでは、あなたさまは殿をこのまま見殺しにしてもよいと、仰せられるのですな」

次郎右衛門も十太夫も、ぜひ国ざかいへ鉄砲組を出迎えに出さねばならぬと、主張するのである。

17

「そのほうどもは、鉄砲組足軽さえ出迎えにまいれば、斉信どのが無事に国入りできると考えているのか」

捨三郎の語気には、血迷っている老臣どもをあわれんでいるようなところさえある。

「しかし、先日のごとく数千の百姓どもに取りまかれましては、鉄砲で追い払いますほかに、手段はございますまい」

「数千の百姓どもに対して、鉄砲組足軽はおよそ何人ぐらいいるのか」

藩士全員が鉄砲を持って籠城するとしても、五百の数には足りないのである、まして、弾丸にも人員にも限りのある出迎え足軽を向けたところで、いざ野戦となれば、とうてい数千の竹槍には及ばない。

「そのほうどもは、鉄砲でおどしさえすれば、百姓どもが恐れて道をひらくと杜撰にもたかを

くくっているのだろう。そもそも、領内の百姓を相手に一戦しようという心組みからしてまちがっているとは心づかぬのか。百姓どもはけっして領主に反抗しようというのではないぞ。ただ、食えぬから食えるようにしてもらいたいと、嘆願しているのだ。その根本の問題を今日までおろそかにしておいて、いまさら鉄砲の弓のと狼狽したところでなんになる」

「おことばではございますが、百姓などという者は、一度いい分が通りますと、必ず明年は年貢一割減の嘆願をしたがるものでございます。それが見えすいておりますゆえ、今日までわれわれども評議を重ねておりましたので、けっして根本をおろそかにしていたわけではございません」

十太夫がうまいいいのがれを口にする。

「さようか。百姓どもから平年の年貢一割減などという嘆願が、過去において一度でも出た例があるのか」

明石転封以来の記録は、およそ調べさせてある捨三郎である。十太夫はぐっとことばに詰まったようだ。

ご用べやではそんな議論が行なわれていたが、外では藩士たちも鉄砲組足軽たちも、もうすっかり戦意を失っていた。肝心の大内右源太が切られ、捨三郎と大学の出現によって、今まで沈黙していた正義派が黙言で蹶起するけはいが見えだしたからである。しかも、いざとなると、数においては、大内派などというものは全藩士の一割にも足りないのである。いいかえれば、時の勢力によって左右されるごつごう派が大部分ということにもなるのだ。

そういう形勢の中に、垂水の宿から、斉信重態、実は急死という飛報があり、つづいて、下手人は領内の百姓ではなく、先年木曽街道で幼子を手討ちにされた尾張の猟師多九郎なる者が、斉信を恨んで行列をつけねらい、垂水で狙撃したものと知らせてきた。

外記はその場で、領主重態を発表し、ついては嘆願のおもむきお聞きとどけあそばされると、百姓どもに申しわたしたので、土下座のものはたちまち道をひらき、その中を、斉信重態のかごは外記がつきそって、粛々と明石城へ向かった。

事態はここに一変したのである。

18

美代が痛ましい凶弾の犠牲になってから、早くも再七日になる。そして、その遺骨はいま思い出深い大蔵谷の六左衛門屋敷の離れへ安置され、小稲と要吉に守られて、江戸へ帰る日を待っている。

捨三郎はあの日以来、一度も城から出てこない。その間に、当主の病気届け、大学の嫡子届けなど、江戸へ急使が何度となく飛び、斉信の喪が発せられると同時に、大学が明石十万石の封をついだのは、ついきのうのことだった。

「あねご、このごろ顔色がさえねえようだな、しっかりしてくれなくちゃ困るぜ」

きょうは仏の再七日だから、あとからだんなもくると、先触れにきた油屋伝次が、仏前へ焼香をすませてから、小稲の顔を見ていった。

目の前で美代があんなことになった日から、小稲はすっかり沈んだ女になってしまったのを、自分でもよく知っていた。どうしても気が引きたたないのである。

「あたしねえ、にいさん、江戸へ帰って伊丹屋さんにお目にかかるのがつらいんです」

ほんとうはあのとき、自分が身がわりになるつもりだったのだ。ひと足おくれたばかりに、親のある美代を殺し、その親に嘆きを見せるかと思うと、心苦しくてたまらない。

「尼はいけねえぜ、あねご」

伝次はずばりといって、

「つらいなあ、だんなだって、おれだって、おんなじことさ。ことにだんなはねえ」

と、仏のほうを見ながら、目をしばたたく。
「おれだってつらいや。ねえちゃんは病気だったから、しようがないけれど、お美代ねえさんのことは、だんなからようくたのまれてきたんだ」
要吉はそういって、ぷいと立っていってしまった。人の前では泣きたくなかったのだろう。
「要ちゃんは、小品さんに死なれてから、お美代さんをほんとうの姉のように思っていたんです。あの子がいちばんつらい。——にいさん、あたしはなにもかも捨てて、一生あの子の親身の姉になって暮らそうと、覚悟をきめました」
なにもかもとは捨三郎への恋のことで、それはまた死んだ美代への心中だて、自分ばかりいい子になっては申しわけないという気持ちでもあった。
「いいだろう。だんなもそのつもりよ。実をいうと、いつまでもここにいちゃ大学さまに箔がつかねえ。家来がみんなだんなばかりをたよりにする。あしたは朝早く、そっとここを立ってしまうといいなさるんだ」
「小名木川の下屋敷へおかえりになるの」
「違うねえ、そんなけちなだんなじゃねえ。一度家出したからは、大名などに未練はない。生涯浮世捨三郎さ。お住まいは伊丹屋の根岸の寮を借りよう。あそこなら、下谷に近いから、たびたび要吉の顔も見られるし。小品ちゃんとお美代さんにも縁が深い。親友、おまえは一生庭番にしてやると、親友からいきなりじいやに下落しやがった。小稲はと聞くとね、あれには一生飯をたいてもらうかなと、つまりあねごは飯たきばばあに下落さ。あすはどうか天気にしてえもんだ」
けろりとしていってのける伝次だった。
小稲は黙って、縷々と立ちのぼる仏前の香の煙を、目で追っていた。
翌年、斉信の命日の日に、平松外記は自宅で切腹した。自決を一年のばしたのは、法で禁じ

られている殉死追い腹をさけたのである。

おかぐら

おかぐらの初めはストリップか

おかぐらの事始めといえば、江戸時代をはるかにとびこして、どうしても古事記が述べる神代にさかのぼらなければならない。

タケハヤスサノオノミコト（建速須佐之男命）が大あばれしたので、アマテラスオオミカミ（天照大御神）が天の岩屋へ隠れたもうて、高天原はまっくら闇。葦原の中ツ国も闇に沈み、悪しき神どもがいっせいに騒ぎ出した……と、古事記は語りはじめる。

そこで八百万の神々が天ノ安ノ河原に集まって、会議の結果、才知にすぐれたオモイカネノカミ（思金神）にすべてを一任。この知恵の神が考えたアマテラスさま誘い出しの計画に、大きな役をふりあてられたのがアメノウズメノミコト（天鈿女命）だ。

美しい巫女の彼女は、ヒカゲカズラ（蘇苔類の一種）を襷にかけ、マサキノカズラ（蔦の一種）を飾り髪にして、小竹の葉を束ねたものを手に持ち、天の岩屋戸の前、さかさまに伏せた槽の上へあがった。そして、足を踏みとどろかして歌い、踊ったのである。

乱舞するうち、彼女はゆたかな乳房もあらわに胸をはだけていった。そして、裳帯をずりさげて、女陰まで見せて踊り狂った。

この特出しストリップに、見物の神々は熱狂し、高天原が鳴りどよむばかりに笑い、歓声をあげたので、不審に思われたアマテラスさまが、そっと岩屋の戸を細目にあけた。これを待っていた剛力なアメノタジカラオノミコト（天手力男命）が、アマテラスさまのお手をしっか

りと取って、外へひき出されたので、天地はふたたび照りかがやき、明るさをとりもどしたという。

要するにこの話、古代の巫女の舞の様子を知るのに適当で、乳房を見せたり、女陰をあからさまにするのは、魔を払いのける力がそこにこめられているという、古代人の信仰を物語るものだろう。

日蝕、日没、また太陽の光線がもっとも衰える冬至のころに、太陽神の力をよび起こすための祈禱がおこなわれて、そのときは、シャーマンが裸身をさらけ出して踊り、神がかりしたにちがいない。

そして、このアメノウズメノミコトの子孫一統が、のちに朝廷の神祇官で、神前に舞楽を奏した巫女の〝猿女〟だとされた。

朝廷のかぐらと里かぐらはどう違うか

朝廷のかぐらは、奈良朝時代から神遊びといって、舞をともなわないかぐら歌の演奏が主となり、これをたいそう重大なものとするようになった。

奈良朝以後は、豊楽殿中の清暑堂でおこなわれたが、一条天皇の御代から内侍所の庭で一年おきの十二月に奉奏することになり、その後、時代のはげしい移りかわりにつれて、宮中の儀式の多くは廃絶したが、このおかぐらだけは現代まで伝わっているようだ。

朝廷以外の神社でおこなうかぐらが、つまり里かぐらで、これは巫女か、かぐら男が舞うのだが、神社によってそれぞれ特定の舞式がある。

また、かぐら歌のほかに猿楽（そのときの座興でこっけいな所作をする戯技）を演じる風がおこり、巫女が舞のほかに歌ったり、田楽を演じたりするようになった。

田楽というのは、田植えのときに歌い踊った神事から出て、社寺の行事になったものだが、

この田楽には、高足といって柱の高さ七尺（約二・一二メートル）、横木が一尺（約三〇・三センチ）の十字架の上へ乗ったり、品玉という玉をあやつる曲技が付きものだった。これに獅子舞も奏せられて、時代が進むにつれて、獅子と田楽とは祭礼に欠かせない景物になった。

そして、この田楽の曲技から後世の太神楽が生まれた。いま、寄席やテレビの演芸に出演して、口にくわえたバチの上でマリをたくみに転がしたり、弾いて止めて、観客の拍手をあびる曲芸のルーツがこれである。

さらに神社に奉納される舞踊から、関東地方のあの馬鹿囃子、おかめ・ひょっとこの愉快なパントマイムも発生したのだった。

馬鹿囃子はいつから盛んになったか

「お祭りに一時期を画すべきは、葛西における新芸術の発達である」と、考証家の三田村鳶魚翁も書いている。

江戸の祭礼になくてはならない庶民の音楽〝葛西囃子〟は、享保（一七一六～一七三五年）のころ、下総は葛西金町（現在の東京都葛飾区金町）の香取明神の神主さんで、能勢環という人が、村民たちに〝和歌囃子〟というものを教えたのが最初で、これが発達してあの軽快で楽しいメロディーができあがったといわれている。

〝ワカ囃子〟がいつから〝バカ囃子〟になったのか、そのへんは定かでないが、宝暦三年（一七五三）のこと、葛西の田園に困った問題が起きた。

それというのは、葛西の青年たちが夜になるとそろって荒川をさかのぼり、千住あたりに遊びにいってしまうのだ。江戸四宿の一つ、千住の遊里周辺に、安価で手軽くころび寝する売色の者があらわれて、どうやらこの穴場に通うらしい。

葛西の代官伊奈半左衛門はこれを憂慮して、

名主や村役衆を集めて協議した。

「だいたい、田畑の仕事をおえてしまうと、用事がなくなって、秋の夜長を無為にすごすからいけない。なにか健全な娯楽はないものか？」

考えた末に思いついたのが葛西囃子だ。若者たちを集めて、この稽古をさせようということで衆議一決。

オヒャリトーロ、オヒャリヒャリトロの笛から、テケテン、ドドドンの太鼓、チキチンの鉦などを持たされた葛西の若衆アたち、代官さまのご命令とあっては仕方がない。恋しい千住の灯を遠く望みながら、ヤケになって猛レッスンをはじめた。

だが、いくら上達しても、発表の場が村祭りの日だけでは、若者たちも意欲がわかない。そこで、宝暦十二年（一七六二）から、江戸の日枝神社、神田明神の祭礼に特別出演させることになり、そうなると青年たちも勢いづいて、懸命に技を競い出した。

和歌囃子が転じた馬鹿囃子のほかに、雷序・手古面舞・狐ばやし・鎌倉・越後などの曲目があり、どれにも歌詞はない。曲に合わせて、おかめの面、ひょっとこ面をつけたユーモラスな踊りがおこなわれるようになり、いまでは〝おかぐら〟といえば、これだと思われるまでになったのである。

おかめは醜女の代表か

「おかめ」「おたふく」というのは、江戸のころからつい最近まで、女性をあざけるときの常套語だった。

おでこが高く、頬がふくれて、鼻べちゃで目が細い。しかし、その原型は引き目鉤鼻、平安時代の大和絵で、当時の女性的な美を夢幻的、印象的に表現したあの様式にのっとっているのであって、決して不美人ではなかった。

それが誇張されて、こっけいなものになっていったが、本来、おたふくは〝お多福〟であ

り、おかめは亀が象徴する長寿・富貴・平和・平穏・愛と徳の上達を祝福して、おたふくの別称にしたものだから、とにかくめでたいのである。また、元禄（一六八八～一七〇三年）のころには、海の宝物をつかさどる龍女を亀とした考え方があり、これもおかめの名にふくまれている。だから、「おかめ」だの、「おたふく」と呼ばれた女性は、怒るどころか、「ありがとうございます」と礼を言わなければならない。

ただし、このお多福の面が、十一月の酉の日におこなわれる鷲神社の酉の市に、縁起ものの熊手に飾られて売り出されるようになってからは、どうも女性への嘲罵の意味をこめて使われるものになってしまった。

酉の市に売れ残った熊手のおたふくは、ほとんど形がくずれていたり、彩色がよくなくて、見おとりがする。それで売れなかったわけだが、これを花街の張り見世で売れ残った娼妓にたとえたのが、罵言の最初だろうと言われている。

遊郭の張り見世というのは、その店の抱えの遊女たちが、店先の格子の内へずらり顔を並べて客を待つのだから、まさに酉の市の熊手に飾ったおかめの面の勢ぞろいだ。形のいいものから先に売れて、売れ残りが出るのも、酉の市の熊手に似ている。

そこで口のわるいやつが、

「なんだ、売れ残りのおかめ、おたふく女郎め」

と笑った。これでは「ありがとう」と礼を言えるわけがない。

かくして、「おかめ」「おたふく」は、いまでいう「ブス」の代名詞になって、近年までモテない男性は、女性にふられるたびに眉をつりあげて叫んだものである。

「なに言ってやンでえ、このおかめ。てめえに惚れたそぶりを見せてやったのは、おれが情け深いからだぞ。おれでも惚れてやらなかったら、だれがてめえみてえなお多福に、ハナもひ

つかけるかってえんだ。ざまア見やがれ、ちっくしょうッ……」

ひょっとこは潮吹き男か

祭礼のかぐら殿に登場するおたふくの相手役は、ひょっとこだ。片目が小さくて、口のとがったこの道化た面は、山の幸・海の幸の神話からの解釈で、潮を吹く男とされているが、これは近世の付会で、本当は〝火男〟、ヒオトコが転訛して、ヒョットコになったというのが正しい。

片目を細くして、口をとがらしているのは火吹き竹を吹く顔で、東北地方の農家では、この面を台所の柱にかけて、火の守護神として大切にしていた。

里かぐらで、ひょっとこの舞というのは火の神の舞だ。現在のように、マッチやライターで、いつどこででも容易に火が使えるようになってしまっては、火の管理する苦労など想像もできないが、昔は人間の生命の源である食物のための火を焚く技術と、この火種をいつまでも消さずに保存する心づかいは、なみたいていのものではなかった。

時代をさかのぼって古代になれば、なおいっそう火おこしは大変な作業であって、だからこそ、火そのものが持つ力への信仰も強くなり、これを消さずに守る火の巫女の呪術は数多くの物語を生んでいる。

ともあれ、そうした神々の厳粛な舞を喜劇化して、庶民一般にわかりやすく笑いのうちに伝えるとき、用いられた仮面がひょっとこであった。だから、「おかめ」とののしられた女性が、「なんだい、ひょっとこ」と言い返すと、火男が烈火となって怒るわけである。

火のかぐらとはどんなものか

熊本県阿蘇の霜の宮に伝わる火焚き神事を〝火のかぐら〟という。

これは神代のころ、タケイワタツノミコト（健磐龍命）が高千穂からこの地へ来て、土地の首領であった鬼八法師の首をはねた。その首は天空高く飛び去ったが、それからというもの、霜をおろして、農作物が実らない。そこで、村の人たちは霜の宮を造営して、秋の六十日間、氏子から選ばれた十二、三歳の乙女と、その母親に火を焚きつづけさせて、鬼八の首を暖めさせる。

「鬼八の首を冷やしたら、早霜がおりる」

そう言い伝えられているので、母娘は神座の下で昼も夜も絶えまなく火を焚きつづけなければならない。

で、八朔の日に、ぬくめあげと称して、真綿をささげて祈り、旧暦の九月六日、乙女は火焚きをやめる。それから二日後、日暮れると火焚き殿でさかんに火を燃して、神官や巫女は夜通しかぐらを奏して朝になるのを待つ。

そして夜明け、巫女が火焚きの乙女の手をとって、燃え立つ火の中を素足で舞いわたるクライマックスがあり、この祭事は終了の幕になるのだ。

その夜明けの火祭りに参加しようとして、近在から男女が集まってくる。日ごろ、恋い慕っている女性が来れば、男は彼女を襲って思いをとげてもいいとされていたから、火のかぐらは村々の若者の青春が爆発する機会でもあった。この女性の掠奪をカタゲヨドという。

また〝湯立てのかぐら〟と呼ぶ行事が伝わっている神社も多い。これは、煮えたぎる熱湯を身にふりかけて、神慮をうかがう占いの法でもあって、〝問い湯〟という地方もある。

神社の庭の中央に、大きな釜をすえて薪を燃す。その火炎と火花に、わき立つ釜の湯気も紅に染まって流れる中で、舞がつづく。やがて湯かぐらの舞人は、手に持った笹の束を熱湯の中にさし入れて、舞いながらこれを自分の頭上にふりかざし、周囲へ湯玉をふり散らすのだ。

「あっちっちッ、ヤケドした」

悲鳴をあげるようでは、神慮にかなわない外道で、熱くもなければヤケドもせず、熱湯によって祓い清められた歓喜に酔い、神に近づき得る自分を実感できなければホンモノとはいえない。

おかぐらといえば、おかめにひょっとこ、馬鹿囃子だけだと思うと大まちがい。こんな熱いおかぐらも伝えられてきたのである。

太神楽や獅子舞もかぐらか

江戸の末期、すでにこれは正月の風物詩になっていた。幕末を知る故老で、四代目広重を称したこともある画人の菊池真一郎翁が、明治三十八年（一九〇五）に東陽堂から刊行した『江戸府内絵本風俗往来』の〝正月〟の部に、つぎのような記述がある。

「太神楽は丸一および大丸の二家は、山王祭礼のとき、将軍家上覧の栄をかたじけのうす。よりて太神楽の巨擘とす。これにつぐは海老一と唱うるものなり。その他はこれより下ること数等なり。上の三家は年々諸大名家の奥庭、または御物見窓下へ召されて、かの籠・鞠・また開き・万燈その他の曲芸を演ず。その手練の軽妙、筆のおよぶところにあらず」

この太神楽は、本来、代神楽と書くべきで、つまり、かぐらを奉納する人に代わって、それをおこなうという意味のものだった。

そのころ、諸国に太々講といって、日掛けや月掛けで銭を集めて、くじ引きで講中から十人、二十人を選び出し、これが伊勢に参宮して、かぐらを奉納することが多くおこなわれていた。代神楽も、一般庶民に代わって伊勢神宮へ参詣し、かぐらを奏しますという主旨で町々を歩いたわけだから、延宝（一六七三～一六八〇年）のころまでは、威儀を正した行列で、もっとまじめなものだったという。

江戸末期の風俗を記した『守貞漫稿』には、

享保（一七一六～一七三五年）のころに八十歳の翁が語った七十年前の昔話として、古い太神楽の様子が述べられている。それによると、延宝時代に江戸市中をねり歩いた太神楽は、まず先頭に「鼻高き面かむりたる者、直垂を着、白袴をつけ、御幣を奉げて立」ち、つづいて十四、五歳ばかりの少年が美しく化粧して、「瓔珞をかぶり、長絹を着せ、白袴をつけ、中啓の扇子を右手に、鈴を持」って従う。

さらに、麻裃で箱を持つ男と、布衣の装束の男がつづき、四つ足つきの大長持の蓋をあおむけにした上へ獅子頭をすえ、大太鼓を置いて、中央に一万度お祓いの御幣を立てたものを四人か六人の仕丁がかついで、これを囃子方がかこんで、「まことに森々として感に堪るばかり也」とある。

ところが、近年（享保時代）の江戸を徘徊する太神楽というものは、「人柄至極浮気に見えたる歌舞伎者どものごとく」と、八十翁は慨嘆して、着流しの大広袖で、幅びろい帯を粋に締め、大脇差を落とし差しにした装いを、「大じだらくの浮気者ども」とののしる。

そして、太鼓、小太鼓、笛を奏しても、笛は小唄節にあわせて吹き、獅子頭も持ってはいるが、これを馬にして遊郭へ通う芝居のまねをするなど、「若き男女の気をそそり立てる様子、下女、下男におもしろがらせるように仕組む」とは、いったいどうしたことか、これでは神々がおよろこびになるはずがないだろう！　と、八十翁は息まいている。

かぐらとは名ばかりで、すっかり俗化した曲芸になり、太夫と後見がこっけいで猥褻なやりとりをして、見物を笑わせるものになってしまった。

獅子舞も、門獅子舞の銭もらいが多く歩いて、古式は失われてしまったが、それとは別に、神社が所有して尊重し、容易に外へ出さない獅子頭もあった。

その神社に古くから伝わった獅子頭は、いろいろな伝説が加わって、いっそう尊重された。たとえば「この獅子は鎮守の神がみずからつくりたもうた」とか「弘法大師のお作」「行基菩薩のお作」「これは左甚五郎の作」などと言われて、神社境内に獅子宮、獅子神社を建て、そこへ安置して祀るところもすくなくなかった。

千葉県印旛郡公津村に伝わる獅子頭は、これを水に映して、その影が宿った水を飲めば万病が治ると信仰されたものである。

隠語で〝おかぐら〟という意味は何か

祭り好きの江戸っ子が、馬鹿囃子にうかれているときは、香具師の稼ぎどきだったし、その人ごみにまぎれて、スリもまた大いに暗躍した。

香具師仲間の隠語で「野郎、かぐらを舞やアがった」とささやくのは〝あいつ、強盗をやったぞ〟という意味。おなじ「かぐら」でもスリ仲間の場合は〝変装して仕事をした〟との意味になる。

おかぐらは仮面をかぶって舞うものだから、身なりを変えて素姓をいつわり、周囲の人の油断を見すまして金品をかすめとる仕事は、おかぐらにちがいない。

アメノウズメノミコトのストリップからはじまったおかぐらは、こうして時代とともに変転して、現代は各地の郷土芸能の中に生きているわけである。

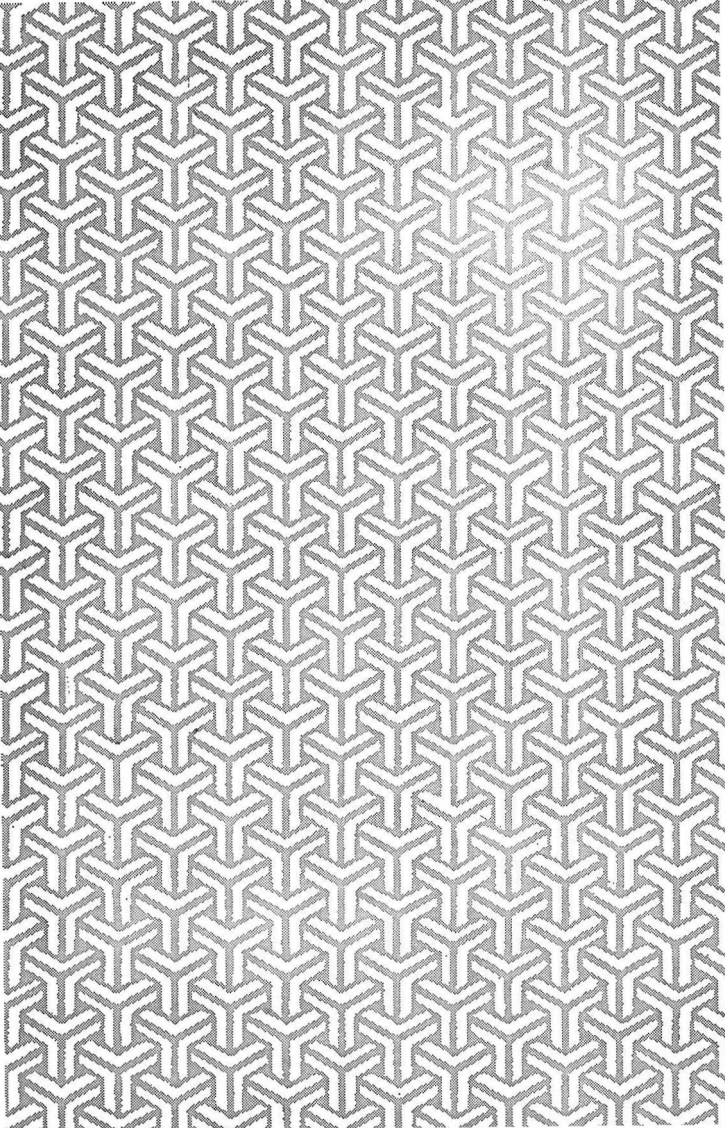
（水野泰治）

山手樹一郎長編時代小説全集16
はだか大名
発行——一九七八年六月二五日初版第一刷
二〇〇四年四月二〇日初版第五一刷
著者——山手樹一郎©
装画——国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁——玉井ヒロテル
発行者——和田佐知子
発行所——株式会社春陽堂書店
東京都文京区白山三—六—一三 〒一一二—〇〇〇一
☎〇三—三八一五—一六六六 振替〇〇一〇〇—二—一六一七
印刷——市川印刷
製本——若林製本所
◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします

山手樹一郎長編時代小説全集　全84巻

A11	桃太郎侍	657	101018
2	恋風街道	733	101026
3	恋天狗・地獄ごよみ	733	101034
4	嵐山と長英・天保の鬼	695	101042
5	又四郎行状記（上）	657	101050
6	又四郎行状記（下）	638	101069
7	夢介千両みやげ	752	101077
8	江戸名物からす堂（一）	695	101085
9	江戸名物からす堂（二）	790	101093
10	江戸名物からす堂（三）	695	101107
11	江戸名物からす堂（四）	638	101115
12	新編八犬伝	752	101123
13	鳶のぼんくら松・ぼんくら千両	600	101131
14	遠山の金さん	733	10114X
15	花笠浪太郎他二編	600	101158
16	はだか大名	714	101166
17	ぼんくら天狗・ぼんくら与力	657	101174
18	朝焼け富士	695	101182
19	浪人横丁・街に出た若殿	638	101190
20	素浪人日和	714	101204
21	青空浪人・朝霧峠	657	101212
22	野ざらし姫・めおと八景	638	101220
23	鉄火奉行・紅梅行燈	714	101239
24	巷説荒木又右衛門	600	101247
25	江戸の虹	714	101255
26	恋染め笠	657	101263
27	青空剣法	790	101271
28	春秋あばれ獅子・和蘭囃子	657	10128X
29	青雲の鬼・青春峠	695	101298
30	青年安兵衛・元禄いろは硯	657	101301
31	江戸群盗記	562	10131X

32	巷説水戸黄門・江戸花火	638	101328	48	浪人市場（二）	790	101484
33	変化大名	695	101336	49	浪人市場（三）	790	101492
34	江戸ざくら金四郎	600	101344	50	浪人市場（四）	752	101506
35	大名囃子	600	101352	51	八幡鳩九郎（上）	657	101514
36	女人の砦	562	101360	52	八幡鳩九郎（下）	657	101522
37	若殿ばんざい・のっそりと参上	600	101379	53	鶴姫やくざ帖・花のお江戸で	600	101530
38	紅顔夜叉	562	101387	54	天保うき世硯・極楽一丁目	638	101549
39	浪人八景	752	101395	55	天の火柱	733	101557
40	朝晴れ鷹	790	101409	56	隠密三国志・いろは剣法	657	101565
41	わんぱく公子	695	101417	57	江戸へ百七十里	714	101573
42	江戸の朝風	714	101425	58	江戸の顔役・青春道場	657	101581
43	江戸の暴れん坊・青春行路	657	101433	59	侍の灯（上）	600	101590
44	青春の風・花の青空	638	101441	60	侍の灯（下）	600	101603
45	浪人若殿	638	101458	61	お助け河岸・江戸の恋風	638	101611
46	天保紅小判	695	101468	62	たのまれ源八（一）	695	101620
47	浪人市場（一）	752	101476	63	たのまれ源八（二）	562	101638



春陽堂





ISBN4-394-10116-6

C0193 ¥762E

定価：本体762円＋税